

カンピオーネ!
槍の戦神
Campione X
丈月城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH
集英社

# カンピオーネ！

## X　槍の戦神

丈月　城

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
槍の戦神
Campione X



祐理
リリアナ
???
アレク
エリカ
グィネヴィア
護堂
セシリア


いきなり少女が振り向き、護堂と視線が合った。
彼女は微笑した。
草原を渡る風に光がまじるように笑い、
こちらへ歩いてくる。
「やっと見つけたぞ。
私の運命よ」
透明感のある美貌に似合いの涼やかな声で、
美少女はささやいた。

## 主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

当代随一とされる「太刀の媛巫女」。護堂の「剣」として侍る。

アレクサンドル・ガスコイン

黒王子の異名を有する魔王。

アリス・ルイーズ・オブ・ナヴァール

グリニッジ賢人議会前議長。白き姫。

グィネヴィア

神祖の女王。

ランスロット・デュ・ラック

湖の騎士。

Contents

イラスト / シコルスキー


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
槍の戦神
Campione X

# 序章

　人の暦こよみでいえば、五世紀もほとんど終わりかけていた頃だ。

　まだ、人間たちの信仰心が素そ朴ぼくだった時代である。人と『まつろわぬ神』の関係は今の世よりもすこしだけ緊きん密みつだった。

　この頃の彼は、世界を気ままに放浪する『まつろわぬ神』であった。

　全身を鎧よろい兜かぶとでおおいかくし、長ちよう槍そうをたずさえ、白き神しん馬めを駆る。あるときは人ならざる白しろ騎き士しとして地上を、あるときは稲いな妻ずまとなって天空を駆け抜けた。

　聡さとい人間はその雄ゆう姿しだけで彼が軍神であると見抜き、大いに畏おそれたものだ。

　人間の前へ降こう臨りんするとき、適当に『槍ランシアの神』と名乗ることもあった。そんな彼がブリテン島に来た理由は、気まぐれである。彼同様『まつろわぬ神』となっていた古い同どう朋ほうが、この地にいると聞いたのだ。

　そこで旧縁を偲しのび、なんとなく訪ねてみた。

「先日、なかなかに面白き《鋼はがね》と出会いましたわ」

　古き同朋は微笑ほほえみながら、彼に語った。

「《鋼》……余の同族か」

「ええ。神殺しの魔王どもを殲せん滅めつさせるために生まれた英

雄殿です。魔王どもが幾人も出揃い、この世の終わりが近づいたとき、世界を救済すべく降臨する――」

「ほう。この世の最後に顕あらわれる戦士というわけだな」

「しばらく前、この島で暴れていた神殺しめも、みごと斬きり捨てましたわ」

　愉たのしげに語る同朋は、麗うるわしき地じ母ぼ神しんである。

　この土地（のちにウェールズと呼ばれる）に彼女は、数十年前流れ着いたという。

　以来、命の恵みと死の脅きよう威いを振りまく『まつろわぬ神』として、人間どもから畏れられているらしい。ついた呼び名が『白き女神グウエンフイフアル』だとか。

「そやつの名は？」

「わかりませんわ。妾わたくしも問うてみましたが、ただ口を閉ざすだけで」

「ふむ。そやつも名を失おうとしているのかもしれぬな」

「そのようですわね。この地の民たみは彼を『勇アル者トス』と呼び、島の守護神として崇あがめはじめております」

　ときに『槍の神』と名乗る彼。人間から『白き女神』と呼ばれる彼女。

　両者とも、もとは欧おう州しゆう本土の民に崇められた神格だ。

　倶ともに天を戴いただく二柱はしらの神王、『戦いの王』と『智ち慧えの女王』。彼と彼女をそのように信しん奉ぽうする、勇ゆう猛もう果か敢かんな民族がいたのだ。

　だが、度を超していくさにふける民族に栄えい枯こ盛せい衰すいはつきものだ。

　この民も例に洩もれず国を失い、民族としての体てい裁さいまで失いかけている。彼らの血と文化は他国のそれに吸収されつつあり、いずれ古来の形を失うはずだった。

文化が変われば、神話も変わる。

ときにその変化は、神々の名前まで異なるものに改めさせてしまう……。

「我が同朋たる女神よ。余とそなたもいずれ新たな名を得ることとなろう。ふふふ、このような憂うき目めに遭あうとは、戦乱の世というのはままならぬものよな」

「などとおっしゃいながら、愉たのしそうですわね」

兜からこぼれた笑声を聞き、古き地母神も淑しとやかに微笑した。

この数十年後、彼女は聖杯創造とひきかえに不死の命を失い、英雄の婢はした女めとして転てん生せいすることとなる。新たな名を得る前の死であった。それゆえ転生体は『白き女神グウエンフイファアル』の異い名みようをもじり、グィネヴィアと名乗る……。

「うむ。どのみち行く当てのない旅の途中だ。暇ひまつぶしにひとつ、その英雄殿と逢あってみようと思ってな。どこにいるのか教えてくれまいか？」

答えを教えてもらうなり、彼は同朋のもとを辞じした。

神馬にまたがって空へ駆け出し、うわさの英雄の居場所へ急ぐのだった。

魔王殲滅の英雄が眠る場所は、峨が々がたる高山の頂いただきであった。

もっとも、彼は天あま翔かける神馬の騎手である。相棒を稲妻のごとく飛ひ翔しようさせ、やすやすと山頂にまで到達する。

途中、彼は苦心して山登りする人間たちの姿を見かけた。

ブリトン人の一団であった。この者たちも山頂をめざしているのだ。ただし、命がけで。そこにいるはずの『勇アル者トス』を崇め、祈りを捧ささげるために。

山の頂には、一振りの鉄剣が突き刺さっていた。

剛ごう剣けんである。両刃の刀身は長く、広く、そしてぶあつい造りだった。

だが、形状よりも刃に宿る輝きの方が目につく。恒こう星せいのごとき白プラ金チナ色の光を、剛剣は放っていたのである。

「なんとみごとな……」

まさに神刀。まさに霊れい剣けん。彼は賛さん嘆たんした。

美しさでも威力でも、この一振りをしのぐ刀剣はあるまい。

彼も白き隕いん石せきさながらの生ける剣となり、竜蛇を屠ほふる剣神である。白金の神刀がいかにすばらしいものか、一目で諒りよう解かいできた。

「御ご免めん。魔王殲滅の軍神がいると仄そく聞ぶんし、罷まかり越した。貴公の眠りを邪じや魔まする非礼、深くお詫わびしよう。だが、余は比類なき英えい傑けつと語らい、友ゆう誼ぎの交わりを得たいと思うのだ。どうか、御姿を顕あらわされよ」

白金の神刀はただの武具ではない。神の現うつし身みだ。

魔王殲滅の戦士は刀に化身して身を休め、次のいくさに備えているのだろう。同じ《鋼》の勘かんが告げていた。

覚かく醒せいをうながすため、彼は神刀に手をのばす。直後、火花が散った。

「ぬうッ！」

火花は電撃となって彼の手をはじき、ぶしつけな接触を拒んだ。

「ふふ……かんたんには目を覚まさぬというわけか。貴公はよほどの怠なまけ者か、おそろしく気むずかしい男であるらしいな」

むしろ、その邪険さに惹ひかれて彼は微笑んだ。

彼――後年、ランスロット・デュ・ラックの名で呼ばれる『槍の神』が魔王殲滅の戦士と出会うのは、もうすこしあとである。それ

は新たな神殺しがブリテン島に上陸し、暴ぼう虐ぎゃくのかぎりを尽くしていたときだった。

　それから数十年、同朋たる地母神とランスロットは『魔王殺し』に助力して戦った。

　地母神がそうした理由は知らない。もしかしたら情愛ゆえだったのかもしれないが、わざわざ確認するような無ぶ粋すいはしなかった。

　ランスロットがそうした理由は単純だ。単に激烈たる死闘を求めたからである。

　この欲求はたっぷり満たすことができた。だが、『魔王殺し』は最後まで己の名と来歴を明かすことはなかった。

　自分たちと同様、あの男も名を失った神なのだろうと当時は考えていた。

　また昔せき日じつを偲しのんだとき、ふと思うことがある。

　——自分たちが『最後の王』と呼ぶ最強の《鋼》。あの男はおそらく戦いに倦うんでいたのであろう。己を戦場へ誘いざなうものを全て疎うとんでいた。

　そう、全てを。

　彼が滅ぼさなくてはならない神殺したちを。彼に戦いを強しいる宿命の星を。

　だからだろうか？　あの男はいつも物もの憂うげに戦っていた。錆さびにも似た憂ゆう鬱うつの翳かげで、秀麗な美び貌ぼうを曇くもらせながら。

　そして時折、戦友を見つめる瞳ひとみにも同じ憂いが揺らいでいたような気もする。

　あるいは、あの男が倦んでいたのは敵だけでなく——。

　しかし、ランスロット・デュ・ラックは今も昔も剛直な武人であり、まっすぐ進むことしか知らない最源流の《鋼》である。

　今さら確認する術すべもないことを、いつまでも気に病やんだりはしない。

　そういうとき、彼はただ黙然と頭こうべを振り、無用な追憶を中断するだけであった。

# 第１章　くすぶる魔王たち

## 1

　その日、アレクサンドル・ガスコインの姿は台タイ北ペイにあった。

　台北――。いわずとしれた台たい湾わんの中心都市である。

　彼が訪れたのは寧夏路夜市ニンシヤールーイエシー。屋台と露店がひしめくナイトマーケットだ。Ｂ級な屋台料理を求める地元民や観光客で毎夜にぎわう。

　買い求めた品は立ち食いしたり、屋台のそばにあるテーブルで食べられる。

　だが、この夜アレクが選んだのは古くて汚い料理屋だった。

　店の外に置かれた長テーブルのひとつに腰かけ、適当に注文する。この手の夜市ではあまり酒類を売らないので、缶ビールも持参した。

　蒸むし餃ぎよう子ざ、水すい餃ぎよう子ざ、肉にく粽ちまき、香料入りのソーセージ、牡か蠣きのオムレツなど。

　注文した料理が並べられた頃、待ち合わせの相手はやってきた。

「……おひさしぶり、アレク」

「ああ。たしか一年ぶりだったな」

　福ふっ建けん語ごで挨あい拶さつされたので、アレクも同じ言葉

で返事する。

　相手はメガネをかけた一〇代後半の少女だった。

　名はセシリア・チャン。白いシャツの上に地味なセーター、地味なスカートという目立たない格好だ。顔立ちは愛らしいのだが、華はなやかさに欠ける。

　数年前、極きよく東とうを旅したときに知り合った。このときアレクが売った多少の恩に義理を感じて、彼女は結けつ社しゃ《王おう立りつ工こう廠しよう》のメンバーになっていた。

「たまにはセントアイブスに顔を出せ。……いや。そもそも、おまえは本部に来たことがあるのか？　俺の記憶がたしかなら、一度もなかったはずだぞ」

　セントアイブス。アレク率いる《王立工廠》の本拠地だ。

　英国の最西端コーンウォール地方にある。海辺の小さな町だった。

「その記憶は正しい。というより、私はあなた以外の仲間と会ったことがない」

　平へい板ばんかつ淡々とした声で、セシリアは言った。

　表情にも声音にも、めったに感情の色を出さない娘なのだ。

「まずそこからか……。それにしても、ものぐさで出で不ぶ精しようなおまえがよくもすんなり呼び出しに応じたものだな」

「あなたに会いたかったから」

「悪い冗談はよせ。ビールが妙な味になる」

「…………」

　冗談に即答したら、セシリアは無言になった。

　基本的に無口で無表情な少女なのだが、どこか恨うらめしそうに見える。だが、アレクはまったく意に介さなかった。もっと重要な用件があるのだ。

「島釣りの針を見つけたと報しらせたからな。おまえのことだ。それ目当てで来たんだろう？」

　セシリアは若いが、なかなかすぐれた道どう士しだった。

　道士。中国伝来の呪じゆ術じゆつを学んだ方術使いの呼び名である。また、彼女は東方の神話伝承について豊富な知識を持っていた。

「そういうことにしておいても、いい」

「というよりも、それ以外にないだろう」

　また微妙に恨めしい目で横見された。何か言いたいことがあるのだろうか？

「これが問題の針だ」

　アレクはかまわず本題に入った。

　上着の胸ポケットから棒を抜き出す。ボールペンと大差ない長さ、細さ。飴あめ色いろのプラスチックじみた材質。日本で手に入れた神具、天あま之の逆さか鉾ほこである。

「そういえば、前におまえと話をしたことがあったな。おそらく中国南方を淵えん源げんとする海洋民族系の神話はまずここ台湾に渡り、それから東南アジアに、さらにはポリネシアやミクロネシアにまで伝でん播ぱしていった。その過程で日本にも伝わっていると」

「ええ。覚えている」

「海洋民族由来の神話では、世界のはじまりは海だ。見渡すかぎりの海で、陸はない。そこに原げん初しよから存在する創造神が釣つり糸を垂たらし、海中より陸地を釣りあげ、島とする。大地の誕生——国生みの物語だ」

　食べ物をつまみ、ビールを口に運びながら、アレクは徒つれ然づれと語った。

「紀元前四〇〇〇年から三〇〇〇年頃、海の民たみは粗末だが機能的なボートに乗って太平洋を南下し、各地に移住していった。その結果、東アジアの各地に海洋系の世界創造神話が散さん見けんされ

るようになる。もちろん日本でも」

「イザナギとイザナミの国生み」

「そうだ。かすかな滓おりのような陸地しか浮かんでいない原初の海に、イザナギとイザナミが天之逆鉾を突き立て、かきまわす。そうして陸地をまとめあげ、日本列島を造り出した。まあ、釣り針でひっかけるのと、棒きれでかきまわすのは、一見ちがうようにも思えるが——」

「そこはたいした問題にならない」

　セシリアが短く相づちを打ったので、アレクはうなずいた。

　古代日本において、鉾は漁——魚釣りの道具であったという記録がある。これらのエピソードは本質的に同一なのだ。

「その鉾と同じ名前を持つ神具。やはり、国生みの道具と考えるべきだろうな」

「アレクはそれを調べたいの？」

「ああ。どんな能力を持ち、どうすれば使いこなせるのかを突きとめたい」

　つぶやくアレクに、セシリアは無感動に告げた。

「無理。神ならぬ身の私たちに、どうこうできることじゃない。あきらめたら？」

「そうでもないだろう。実はひとつふたつアイデアがある」

「……本当？」

　セシリアは感心したらしい。メガネの下の瞳が大きく見開かれている。

　素直な賞賛に対して、アレクは肩をすくめた。

「たいしたアイデアじゃない。神話から推すい察さつするに、こいつは水か大地の神性に関係する神具のはずだ。だったら、そういう類たぐいの神をどこかで発見し、この棒きれを使わせる。そして何

が起きるか観測し、検証する」

「……とりあえず、この国ではやらないで。危険すぎる」

　ダメ出しされて、アレクはにやりと微笑した。

　もとより、そんなまだるっこしい真ま似ねをする気などなかったのだ。

「なら、残る選択肢はひとつだ。大地か海にまつわる神の竜骨を見つけ出し、こいつと接触させるぞ。手伝え。まずはここ百年で顕けん現げんした地じ母ぼ神しん、竜蛇神の記録を洗う」

　セシリアはまじまじとアレクの顔を見つめた。

「……竜りゅう骨こつ。たしかにその手があったけど。アレク、あれを見つけ出すのは、神を探すよりも難しいはず」

「難しいだけで不可能ではない。それに考えてもみろ」

　配下の意見を聞いても、アレクはまったく意に介さなかった。

　さまざまな謎なぞを解き、数多あまたの聖域を踏とう破はしてきた彼である。この程度の探索行クエスト、ウォーミングアップのようなものだ。

「発見したあと無駄な戦闘抜きで確保できるという点を考慮すれば、神を探すよりも遥はるかに効率がいい。そこを見落とすな」

「見落としてはいない。あなたの考え方がおかしいだけ」

　セシリアは珍しく、わかりやすい感情表現をした。深くため息をついたのである。

「アレク、あなたはやっぱりすごい人。世界に混乱をもたらすことにかけては、たぶん右に出る人はいない。他のカンピオーネたちよりも、まちがいなく上」

　手放しの賞賛。しかし、人聞き悪いことこの上ない。

「他の連中ほど俺は野や蛮ばんでもないし、無分別でもない。いっしょくたにするな」

思わず、仏ぶつ頂ちよう面づらで言うアレクだった。

そして数日後。

アレクはフットワークも軽く、ロサンゼルスの地に降り立った。

台湾、フィリピン、さらに中国の奥地まで。ここ何日かで、いくつもの国を渡り歩いた。そして、ツアーの締めくくりに選んだのが、この地であった。

アレクは単身だった。セシリアには新たな指示をあたえ、別行動をさせている。

空港からタクシーに乗り、アメリカ西海岸の大都市を走る。

ロサンゼルス。人種のるつぼであり、経済と産業の一大拠点。犯罪渦うず巻まく魔都。堕だ落らくと繁栄がしのぎを削るメトロポリス。

この『混こん沌とん』の都には、世の理ことわりから外れた者たちも隠れ住んでいる。

倫理と良心を悪魔に売り渡し、超常の魔力を得た異能者——邪じゃ術じゆつ師したち。そして、仮面の神殺しジョン・プルートー・スミス！

今回の渡米で彼とかかわりあうつもりはない。

決意するアレクを乗せて、タクシーはロスフェリス地区のサマンサ大学に到着した。数年前に一度だけ訪問したことがある。大学構内の造りに変化はない。

アレクにはそれで十分だった。

タクシーを降りると、案内板など見ずに歩き出す。道順はしっかり覚えていた。

外国語文学科、ジョー・ベスト教授の研究室にやってきた。ドアをノック。「どうぞ」と返答があったので、ためらわずに開ける。室内にはふたりいた。

　知的な面おも差ざしをした老齢の黒人と、燃えるような赤毛の白人女性。

　前者はもちろんベスト教授だ。幻想文学では世界的に著名な研究者であり、善の魔術師。妖精博士フエアリードクターとしての力量は、欧州でも並ぶ者はいない。

　そして、女性の方はたしかアニー・チャールトン。

　ベスト教授の教え子。アレクと同年代で、メガネが印象的な美女。冷静沈着で行動力旺おう盛せいな人物だった。ジョン・プルートー・スミスの配下として探偵の真ま似ね事ごともする——。

　教授は大おお仰ぎように、教え子の方はひかえめに驚きよう愕がくを顔に表していた。

　黒王子と呼ばれるカンピオーネと、彼らは対面したことがあるのだ。

「たしか今日の来客は、ピレスくんの紹介で来るガスコーニュ氏だと、私は記憶しているのだが。これは一体、どういう趣向なのかな？」

　アレクの顔を見つめながら、ベスト教授は言った。

「それは誤りではないな。俺の名前はアレックス・ガスコーニュ。オックスフォードで学ぶフランス人で、今日はあなたにお会いするのを楽しみにやってきた学生。そういう設定だ」

　ずうずうしい虚きよ偽ぎをアレクは口にした。

　どうせ変装しても、妖精博士の浄じよう眼がんには見破られる可能性が高い。だから堂々と黒王子の素顔をさらし、ひねりのない偽ぎ名めいで訪問したのだ。

「ふむ。そういうことかね」

　アレクサンドル・ガスコインの名でジョン・プルートー・スミスゆかりの場所を訪ねる。それは魔王同士の外交問題にも発展しかねない、突とつ飛ぴすぎる行動である。

　事を荒立てたくない。だから、こんな形でやってきた——。

アレクの意向を察してくれたのだろう。教授は肩をすくめて、ためいきをついた。

「ある要注意人物を思い出させてくれるイニシャルは、気にしない方がよいというわけだ。いや、もうすこし工夫があってもよかったと思うが！」

「なに。ここで重要なのは形式であって、実質ではない。この程度で十分だろうよ」

「それでミスター・ガスコーニュ、あなたは何のためにここへ？」

アニー・チャールトンが口をはさんできた。

眼光鋭く、アレクをにらんでいる。教授に危険が迫れば、すぐ体を楯たてにしてかばう。その覚悟が見て取れる。なかなかの女じよ傑けつぶりだ。

「長居するつもりもないから、単刀直入に言おう。竜骨——この街風にいえば『天使の骸むくろ』だったな。あれをすこしの間、貸してもらいたい」

「なんですって？」

「あんなものを何に使うつもりなのだね？」

アニーと教授に驚かれて、アレクは尊そん大だいに微笑んだ。

「実験と検証のためだ」

「また世間を騒がすつもりなの？」

「さて、どうかな？　俺としては世界から災さい厄やくの芽をひとつ取りのぞく慈じ善ぜん事業というつもりもあるのだが、口うるさい輩やからはそう見ないかもしれない。俺の口から善行・悪行のいずれだとは断定できんな」

アニーの問いかけを、アレクはわざとらしくはぐらかした。

「とにかく、そのために竜骨が必要だ。教授、あなたが一〇年近く前に中国四し川せん省しようで採取したという情報を、たしかな筋から聞いた。快こころよく貸たい与よしてもらえるなら、俺も余計

な手間をかけずにすむ。ご一考願いたい」

　余計な手間。つまり盗みである。

　何か欲しいものがあり、持ち主が財力・権力・魔力のいずれかを所有する場合、アレクは窃せつ盗とう行こう為いに躊ちゅう躇ちよを覚えない。世間の良識だの常識だのを気にして生きるなど、もともと彼の流儀ではないのだ。

「……まったく君という男は！　ふだんはまともそうに振る舞えるくせに、一度火がつくと、すさまじく傍はた迷めい惑わくな本性をむき出しにする！」

　悩ましげに頭を振りながら、ベスト教授は言った。

「いいだろう。君の望むとおり、私が所有する『骸』を提供しよう」

「ジョー。軽々しく決めないで」

　アニーにファーストネームで警告されて、ジョー・ベストは思慮深げに答えた。

「アーシェラが息絶え、《蠅はえの王》も滅び、ロサンゼルスは数年ぶりの平和を謳おう歌かしている最中だ。冥めい王おうと黒王子殿の対決で水を差すのも気が引ける。それにだなアニー、欲しいものを奪い取る、盗むという行為において、彼を出し抜ける魔王がいるとは思えない」

　魔王カンピオーネ同士が決闘するならば。

　勝敗はまったく読めない。どちらが強い、弱いの問題ではないのだ。どのような局面でも勝利を求め、それを愚おろかしくも見える大胆な行動によって成じよう就じゆさせることこそがカンピオーネの本領なのだから。

　だが、勝負のフィールドが『盗み』に限定されるなら。

　ジョー・ベストは正しい。黒王子アレクのひとり勝ちだろう。

　彼は神速にして迷めい宮きゆうの魔王。あやしき権能の数々で敵を陥おとしいれる。そのうえ魔術を身につけ、権けん謀ぼう術じゆ

つ数すうにも長たける。それらの資質がアレクを史上最高の怪盗となさしめるのだ。

　結局、アニーは師の言葉に渋々という感じでうなずいた。

2

　研究室のテーブルに用意された小さなシャーレ。

　そのなかに、乳白色の小石が置かれた。

「地上に顕けん現げんした『まつろわぬ神』の肉体が失われるとき、まれにわずかな肉や骨、骸むくろの一部が遺のこされるという。それを中華の道どう士したちは『竜りゅう骨こつ』と呼び、北米の魔術師たちは『天使の骸』と呼ぶ。そうだったな？」

「ああ。もちろん、地上の生物が有する肉や骨とはまったく異なるものだ」

　小石を見ながらアレクがつぶやくと、ベスト教授が言った。

「神々が脱ぎさった肉体は砂となって崩れ去り、石となって砕け散る。このとき、たまたま形状を保ったものがあれば、聖せい遺い物ぶつとして崇拝の対象になり、魔術師らに強大すぎる力をあたえる源みなもととなる。まあ、めったに採取できるものではないがね」

　と、教授はシャーレの小石を見おろした。

「これも中国の創造神・女じょ媧かが降こう臨りんしたという土地で、運よく発見できたものだよ」

「女媧。『蛇へび』の神格を持つ地じ母ぼ神しんでもあるな」

　アレクはポケットから天あま之の逆さか鉾ほこを抜き出し、乳白色の小石に近づけた。

　すると鉾がのびた。ボールペン程度の長さだったのが、一メートルほどに。突然の変化に、ベスト教授と静観していたアニーが目を

みはった。

「やはり、大だい地ち母ぼ神しんの忘れ形見に触発されたか……」

　一〇年以上も続けてきた冒険の数々。その経験からアレクは知っていた。

　神々の『骸』は、神獣などよりも遥はるかに格上の神性を持つ。あるいは、神との接触に等しい効果が得られるかもしれない——。

　目もく論ろ見みが当たって、アレクは微笑した。

　さて、この鉾はどう使用するものなのか？　試ためしに先端で床をつつく。……めりこんだ。まるで泥のなかに突っ込んだかのように。

　天之逆鉾の先端は、タイルの床にめりこんでしまった。

「国がまだ若く、形状も定かでない国土が脂あぶらのように海を漂っていた頃、伊い邪ざ那な岐ぎの命みことと伊い邪ざ那な美みの命みことは『この漂える国を修おさめ理つくり固かため成せ』と命じられ、天之逆鉾をたまわる。二柱はしらの神は天あまの浮橋に立ち、その鉾をおろして、かきまわす……」

　アレクは日本神話の一節を思い出した。

　天之逆鉾でタイルをかきまわしてみる。驚きよう嘆たんした。次第にタイルは硬さと感触を失っていったのである。はじめは泥をかきまわすようだった。だが、だんだん抵抗感が失われていき、ついに溶けたシャーベットにも似た手て応ごたえになったのである。

「……溶けた？　形状を失ったのか？」

「日本流に蛭ひる子こと呼ぶべき状態かもしれないがな」

　教授とアレク、そして無言のままのアニーは、その情景に見入っていた。

　数十秒前まではタイルだった床の一部。

　そこがいまや、流動する液体に変質している。名めい状じようしがたい色だった。一見すると無色透明なのだが、見続けていると白

く変色し、やがてキラキラまたたきだす。輝きのひとつひとつが異なる色で、万まん華げ鏡きようのように次々と変色していった。

　この世の全ての色をそこに見み出いだすことができた。無色にして万色なのだ。

「……ガスコーニュ。いえ、アレクサンドル・ガスコイン。『蛭子』とは何？」

　不意にアニーが訊たずねてきた。学生らしさに欠ける口調だった。

　むしろ、対等の王へ問いかける王者の風格がある。

「日本創造の神であるイザナギとイザナミが最初に生んだ、異い形ぎようの子だ。その肉体に骨はなく、不定形だったという。誕生してすぐ海に流され、闇やみに葬ほうむられた……」

　解説しながら、ふとアレクは思いついた。

　今まで時計回りだった天之逆鉾の動きを、反時計回りにしてみた。逆向きにかきまわしたのである。しばらく続けていると、だんだん抵抗感が増してきた。

　水をかきまわす感じだったのが、やがてシャーベットをかきまわすように。

　そして、泥をかきまぜる感触に。しまいには、ついに凝ぎよう固こ。

　……タイル張りの床にもどってしまった。もっとも、タイルのなかには渦巻き模様ができており、完全にもとどおりとはいえないが。

「東アジアと南洋に流る布ふする『島釣り』『国生み』神話。この鉾はそれを再現するための神具なのか……？　陸地を形成し、さらには蛭子まで生み落とす創世の鍵かぎ……」

　いくつかの知識と想像が、アレクの脳内で駆け巡った。

　最強の《鋼はがね》。この世の最後に顕あらわれる王。かつて日本で起きたであろう出来事。天之逆鉾がはたしたはずの役割。そし

て、アヴァロンとグィネヴィア。

「そろそろあの女との縁を切る、いい機会かもしれないな……」

　アレクは『送還』の魔術で天之逆鉾を消し去った。

　必要なときは『召しよう喚かん』の術で呼び出せる。欧おう州しゆうの騎士たちが剣や槍やりを持ち歩くときに使う魔術だった。そして、研究室の主たちに向き直る。

「長居してしまい、申し訳ない。俺の用件は全て終わった。いずれ礼をさせてくれ」

「あたしたちにとって最高の謝礼は」

　アレクの言葉に、アニーは苦々しげに答えた。

「あなたがこのまま、あたしたちの街に災厄をもたらす前に去ってくれることよ。アレクサンドル・ガスコイン、願わくば二度とカリフォルニアの土を踏んで欲しくないものね！」

　研究室を辞したあと、アレクは稲いな妻ずまとなって海へ向かった。

　天之逆鉾の機能を再検証するためである。

　満足できる結果が得られたので、その夜はロスで一泊することにした。

　太平洋に面した、高級に分類されるホテルの一室。ルームサービスで食事もすませ、ベッドの用意も終わっている。

　しかし、アレクは窓際でイスにすわりながら、物思いにふけっていた。

　アジアの東から北米西海岸への強行軍。疲れも時差ボケもあった。だが、考えておきたいことが山ほどあったのである。

　この部屋に、アレクは『結界』の魔術をかけておいた。

　危険が迫ったときは警告させるだけの単純な術。しかし、神速の

カンピオーネにとってはこれで十分なのだ。逃げるのも戦うのも、敵を惑まどわすのも彼の自由。だから、魔術の警報を聞いても、アレクは平然と言うだけだった。

「深夜の訪問をするときは、事前に断りの電話くらい入れるべきだろう」

「偽ぎ名めいでアポイントメントを取る紳士の部屋だ。この程度の不作法、問題にもなるまい。無駄な努力をしないのが私のスタイルでね」

　いかなる秘術、もしくは仕掛けによるものか。

　施せ錠じようされているはずの窓が開き、カーテンが揺れる。

　窓の外から平然と踏み入ってきたのは黒き仮面の怪人だった。ここは高層ホテル一〇階の部屋なのだが……。

　仮面のバイザーは、昆虫の複眼を思わせるデザインだった。

　魔鳥の翼に似た黒ケープの下は、オペラ座の怪人めいた格調高い衣装だ。



「ガスコイン。君と私は相互不可侵条約を結んだ間柄だ。だが、今回の訪問はそのルールにいささか抵てい触しよくするように思えるな」

　ジョン・プルートー・スミス。ロスの闇やみに君くん臨りんする魔王の登場だった。

「アレクサンドル・ガスコインとしての訪問ではない。……という建前は、貴様の配下たちにも伝えているはずだが」

「友人の研究室で悪さをする程度なら、その言いわけで見逃してもよかったのだが」

　スミスは黒ケープの肩をすくめた。おおげさで、舞台映ばえする仕草だった。

　平凡なホテルの一室が、まるで劇場の舞台に思えてくる。

「ロサンゼルス沖……チャネル諸島の近海に、地図に記載されていない島が突とつ如じよとして出現した。今日の一五時頃に起きた異常事態らしい」

「ほう」

「そして、一七時頃、この島が忽こつ然ぜんと消え失せたとか」

「そんな事件があったのか」

「莫ばく大だいな呪じゆ力りよくがはじけるのを感じた善の魔術師がわざわざ偵察に行き、私に報告してくれたのさ。ところでガスコイン、君はいわくありげな神具を持ち歩いていたそうだな？」

「単なる偶然、ということにするのはどうだ？」

　悪びれず、アレクは言った。

「この件については、俺を野放しにした方が貴様の利益にもなるぞ」

「なかなか魅惑的な言葉だが……。何をするつもりだ、ガスコイン？」

　仮面のバイザーが、アレクの秀しゅう麗れいな顔立ちを捉とらえる。

「壮大な構想力と実行力は君の美点だが、その長所がこれまで、君の個人的な愉たのしみ以外で発揮されたという記憶がないのでね。私としても、慎しん重ちように対応したい」

「バカを言うな。世の人間が言うほど、俺は傍ぼう若じやく無ぶ人じんでも破壊的でもないぞ」

「そこは同意しよう。だが、ひねくれた天あまの邪じや鬼くで、一般的な倫理観よりも己の美学を尊とうとび、しかも、いざとなれば周囲への影響など考慮せずに突っ走る性格なのはうわさどおりだ。世間の評価もバカにできないと思うが」

「…………おい」

「だから、君を無条件に信頼するのは危険な賭かけだと私には思えるのさ」

　アレクは舌打ちしたが、文句は言わなかった。

　このキザなコスプレ好きは、中国の怪力女やイタリアの阿あ呆ほとはちがう。交渉や談合を持ちかければ、ひとまず理性的に応じる男だ。話を進めなくては。

「神祖どもの親玉を始末して、面倒事の芽をきれいに刈り取ろうというプランだ。貴様にとっても他ひ人と事ごとではあるまい」

「神祖。数か月ぶりに聞く言葉だな」

「北米に巣くう邪術師どもは、いくつかの系統に分類される。そのひとつが、かつて欧州で神祖たちを女王と崇あがめた魔女の一派だ。この連中がヨーロッパから開拓時代のアメリカ大陸に渡り、さまざまに悪行を重ねた」

　魔術師のみが知る歴史の暗部を、アレクは口にした。

　もちろんスミスも承知しているだろう。ここ数年、彼と敵対していた《蠅はえの王》こそが魔女の系けい譜ふに連なる邪術師カルトだったのだから。

　はたして、黒き仮面の王は「そのとおりだ」とうなずいた。

「その魔女どもが闇でうごめいたことで、プロテスタントの聖職者による北米の魔女狩りは病的に加熱し、多くの罪なき女性を苦しめる凄せい惨さんな結果となった。むごたらしい話だ。……ではガスコイン」

　仮面のバイザーでアレクを真正面から見み据すえ、スミスは言った。

「つまり、君の提案はこうか？　現代でも邪術師に多大な影響力を有する神祖――彼女らに壊滅的な打撃をあたえるため、君の暗あん躍やくを見逃せと」

「ああ。貴様もアーシェラとやらの二代目と戦いたくはないだろう？」

「ふむ」

　しばらくスミスは沈黙してから、おもむろにつぶやいた。

「たしかに、われわれ双方の利益になりそうな話ではあるな。だが」

「なんだ？　俺の言葉が正しいという証拠でも見たいのか？」

「君ほどの男にそんな要求をするほど無ぶ粋すいではないさ。だがな、君の智力と構想力はたしかにすばらしい。しかし、想定外のアクシデントが続くと、計画をあっさり放ほう棄きする一面があるのも事実で――」

「放棄するわけじゃないッ。臨りん機き応おう変へんにアドリブを加えるだけだ！」

　心外な言われように、アレクは思わず声を荒らげた。

「俺たちの相手はいつだって神々や、同じカンピオーネだ。常識と計算が通用しないヤツらが相手なのだから、柔軟な対応をするのは当然だろう」

「まあ、それはそうだが……。君の場合、臨機応変にやった結果、計画が原形をとどめぬほど変わることもあるからな。たしか贋がん

作さくの聖杯が出現したときも、あのプリンセスと談合で決めていた盟めい約やくを途中で無視して、好き勝手にやりはじめたのだろう？　いつだったか姫が愚ぐ痴ちられていたぞ」

　プリンセス。もちろん英国の賢けん人じん議ぎ会かい元議長、ゴドディン公こう爵しやく家け令れい嬢じようアリス・ルイーズ・オブ・ナヴァールである。

　あの女め、密約のことをよくも口軽にぺらぺらと……！

　からかうようにスミスに言われて、アレクはひそかに憤ふん慨がいした。しかし。

「とはいえ、アレクサンドル・ガスコインの計画は成功を収めるものが多いことも私は知っている……。いいだろう。今回の不作法は大目に見よう」

「そうか。すまんな」

　スミスの言葉に、アレクは平静を取りつくろった。仮面の怪人ほど芝居がかってはいないが、黒王子も見み栄えっぱりで格好をつけたがるカンピオーネなのだ。

　話し終えると、ジョン・プルートー・スミスは優美に一礼し、窓の外へ出ていった。

　さながらカーテンコールをすませた名優の退場である。

　十数秒後、アレクは窓の外を見てみたが、英雄の黒衣黒面はどこにもなかった。煙のように消え失せたのだ。

「あいかわらず、神しん出しゆつ鬼き没ぼつな男だ」

　つぶやいてから、アレクは携帯電話を取りだした。

　イギリスに残っている腹心、サー・アイスマンの番号に国際電話をかける。

　ほどなくして出た伝説の騎士に、アレクはこの数時間でまとめた〝計画〟を手て際ぎわよく語っていく。組織の長が国外に長期滞在し、陰いん謀ぼうを企くわだて、自みずから実行に移す。そのフットワークの軽さに、やはりアイスマンは苦言を呈ていしてきた。

『……あと、あなたの行動への抗議が日本のカンピオーネから届けられました。われわれもアレクサンドル・ガスコインの居場所を知らないのだという事実を伝えて、どうにかしのぎましたが』

「無視しておけ。あとで俺が直接対応する」

　そう言ってから、アレクは念のため付け足した。

「本部の方はいつものように処置しておいてくれ。草くさ薙なぎ護ご堂どうとやらが怒りにまかせて乗り込んでくるようなら、とっとと撤退しろ。神殺しなどという天災に立ち向かう必要などない。せいぜい無駄なカロリーを消費させればいい」

『そうしましょう。トップ不在の今、われわれにはその程度しかできませんからな』

　皮肉っぽく言うアイスマンに、アレクは悪びれず語りかけた。

「そう言うな。このあたりでグィネヴィアとの腐れ縁を切り、借りを返しておくのも悪くないだろう？　あの女を罠わなにかける最高の機会、無駄にするのもバカバカしい。もうしばらくの間、自由にやらせてくれ」

　このとき、ロサンゼルスは木曜日の深夜だった。

　同じ頃、時差の関係で日本は金曜日の夕方である。そして、東方の果てに住むカンピオーネは、もうすでに行動を開始していた。

3

　日本でアテナが逝いってからの約一週間。

　この間、世界で最も多忙な魔王はアレクサンドル・ガスコインだった。一方、日本の草くさ薙なぎ護ご堂どうはふだんどおりの生活を送っていた。

　何しろ学生である。平日は学校に通う義務があるのだ。

　だが、それは人じん畜ちく無む害がいな生活を営んでいたという意味ではない。むしろ逆だった。

　次の週末は土日だけでなく、週明けの月曜日も祝日の三連休。ここに向けて、護堂は不届きな準備を行っていたのである。その顛てん末まつを追いかけると、以下のようになる。

　ランスロットと戦い、アテナの最さい期ごを見届けた日の夜。

　ある文書を見せられて、護堂はあきれた。

『小しよう生せいの興味をかきたてる物品であったゆえ、暫ざん時じお預かりしたく思い、略式にて拝はい借しやくいたした旨むね、ご承知いただきたく候そうろう。十分な検分のあと、ご返却申し上げたい。尚なお、当方の保護を要する物品であると判明した場合、検分にかかる時間が長びく可能性もあること、ご了承願いたし——。Alexandre Gascoigne』

　正せい史し編へん纂さん委員会に送られてきた手紙であった。

　署名はアレクサンドル・ガスコイン。天あま之の逆さか鉾ほこを奪ったカンピオーネである。通称は黒王子ブラックプリンスアレクだとか。

「……つまり『ちょっと気になったから無断で借りていく。返さないかもしれないが、気にするな』ってことか。何なんだ、こいつは！」

　と、護堂は文句をつけた。

　千ち代よ田だ区く三さん番ばん町ちようの沙さ耶やの宮みや家別邸に、魔術で郵送されてきたそうだ。

　護堂は木き更さら津づから帰ってきたあと、すぐ帰宅せず、こちらへ立ち寄った。アレクからの手紙を見るのと、今後の方針を相談するためである。

「これが有名なアレク王子の『拝借書』ですか。はじめて見ました」

　つぶやいたのは沙耶宮家の次期当主、馨かおるだった。

　別邸の応接間には、男装の麗れい人じんである彼女と護堂、そしてエリカがいた。

　三人だけの緊急会議である。恵え那なは神がかりの使いすぎで強制入院。祐ゆ理りとリリアナは石化の後こう遺い症しようがないか検査するため、やはり病院へ。甘あま粕かすも事後処理で外出していた。

「こいつ、こんな真ま似ねを何度も繰りかえしているのか？」

「ええ。あの方は欧おう州しゆう各地の魔術結社が秘蔵する霊れい宝ほうや神具を、いくつも強引に借用されているの。『興味がある。ちょっと調べてみたい』とかおっしゃって」

　護堂に答えて、エリカ・ブランデッリは肩をすくめた。

「警戒が厳重なときは予告状を出して華々しく盗み出し、そうでもなくて見せ場がないときは拝借書を残して強ごう奪だつ。で、特に重要と見たものは返却せず、配下の結社《王おう立りつ工こう廠しよう》本拠地の美術館で展示して、手て許もとに残すそうよ」

「伝統ある大英帝国の流儀にならった、と吹ふい聴ちようしているそうですね」

　イギリスの誇る大英博物館。

　展示物の多くが世界各地から強奪した品であるのは、有名な話だが……。

　それをわざわざ真似るカンピオーネ。そういえば、『性格の悪いひねくれ者』だと聞いた覚えが護堂にもあった。

「たしか、イギリスのカンピオーネなんだよな？」

「ええ。七人いらっしゃる魔王方のなかでも、他の方々とはすこし趣おもむきがちがう方だと、よく耳にしますね」

　馨が答えながら、エリカをちらりと見た。

「そのあたりはエリカさんが詳しいんじゃないかな？」

「そうね。わたしたち欧州の魔術師は、あの方がカンピオーネとなられた一二年前から、さんざん悩まされてきたわ」

　話を振られて、エリカが語る。

「ヴォバン侯こう爵しやく、羅ら濠ごう教きよう主しゆ、サルバトーレ卿きよう、ジョン・プルートー・スミスさま、それに草薙護堂。この方々はまさに『戦士』だわ。彼らが真に輝き、心の充足を覚えるのは戦いのなかでだけ。それも神か、同じカンピオーネが相手のときだけでしょうね」

「……さりげなく俺のことをまぜるなよ」

　不適切な例に護堂は苦情を言ったが、エリカはかまわず続けた。

「黒王子アレクも神殺しである以上、きっと『戦士』なのだと思うわ。ただあの方の場合、同時に『探たん索さく者しや』であり『冒険家』でもある……といえばいいのかしら」

「探索者で冒険家……？」

　予想外の言葉に、護堂は考え込んだ。

「つまり戦いだけじゃなくて、謎なぞや危険に挑戦することが生き甲が斐いみたいな男なのか？」

「言い得て妙ね。まさにそうよ。その結果がこれというわけね」

「ドニのアホが『ちょっと決闘しようよ！』とか言うのと、大差ないな……」

　エリカが指さした借用書を見て、護堂は愚ぐ痴ちをこぼした。

「でも、何のために天之逆鉾を盗んだんだ？　まさか、グィネヴィアたちに渡すため？」

「その可能性は低いと思うわ。あの方と神祖グィネヴィアは数年来の仇きゆう敵てき同士らしいから」

「……だったら、ガスコインってやつの問題はすこし棚上げするか」

　エリカの返答を聞いて、護堂はつぶやいた。

「そいつのところに天之逆鉾があるなら、グィネヴィアたちの注意はそっちに向けられるはずだよな？　なら、その間に俺はもっとべつのことをしたい」

「べつのこと、ですか？」

「はい。あいつと――ランスロットと戦う準備です」

　馨に問われて、言い切った。

　軍神の名に、男装の麗人とエリカが即座にうなずく。

「ただの勘かんだから根拠はありませんけど……あいつはたぶん、俺と戦うためにまた日本へ来るような気がします。そのときのために準備をしておきたいんです」

　アテナを死に追いやったランスロット・デュ・ラック。

　あの神といつかまた戦うと、護堂は自みずから宣言した。そして、その日はおそらく遠くないという確信が胸の裡うちにあった。

　もしかしたら、神殺しの直感が予知しているのかもしれない。

　だとしたら、ランスロットと戦うために『剣』を研とぐのは急務だといえた。

　この翌日、月曜日。

　リリアナと祐理は病院での検査が長びき、学校を欠席した。

　そして火曜日。問題なしと太たい鼓こ判ばんを押されて、ふたりは学校に戻ってきた。その日の屋上、護堂たちは昼食を食べるため中庭に集まった。

　いつも屋上で食べていたが、もう一一月も中旬である。

　だいぶ風が冷たくなってきたので、中庭に場所を変えたのだ。四方を壁にかこまれているおかげで、日差しさえあれば十分にあたたかかった。

　そして、この席で護堂は『黒王子アレク、行方ゆくえ不明』の報を聞いた。

「今回の件にクレームを入れてくれって、護堂に頼まれたでしょう？」

「ああ」

「だから、《王立工廠》に連絡を取ったの。そうしたら向こうの副ふく総そう帥すいであるサー・アイスマンは、あの方が二日前まで日本にいたことは認めたのだけど」

　憮ぶ然ぜんとした面おも持もちで、エリカは語った。

「今現在、どちらにいらっしゃるのか把は握あくしてないのですって」

「ふつう、組織のリーダーが留守にするときは、所在を明らかにするよな？」

　護堂はあきれて言った。

　甘粕から天之逆鉾を奪った黒王子アレクは、どこへ消えたのか。正史編纂委員会のエージェントたちも突きとめられないらしいから、本当に謎だ。

「実はアイスマンのおじさまとは子供の頃からの知り合いなのだけど、こんなふうにおっしゃっていたわ」

　エリカの叔お父じ、パオロ・ブランデッリと並ぶ伝説の騎士いわく。

『申し訳ない。アレクサンドル・ガスコインはこの数日、こちらからの連絡にも一切応こたえず、消息不明になっている。遺い憾かんだが、ときどきあることなのだよ』

『こうなったら最後、彼の方から連絡があるのを待つしかない。われわれはボスがどこにいて、何をして、どんな危険と対たい峙じしているのか……一切知らされないまま時を過ごすわけだ。しかも、今回は日本のカンピオーネ殿から苦情が来るおまけつきだ。まったく、胃が痛くなって仕方がないな……』

以上がアイスマンという男の発言だったとか。

電話越しの声に、真実をごまかそうとする意図は感じられなかったという。むしろ、奔ほん放ぽうすぎる主あるじを憂うれえる家臣の苦悩がかいま見えたとか。

「アレク王子は度が過ぎるほど単独行動を好むご気性で、しばしば部下を置き去りにするとはよく耳にしていました。もしかしたら、真実なのかもしれませんね」

リリアナがバスケットを開けながら言った。

「もちろん、事実を知りながら隠いん蔽ぺいしている可能性もあるでしょう。むしろ、そちらの方がありそうな話ですが……」

ハンバーガーを手渡しながら、リリアナは護堂の顔をちらりと見る。

手ごねハンバーグにトマト、レタス、ベーコン、アボカド、チーズをバンズではさみ、プラスチックの串で刺して具材が飛び出ないようにしている。

それ以外にも、ピクルスやオニオンリングなどが用意されていた。

いつもながら行き届いたメニューだが、護堂は食事よりも騎士の態度に注目した。

「何だよ、変な目をして？」

「あ、いえ。カンピオーネの方々はとかく周囲を振りまわすものですし、そういうこともあるかもしれないなと思ったのです」

「……本当にそうですね。常識の通用しない方ばかりですし」

なぜか祐ゆ理りまで、護堂を見つめながら言う。

最近、身近な少女たちからのツッコミが増えてきたような……。なんとなく居心地の悪さを味わう護堂だった。

「とにかく、アレク王子が世界のどこにいるのか定かではないわ。稲いな妻ずまみたいな速さで飛びまわれる方ですもの。この何日か

で北極から南極大陸にまで移動していても、まったくおかしくはないわね」

　珍しくエリカが降参宣言し、祐理から渡されたお茶を上品に口へ運んだ。

「思い立った瞬間に即、しかも気ぜわしく行動を起こす天才肌で、まわりはあとからついてくればいいという方らしいから。アマデウス・モーツァルトを組織のトップに据えたらこうなるという、いい見本よね」

「そいつのことは、やっぱり一時保留だな。今はランスロットの問題をどうにかする方が建設的だし、現実的だ」

「まつろわぬランスロットは、非常に謎めいた神格です」

　考え込む護堂へ、リリアナが言った。

「ごくわずかな上位魔女のみが彼を守護神とし、ひそかに庇ひ護ごを受けてきました。その正体は、わたしやエリカも知りません」

「その件について、護堂に伝言があるわ」

　エリカが口をはさんできた。

「魔女の秘ひ奥おうは魔女に訊きくのがいちばん。リリィでも知らないほどの秘密なんだから、訊く相手もおのずと限られてくるでしょう？　だから昨日、あの方に連絡を取ってみたの。そうしたら『個人的に力を貸してもいい』とおっしゃってくれたわ」

「あの方？」

「ええ。ロンドンにいらっしゃる、やんごとなき方」

　護堂はうなずいた。斉せい天てん大たい聖せいと戦ったあと、彼女の素す性じようについては聞いていた。リリアナを超える魔女は、知り合いでは彼女とルクレチア・ゾラしかいない。

「あの方からの伝言はこうよ。『まつろわぬランスロットの謎に近づきたいのであれば、巫み女こを同伴のうえで当地へ来られたし』」

　エリカから伝えられて、護堂は左隣にすわる大やまと和なで撫子しこを見た。

　巫女。もちろん万ま里り谷や祐ゆ理りに決まっている。即座に言ってしまった。

「頼めるか、万里谷」

「は、はいっ。もちろんです！」

　なぜか頬ほおを紅あかくしながら、祐理はうなずいてくれた。

「護堂さんがお望みでしたら……どこへでもお供いたします……」

「助かるよ。ありがとうな」

「言うまでもないでしょうけど、もちろんわたしも同行するわよ。あの方との連絡役もあるし、なによりエリカ・ブランデッリはあなたの騎士なのだし」

「当たり前だ。おまえがいなかったら、はじまらないだろ」

　エリカの口出しにも、護堂は即答した。

　もともと金髪の紅き少女が随ずい伴はんしないなどとは、想像すらしていなかった。

「リリアナ。旅の準備とか手配を頼んでもいいか？」

「あなたとエリカ、そして万里谷祐理の分ですね。……ところで、もうひとりの分も必要かどうか教えていただきたいのですが……」

　侍じ従じゆう長ちようを名乗るリリアナにも声をかけると、彼女は妙にもじもじしながら言った。

「そんなこと、訊く方がどうかしてるだろ」

「は、はい。では、そのように！」

　護堂があえて曖あい昧まいな答え方をすると、リリアナはいきなり上機嫌になった。

　これで抜かりなく、四人分の旅の手配をしてくれるだろう。あと

は出発の日を待つだけ――と、護堂がうなずいたときだった。

「ですが護堂さん、向こうへ行かれるのはやはり今度の週末ですか？」

「ああ。そのつもりだけど？」

「先週も外泊されたばかりですし、草薙家の方々が許してくださるでしょうか？」

　心配そうな祐理の問いかけで、護堂は気づいた。

　先週は金、土と連泊してアテナやランスロットと戦った。今週の金曜日、学校が終わったあとで旅立つなら、二週続けて小旅行をすることになる。

　ふつうの高校生の家なら、なかなか許してはもらえないだろう。

　そのあたり、媛ひめ巫み女こととしての責務に協力的な万里谷家や、そもそも保護者不在のブランデッリ家、クラニチャール家とはちがう。しかし。

「幸いというか、うちの保護者はふつうじゃないから、大丈夫だと思う」

　草薙家の反応を予想してみて、護堂はあっさりと言った。

　母・草薙真ま世よに、旅行の許しを請こうたとする。

『そう。おみやげはいらないわ。好みじゃない食べ物を口に入れる趣味はないから。どうしても献けん上じようしたいというなら、酒だけ受けつけてあげる』

　と、行き先も訊かず、何の詮せん索さくもせずに答えるだろう。

　祖父・草薙一いち朗ろうに旅行の許しを請うたとする。おそらくフッと微笑み、共犯者を眺めるような目で護堂を送り出すだろう。

　我が家の保護者は本当にふつうじゃない。想像してあきれる護堂だった。

「ですが、静しず花かさんが何かおっしゃるかもしれませんよ？

実は昨日、茶道部でごいっしょしたとき、護堂さんが行き先も告げずに外泊されたと、ひどく憤ふん慨がいされていたのです」

「……え？　あいつ、そんなことを？」

　妹・草薙静花。想定外の名前を出されて、護堂は驚いた。

　そういえば、木更津から帰ってきたときも、グチグチと小言をいってきた。疲れていたので適当に聞き流したが。

「そうか。あいつはまだふつうな方だったか」

　護堂は腕組みしてつぶやいた。

　まあ、一族が集合する正月の宴会でウイスキーを一ひと瓶びん開けて平然としていたとか、いずれ途方もない大物に成長しそうな資質をちょくちょく見せる妹ではあるが。

「何か適当な言い訳をでっちあげなきゃなァ……」

　家族に心配をかけさせてはいけない。その想いから、護堂はつぶやいた。

「でしたら、私から静花さんにお願いしてみましょうか？」

「万里谷が？」

「はい。どうしても護堂さんのお力を借りたい用事があるので、すこし遠くの土地にごいっしょしていただいてもかまわないか、と」

　しっとりと微笑ほほえみながら、祐理が提案する。

　そうか。仲間を助けるためという名目なら、静花も納得するかもしれない。勝ち気な妹は、あれでなかなか面倒見のいい親分肌なのだ。

「それはいいかもしれないな。頼めるか、万里――」

「悪いことは言わないから、やめておきなさい。たぶん、火に油を注ぐ結果になるわよ」

「エリカの言うとおりです。手負いの獣けものを無駄に挑発することもないでしょう」

頼みかけたら、エリカとリリアナから同時に止められた。

「あいつもそういう理由があれば、うるさく言わないと思うんだけどなあ」

「ええ。静花さんは心こころ根ねのやさしい方ですし……」

祐理といっしょに、思わず首をかしげる護堂だった。

「やさしいやさしくないはこの際、まったく重要じゃないわ」

しかし、エリカはあきれた様子でばっさり切り捨てた。

「祐理をダシに使うのが問題なの。もちろん、わたしやリリィの名前を使ってもダメでしょうね。もっと効果的な言いわけを考えなきゃダメよ、護堂。……まあ、いざとなったら黙って出かければいいだけだし、たいした障しよう碍がいにもならないでしょうけど」

天才的な交渉人でもある『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』は、肩をすくめて言った。

とはいえ、あまり妹をないがしろにするのも気が引ける。どうしたものだろう？

妹への言いわけを思いつかぬまま迎えた、翌日の水曜日。

護堂は清せい秋しゆう院いん恵え那なの見舞いに行った。

数日前の戦いで孤こ軍ぐん奮ふん闘とうした恵那は、静養のため秩ちち父ぶの実家にもどる予定だった。神がかりを濫らん用ようしたせいで、並々ならぬ疲労とダメージが蓄ちく積せきしたのだという。

「そりゃ、ちょっと体が重いのは本当だけどさ。まだまだ無理は利きくから、王様といっしょにあっちへ行くぐらい大丈夫だよ。王様から馨かおるさんや清秋院のばあちゃんに言ってやってよ。みんなして恵那を実家に閉じこめようとしてさ！」

見舞いに訪れた護堂へ、太た刀ちの媛ひめ巫み女こは不満そうに訴えた。

　ただし、病院のベッドの上で。正せい史し編へん纂さん委員会の息がかかっているという、とある私立病院の個室に強制入院中なのだ。

「清秋院は十分がんばってくれたよ。今はゆっくり休んでくれ。エリカも帰ってきたことだし、俺の方は心配いらないって」

「そりゃそうだけど。でも、王様といっしょにいたいし……」

　いさめる護堂に、恵那は珍しく駄だ々だっ子このような口を利きいた。

　もしかしたら、体が弱っているせいで心細いのかもしれない。護堂は恵那の肩に手を置いて、やさしく言い聞かせた。

「今おまえに無理されて体を壊されたら、俺が困る。俺は元気な清秋院といっしょにいたいんだ。すこしの間、じっとしていてくれよ。頼む」

「ん、もう……。そんな言い方をして、王様ずるい」

　護堂の真しん摯しな頼みに、恵那は口をとがらせながら、こくんとうなずいた。

「いやだけど、夫になる人のお願いだもんね。きちんと養よう生じようしてあげる」

「そ、そうか。悪いな」

　護堂は『夫』と言われて大いにあせったが、安心して笑った。

「その代わり、次にあったときはその……キスしてくれなきゃヤだよ？　でないと、もう二度と王様の命令を聞いてあげないんだから」

「えっ!?」

　恥じらいながら拗すねる恵那は、凶悪なほどのかわいさだった。

　だが、かなり問題のあるおねだりだ。護堂は狼ろう狽ばいし、何と言ってごまかそうかと考えていたら、すかさず恵那にだめ押しされた。

「約束だからね。ちゃんと守ってね！」

　思わぬ成り行きになったが、恵那を静養させることは上う手まくいきそうだった。

　残った問題は静花だけである。面倒だから、今回もないしょで出かけようか。不ふ埒らちなことを考えだす護堂だった。

4

　出発がいよいよ明日に迫った木曜日の放課後。

　学校からの家路をたどる護ご堂どうは、静しず花かに言いわけするつもりをほとんどなくしていた。しかし、幼なじみとの遭そう遇ぐうが流れを変えさせた。

「ああ、護堂。ちょうどよかったわ」

　地元の根ね津づ三丁目商店街を歩いていたら、ツインテールの勝ち気な幼なじみ、徳とく永なが明あ日す香かに呼び止められた。

　あちらも学校帰りなのだろう。都立高校の制服姿だった。

「来月の頭にさ、静花ちゃんの誕生日があるでしょ？　プレゼントとか用意してる？」

「……そういえば、そうだったな」

　この返答に明日香は眉まゆをひそめた。

「その様子だと、すっかり忘れていたようね。あきれた。じゃあ、当然プレゼントの用意なんてしてないわよね」

「ああ。全然」

「まったく！　よその女の子に向ける気配りの半分だけでも向けてあげれば、静花ちゃんだってプリプリ怒らないのに。ほんと、あんたってダメな兄貴よね！」

　いつものとおり、歯切れよく悪態をつく明日香だった。

「気配りって……家族だし、妹だぞ？　気なんか遣つかってられないだろ」

「そこをきちんとするのが男の器量ってもんよ」

　そういうものか？　明日香の言葉に「うーん」と考え込む護堂だった。

「ま、いいわ。なら今度の週末、あたしといっしょに買いに行こ。あんたのプレゼントとかぶらないようにするつもりだったから、ちょうどいいわ。土曜と日曜、どっちが都合いい？　あたしは土曜バイトだけど、午前中だけだから」

　仕切り屋で決断が早い明日香は、テンポよく言いたてた。

　昔はよく、こうやって明日香が即決したプランに沿って遊んだものだ。

「悪い。今週はもう予定が入ってる。土曜も日曜もダメだ」

　護堂は断った。かなり長距離の遠征なので、明日香につきあう余裕はない。

「買い物なんて一、二時間で終わるじゃない。その程度も空あけられないの？」

「ちょっと遠くに行くんだよ。……なんていうか、いろいろゴタゴタがあってさ。そいつを丸く収めなきゃダメな感じで、俺が行かなきゃダメなんだ」

　詳細は語れないので、曖あい昧まいな説明になってしまう。

　さすがに納得してもらえないか？　どう言いつくろおうか悩む護堂に、明日香はハァ～と盛大にためいきをついた。

「そう。わかった、じゃあ買い物は来週ね。それなら大丈夫？」

「あ、ああ。今のところ何もない。もしかしたら、何か急用が入るかもしれないけど」

「そのときはそのとき。臨りん機き応おう変へんにやればいいわ。細かいことは来週決めるわよ」

　幼なじみの反応に、護堂は驚いた。あんな説明で文句が出ないとは。

　いつも挨あい拶さつのように悪態をつくヤツなのに。すると明日香は訳知り顔で言った。

「あんたがそういうふうに言うんだから、どうせ本当に友達のためとかで、ビックリするくらい遠くに行くつもりなんでしょう？　なんたって小学六年のとき、友達が困ってるってだけで金かな沢ざわまで行ったヤツだし」

「ああ。そういや、そんなこともあったな」

　ほとんど忘れかけていた想い出がなつかしい。

　護堂と明日香の友達が転校先の金沢（もちろん石いし川かわ県の）で困った目に遭あっている……と手紙で報されて、『ちょっと様子を見にいくか』と出かけていったのだ。

　ひとりで行くつもりだったが、心配した明日香もついてくることになった。

　徳永家では『まさか家出!?』と騒ぎになりかけたらしい。ちなみに草くさ薙なぎ家は『そういうこともあるさ』と春しゅん風ぷう駘たい蕩とうたる空気だったとか。

「あんたのフットワークの軽さにもあきれたけど、小学生にあるまじき貯金額にも仰ぎょう天てんさせられたわ。まあ、正月になると草薙一族の宴会であやしい勝負に大勝ちしてるのは知ってたけど、まさかお金を賭かけていたなんてね……」

「…………」

　そうだった。小学生二名の旅費は、護堂が全額負担したのだった。

　明日香の所持金が足りず、護堂の懐ふところに余裕があったからだ。

　正月の草薙一族総出の宴うたげには二次会があり、花はな札ふだ・丁ちよう半はんバクチ・バックギャモン・ポーカー・麻雀マージヤンなど、和わ洋よう中ちゆう混在のゲーム三ざん昧まいとなる。子供は参加厳禁が建前だが、なぜか護堂は六歳の頃からまざっていた。

　はじめは面白半分に連れていかれただけだった。

　だが、ためしに参戦したら大勝ちしてしまい、雪せつ辱じよくを期きす大人たちから『今年こそ倒してやる』と強制参加を毎年命じられるのだ。幼少の頃、関東最強の博ばく徒ととして伝説を作った遠縁のじいちゃんにいろいろ教わったおかげかもしれない。

　勝ち分は破格の『お年玉』として預金通帳に加わるのが、恒こう例れい行事であった。

　来年の正月こそ、そろそろ解放して欲しいと護堂は思っているのだが。

「そういうことだから、来週はなるべくつきあいなさい。あと誕生日もあるんだし、静花ちゃんにもたまには気を遣ってあげること。いい？」

　と申し渡して、明日香は自宅の方に歩いていった。

　やっぱりあいつはいいヤツだなと、幼なじみの美点を再確認した護堂だった。

　そして帰宅。居間に顔を出すと、ちょうど静花がお茶を飲んでいた。

「ああ、お兄ちゃん。お帰り。今日は早かったね」

　妹と対面して、護堂はふと思った。たまには明日香の言うとおりにしてみようかと。

「なあ静花。今度の連休、ちょっと友達の家に泊まってくる。たぶん金、土、日って帰ってこれないと思う」

「え⁉　お兄ちゃん、また何日も外泊するつもり⁉」

　やはり、静花の機き嫌げんが一気に悪くなった。

「悪いな。どうしても外せない用事が先週から立てこんでるんだ。でも、来月の三日は空けておくから、どこかへ行くか？　ひさしぶりに明日香なんかも誘って」

　一二月三日は草薙静花の誕生日。

　護堂の唐とう突とつな提案に、妹は目を白黒させた。

「な、何よ、それ？　もしかして、それでごまかしてるつもり!?」

「ごまかしてなんかないって。最近は家にいないことが多くて、いっしょにいないときも多かったからな。たまにはいいだろ？」

　子供の頃は、よく兄妹ふたりで遊んだことを護堂は思い出した。

　親が共働きで、どちらも忙しかったせいだ。離婚した母が実家にもどったことで、皮肉にも祖父という『保護者』が生まれ、兄妹だけで過ごす時間も減ったのだが——。

　静花が兄の素そ行こうを過か剰じように気にする理由。

　もしかしたら、兄離れできていないだけなのかもしれない。だが、それはそれで微笑ほほえましくもある。だったら、もうすこしだけ気を遣ってみるか。

　ちょっと改心した護堂の前で、静花はツンと顔を横にそむけた。

「お兄ちゃんってば、さんざん家族をないがしろにしてきたくせに、突然そんなこと言うんだから。あたしにも予定があるんだから、いきなりそんなこと言わないでよね」

「いきなりか？　結構先の話だろ？」

「あたしはこれでも忙しいの。でも、このところ素行不良が目立つお兄ちゃんが改心して、妹とのふれあいを楽しみにしてるって言うなら、スケジュールを空けてあげなくもないけど」

　ちょっと不機嫌そうに、しかし、すこしそわそわしながら静花は言った。

　つまり、いっしょに出かけてもいいという意味なのか？

　なかなかややこしい。だが、こういう物言いが逆に静花らしかった。素直さとは正反対の態度を不思議とかわいく思い、護堂は答えた。

「ああ。改心したから、たまには昔みたいにしてみたくなった。ダメか？」

「フンだ。いきなり殊しゅ勝しようなこと言うようになって、変なの。お兄ちゃんの改心を無駄にするのもあれだから、今年の誕生日はいっしょにいてあげるけど。でも覚えておいてよね？　また素行がおかしくなったら、来年は容よう赦しゃなく見捨ててあげるんだから！」

　ツンと顔を背けたまま、妹が宣告する。

　護堂は「覚えておくよ」と返事した。笑みが自然とこぼれそうになったので、苦心して堪こらえながら。

　かくして護堂は身近なゴタゴタをかたづけ、出しゅつ立たつの準備をすませたのである。

　ついに迎えた週末、金曜日の放課後。

　草薙護堂は旅の荷物といっしょに、羽はね田だ空港へ向かう。

　同行者はエリカ・ブランデッリ、万里谷祐理、リリアナ・クラニチャールの三人。

　行き先はイギリスのヒースロー空港。飛行機のチケット等は、正史編纂委員会が厚意で用意してくれた。

　ロンドンに向かい、最上位の魔女プリンセス・アリスと再会するための旅だった。

## 第２章　英国魔王事情

### 1

　日本から英国までは、飛行機で一二時間以上の旅となる。

　時差はマイナス九時間。護ご堂どう一行が羽はね田だ空港を発つ頃、日本は夕方だった。

　飛行機に揺られること約半日、ようやくイギリスのヒースロー空港に到着した。だが、日本を発ったときと日付は変わっていない。

　——一七時発の飛行機に乗って日本を出たら、夜の二一時にイギリスに着いた。

　出発点と到着点の時計だけ見れば、そうも解釈できる行程だ。こんなややこしい時間の推すい移いは、時差ボケという形で旅行者の肩にのしかかる。

「何度味わっても、これだけは本当に慣れないよな……」

　ヒースロー空港のロビーで、護堂はぼやいた。

　時差ボケのせいで、だるくて眠い。飛行機のなかで十分寝たのに、だ。

　東アジアから欧おう州しゆうへ向かう旅人全てが味わう苦難である。同行者を見れば、祐ゆ理りがかなりぐったりしていた。体力のあるエリカとリリアナは一応シャキッとしているが、元気溌はつ剌らつというわけではない。

　ちなみに一一月も下旬になると、ロンドンは寒い。

　女子三人はそれぞれ防寒を考慮した装いだった。エリカはノーカラーの紅あかいツイードコートにチュニック、黒のレギンス。リリアナは青いジャケットに丈の短いワンピース、黒のタイツ。祐理は白いダッフルコートに濃いグレーのパンツである。

「空港の近くにホテルを手配しています。今日はこのまま、そちらで休みましょう」

　リリアナが背筋を正しながら言った。

　疲れていても凛り々りしい口調が変わらないのは、彼女の美点だろう。

「一晩ゆっくりして、明日のために英気を養うべきです」

　リリアナの進言に護堂はうなずいた。

　長距離の海外旅行をするときは、訪問先の国の昼夜に合わせて睡眠を取る。そうして体内時計を現地のリズムに合わせて、時差ボケを解消するのだ。

「ところでエリカさん。アリスさま――プリンセスにはもう、謁えつ見けんのお許しを頂ちよう戴だいしているのですか？」

「ええ。何日か前にご連絡を差し上げてね」

　祐理の問いかけに答えながら、エリカは携帯電話を取りだした。メールチェックでもするつもりなのか、電源を入れている。

「何事もなければ、予定どおりに明日プリンセスとお会いできるはずだけど……あら」

「どうしました？」

「そのプリンセスから、メールが届いているわ」

　エリカが携帯の画面を見せたので、みんなでのぞき込んだ。

　英語で書かれたメールだった。飛行機搭乗中に送られてきたのだろう。

『大変です！　エリカからの連絡を受けて草くさ薙なぎさまとお会いする準備（もちろん館やかたを脱出するね♪）をしていたら、女官長のミス・エリクソンに警戒されてしまったわ。

　わたしがウキウキしているのに気づいて、彼女ったら館に結界をはって、脱出を阻そ止ししようとしているの。ひどいと思わない!?

　今、脱出プランを検討中です。決まったら、あらためて連絡します。

　——追つい伸しん。いっそ草薙さまに頼んで、ロンドンを破壊していただけないかしら？　そうしたら、わたし緊急魔王対策本部を立ちあげて、大手を振って外に出ていけるわ♪』

「……これがあの人から？」

　護堂はアリスの淑しとやかさを思い出して、ため息をついた。

　プリンセスの肩書きを持つ女性からの便りにしては、ツッコミどころが多すぎる。

　ネットやメールでは、いきなりテンションが上がる性格なのか。それとも、日常生活でかぶっている猫をかぶり忘れたのか。

「なんとか公こう爵しやく家けのお姫さま……だったっけ？」

「ええ。その昔、欧おう州しゆう本土のさる大貴族と縁えん戚せき関係にありながら、テンプル騎士団系の魔術結社やドルイドの末まつ裔えいたちと接触して、オカルトの叡えい智ちを学んだ名家の姫君よ。欧州最高の貴婦人ともいわれる、やんごとなき女性だわ」

　念のため確認を取ったら、エリカが語ってくれた。

「もともとお体の弱い方だったのだけど、六年前に病状が悪化されてからは、賢けん人じん議ぎ会かい議長の職も退いて、ロンドン市内のお屋敷で静養されていたの。お体の心配をする家人に止められるせいで、気ままな外出もままならないと前に嘆なげかれていたわ」

「でも斉せい天てん大たい聖せいのときは、幽ゆう体たい離り脱だつみたいなことして日本に来てたよな？」

「おそらく、館にはられた結界というのは、霊体の出入りを封じるためのものでしょう。プリンセスの脱走を阻止するための」

　疑問を口にした護堂に、リリアナが答えてくれた。

　なるほど。だが、それならべつに館から出なくてもいいのに。

「俺の方からお屋敷に行けばいいだけなんだから、たいした問題じゃないだろ？　エリカ、向こうにそう返信してくれ」

「それがね、護堂。プリンセスとのお約束なのよ」

　妥だ当とうな提案に対して、エリカはかぶりを振った。

「プリンセスはおっしゃったわ。草薙護堂の訪英に全面的協力を約束するから、姫の『外出』も手伝って欲しいと。それが交換条件だって」

「姫様はどうしても出しゆつ奔ぽんされたいのですね……。お体にさわらないでしょうか？」

　アリスの健康を気き遣づかって、祐理が心配そうにささやいた。

　その隣でリリアナが、やや嘆かわしげに言う。

「まあ、そこも心配だが、あの方ほどの貴婦人にはもっとたおやかに、おっとり控えていていただきたいと思わないでもないな……」

「深しん窓そうのお育ちのせいか、ちょっと奔ほん放ぽうなところがおありなのよね……」

「奔放ですませていいのか……？」

　エリカの感想へ、ぼそりとつぶやく護堂だった。

「でも、さすがに護堂さんがロンドンのどこかを破壊するわけにもいきませんし、どうしたらよいのでしょう？」

「そうでもないと思うわ。要はプリンセスに大たい義ぎ名めい分ぶんを差しあげればいいだけだし」

　もっともな発言をした祐理に、意外にもエリカが反論した。

「最近では草薙護堂のネームバリューもすっかり高まっているし、どうにかなるでしょう。護堂、あちらには計画を連絡しておくから、一働きしてちょうだい」

　何かロクでもないことを思いついたようだ。

　これもアリスと会うため、仕方ない。割り切った護堂は、ため息と共にうなずいた。

「明日は朝から忙しくなるわよ。みんなもそのつもりでいなさい」

「朝からって言うなら、この面メン子ツでいちばん不安なのはまちがいなくおまえだ、エリカ」

　えらそうに呼びかけるエリカへ、護堂はつっこんだ。

　エリカ・ブランデッリは朝に弱い。学校のある日は迎えが必要なほどだ。しかし、悪魔の称号を持つ少女はあでやかに微笑ほほえんだ。

「あら？　そこは大丈夫に決まっているわ」

「言い切っていいのか？　おまえのことだから、ホテルのモーニングコールがかかってきても無視して寝てそうだぞ」

「何を言ってるの。起こすのはあなたの役目に決まってるじゃない」

　エリカがいきなり、護堂に抱きついてきた。

　驚くほど豊満な胸の弾力と、そのくせ華きや奢しやな肢し体たいのやわらかさが密着する。

「せっかくの旅行、せっかくのホテルなのよ。当然、わたしたちふたりで同じベッドを共有して、夜明けのコーヒーを楽しむべきじゃない？」

「…………な、に？」

　護堂が覚えた戦せん慄りつは、並々ならぬものであった。そうい

えば、この状況――。

　今まで気づかなかったが、とんでもないことでは？　いきなり頭が活発に動き出す。考えてもみろ。男ひとりに女子三人の旅。しかも行き先は海外。先週、木更津に向かうときも似たような状況ではあった。しかし、あのときは正せい史し編へん纂さん委員会の面々も居合わせたわけで……。

　今回は完かん璧ぺきに四人だけの遠征だ。なのに、自分から企画してしまった。

　もしかして、異様な環境に慣れすぎた？

　護堂は自みずからが作りあげたシチュエーションに戦慄した。

「……みんないっしょの旅で、男は俺だけ？　甘あま粕かすさんも馨かおるさんも鷹よう化かも、委員会の人たちも誰もいなくて、俺とみんなだけの旅行？」

「ええ。あなたが言い出したことじゃない、護堂」

　腕にしがみつくエリカが、耳元にささやきかけてくる。

　とっさに護堂は、祐理を見やった。すると、大やまと和なで撫子しこ代表ともいえる彼女は顔を真っ赤にして、うつむいてしまった。照れているのだ。

「そ、そのとおりです、護堂さん。あんなふうにお誘いを受けてしまっては、とてもお断りできません……」

　なんともけなげで、そして可か憐れんなつぶやきだった。

　ただのグループ旅行……と言いはるには、あまりにいろいろありすぎた面メン子ツだ。護堂はがつんと頭を殴なぐられた気分になった。

　次にリリアナも見る。銀髪の騎士は、全てを受け容れるように平静だった。

「わたしは終しゆう生せいあなたを補佐すると誓った身です。多少無茶なご指示にも、全力で付きしたがうのは当たり前でしょう。……ところでエリカ、そろそろ草薙護堂から離れるべきだと思う

が？　そろそろ移動すべきだろう」

「あらリリィ。こうして抱き合い、たがいの感触をたしかめながらだって、いくらでも歩けるでしょう？　あまり無ぶ粋すいを言うものじゃないわ」

　旧友兼ライバルから冷たい視線を注がれても、エリカは泰たい然ぜんと応じた。

「何と言っても、護堂自身がわたしたちを引き連れての遠征を望んだのだもの。わたし、彼の愛人として、ふさわしい振る舞いをするつもりよ？　プライベートが充実しなくちゃ、仕事にも集中できないものね」

　エリカの唇くちびるが頬ほおにふれるのを感じて、護堂は自らの迂う闊かつさを呪のろった。

　今からでも間に合う。慎しん重ちようかつ健全に行動しよう。とりあえず密着するエリカを振りほどき、距離を取らなくては。

　だが、魔術で筋力を高めたエリカの肢体は、びくともしなかった。

　しかも、リリアナが旧友兼ライバルを目でとがめ、護堂にまでいさめるような視線を投げかけてくるので、かなり気まずい。

　このままだと、祐理もお小言をぶつけてくるかも……。

　情熱的に体を押しつけてくるエリカの感触はたまらなく心地よいが、護堂は爆弾を抱いている気分だった。ちらりと祐理の顔をうかがう。予想外なことに、媛ひめ巫み女こは真剣な表情で考え込んでいた。そして、おもむろに言い出した。

「エリカさんがこのようなことをはじめてしまいましたし……ちょうどよい機会かもしれません。私からみなさんに提案があります」

　何だ、一体？　護堂はちょっと不安になった。

「旅に出る前から、こうなるのではないかと心配していました。日につ光こうでも一ひと悶もん着ちやくあった末にああなりましたし」

　憂うれいと共に祐理が言った。数か月前の出来事が思い出される。

　たしか日光でもエリカが護堂といっしょに寝ると騒ぎ、それを阻そ止しするため祐理とリリアナも同じ部屋に来てしまったのだ……。

「でも、たびたび似たような問題で揉もめるのは愚おろかしいことだと思います。私たちと護堂さんがいっしょに旅する機会はこれからも多いでしょうし……。ですから、こうすればよいと私が考えたことを申し上げます」

　祐理は決然と顔を上げ、一同を見まわした。

　媛巫女――『媛』の称しよう号ごうにふさわしい、威い厳げんのある面おも差ざしだった。

　そうか。護堂は安あん堵どした。非常識な揉めごとは時間と労力の無駄だから、仲間たちに自じ粛しゆくを呼びかける気なのだ。ありがたい。

「私たちが旅行するときは、必ず全員で同じ部屋に泊まる……というのを決まり事にすればよいと思うんです。それがいちばん波風の立たない方法ではないでしょうか」

　あれ、自粛……？

　自粛どころではない過激なアイデアに、護堂は愕がく然ぜんとした。しかも祐理の提言を、エリカとリリアナがまじめな顔で検討しはじめたのである！

2

　ああ、太陽がまぶしい……。

　ホテルの窓から朝焼けを眺めながら、護ご堂どうはベッド代わりにしたソファの上で思った。毎度毎度、自分もよく理性を保てるものだと感心する……。

　リリアナが予約したホテルの一室である。

　ただし、エリカが交渉して、部屋を変えてもらっていた。

　もともと男女べつべつに泊まるつもりで、複数の部屋を予約していたのだ。男子である護堂と女子三人が同室にならないよう。しかし、その予約をキャンセル。代わりに、大きなダブルベッドを備えた広い部屋を用意してもらった……。

　そのまま一夜明けて——。

　今、ダブルベッドでは三人の美少女が眠り込んでいる。

　もちろんエリカ、祐ゆ理り、リリアナである。キングサイズのベッドなので、細身の女子三人で使用してもすこし余裕があった。仲むつまじげな、微笑ほほえましい光景だ。

　だが、護堂はちょっと眺めただけで、すぐに目をそらした。

　女子のあられもない寝姿というのは、本当に正視できなくて困る。

　祐理とリリアナはパジャマを着ていたが、寝乱れて裾すそがはだけていたり、まぶしいほど白い素足がかいま見えたりする。

　もちろんエリカはいつものように、下着姿で毛布にくるまっている。



　寝相がいい方ではないので、無防備な素肌がさまざまに見えてしまうのは予定調和だ。

　この情景がプレッシャーとなり、護堂を精神攻撃する。しかも、彼女らは三人。単独のときよりも攻撃力は三倍、いや、三乗倍くらいありそうだ。

「お……おかげで、こんなに早く目が覚めた……」

　早朝の太陽を見ながら、護堂はつぶやいた。

　昨夜、祐理の訴えを聞いて。

「たしかに……非常識に見えて、実は合理的なアイデアだ。全員が一箇所に集まることによって、抜けがけを牽けん制せいできるわけだからな」

　と、リリアナは言った。護堂に抱きつくエリカをにらみながら。

「ま、たしかに、機会を均等に割り振るという観点からすれば、悪くはないわね」

　ちょっとつまらなそうにエリカも言った。それでも護堂に密着しながら。

　リーダーである護堂は強く反対したが、全て無視された。そこからはまあ、特筆すべき事件は何も起こらなかった。

　護堂が逃げ出そうとしたら、エリカがドアに『施せ錠じよう』の魔術をかけたとか。

　シャワーを浴び、着替えた女子たちにドキドキしたとか。

　長旅の疲れで眠くなってきたので、女子三人はベッドに横になったとか。

　エリカに「いっしょに寝ないの？」と誘われ、祐理とリリアナに意味ありげな目で見つめられ、いろいろ葛かつ藤とうがうずまいたが護堂はひとりソファに向かったとか。なかなか眠れず、悶もん々もんと夜は更ふけていったとか。

くだくだ書きつづるほどの内容ではないだろう。

何はともあれ、ヒースローのホテルで迎えた朝だった。

「コーヒー……でも飲むかな」

ソファの上で身を起こし、護堂がつぶやくと。

「よろしければ、ご用意しましょうか……護堂さん？」

「せっかく英国に来たのですから、紅茶でもいれてみましょう。道具はあるようですし」

後ろから声をかけられた。

振り向けば、祐理とリリアナがベッドから起き上がるところだった。

「悪い。起こしたか？」

「かまいません。今日は忙しくなりますからね。どのみち早く起床するつもりでした」

「はい。私も同じです」

リリアナの言葉に、祐理がうなずく。それからふたりは部屋に備えつけのティーセットとポットを使い、協力しながら紅茶の準備をはじめた。

日本の宿と同じように、ティーセットを常備するイギリスのホテルは多いのだ。

彼女たちを眺めていたら、護堂は居心地が悪くなってきた。

ふたりとも寝ね間ま着きのままだ。いつもきれいに梳くしけずられている祐理の髪は、すこし寝乱れていた。リリアナもいつものポニーテールではなく、銀髪をストレートにおろしていた。

ふつうなら、家族しか見られない姿だ。

例外は同性の友人か、よほど親密なつきあいの異性だけで……。

「ところで万ま里り谷や祐理。このアイデアはなかなか名案だった

と思うが、すこしあなたらしくない気もするな」

　紅茶をいれながら、不意にリリアナが言った。

「あ、はい。実は恵え那なさんから、木き更さら津づで私たちが石になっていたときのことを教えていただいたときに、すこし思うところがあったもので」

「ああ、あのときか」

　祐理の答えに、銀髪の騎士がうなずいた。

　何気ない会話。だが、護堂はすこし不安になった。無自覚なトラブルメーカー、清せい秋しゆう院いん恵那の名前が出たせいかもしれない。

「せ、先週の事件のとき、護堂さんと恵那さんは同じ宿の同じ部屋に泊まられて、同じ布ふ団とんで一夜を過ごしたと……恵那さんが恥ずかしそうにおっしゃって。そのとき感じたことがいろいろ積み重なって、こんなことを申し上げてしまったのだと思います……」

「…………ふむ。そうだったのか」

　すこし切なげな祐理の告白を聞いて、リリアナは平板な声でつぶやいた。

　それから、いれたての紅茶を持って護堂の方へ来た。

「さあ、あたたかいうちにどうぞ」

「あ、ありがとう。なんか美う味まそうだなっ」

「いえ。あまりよい茶葉でもないですし、味はそれなりだと思います。それより草くさ薙なぎ護堂、考えてみれば石化している間の出来事をくわしくお聞きするのを忘れていました。第一の騎士としては、あるまじき不ふ心こころ得え。お詫わび申し上げます」

　リリアナの謝罪は事務的で、しかも強圧的だった。護堂は身を固くした。

「……深く反省しましたので、是非お聞かせください。わたしと万里谷祐理が石化していた夜、何があったのかをくわしく事細かに。

よろしいですね？」

　護堂はちらりと時計を見た。朝食まで、あと二、三時間はある。

　その間、リリアナの追及から逃れる手段はないように思える。これはまずい。そして、この空気のなかでもエリカは熟じゅく睡すいしていた。

　彼女の安らかな寝顔が、護堂にはたまらなくうらやましかった。

　護堂が疲れる朝を過ごし、どうにかリリアナの機嫌も直ったあと。

　エリカがようやく起床して、朝食になった。

　イングリッシュ・ブレックファストといえば、ボリュームたっぷりの朝食として知られている。護堂たちが泊まったのは、この伝統をしっかり守るホテルだった。

　フライドエッグとカリカリのベーコン。焼きトマト。ハッシュドポテト。ベークドビーンズにマッシュルーム、ソーセージ、薄切りのトースト等……。

　朝から品数たっぷりの食事だった。

　小食な祐理はさすがに残していたが、他の三人は健けん啖たん家かぶりを発揮して、きれいにたいらげてしまった。量だけでなく味もなかなかだったおかげだ。

　朝食後、ホテルを出てタクシーに乗った。

　ヒースローからロンドンまでは、数十分のドライブで到着する。もっとも、護堂たちの目的地はロンドンの中心街でも観光名所でもない。目指すは郊外のグリニッジである。

　タクシーは定番の観光地に立ち寄ることもなく、軽快に走っていく。

「せっかくイギリスに来たっていうのに、ちょっと残念だな」

助手席で護堂はつぶやいた。

はじめて訪れる異国の首都。じっくり見てまわりたいのが人情だ。

もっとも、これは彼だけの感想らしい。エリカもリリアナも、さらに祐理までも、ロンドンには何度か来たことがあるのだとか。

やがて、テムズ川の雄ゆう渾こんな流れが見えてきた。

名前だけなら何度も聞いたことがある。グリニッジはテムズ川の岸辺にある町なのだ。

タクシーを降りると、エリカが先に立って歩きだした。勝手知ったる足取りだ。

みんなでうしろに続く。

グリニッジ。有名なグリニッジ天文台を擁ようする町である。設立は一七世紀。経度〇、グリニッジ標準時の基準点となる天文台だ。

国立海洋博物館、グリニッジパークなど、他の見どころも多い。また、かつてプリンセス・アリスが議長をつとめていた組織、賢けん人じん議ぎ会かいの本拠地だった。

「グリニッジの賢人議会はわたしたちの《青せい銅どう黒くろ十じゅう字じ》や《赤しやく銅どう黒十字》とはちがい、魔術結社ではありません。極端にいえば互ご助じよ会かいのようなものです」

町を歩きながら、リリアナが説明してくれた。

「互助会？」

「はい。もとは会員同士でオカルトの知識を交換し、たがいの見識を高め合おうというシンプルな組織だったのです。研究に行き詰まった会員がいれば、経済的もしくは学術的に援助の手をさしのべたり」

なるほど、たしかに互助会的だ。護堂は納得した。

「それが次第に独自の研究機関を設けたり、アカデミーと呼ばれる

育成機関を設けたりするうちに大きな権けん威いとなり、今の独特な立ち位置を築くようになります。……あと、議会の設立は一九世紀、イギリスはヴィクトリア朝の時代でした。当時の彼らは、生き残るために組織を強化しなければならなかったのです」

「生き残るためって……なんか物騒だな」

　リリアナの言葉に、護堂は首をかしげた。

　すると横にいた祐理が、すこし身をすくませながら言った。

「当時のロンドンには、あの方――デヤンスタール・ヴォバンさまがお住まいだったのです。なんでも、躍やく進しんいちじるしい大英帝国の首都で都会暮らしをされてみたくなったとおっしゃったそうで……」

「えっ、あのじいさんが⁉」

　同じ魔王とさえ気まぐれに戦い、神すら狩りの獲え物ものと見なす妖よう人じん。

　知的なのはうわべだけ。本性は『獣けもの』である老ろう侯こう爵しやくの記憶は、いまだ生々しい。

「当時はまだ青年で、たわむれに王宮のヴィクトリア女王を表ひよう敬けい訪ほう問もんされたといいますね」

「候の脅きよう威いから英国と女王をお守りするため、賢人議会が魔王カンピオーネについての研究を本格的にはじめたというのは、有名な話です」

　リリアナが伝説を語り、祐理は意外な裏話を明かしてくれた。

　あんな怪物と同じ都市に住み、その影に怯おびえながら暮らす。大変な苦労だっただろう。護堂はアリスの先輩たちに同情した。

「さあ、着いたわ。さっそく準備をはじめましょう」

　とあるパブの前でエリカが立ち止まり、皆に呼びかけた。

　これが有名なイギリスのパブか。護堂はちょっと感動しながら、エリカに続いて店内に入った。もちろん祐理、リリアナもいっしょ

だ。

　古めかしい、しかし、きれいに掃除の行き届いたパブ。

　薄ぐらい店内にいると、奇妙なほどリラックスした気分になれた。夕方頃から近所の男どもが集まり、フィッシュアンドチップスをつまみながらビールをたっぷりと飲み、与よ太た話ばなしにふけり、サッカー観戦に興きようじたりするのだろう。

　だが、今はまだ午前中だ。

　開店準備をする中年男性の店員しかいなかった。

　エリカと親しげに挨あい拶さつを交わした彼は、護堂に畏い怖ふのまなざしを向けながら慇いん懃ぎんに一礼し、奥へ引っこんでいった。

「今の人、エリカたちの仲間か？」

「グリニッジ常駐の《赤銅黒十字》メンバーよ。このあたりには欧州各地の結社が人員を配置して、議会の動向をうかがわせているの。……じゃあ護堂、打ち合わせどおりお願いね」

　カウンターに置かれていたノートＰＣの電源を入れながら、エリカが言った。

「仕方ない……。まあ、やるだけやってみる」

　もう中止するには遅すぎる。暗い声で護堂はつぶやいた。

　そして待つこと十数分。パブの扉が揺れ、三〇代後半の白人女性が入店してきた。

　細いフレームのメガネをかけている。きつい顔立ちだった。厳格な女家庭教師を絵に描いたような女性だ。

「お招きに応じて参上いたしました。まさか、魔王であらせられる御身が自みずからロンドンへ出向いてこられるだなんて、本当に意外でしたわ……」

　震える声で挨あい拶さつした彼女は、たしかミス・エリクソン。

　ロンドンの高級住宅街にあるプリンセス・アリス御ご用よう邸ていで女官長をつとめている。昨夜、彼女の公務用携帯電話にエリカが連絡し、草薙護堂の名を使って呼び出したのだ。

　尚、その番号をリークした姫君の名は言うまでもあるまい。

「草薙護堂さま。今回は一体、何のためにこの街へいらっしゃったのです？」

　キッと護堂をにらんでから、ミス・エリクソンは言った。

　なかなかの迫力だった。だが、よく見れば表情が硬い。悪あく逆ぎやく非ひ道どう（？）な大魔王から個人面談を要求され、ひどく緊張しているようだ。

「えーと、はじめまして。実はあなたがたに是ぜ非ひ、可能なかぎり速すみやかに行っていただきたい案件があるんです。わざわざお呼びだてして、申し訳ありません……」

　猿さる芝しば居いに荷担する自分を呪のろいながら、護堂は答えた。

　ホテルを出る前、『こんなふうに言え』とエリカに教え込まれている。過か剰じように演技する気はないので、なるべく淡々と言った。

「わ、われわれ賢人議会は魔王カンピオーネの横おう暴ぼうには屈しません！」

「そうですか。でも、そういう強情が俺やあなた方の双方にとって、歓迎できない結果をもたらすことは当然ご存じですよね……？」

　護堂にしては、珍しくボソボソした話し方だった。

　心に忸じく怩じたるものがあるからだろう。初対面でこんなことしてすいません。いつかお詫わびしますので、と念じながら告げる。

「なんていいますか、俺も過激なことは本当にしたくないんです。ここはひとつ穏おん便びんに、とりあえず話を聞くだけでもお願いできないかなと思っていまして……」

　ボソボソ勧告していたら、ミス・エリクソンの背後にエリカがまわりこんだ。

　厳格な女官長から見えないように、スケッチブックをかかげる。

『もっと魔王らしく、威い厳げんを持って話しなさい！　せっかくのイギリスデビューが台なしじゃない！　草薙護堂ここにありというところを天下に示すのよ！』と書かれていた。

　……無視することにした。

　コホンとせき払いして、護堂は「どうでしょう？」と丁てい寧ねいに訊たずねる。

　そのとき、カウンターにあったノートＰＣのウインドウに美女の顔が現れた。実は、さっきからビデオチャットのソフトが動いていたのだ。

　プラチナブロンドがまぶしい美女の名は、もちろんプリンセス・アリスだった。

『まあ！　カンピオーネでいらっしゃるあなたがどうしてこちらへ!?　もしかして、このロンドンに破壊と混こん沌とんをもたらすべく日本から来たというのですか!?』

　アリスの美び貌ぼうは凛りんぜん然と輝いていた。

　ノリノリだった。『使命感に燃える気け高だかい姫君』の役作りもバッチリだった。

　……彼女はすこし、自じ重ちようした方がいいのかもしれない。

『そんなことはわたしが許しません！　ミス・エリクソン、すぐに館やかたの結界を解除させなさい。賢けん人じん議ぎ会かいの前議長であるアリス・ルイーズ・オブ・ナヴァールが神殺しの魔王殿に拝はい謁えつを願い、直じかにお話をさせていただきます！』

　ネット回線とノートＰＣ越しに、女官長へ命じる姫君。



　しかし、この一いつ喝かつで逆にミス・エリクソンは気を取りなおしたらしく、冷静にメガネのズレを直しながら言った。

「……姫様。どうしてタイミングよく、しかも、このように不自然な形でわたくしと草薙さまの面談に立ち合われているのですか？」

『今は非常時ですっ。些さ細さいな疑問など脇わきに置きなさい！』

「些細ではありません。とても重大な疑問です。まさか姫様、またカンピオーネの魔王方を相手にいかがわしい取引を⁉　いつかはアレクサンドル・ガスコイン、この間はイタリアのサルバトーレ卿きよう！　本当に懲こりない方ですね！」

『うふふふ、何のことかしら？　さあ、草薙さま。要求をおっしゃってくださいな。このアリスの身柄とひきかえにロンドンを見逃してくださるというなら、わたし、どこへでもついて参りますわ！』

「うん、まあ……べつに乱暴なことをするつもりはないんですけど、出てきてくださるのなら本当にありがたいです」

　つきあうのがバカらしくなってきた護堂は、無感動に言った。

　結局、プリンセスの『自分を解放しなかったら草薙護堂がロンドンを襲い、狼ろう藉ぜきのかぎりを尽くす』という脅きよう迫はくにミス・エリクソンが苦く渋じゅうの表情で屈くつし、騒ぎは収まったのである。

3

　かくしてミス・エリクソンが去った数十分後。

　護ご堂どうたちのいるパブに、ひとりの美女が颯さつ爽そうと現れた。

　軽やかな印象の白いロングコートをはおった、プラチナブロンド

の姫君。いわずとしれたプリンセス・アリスである。

「このたびはわたしのためにお手間を取っていただいて、本当に感謝いたします」

　護堂の顔を見るなり、アリスは優ゆう雅がに挨あい拶さつした。

　さっきのノリがうそのような淑しとやかさだ。まあ、アレにあんまりつっこむのも野や暮ぼかもしれない。何事もなかったかのように、護堂は話すことにした。

「出歩いたりして、お体は大丈夫なんですか？」

「はい。草くさ薙なぎさまもご存じの、例の力を使っているのです。体の方はベッドで寝ておりますので、ご心配は不要ですわ」

　例の力——幽ゆう体たい離り脱だつ。護堂はうなずいた。

　からくりを明かしたアリスはいたずらっぽく微笑ほほえみ、それから居合わせた少女たちにも明めい朗ろうな笑顔を振り向けた。

「おひさしぶりね、エリカ！　もちろん、あなたたちのことも忘れていないわ。クラニチャール家のリリアナに、草薙さまにお仕つかえする祐ゆ理り。ふふふ、わたしの記憶力も捨てたものではないでしょう？」

　貴人からの呼びかけに、エリカは優美に微笑んだ。

　祐理は恐縮した体ていで会え釈しやくし、リリアナは黙もく然ねんと頭こうべを垂たれた。

　だが、三人とも口を開かない。護堂とアリス——魔王と賢人議会前議長の会談を妨さまたげるつもりはないという意思表示だろう。

　そして何より、ヨーロッパでは白き巫み女こ姫ひめと呼ばれ、魔術界で最も高貴なセレブとされる女性への敬意ゆえに沈黙しているようだ。どれだけ気さくに言葉をかけてくれても、立場の差は歴然とある——。その事実を尊重しているのかもしれない。

　またアリスの方も、エリカたちの敬意を当たり前に受け容いれている。

　高こう慢まんとか横おう柄へいなのではない。『姫』であるアリスには、それが自然なのだ。ときどきノリが軽くても、気さくでも、このように敬意を払わせる気品。

　さすがプリンセスだと、護堂は感心した。

「ところで草薙さま。アレクサンドルが日本から詳細不明の神具を奪い去ったとエリカからうかがいましたが――」

　テーブルのひとつに護堂と差し向かいですわるなり、アリスが言った。

　尚、他の女子三人はカウンターで控えている。

「はい。とりあえずランスロットの問題をかたづけたあとで、本腰入れて文句を言ってやろうと思ってはいます。……もしかしたら、荒っぽい事態になるかもしれませんけど」

　目には目を、ではないが。手を出してきたのは向こうが先だ。

　草薙護堂は平和主義の信しん奉ぽう者しや。しかし、無抵抗主義者ではない。なるべく穏おん便びんな方法を選ぶにしても、反撃しなくては。

「まあ、さすがです。ええ、そうこなくっちゃ面白くありませんものね！」

「へ？」

　ひどく不ふ穏おんな発言を聞いた気がして、護堂はアリスの顔を見つめ直した。

　すると、欧おう州しゆう最高の貴婦人はわざとらしく優美に微笑んだ。

「いえ、こちらの話です。お気になさらないでくださいな。それより草薙さま、ひとつご忠告さしあげてもよろしいですか？」

「はい、もちろん。何でしょう？」

　プリンセス・アリスは並外れた霊力と見識を持つ。そのことは義姉・羅ら濠ごう教きよう主しゆと揉もめたときにかいま見ている。

護堂は居ずまいを正した。

「草薙さまはすでに幾人ものご同どう朋ほう……サルバトーレ卿きよう、ヴォバン侯こう爵しやく、羅濠教主、ジョン・プルートー・スミスさまと矛ほこを交まじえ、あるいは友ゆう誼ぎを結んでいらっしゃいます。カンピオーネがどれだけ埒らち外がいの方々であるか、すでにご承知のことでしょう」

　たしかに。個性的すぎる同族たちのことが自然と思い出される。

　護堂がうなずくと、アリスはちょっと心配そうに言った。

「あの方々とアレクサンドルには、決定的なちがいがあります。だから、もしかすると他の魔王方よりもくみしやすく見えるかもしれません。でも、お気をつけください。それは彼と争ううえで、深刻な陥かん穽せいとなります」

「決定的なちがい？」

「はい。先に挙げたカンピオーネのみなさまは、どなたも非近代的——神話的と申し上げてもよい方々です。基本的に剛ごう胆たんで、些さ事じにこだわらない豪ごう傑けつぞろい。ときに知ち略りやくも駆く使ししますが、最終的に拠より所どころとするのは野性の勘かんであり、本能。ひよわな現代人が忘れた獣けものの闘争心を胸に秘め、激情にまかせて神さえも殺あやめてしまう……」

　たしかに、そんな人間ばかりかもしれない。

　それをアリスは『非近代的』と評する。面白い見方だった。

「ですが、ただひとりアレクサンドルだけは近代的な人間性です。やたらと細かいところに気をまわす神経質な性格ですし、無駄に勘かんがいいくせに策略家で。異様に負けず嫌いだから闘争心は旺おう盛せいでしょうけど、獣なんて感じの格好よさとはちょっとちがいますし」

　黒王子アレクと白き姫アリスはライバル同士。

　エリカの教えを思い出しながら、護堂は「はあ」と相づちを打った。なるほど。長いつきあいの分、遠慮なく相手の人格に文句をつけるのか。

「あの人、ヴォバン侯爵ほどスケール感もないですし、羅濠教主ほどハチャメチャでも、スミスさまほど神秘的でもありません。でも、だからといって甘く見ていると、足もとをすくわれます。せっかくの頭のよさを、ろくなことに使わない人なんです！」

「もしかして、すくわれたんですか？」

　くやしがるアリスに訊たずねたら、正解だったようだ。

　姫君は昔の失態を恥じらうように、こくりとうなずいた。

「恥ずかしながら、何度か。……アレクサンドルはたぶん、チンギス・ハーンやリチャード獅し子し心しん王おうにはなれないでしょうね。でも、ナポレオン・ボナパルトになら、きっとなれます。あと、アルセーヌ・ルパンの名みよう代だいもつとまるかしら？　彼はそういう『王』なのです。お忘れなきよう」

　プリンセスの言わんとするところを、護堂は理解した。

　冷れい酷こくと虐ぎやく殺さつを本領とする野や蛮ばんな大英雄、度が過ぎるほど勇ゆう猛もうな騎士王にはなれない。

　だが、近代ヨーロッパが生んだ軍事的大天才、あるいは冒険小説のなかにのみ存在しうる怪盗紳士に比される男。一体、どんなカンピオーネなのか？

　すさまじい雄ゆう敵てきの影を見た気がして、ひそかに護堂は武者震いした。

「ところでアリスさん、そろそろ本題に入ってもかまいませんか？」

　しかし、草薙護堂にはもっとべつの強敵がいる。話題を変えることにした。

「さしつかえなければ、ランスロットについて教えてください。あなたのような魔女の守護神だとリリアナは言っていましたが」

「ええ。そのために草薙さまはいらしたのですものね」

　アリスは考え込みながら、つぶやいた。

「ですが、申し訳ありません。たしかに彼は最上位の魔女たちの守護神。でも、それはわたしたちが彼の出しゆつ自じについて熟知しているという意味ではないのです」

「そうなんですか？」

「はい。中世の昔から、上位魔女たちは独自のネットワークで結ばれていました。『ワルプルギスの夜』のような集会を定期的に開いたりして。そして、このネットワークを作りだしたのが当時の魔女王、先代のグィネヴィアさまです」

「先代のグィネヴィア⁉」

「はい。今現在のグィネヴィアさまは、数十年前に転てん生せいを遂とげた二代目なのです」

「初代が中世で、二代目が現代……ずいぶん間が空いてますね？」

「神しん祖その方々は転生を遂とげるまで数百年かかるらしいのです。それが原因でしょうね」

　生まれ変わるまで数百年。不滅の魔女にも弱点があったらしい。

　感じ入る護堂に、アリスはさらに言う。

「初代グィネヴィアさまはアーサー王伝説の原型となった『最後の王』休眠から数百年後に誕生し、一二世紀の末頃に殺害されます。ランスロット卿は彼女の庇ひ護ご者しやでしたから、彼女に仕つかえる上位魔女も〝ついで〟に守護していたのですね」

「――え？」

　何気なくアリスが語った内容に、護堂は驚きよう愕がくした。

　今の一言に、とんでもない重要情報がいくつもあったような……。

「アーサー王のもとになったのが『最後の王』？　それってこの世の最後に顕あらわれる、俺たちカンピオーネの宿敵だとかいう？」

「まあ、草薙さまもご存じでしたのね。ご説明の手間がはぶけて、助かりますわ」

　アリスは軽やかに微笑んだ。

「じゃあ『最後の王』ってアーサー王なんですか？」

「いいえ、ちがいます」

　核心的な質問をしたら、あっさり否定された。どういうことだ？

「まつろわぬアーサーが六年前に顕けん現げんしたとき、そうではないと明確になりました。おかげで二代目のグィネヴィアさまが半狂乱になって、大変だったんですよ。……あのときもアレクサンドルだけが『最後の王はアーサー王にあらず』と仮説を唱えていて。正解だったときの〝どや顔〟ったら、今思い出しても腹が立ちます！」

　こぶしを握りしめて、アリスが訴える。

　すると、黙って控えていた少女たちが色めき立った。

「アーサー王が『まつろわぬ神』になっていたのですか、プリンセス!?」

「しかも、六年も前に!?」

　エリカとリリアナが愕がく然ぜんとしている。

　欧州出身、しかも騎士である彼女たちには、アーサー王の名は日本人の護堂や祐理には想像できないほど重いのかもしれない。

　紅と青の騎士たちに、アリスはいたずらっぽく微笑みかけた。

「はい。長い話になりますから、あとで当時の報告書をあげましょう。でも、他た言ごんしてはなりませんよ？　あそこに書かれた内容は、賢人議会でもディオゲネス・クラブのメンバーにしか明かされない機密事項なのです」

　騎士たちが「かしこまりました！」と畏おそれ入る。

　それにうなずきかけて、アリスは護堂に向き直った。

「今は昔話よりも、軍神ランスロットのお話ですね。円卓の騎士物語にあるランスロット卿のエピソードには、初代グィネヴィアさま

の指示でアーサー王神話を布教した創作集団……特に、クレティアン・ド・トロワによる脚色が数多く加えられています。だから、彼本来の神格を読み解くヒント程度にしかなりません」

　プリンセスがまた、重要単語をさりげなく織おりまぜてきた。

　この人を頼って正解だった。そう痛感する護堂だった。

「むしろ、彼とゆかりのある土地を訪ねて、かの軍神はいかなる神か——心を澄み渡らせて、真実を謙けん虚きよに授さずかろうとする方が良策でしょう。草薙さま、あなたはそのための切り札をすでに手にしておられます」

　と、アリスはずっと静かに控えていた少女を見やった。

　最高の霊視力を持つ媛ひめ巫み女こ、万里谷祐理。やや茶色がかった黒髪の美少女は、プリンセスの言葉に深くうなずく。このとき、はじめて護堂は気づいた。

　アリスはイギリス人で、祐理は生きつ粋すいの日本人。

　だというのに、ふたりはどこか雰ふん囲い気きが似通っていると。

「まずサマセットへ向かいなさい、祐理。かの地に刻まれた魔女王とランスロット・デュ・ラックの爪つめ痕あとにふれるのです」

「はい。ご助言のとおりにいたします、プリンセス」

　迷わず即答した祐理に、アリスはやさしい笑みを向けた。

「ふふふ、大丈夫。あなたならきっと、何かを感じ取ることができるわ。現地へはわたしも同行して、お手伝いするつもりですし」

「え？　姫様が御おん自みずから⁉」

「あ、いえ。そこまでしていただかなくても」

　祐理が恐縮し、護堂もあわてて遠慮した。

　だが、プリンセス・アリスは大いに力を込めて訴えた。

「いいんです！　これはどちらかというと、個人的な趣味ですか

らっ。たまにはお出かけしないと、わたし、退屈で骨まで腐くさりそうに感じるんです！」

「はあ」

「それに実は、前から祐理に手ほどきしておきたいことがあったのです。いい機会ですから、旅の間にそちらもすませてしまいますわ」

　どうやら遠慮は要いらないらしい。護堂はありがたく申し出を受けることにした。

「グィネヴィアさまとランスロット卿について、わたしが知っていることも道々お話ししましょう。……まあ、その多くを解き明かしたのはアレクサンドルなのですけど」

　ちょっと憮ぶ然ぜんとしながら、アリスは言った。

「ほんと、あの人ったら、そういうことにも異常な才能を発揮するんですから。知恵比べをしていると、いやになってしまいます！」

　またガスコインか。護堂は漠ばく然ぜんとした不安感を覚えた。

　カンピオーネは神殺しの戦士。だが、黒王子アレクはそれだけではない。数々の神秘と謎なぞを解明する冒険児にして、知ち略りゃく縦じゅう横おうの策略家。即断即決、独断専行を身上とする天才肌で、おそろしく活動的な切れ者……。

　この男をこのまま棚上げしていると、いずれ足をすくわれそうな気がしてきた。

　だが、今の目的は軍神ランスロットの謎解き——。

　うごめく不安を意思の力で無視して、護堂は目の前の課題をかたづけることにした。

　アリスが目的地だといったサマセット州は、英国の南西部に位置する。

　自然が多く、観光地として有名だという。つまり、都市部と呼べるところがすくない。州全体が田舎いなかだともいえる、風ふう光こう明めい媚びな土地柄だとか。

「そういえば、ガスコインたちの本拠地はその州の先にあるんですよね？」

「ええ。サマセットのもっと西、イギリスの最西端にあたるコーンウォール地方のセントアイブスという町の美術館です。あそこは芸術家の方たちがたくさん住んでらして、ギャラリーや美術館も多いんですよ」

　ロンドンからサマセットまで、三時間かかるというドライブ。

　高速道路に乗った車のなかで、アリスが教えてくれた。

「今回の旅には関係ありませんから、足をのばしたりはしませんが。それに《王おう立りつ工こう廠しよう》へ行っても、もぬけの空からにされるでしょうし」

「空にされる？」

「はい。アレクサンドルが部下にカンピオーネの来襲に備えろ、迎え撃てなんて無駄な指示を出すはずありません。すみやかに総員撤去せよと命じているでしょうね」

　尚、この車はアリスが提供してくれたリムジンである。

　ハンドルは運転手にまかせ、護ご堂どうたちは後部座席でくつろいでいた。

　運転席と後部席の間は、パーティションで仕切られている。ならんですわるアリスと護堂の向かい側に、エリカ・リリアナ・祐ゆ理りという配置。しかし、五人が足をまっすぐのばしても、まだ余裕がある。

　その広い車中で、エリカとリリアナは渡された書類を流し読みしていた。

「これが『まつろわぬアーサー』についての報告書……」

「こんな大事件が六年も前に起きていたのか……」

「あの事件のときに、グィネヴィアさまは聖杯にたくわえた呪力を失ったわ。まつろわぬアーサーはアレクサンドルとわたしの力で、どうにか封じ込むこともできたし。ひとまず『めでたしめでたし』だと思っていたのだけど」

　ため息と共にアリスは言った。

「あれが巡り巡って、先週日本で起きた事件の発端となったのね。……草くさ薙なぎさま、わたしたち賢けん人じん議ぎ会かいはあの事件で、ひとつの原則を再確認しました」

「原則、ですか？」

「はい。地上に降こう臨りんする『まつろわぬ神』の肉体と精神は、〝神話〟によって形成されるという原則です。つまり、神話が変われば神の性質も変わるんです」

　どうやら、ランスロットにも関係する講義らしい。

　アリスの真剣な口調から察した護堂は、背筋を正して聞くことにした。

「たとえば、今の世では『最高の騎士』と崇あがめられている軍神がいるとします。でも、千年前の彼はそうではなかった。では、その神が明日降臨するとしたら——」

「『最高の騎士』として降臨するんですか？」

「そのとおりです。ですが、もし彼が地上に『まつろわぬ神』として降臨したのが一五〇〇年以上も前であれば……神話の変へん遷せんは彼に影響を与えることなく、彼は当時の神格のまま地上にいることでしょう」

「……それ、やっぱりランスロットのことですか？」

「ええ。ランスロット卿きようを理解するには、三つの障しよう碍がいがあります。一、彼がもう千年以上も前に顕けん現げんした神であること。二、千年の間に彼の出しゆつ自じにまつわる神話が失

われ、調査が困難であること。三、彼が『最高の騎士』であると新たな神話を〝創作〟した人々がいて、しかも広く伝でん播ぱしてしまい、実像がいっそうわかりにくくなったこと、です」

　グリニッジでアリスが口にした名前を、護堂は思い出した。

「さっきクレ何とかがどうとか、おっしゃってましたよね？」

「はい。クレティアン・ド・トロワ。ランスロット卿が登場する物語を最初に執しつ筆ぴつした一二世紀の吟ぎん遊ゆう詩し人じんです。彼はおそらくテンプル騎士団系の魔術師で、しかも当時の魔女王である初代グィネヴィアさまとの癒ゆ着ちやくが疑われます」

「え!?」

「新たなアーサー王神話をつむぐにあたって、グィネヴィアさまとランスロット卿を重要登場人物として加えたのは、彼とその仲間たちです。なので、円卓の騎士物語から卿本来の神格をきちんと読み解くのはむずかしいでしょうね……」

　ランスロットの身辺調査。思ったよりも困難なミッションだったようだ。護堂は「うーん」と腕組みし、それから祐理をちらりと見た。

「ええ。そういう事情ですので、この子の霊視がとても重要になります。ふふふ。だから、よろしくお願いね、祐理？」

「は、はいっ。微力を尽くしますが……御お力ちからになれるかどうか……」

「大丈夫よ、わたしが保証するから。あ、でも、根拠は何か訊きいてはいやよ。乙女おとめの勘かんとしか答えられないもの♪」

　身をすくませて恐縮する祐理に、プリンセスはたおやかに微笑みかける。冗談のような本気のような、微妙な口調だ。

　そこからはもう、アリスは実務的なことを話そうとはしなかった。

　護堂相手に講こう釈しやくするのをやめ、エリカ、リリアナ、祐理ともおしゃべりに興きようじ、軽やかに談笑する。おそらく、媛ひめ巫み女この気負いをなくそうと気き遣づかったのだろう。

　その間も車は順調に走り、高速道路から一般道に下りた。

　窓から外を見れば、見渡すかぎり緑の野原だった。ときどきなだらかな丘きゆう陵りようが大地にカーブを描いており、起き伏ふくを作っている。

　その牧歌的な光景のなかで、護堂は不審なものを発見した。

「何だ、今の？」

　今通りすぎた荒野の一角に、巨大な石の建造物があったのだ。

　長方形の大石を三つも使って組み立てていた。鳥居のような形だった。ふたつの石を二本の柱にして、その上に三つめの大石が乗る。石はどれも数トンはありそうなサイズだ。

「そういえば、サルデーニャ島でも似たようなのを見たな」

「正解よ、護堂。あれは有史以前のヨーロッパ先住民が遺のこした巨石建造物ドルメンだもの。サルデーニャ島にもああいう感じの建造物が、内陸部の方にたくさんあったわ。ほら、メルカルト神と遭そう遇ぐうしたあたり」

「……ああ。あれか！」

　エリカに言われて、なつかしい想い出が甦よみがえってきた。

「ブリテン島の各地に巨石建造物が造られたのは、新石器時代の末期から青銅器時代にかけてだといいますね。ケルト人もまだ到来していなかった頃、先住民族が築いたものです。これらと類るい似じした様式の巨石建造物は大陸――特にフランスのブルターニュ地方にも見られます」

　護堂の隣で、アリスが講義してくれた。

「コーンウォールから海を渡れば、すぐブルターニュです。海にかこまれた島国であっても、大陸の人々と交流し、その影響を受けて文化が変質していくのだという証あかしですね」

　などと話すうちに、荒野のなかで車が止まった。

　後部席のドアがひとりでに開く。ついに到着したらしい。まずエ

リカとリリアナが、次に護堂と祐理、最後にアリスが降車した。

　見渡すかぎりの野原。仲間以外に人間はいない。

　そして、この光景のなかにそびえ立つ巨石建造物――。

　今度は円形だった。球体ではない。直径一〇メートルはありそうな、巨大な円なのだ。まんなかのあたりはご丁てい寧ねいにも空洞で、岩で造られた指輪のようだった。

　この巨石製の指輪が、広野に直立している。

　どこか荘そう厳ごんで、しかも、あっけにとられる眺めでもあった。

「……白い女神――？　それに戦いの王……？」

　そして、不意に祐理がつぶやいた。

　よろよろとした足取りで、円形の巨石に向かっていく。

「巨石文明は有史以前の先住民が遺のこした遺産。ですが、このように巨石建造物は後世にも残り、あとからブリテンにやってきた民たみにも受け継がれていきます」

　巨石へ歩いていく祐理を見守りながら、アリスが語る。

「ケルト人もローマ人もサクソン人も、これらの巨石を聖なるもの、聖なる場所、あるいは神そのものとして信しん仰こうし、守護したといいます」

　ついに、祐理が円形の巨石にふれた。

　媛巫女はたおやかな美び貌ぼうを怜れい悧りに研とぎ澄すまし、両目を閉ざす。

「六年前の『まつろわぬアーサー事件』の際に、グィネヴィアさまとランスロット卿は聖杯の呪力を最大限に引き出すため、ここで大がかりな儀式を行いました。この地にはまだ、おふたりの霊気が残のこり香がのようにただよっているはずです。祐理なら何かを読み取れるのではないかと期待して、ご案内したのです」

　アリスの語りに聞き入る護堂の前で、祐理がふたたび目を開いた。

　そして、くずおれる。膝ひざの力が抜け、立っていられなくなったのだ。霊視による啓示を得て、かなり消耗したらしい。

「万ま里り谷や！」「しっかりなさい、祐理！」「何か見えたのか!?」

　あわてて駆け寄ると、エリカとリリアナも集まってきた。

　護堂は媛巫女の背に腕をまわした。支えてやるためだ。リリアナもすぐに手をのばし、助けてくれる。すると、祐理が弱々しく微笑んだ。

「白き女神と、対ついをなす戦いの王。それからサルマタイという名前が視みえました。……もしかして、古い国の名前でしょうか？」

「いいえ。サルマタイ……サルマティアともいうわ。国ではなくて――」

「古い民族の名前だ。そうか、ランスロット卿が最源流の《鋼はがね》なら、当然そこに行きつくわけか……！」

　祐理のささやきに、エリカとリリアナが興奮気味に答えた。騎士たちには心当たりのある名前らしい。護堂も感謝しながら彼女を車に運ぼうとした、そのとき。

　ブオオオオオオッ！

　やたらと豪快な排気音が聞こえてきた。

　見れば、向こうから大型バイクが近づいてくる。

　車種はハーレーダビッドソン。乗り手は黒い革かわジャンに革ズボン、サングラス姿。ヘルメットにバイザーはなく、鉄の帽子という雰ふん囲い気きだ。ハーレー乗りの定型を忠実に守るようなファッションだった。

「ここに用があるのか？　パワースポットで幸運の願がん掛かけをする輩やからにも見えないが……」

「あれはもしかして、おじさま!?」

　不ふ審しんそうにリリアナがつぶやく横で、エリカが驚いていた。

　護堂たちのすぐ前でハーレーが停車する。黒ずくめの乗り手はヘルメットを脱いで鋼鉄の馬から降り、歩み寄ってくる。

「やっぱり……おひさしぶりですわね、アイスマンのおじさま」

「美しくなったものだね、エリカ。この間は電話越しだったので、わからなかったよ。仇きゆう敵てきパオロの姪めいと数年ぶりに語り合いたいのはやまやまだが、勘弁してもらおう。今日の私はメッセンジャーとして参上したのでね」

　深みのある声で返答しながら、彼はサングラスを取った。

　苦み走った美男の顔が露あらわになる。三〇代なかばの白人だった。

「お初にお目にかかります、草薙護堂。アレクサンドル・ガスコインの臣しん、アイスマンと申します。……ああ、もちろんあなたとの再会もよろこばしいですよ、プリンセス」

　エリカから名前だけは聞いていたサー・アイスマン。

　その男がなぜここに？　いぶかしむ護堂へ、伝説的な騎士は手紙をさしだした。

「われらの総そう帥すいアレクが魔術で郵送し、あなたに渡せと命じた文書です」

「俺宛あてにわざわざ？　って何だよ、これは」

　受け取った手紙を一読するなり、護堂はあきれた。

『只ただ今いまより小しよう生せい、ささやかな計画の実施に取りかかる所存。

　そこで、くれぐれも貴殿にお願いしたき儀ぎあり。どうか事態を

静せい観かんされたし。

　余計な手出しは無用。重ねてお願い申し上げる。貴殿には万事を静観してもらいたし。

　好奇心、お節せつ介かい、義ぎ侠きよう心しん、気まぐれ、遊び心、その他の感情に基もとづいての邪じゃ魔ま立だて、一切をお断り申し上げる。

　追伸。よろしければ、わが郷土コーンウォールにて愛人方と憩いこわれてはいかがか？

　部下に命じて貴殿を歓かん待たいさせる用意、当方にはあり。一月でも二月でも滞在していただきたい。検討されたし』

　またしても古風な日本語による手紙だった。

「何もするな、イギリスでしばらく遊んでいろって？　ふざけたこと言いやがって！」

　護堂が手紙を握りつぶした直後、ポケットの携帯電話が鳴った。

　だが、アイスマンと話をしなくてはいけない。無視しようとしたら。

「アレクの企くわだてと関係することかもしれません。出てみられてはいかがでしょう？」

　謹きん厳げんな顔で勧すすめられてしまった。

　企て？　また不穏な言葉だ。護堂は電話に出てみることにした。

　甘あま粕かす冬とう馬まからだった。日本からの国際電話のようだ。

『たいへんですよ、草薙さん。この間、大騒ぎになった房ぼう総そうの海に、今度は奇き岩がん城じようができあがりました！』

「……奇岩、なんですって？」

『奇岩城です。東京湾のどまんなかに、島がいきなり浮上したんで

すよ。岩ばっかりのゴツゴツした島で、周辺は岩がん礁しようだらけになっています。ＲＰＧの中ボスあたりが魔王城にしていそうな雰囲気がぷんぷんです。おそろしく不吉そうな印象ですな』

　いきなりの不吉な報しらせだった。

　そして、サー・アイスマンは誠実そのものの声でつぶやいた。

「アレクサンドル・ガスコインが計画の遂すい行こうに取りかかったようですな。アレクが申し上げたとおりに静観されるか、急ぎ日本へ帰国されるか……ご随ずい意いになさいませ。私としては世界の平穏のために、前者をおすすめしたいのですが」

　奇岩城とやらが黒王子の仕し業わざ!?　棚上げしていたら、本当に足もとをすくわれた！

　数時間前の不安がもう的中してしまい、愕がく然ぜんとする護堂だった。

## 第３章　二王、あいまみえる

1

　その仮説が唱えられたのは、六年前だったそうだ。

　発表場所はフランス、ブルターニュ地方の港町サン・マロだった。満潮時には海に沈む修道院モン・サン・ミッシェルにも近く、リゾート地として知られている。

　とあるレストランのテラス席に、発表者は陣取っていたらしい。

　名はアレクサンドル・ガスコイン。いわずとしれた黒王子アレクである。

「今、なんとおっしゃいました、アレクサンドル？」

「何度も言わせるな。おそらくアーサー王伝説は、中世ヨーロッパの魔女王だった初代グィネヴィアが、長い歳月をかけて用意した触しよく媒ばいだ。とある大魔術を成じよう就じゆさせるためのな。あるいは、一種の魔ま方ほう陣じんと言うべきかもしれんが」

　触媒？　聞き手であるプリンセス・アリスは小首をかしげた。

　特定の魔術を行使するとき、成功率を高めるために用意される物質。

　これを触媒という。たとえば『眠り』の術を助ける黒こく蓮れんと薔ば薇らの花びらの粉末。『爆裂』の術を助ける、乾燥させたコウモリの糞ふんと硫黄いおうなどだ。

「……アーサー王伝説が触媒？　何の魔術を成功させるための？」

「この世の最後に顕あらわれる王。最強の《鋼はがね》を招しょう来らいする術に決まっている」

　鳩はと肉にくのパイ包み焼きを切り分けながら、アレクは語った。アリスの前には一皿も並んでいない。幽体である彼女は、いかなる飲食物も口にできないのだ。

「神しん祖そどもの究きゆう極きよく的てきな目的は『最後の王』を再さい臨りんさせることだ。そこにおあつらえ向きの術がある。不死の領域より『まつろわぬ神』を呼び寄せる儀式……貴様も知っているな？」

「もちろんです。バカなことを訊きかないでくださいな」

　余談だが、この大魔術は二年後、ヴォバン侯こう爵しやくの手でも実行される。

　ワーグナーの『ニーベルンゲンの歌』を触媒に、英雄神ジークフリートが招来されたのだ。結局、若きサルバトーレ・ドニの剣で葬ほうむられたが——。

「あの秘術を成功させるには、三つの《鍵かぎ》が必要らしい。きわめて巫ふ力りよくのすぐれた魔女や巫み女こ。神の降こう臨りんを狂気に近い強さで願う祭さい司し。そして、呼び寄せる神に血肉をあたえるための神話……地上の国や人々に広く流る布ふした物語だ」

　神々を生み出し、その魂たましいと肉体を形成するのは『神話』である。

　神話がなければ、神は存在しえない。アレクの論ろん旨しを察して、アリスはうなずいた。

「はじめのふたつは、魔女王自身でまかなえるでしょう。でも最後のひとつ、神話だけは独力ではどうにもなりません。だから先代のグィネヴィアさまは——」

「ああ。自らが主しゆ宰さいとなって、アーサー伝説の拡かく充じゆうと伝でん播ぱにつとめたのだろうよ」

　グラスに注いだ赤ワインで喉のどを潤うるおし、さらにアレクは続けた。

「アーサー伝説は、一二世紀頃を境さかいに性質を一変させる。それまでブリテン島でのみ熱狂的に支持されるご当地ヒーローだったのがフランスに輸出され、欧おう州しゅう各地に広まっていく。吟遊詩人トゥルバドールたちはアンジュー伯はく家やアキテーヌ公家など、英国王室と縁の深い貴族の支援を受け、競うようにアーサー王と円卓の騎士物語を謡うたい、執筆した」

「結果、アーサー王は欧州有数の英雄となります。つまりアレクサンドル」

　黒王子が着目したものに気づいて、アリスは言った。

「先代グィネヴィアさまは、『最後の王』招来のために伝説を広めたと言うのですね。円卓の騎士たちを謡った詩人たち——その陰で暗あん躍やくしていた組織の協力を得て」

　一二～一三世紀の中世ヨーロッパ。

　この頃、アーサー王と円卓の騎士物語を発表した作家は幾人もいる。ペンネームの使用者も多く、本名や経歴はたいてい不ふ詳しょうである。だが、その著作の内容から、陰秘学オカルトへの造ぞう詣けいが深いと認定される作家もすくなくなかった。

「あなたが注目されたのは、おそらくシトー派の修道士であったはずのクレティアン・ド・トロワ。十字軍にも参加したハルトマン。それにヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ、ロベール・ド・ボロン……そういった詩人たちなのでしょう？」

　アリスはつらつらと詩人の名を列挙した。

「彼らの著作——特に聖杯や騎士道にまつわる箇所には、テンプル騎士団系の陰秘学オカルト知識が散りばめられていますものね」

「連中の多くがテンプル騎士団ないし、その母体であるシオン派やシトー派修道会のメンバーであった状況証拠だともいえる。また、詩人たちのスポンサーだった貴族の多くとイングランド王家も騎士団と深く結びついていた」

　テンプル騎士団。正式には『キリストとソロモン神殿の貧しき戦友たち』。

　欧州魔術社会の礎いしずえを築いた魔術師集団である。

「テンプル騎士団と先代グィネヴィアの間には、何らかの癒ゆ着ちやくがあったはずだ。おそらく、神祖の術や知識を指導するというような……。実際、聖騎士パラデインの位階者のみが閲えつ覧らんできるダヴィデの言こと霊だまや聖絶クラスの戦闘魔術要よう訣けつには、魔女学ウイツチクラフトの影響を受けたとおぼしき箇所も多いからな……」

　グィネヴィアと出会ってから二年——。

　アレクは『最後の王』と神祖たちの謎なぞに、憑つかれたように取り組んできた。その成果が彼を饒じよう舌ぜつにさせているのだろう。

「そうやってアーサー王伝説を広め、『最後の王』招来の準備としたのだろう」

「アレクサンドル。わたしが調べた魔女の秘録によると、先代の魔女王グィネヴィアさまは一二世紀の終わり頃、たまたま遭そう遇ぐうしたカンピオーネに殺害されたとありました」

　アリスが提供した情報に、アレクは傲ごう然ぜんとうなずいた。

「やはり、その時期か。そうではないかと思っていた。おそらく先代グィネヴィアは陰いん謀ぼうが成じよう就じゆする前に死亡し、『最後の王』招来は頓とん挫ざしたのだろうとな」

「……当代のグィネヴィアさまは、先代の計画を引き継ぐつもりだとお考えなのですね？」

　黒王子と白き姫がブルターニュへ潜入した理由。

　それは、グィネヴィアが『最後の王』招来の儀式に臨のぞむという情報ゆえだった。

「ああ。まあ、たぶん失敗するだろうがな……」

「と、おっしゃいますと？」

「いや、アーサーの招来には成功するだろうさ。視野の狭い、見たくないものから目をそむけたがる女だが、神祖としての能力は格別だからな。だが、おそらくもう遅い」

　このときのアレクは、むしろさびしげだった。

　長らく取り組んできた謎の答えを、もうすぐ目撃することになる。最大の目標と娯楽を失ってしまう。それを惜しむような寂せき寥りょう感かんに満ちていた。

「計画の開始から千年近くが経過した。この歳月は『新たな神』を誕生させるのには十分すぎる時間だ。トーマス・マロリーあたりの素す性じようを考えてみろ」

　一五世紀の英国騎士、サー・トーマス・マロリー。

　当時、戦場の主役は騎士から火砲を装備した歩兵に変わりつつあった。

　社会的にも騎士階級が没落し、王権の強化が進んでいった時代だ。マロリーも没落騎士のひとりであった。身を持ち崩した彼は暗殺未み遂すい、強ごう姦かん、強盗、家か畜ちく泥どろ棒ぼうなどに手を染め、投とう獄ごくと脱獄を繰りかえした。

　だが現代において、彼は『アーサー王の死』の著者として知られる。アーサー伝説の集大成にしてスタンダードと名高い作品だ。

「マロリーは魔術師ではない。いくつもある先行作品を参考に——いや、そのままなぞって、つなぎ合わせたゴロツキだ。しかし、それが決定版になるほどアーサー王物語は民衆に広まり、独自の展開を遂とげてしまっていた」

「千年の間にアーサー王は『最後の王』ではなく、新たな軍神となってしまったと？」

「ああ。テンプル騎士団系の作家まで、自分たちの抹まつ香こうくさい戒かい律りつや哲学を作品に組み込んでいったからな。先代グィネヴィアの思惑を超えて、伝説は肥ひ大だい化かしたのだろうよ」

　今やアレクは憐あわれむような口調になっていた。

「フランス王家はシャルルマーニュ伝説を利用して、王家の権威を広く民衆に認知させた。英国王家もそれを模も倣ほうし、アーサー王伝説を王権強化の道具として徹底的に利用した。結果、アーサーという英雄の粉飾はますます進み、もとの原像からはさらに大きく

かけ離れた」

　シャルルマーニュ。八～九世紀のフランク国王。カール大帝とも呼ばれる。

　その版図は今こん日にちでいうフランスのみならず、ドイツやスペイン、イタリアにまで及ぶ。中世ヨーロッパ最大の覇は者しゃである。だが、彼は歴史上の支配者であるに留とどまらない。

　大王シャルルマーニュと、彼に仕つかえる一二人の勇士。

　アーサー王と円卓の騎士物語にならぶ、壮そう麗れいな英雄伝説の主でもあるのだ。

「神々の魂たましいと血肉を構成するのは神話だ。アーサーという英雄の神話が変わった以上、その神話をもとに降こう臨りんする英雄も変わる。考えてみれば、当たり前の話だ」

　最後にぐいとワインを飲み干して、アレクは語り終えた。

　招来された『まつろわぬアーサー』が仮説の正しさを証明し、当代のグィネヴィアを半狂乱にさせたのは、この半月後だったという。

　アーサー王にまつわる仮説を、草くさ薙なぎ護ご堂どうはエリカとリリアナから聞かされた。

　例のレポートを読んだ騎士たちが、帰りの機内で教えてくれた。そう。イギリスを離れ、日本へ向かう飛行機のなかで。

　結局、予定を急きゅう遽きょ変更し、護堂たちは緊急帰国を決めたのだ。コーンウォールを訪ねた翌日、どうにか確保したチケットで羽はね田だ行きの飛行機に搭乗していた。

「アリスさんが言った『原則』ってヤツだな」

　護堂はうなずいた。ちなみに祐ゆ理りはいない。

　ランスロットの謎を解くため、プリンセス・アリスと共に向こうに残ってもらった。黒王子も軍神も放置できない以上、別行動をと

るしかなかったのだ。

「そうだ。万ま里り谷やの言っていたサルマタイだったか？　あれは何なんだ？」

「これまでの戦いで、護堂もスキタイの名前を何度か聞いたでしょう？」

「サルマタイはスキタイ系の遊ゆう牧ぼく騎馬民族です。……祖にあたるスキタイとも戦って圧倒し、逆に衰退させてしまうほど、好戦的な民族だったのですが」

　エリカとリリアナがそろって教えてくれた。

「彼らサルマタイがスキタイに勝利できたのは、鉄製の鎧よろいと長い槍やり、その重武装を支える鐙あぶみで重装騎兵隊を編制して、軽装のスキタイを圧倒したからだというわね」

「鉄製の鎧と槍？　何だか遊牧民らしくないような」

　エリカに説明されて、護堂はつぶやいた。

　もっと軽い革などの防具を使い、弓矢を主な武器とするのが騎馬民族のイメージだったのだが。するとリリアナも口をはさむ。

「二、三世紀頃、彼らの重武装は画期的なものでした。サルマタイと戦った異民族——ゴート族などもこれを導入したといいます。ローマ帝国もサルマタイを傭よう兵へいや志願兵として徴ちよう用ようし、欧州各地の属州に派遣しました。結果、彼らの武装が欧州中に広まり……」

「甲かつ冑ちゆうと長ちよう槍そうで完全武装する『騎士』の原型になった。そういう説もあるわ」

「じゃあ、ランスロットはその騎馬民族の軍神だったのか？」

　護堂が訊きくと、すこし考え込んでからエリカは答えた。

「かもしれないわね。でも、サルマタイもスキタイも遥はるか昔に滅びた民族よ。末まつ裔えいといわれる人々はわずかにいるけど、彼らが伝える神話も祖先のものと同じではないわ」

「結局、万里谷祐理とプリンセスからの報しらせを待たなければ、断言はできないでしょうね」

　と、リリアナもため息と共に言う。

　謎をかかえたまま、護堂たちは飛行機の座席に体を預けていた。

## 2

「二泊四日で日本とイギリスの往復は、さすがにしんどいな……」

　日本の土ならぬ空港の床を踏んだとき、さすがに護ご堂どうは愚ぐ痴ちった。

　若いし、体力もある。だが、きつい旅程なのはまちがいない。神様がらみで渡と欧おうするときは、いつも似たようなスケジュールではあるが……。

「いつかも思ったけど、こんな旅の仕方をするのはサッカー日本代表の選手くらいだぞ」

　あるいは、週末をどうしても欧州で過ごしたい弾丸トラベラーあたりか。

　どちらにせよ、無理のある日程だ。ふつうは三～五泊の旅程を組む。

「疲れるのもいやだけど、全然優ゆう雅がじゃないのが問題だわ。旅というのはもっとくつろいで、のんびりと異国での非日常を楽しむものでしょうに」

　いつも颯さつ爽そうと話すエリカが、珍しくうんざりした口調だった。

　その横で、リリアナも苦々しげに応じる。

「まったくだ。……まあ、黒王子さまがうわさどおりのお人柄なら、そういう楽しみ方など到底ご理解いただけないだろうが」

出発したのは金曜の夕方。そして帰国したとき、日本は月曜日の昼。いつのまにか三連休も最終日である。強行軍とはまさにこのことだろう。

しかし、数十分後。護堂たちはふたたび休日の空を飛んでいた。

「お疲れのところ申し訳ありませんが、百ひやく聞ぶんは一見にしかず。東とう京きよう湾わんに出現した奇き岩がん城じよう。実際にご覧いただかなくてはと思いまして」

ヘリコプターの機内で甘あま粕かす冬とう馬まは語った。

バラバラというローターの音がうるさく、聞き取りづらい。

長旅を終え、ようやく羽はね田だ空港に到着した護堂たちは、彼から連絡を受けたのだ。

空から偵察と洒落しやれこみましょう——と。言われたとおり、空港近くの旧整備場地区へ向かった。歴史を感じさせる、古びた格納庫が多い一角だった。

甘粕指定の合流場所は開けた広場で、数機のヘリコプターが待機していた。

「ちょっとコネを使いまして、海上保安庁のヘリを借りておきました。海保とか新聞社のヘリって、実はこの辺の格納庫にもしまいこまれているんですよ」

かくして、ヘリは飛び立ったのである。

小型ヘリの内部はせまい。だが、はじめて乗るヘリコプター。好奇心を刺激されて、護堂はきょろきょろ機内を見まわし、機外の情景にも見入った。

もちろんエリカ、リリアナ、甘粕も同乗している。操そう縦じゆう士しも二名いたが、やはり委員会の関係者なのだろう。護堂に目礼したきり一言も口を利きかず、操縦に専念していた。

飛び立ったヘリは、すぐに東京湾上空へ到達した。

「近づきすぎると厄やつ介かいなことになるのですが、現物を見ないとはじまりませんしね」

「奇岩城でしたっけ？　もしかして、うわさになっていたりしますか？」

　東京湾にいきなり浮上した島。異常すぎるしデタラメすぎる。

　おそるおそる訊きくと、甘粕はかぶりを振った。

「小島ですからね。幸いなことに、それはないです。ただ船舶関係者や漁師のなかには気づく連中も当然おりまして。そちらに情報管制を敷いているところですよ。あ、海上保安庁の関連施設が近くにありますから、もちろん彼らは認知しています」

　東京・神か奈な川がわ・千ち葉ばに面する江え戸ど前まえの海、東京湾。

　輸送関係の船が行き来するのはもちろんだが、実は漁業もさかんだ。

　かつては汚れた海として悪名を馳はせた。しかし、ここ数十年、海の清浄化に努めた結果、東京湾の漁獲量は大いに上がっているのだ。

　……つまり、それだけ利用者が多く、情報統制も煩はん雑ざつになる。

　甘粕たちの苦労を思い、同情する護堂だった。まあ、先週の東京湾アクアライン石化のときはさらに大変だっただろうが。

「昨日の深夜、委員会の関係者が東京湾で呪じゅ力りょくが異常なほど高まり、爆発するのを察知しました。まさか『まつろわぬ神』の出現か――なんて警戒しましてね。ヘリを飛ばしたりして、あれこれ偵察を試こころみたんですよ」

　よく晴れた休日の空をヘリで飛び、東京湾の海うな原ばらを見おろす。

　長旅の疲れさえ無視すれば、なかなかの風ふ情ぜいだった。

「で、東京湾のまっただなか――ちょうど横よこ須す賀かと富ふっ津つ岬みさきの中間くらいの海域に、数時間前までなかったはずの小島があるのを発見しまして」

横須賀といえば神奈川県。米軍基地や横須賀港のある地区だ。

富津岬は千葉県。護堂は東京湾近辺の地図を思い出した。前回、騒ぎの中心になった海ほたるよりも南で、外海に近い。

「しかも、すさまじい呪力を秘めた島です。草くさ薙なぎさんからアレク王子の仕し業わざらしいと連絡されて、なるほどと思いましたよ」

「……なんだ、あれは？」

リリアナが目をすがめた。進行方向の先にある虚こ空くうを凝ぎよう視ししている。

「あれは雲か……？　やけに不自然な感じだな」

「さすが、魔女の方は目が鋭い。不気味な形の島が浮かんだだけなら、実害はないんですけどね。そう言って楽観してられない事情がありまして。ああ、見えてきましたね」

甘粕に言われて、護堂も目を凝こらす。操縦士たちの頭越しに前方を見た。

行く手に雲がわだかまっている。雷雨でも降らせそうな、黒々とした雲だった。そこから下方に目を転じて、護堂は納得した。

なるほど、『奇岩城』だ。おそろしく不気味な島が浮かんでいた。

ゴツゴツと岩ばかりである。遠目に見るだけだと、緑色も土色も見えない。黒い岩壁・岩盤・岩肌が見えるのみ。本当に岩だけの小島らしい。

「面積にして、そう……ざっと一〇万平方メートルくらいですか。遊園地ひとつ分といえば、わかりやすいですかね」

やはり、たいして広くないようだ。

小島の中央部は山のように盛りあがっていた。標高にして五、六〇メートルはありそうな黒い岩山だった。これがまた、鬼の顔を連想させる感じでゴツゴツしていた。甘粕が『奇岩城』と言った理由だろう。

　そして、この島の周辺三六〇度——。

　ぐるりと岩がん礁しように取り囲まれていた。下手に船で近づければ、座ざ礁しようしそうだ。

「……もしかして、誰もあの島に近づけないのでは？　ひどく不穏な気配を、あの岩礁あたりから感じるぞ」

「おお。大正解です、リリアナさん」

　銀髪の騎士に問われて、甘粕は誉ほめそやした。

「調査のために近づけた船は、みんな遭難しました。わかりやすいのは、座礁して前に進めなくなるパターンです。乗組員はライフジャケットを着て海に飛び込み、必死に泳いでいると、いつのまにか島の周辺から遠ざかっています」

「まさか、犠牲者が出たりとかは？」

「幸いにも、今のところはゼロです。救命船の活躍で、全員が拾い上げられています」

　甘粕の報告に、護堂はホッとした。

「で、どういうカラクリか不明なのが、あの島の近海をさまよったあげく、どこかの岸辺——神奈川だったり、千葉だったりと場所はさまざまですが——に流れ着くパターンですね。船だけじゃなくて、ヘリや飛行機、呪術で近づこうとした人間も同じ目に遭あいます」

「ほとんど魔の海域じゃないですか」

「ええ、まさに。東京湾に魔の海域が誕生って、洒落しやれにならないですよ」

「——もしかしたら、『大迷宮ザ・ラビリンス』かもしれないわ」

　護堂と甘粕の会話を聞いていたエリカが、ぼそりと言った。

「何だって？」

「アレク王子の権けん能のうよ。大地と迷宮の神ミノスから簒さん

奪だつされた力だと、プリンセス・アリス自らがレポートを書かれているわ」

　地下や地上に迷宮を造り出す創造の権能。

　しかも、造るだけではない。既存の場所や建物——館やかたでもビルでも地下トンネルでも森でも霧のなかでも、アレクの望むとおりに迷宮化するのだとエリカは語った。

「あの権能を海に使えば、魔の海域が誕生したはずよ」

「あー……やっぱり、そう思われますか。その可能性、私たちも疑ってましたよ。それと実は、もうひとつ厄やつ介かいな疑惑がありまして」

　しみじみと甘粕がぼやいたとき、不意にリリアナが叫んだ。

「エクス——カリバー？　いや……救世の神刀！　ランスロット卿きようの槍やりと同じ光!?」

「どうした、リリアナ!?」

　暗雲と岩礁に取りまかれた小島を愕がく然ぜんと見つめる騎士へ、護堂は訊たずねた。

「もしかして、何か霊視できたのか？」

「は、はい。ランスロット卿がたずさえていた聖せい槍そう——あれと同じ輝きが、あの島から一瞬だけ放たれたように見えたのです。そして、剣の名も」

「救世の神刀。この世の最後に顕あらわれる王が佩はい刀とうとする、聖なる鋼はがねね」

　ふぅと息を吐き出してリリアナは語り、エリカもつぶやく。

　一方、騎士たちの発言に、甘粕はひどく憂ゆう鬱うつそうに頭をかいた。

「あー……馨かおるさんに続いて、リリアナさんにも同じ啓けい示じが降りましたか。もうまちがいなさそうですねェ。あの島にはとんでもない代しろ物ものが眠っているようですよ」

「全部ガスコインの仕し業わざなのか？　何を企たくらんでやがるんだ……」

「天あま之の逆さか鉾ほこも関係しているでしょうし、本当に面倒な事態になってきたわね」

　つぶやく護堂の横で、エリカが小首をかしげた。

　いつもは周囲を振りまわす側の彼女に、こんな反応をさせる。護堂が知るかぎり、その難なん行ぎように成功したのはサルバトーレ・ドニや羅ら翠すい蓮れんくらいだ。つまり、神殺しのカンピオーネたちのみ。黒王子アレクは、その方面でも同族に負けていないらしい。

　彼への疑問や文句をつのらせながら、護堂一行はヘリコプターに揺られていた。

　ヘリは『浮島』に接近しすぎないようにしつつ、島のまわりを飛んでいく。どうやら一周するつもりのようだ。

　その途中で、機内の無線機が鳴った。すぐ甘粕が取りあげる。

「はい。え？　あの発掘現場の跡にグィネヴィアが？」

　正せい史し編へん纂さん委員会の仲間から通信を受けたらしい。

　甘粕がくわしい報告に聞き入っている間に、護堂は決断した。エリカ、リリアナにも目くばせする。それだけで通じた。

　紅と青の騎士たちは、すぐにうなずきを返してきた。

「俺たちがそっちへ行きます。何か情報が手に入るかもしれません」

　忍者の末まつ裔えいだという青年の肩に、護堂は手をかけた。

　黒王子に振りまわされて、うんざりしていた。受け身にまわるのはもう御ご免めんだ。こちらから行動を起こして、状況を変えてやる。

　護堂の決意を察したのか、甘粕は通信しながらうなずいた。

3

　護ご堂どうたちが乗るヘリは、まだ飛行中。

　ドアを開けるなど、危険きわまりない行為である。だが、リリアナの飛ひ翔しよう術じゆつで飛び立つために、あえてその愚ぐを犯おかした。

　開いたドアから、突風がヘリ機内に吹き込んできた！

「でも草くさ薙なぎさんッ。グィネヴィアたちと遭そう遇ぐうしたら、例のランスロットが出てくるかもしれませんよ!?　そちらはどうしますか!?」

「いいえ！　たぶん、それはないと思います！」

　踏んばりながら、近くの物につかまりながら、甘あま粕かすと護堂は大声で言い合った。

　強風で飛ばされないよう、声をかき消されないようにするためだ。

「と、いいますと!?」

「グィネヴィアの性格です！」

「そうね！　彼女の慎しん重ちようさを考えれば、最後の王が眠るはずの『アヴァロン』を目前にして、無む駄だな危険を冒おかすとは思えないわ！」

　エリカが口添えしてくれた。そのとおりだった。

　あの神しん祖そが取ってきた行動の数々を聞くかぎり、おそろしく慎重な女であることはまちがいない。切り札を安あん易いに使うはずないのだ。

　……まあ、ランスロットの方はどうだかわからないが。真に猛たけったとき、白き軍神は庇ひ護ごすべき者も忘れて、戦い狂うよう

な……。その予感が護堂にはあった。

「では行きましょう！　しっかりつかまってください！」

　術の準備を終えて、リリアナが叫ぶ。

　青き騎士の肩に、エリカと護堂は手をかけた。直後、青い光がほとばしり、飛び立つ。目指すは木き更さら津づの浜辺――。

　先週、神具・天あま之の逆さか鉾ほこが発掘された場所だった。

　重機で掘り起こされた跡が生々しい空き地に、ぽつんと立つ赤あか鳥とり居い。その近くに彼女はいなかった。防風林を越えて、砂浜の方へ向かう。

　そちらにいた。彼女はじっと海の彼方かなたに見入っていた。

　ふわふわと波打つ金髪。夢見る乙女おとめのようにきらきらと輝く双そう眸ぼう。そして、アンティークドールさながらの精せい緻ちな美び貌ぼう――。神祖グィネヴィアである。

　彼女の手には、黄銅色のメダリオンがあった。

　何かの合金かもしれない。まるで、鉄と黄金を混ぜ合わせたような色合いだ。グィネヴィアはそれを愛いとおしそうに抱え込んでいた。

　まるで、誰か大切な人の形見だとでも言うように――。

「……ごきげんよう。と、ご挨あい拶さつ申し上げてもかまいませんか、草薙さま」

　こちらに気づいていたのだろう。グィネヴィアはすぐに振りかえった。

　まとっている黒いドレスのスカートをつまみ上げ、挨拶する。いつのまにか、その手からメダリオンが消えていた。

「特に機嫌はよくないから、やめてくれ」

　護堂は無ぶ愛あい想そうに言った。両脇にはふたりの騎士がい

る。

　エリカもリリアナもそれぞれ紅と青のケープをまとい、戦闘態勢を整えていた。

「それは申し訳ございません。先日は無断で御力を拝はい借しやくするような真ま似ねをしまして、失礼いたしました」

「そっちはべつにいい。俺もあんたたちの力を利用する形になったからな」

　謝罪するグィネヴィアへ、護堂はそっけなく言った。

「でも、その次に俺とアテナが揉めているところに割り込んできたのは、許せそうにないな。その分のツケは、いずれ払わせたいと思っている」

　自分でも不思議なほど、淡々とした口調だった。

　仇きゆう敵てきとの対決に横やりを入れたグィネヴィアらへ怒りはない。恨うらみもない。ただ『返礼はする』という気持ちがあるだけだった。

「たぶん、そうさせる日はそれほど先じゃないと思う。覚悟しておいてくれ」

「ええ、必ず。グィネヴィアも小お父じ様も、いずれ御おん身みと相まみえる時が来ようと悟っておりますわ。ところで草薙さま、念のためお訊かせください」

「なんだ？」

「この世の最後に顕あらわれる王と救世の神刀が眠る島――アヴァロンを浮上させたのは、あなたさまの行いでしょうか？」

　アヴァロン。すでに何度も耳にした地名だ。

　イギリスの英雄アーサー王が眠るという妖よう精せい境きようの島。息子モルドレッドと相討ちになった彼は、この島で傷を癒いやしながら復活の時を待っているという……。

「いいや、俺じゃない。あんたと古いつきあいのやつらしいぞ」

「やはり……。そうだと思っておりました。グィネヴィアを招きよせるために、おそらくアレクサンドルさまが企たくらんだのであろうと」

　と、グィネヴィアは憂うれいの影で目を曇くもらせながら、海うな原ばらを見やった。

「あいかわらず性根のひねくれた御方ですこと！　グィネヴィアが追い求めてきた希望の地をグィネヴィアより先に見み出いだし、迷めい宮きゆうの権能で鍵かぎをかける。なんと憎らしい……！」

　それは怨うらみの言葉だった。護堂は目をみはった。

　今まで見てきたグィネヴィアの感情とはちがう。表面だけの微笑や、妙に気取った淑しとやかさが消え、内に秘めた激情がかいま見えた。

　この魔女にもこんな一面があったのか——。意外だった。

「ところで今、救世の神刀って言ったよな？　この間ランスロットが持っていた槍やりがそうだったんじゃないのか？」

「ちがいます。あれは最後の王が遺のこした忘れ形見ですもの」

　話題を変えた護堂に、グィネヴィアは淡々と答えた。

「われらが主あるじは最強にして不死身の英雄。しかし、全ての神殺しを討うったあとは、かりそめの死にも似た眠りにつきます。そうして疲れを癒いやしながら、再さい臨りんの時——魔王カンピオーネが幾人も出そろい、この世を脅おびやかす時に備えるのです」

　つまり仮死状態となって、カンピオーネの誕生を待ちかまえるのか。

　最強の《鋼はがね》。その眠りの正体を知って、護堂はうなずいた。

「眠りについた主は肉体をほどき、大地に同化して精気を蓄たくわえます。そして、その土地には神刀の形をした骸むくろが、墓標のように顕あらわれるのですわ」

「神刀の形をした骸……」

「人間の魔術師は竜りゆう骨こつ、天使の骸、聖せい遺い物ぶつなどと呼ぶようですわね。その骸をグィネヴィアは研ぎ直し、小お父じ様の槍といたしました。ですが、所しよ詮せんはまがいもの。『最後の王』その人が振るう一振りのみが、真なる救世の神刀なのです」

　魔女王はふたたび海原を見やった。その先に彼女が求める宝はあるのだ。

「グィネヴィアたち神しん祖そは『最後の王』に仕つかえる巫み女こ。主が再臨をはたしたときは、その麾き下かに馳はせ参じて献けん身しんいたします。ですが、この千年で幾人かの神殺しが誕生されました。だというのに、主は一度も再臨されなかったのです」

　しみじみとグィネヴィアは身の上を語る。

「わたくしども神祖は眠れる主を捜し出し、再臨を願おうといたしました。長き探たん索さくの末に、骸である神刀を見つけたことも幾度かございました。ですが、どの骸のそばにも眠れる主はおらず――」

　そうか。護堂は理解した。

　地上に数名のカンピオーネが出そろったとき、『最後の王』は復活するらしい。そうして神殺し一いつ掃そうの殲せん滅めつ戦せんを開始する。何千年前から存在するのか知らないが、幾度も復活と休眠を繰りかえしているのだ。

　だから、骸である神刀があっても、彼がいっしょとは限らない……。

「あの方の御名のひとつ『アーサー』で神話を広め、魔術による招来を試みたこともございます。しかし、これは失敗いたしました。あるいは、また異なる名で主の伝説が謡うたわれているやもと考え、東西の《鋼》伝承を追いかけもしました……」

　不死ではないが不滅の魔女、神祖。

　最強の《鋼》を求め、志こころざしなかばで横死しても転てん生せいし、探索を続ける――。

呪じゆ縛ばくにも似た生を強しいられる、ある意味で悲しい存在。グィネヴィアのつぶやきを聞いて、護堂はすこしだけ神祖たちに同情した。だが。

「ですが、ついにたどりつきました。この地には『剣と共に眠る貴人』の伝承があることも突きとめております。そして、あの島からは神刀の霊気がほとばしっていますわ」

グィネヴィアの目に力がもどったので、すぐに気を引きしめた。

彼女とその庇ひ護ご者しやは、草薙護堂の『敵』なのだ。

「あの方が眠る地の周囲には、必ず『神刀と共に復活を待つ英雄』の伝説が顕あらわれるのです。最強の《鋼》である主の神しん威いが、その伝説を人間どもの心に生み落とすがゆえに。かつて、それはブリテンの地でアヴァロンの伝承として顕れました」

この間、馨かおるから教わった伝承を護堂は思い出した。

后きさき弟おと橘たちばな比ひ売め、太た刀ちを抱きて海に入り給たもふ。其その太刀の流れし先は陸おかにあらず、海にもあらざる処ところにて、浮島といふなり。あの島こそ『最後の王』が眠る島──。

そう断言したグィネヴィアは、護堂に向き直った。

「ところで草薙さま。われらと御身がいずれ勝敗を決することに異存はございません。ですが、敵の敵は味方とも申します。共通の敵が現れるときがあらば、恩おん讐しゆうを越えて呉ご越えつ同どう舟しゆうするというのも悪くはないかと」

「そんな敵、都合よく出てくるとは思わないな」

「いいえ。グィネヴィアの見たところ、草薙さまと黒王子殿は決してご相性がよいようには思えませんわ。もしあの方を邪じや魔まだとお思いになりましたら、ご一報くださいませ」

む。護堂は眉まゆをひそめた。それとこれはべつの話だろうに。

こいつ、また俺の力を利用するつもりか。気づけば、グィネヴィアの姿がさっきよりも近づいていた。一週間前の記憶が甦よみがえる。

　何度もキスされてたまるか。護堂は抜かりなく警戒した。

「グィネヴィアさま、どうぞお下がりくださいませ」

「ああ。それ以上の接近を許すつもりはないぞ」

　エリカが前に出ると、すかさずリリアナもつぶやいた。

　ふたりとも手を開いている。魔剣を呼び出すかまえだった。

「ふふふ。その準備があるというお話です。ご検討いただければ幸いですが、否いなと言われるのであれば致し方ありませんわ。ひとまず姿を消しましょう！」

　ようやく軽やかな微笑を浮かべると、グィネヴィアは後方へ跳躍した。

　そのまま白い光につつまれて飛び立つ。ぐんぐん急上昇して、空の彼方かなたへ消え去った。

「ははあ。グィネヴィア嬢はそんなことを言っていましたか……」

　ヘリが浜辺に着陸し、甘粕が降りてきた。

　護堂からの事情説明を聞くと、感かん慨がい深げに彼はつぶやいた。

「あの奇き岩がん城じようもどきの島がアヴァロン。こりゃまたトンデモな話ですな。日本人としては、やはり房ぼう総そうの海に現れた島なんだから、浮島と呼びたいですがね」

「ねえ甘粕さん。アレク王子に強ごう奪だつされた天あま之の逆さか鉾ほこだけど」

　正せい史し編へん纂さん委員にエリカが話しかけた。

「あれは日本列島を創造した神々の道具と、同じ名前なのよね？」

「ええ。実のところイザナギとイザナミの二神による『国生み』神話は、中国南方をルーツとする海洋民族系の古い伝承らしいですけどね」

「アレク王子は国土創世の神具を使い、さっきの島を生み出したのか……？　素直に考えれば、そういう解釈になるが……」

　考え込むエリカとリリアナを見て、甘粕は肩の力を抜いた。

「みなさん、今日はもうお帰りください。メチャクチャなスケジュールでのご旅行でしたからね。ゆっくり休んで、これからに備えるべきでしょう」

　かくして甘粕の車に送られて、護堂たちは東京都文ぶん京きよう区くに帰ってきた。祐ゆ理りとアリスに欧おう州しゆうでの調査をゆだねたままなのは心苦しかったが――。

　根ね津づ三丁目の商店街前で、甘粕は車を止めてくれた。

　ひさしぶりの地元。短いが内容の濃い旅だったので、一〇日近く留守にした気さえする。車を見送ったあとで、護堂は気がついた。

　商店街の入り口に、幼なじみの明あ日す香かがいたのだ。

「どうしたんだ、おまえ？　待ち合わせか？」

「あ、うん。そんな感じ。護堂、今帰ってきたんだ」

　いつのまにか陽ひも暮れて、夜になっていた。

　商店街を歩く人も、これからどんどん減っていく時間帯だ。そんな頃合いに明日香は商店街の入り口に立ち、人待ち顔だった。

「ああ。だいぶゴタゴタしたけど、どうにか帰ってこれたよ」

「ひさしぶりだな、徳とく永なが明日香」

　隣にいたリリアナも幼なじみに話しかける。だが、明日香は「う、うん、ひさしぶり」と生返事で挨あい拶さつに答えた。

　いつも勝ち気なはずの目つきが、なぜか今日に限って弱々しい。

　その視線の先にいるのはエリカ・ブランデッリだった。その美び貌ぼう以上に、覇は気きと才気で輝く印象的な美少女。ミラノ仕込みの洗練された立ち居振る舞いと合わせて、衆しゆう目もくを集めるのが必然でもある存在――。

「そういえば、どっちも初対面だったな。明日香、こいつはリリアナや万里谷とも友達のエリカだ。で、こいつは俺の昔からの友達で徳永明日香。会うのははじめてだろ？」

「ええ。でも、そういう人がいるとは聞いていたわ」

　護堂の紹介に、エリカはうなずいた。

　すぐ明日香の前へ行く。口元に浮かべる微笑は優美そのものだった。

「はじめまして。わたしはエリカ・ブランデッリというの。聞いてのとおり日本語は完璧だから、遠慮はまったくいらないわ。あと、ご存じかもしれないけれど、護堂とはきわめて親密な関係といって、かまわないかしら」

「きわめて親密——あ、あたしも一応、うわさで聞いてた」

　颯爽とした名乗りに、明日香はなぜか一瞬だけ顔をひきつらせた。

「そうなの？　じゃあ、そのあたりをくどくどと語る必要はないわね」

　一方、エリカは大輪の椿が花開くように笑った。

　あでやかな笑顔。何ひとつ遠慮することなく咲き誇る、会心の笑顔だった。

「実はわたし、護堂と古くからつきあっている人たちにそのうち挨拶してまわろうと思っていたの。エリカ・ブランデッリの顔と名前を知っておいてもらった方が、この先いろいろ都合もいいでしょうし」

「おまえ、そんなことを企んでいたのかよ」

「あら、企むとは心外な言い方ね。あなたと親しい人たちなら、わたしとも共通の友人になってもらった方がいいはずよ。そう思わない？」

　リリアナや祐理、そして恵那などはきっとしない思考法だ。

だが、エリカは当然のように言った。人づきあいの輪を広め、交友関係を意識的に円えん滑かつにしていくのが習い性なのだ。どんな集団でも人気者になり、中心的存在になってしまうパーソナリティー。まさしくエリカの真骨頂だった。

「でも、そういう意識がなかったとしても、明日香さんとは仲よくできそうな気がするわ。よろしくね。たぶん、これからも頻ひん繁ぱんに顔を合わせるでしょうし」

と、戸惑っている明日香に微笑みかけるのも忘れない。いずれ何気ない会話や気き遣づかいで、もっと距離を詰めていくはずだ。さすがの社交術だった。

まあ、ときどき気分や好みにまかせてツンケンするヤツでもあったが……。

「う、うん。よろしくっ」

「どうしたんだ、徳永明日香？　元気がないようだが？」

やたらと強気で、挨拶のように悪態をつく幼なじみ。それが明日香の持ち味なのだが、エリカの前では別人のようにおとなしい。

不審に思ったらしいリリアナが、怪け訝げん顔がおで訊たずねた。

「げ、元気がないわけじゃないから、心配しないで！　ちょっと気になることがあるだけ！」

「気になること？　俺でよければ相談に乗るぞ？」

「こっちの話だから、余計なお世話！　それより静しず花かちゃんへのプレゼント、ちゃんと考えておきなさいよっ。もうそんなに時間はないんだからね！」

話し相手が護堂になった途端、明日香の調子が回復した。

何なのだろう、一体？　幼なじみのエリカを見つめるまなざしが、ひどくまぶしいものを見つめるようなのも気になるが——。

「じゃあ、俺たちはもう行くよ。待ち合わせしてるんだろ？」

顔を合わせたときの会話を思い出して、護堂は言った。

だが、意外にも明日香はかぶりを振った。

「そっちは大丈夫。ていうか、待ってたのはあんただから」

「え、俺？　どうして？」

「あんたの知り合いがうちの店で待ってるのよ。エリカさんやリリアナさんで外国の人たちともつきあいがあるのは知ってたけど。あんなイケメンの外人さんまで友達だとはね」

「……そいつ、もしかして金髪か？」

明日香の店というのは、家業の寿す司し屋や『すし徳とく』だ。

イケメン外人といわれて、護堂は能天気なイタリア男を思い出した。ついにあいつ、うちの近所にまで、と。しかし。

「ううん、黒髪で背の高い人。三〇分くらい前まで、ちょうどここで缶コーヒー飲みながら立っていたの。見慣れない外人さんだし、道に迷ったのかなって話しかけたらさ」

きっと拙つたない英語と日本語をないまぜにして、声をかけたのだろう。

ふつうの女子なら、なかなかできない親切だ。物もの怖おじしない明日香らしい。それだけに、エリカにのみ見せる遠慮めいた態度が気にかかるのだが。

「そうしたら日本語ぺらぺらでさ。『草薙護堂という男を待っている』って言うの。わたし、教えてあげたの。そいつの知り合いだけど、今は遠くに行ってるよって。そうしたら、『もうすぐ帰ってくるだろう。まちがいない』って断言して」

そこで明日香は「だったら、うちの店で待てばいいよ」と勧めたのだとか。

話を聞いて、護堂はふたりの連れに目くばせした。

『まさか、あの方だとでも!?』と、リリアナの目が語る。

『完全に想定外だったけど、ありえない話じゃ――』と、エリカの目が訴える。

　そして、護堂は駆け出した。

　走る。子供の頃から知っている寿司屋に走る。

　ガラッ！　引き戸を勢いよく開けた。日曜の夜、そこそこ繁はん盛じようする『すし徳』店内。カウンター席の端に黒髪黒目の青年がいる。白はく皙せきの美男子だった。長身で、黒いジャケットを伊だ達てに着こなしている。

　刺身の盛り合わせをつまみに、日本酒の杯さかずきを傾けていた。

　彼の鋭い目が入り口へと向けられる。目が合う。護堂と真っ向からにらみ合う。

　神と遭そう遇ぐうしたわけではないから、闘志と力がみなぎることはなかった。だが、揺るぎない確信があった。こいつこそアレクサンドル・ガスコイン。草薙護堂をさんざん振りまわしてくれた、英国のカンピオーネだと。

## 4

「待ち人来たるか。思ったよりも遅かったな」

　アレクはつぶやくと、カウンターに数枚の一万円札を置いた。

　おつりをもらおうともせず、すぐに立ちあがる。

「世話になった。いずれ機会があれば、ゆっくりと寄らせてもらおう。……ああ、君には特に面倒をかけたな」

　ちょうど店の入り口までアレクが歩いてきたとき。

　護ご堂どうのうしろに明あ日す香かがやってきた。息を切らせている。急に駆け出した幼なじみを追いかけ、走ってきたようだ。

「……友達、なんだよね？」

　護堂とアレクの間に走るピリピリした雰ふん囲い気きに気づいたようだ。

　明日香がすこし心配そうに訊たずねてきた。

「友達っていうよりは知り合い……いや、ちょっとちがうか」

「ああ。同類、同族、同じ穴の狢むじな。そうとでも言う方がふさわしいだろう」

　護堂も、そしてアレクも、明日香の方はかすかに見ただけだった。

　同じカンピオーネから視線を外さない。いや、外せない。

　どちらも傍ぼう若じやく無ぶ人じんに横暴をはたらくタイプではないだろうから、もっと鷹おう揚ようにかまえてもいいはず。だというのに、護堂はアレクから視線をそらせなかった。アレクも護堂から視線をそらさなかった。

「すこし歩くか」

「ああ」

　アレクの呼びかけに短く答える。ふたりそろって寿す司し屋やを出た。

　ずっとにらみ合っていても仕方がない。護堂は意図してアレクと並んだ。おたがいの顔を見ないですむように。向こうも同じ考えだったらしい。

　何の相談もなしに、アレクと護堂は肩を並べて歩きだした。

　もしかしたら、息の合う二人組に見られるかもしれない。そう思うと、なんとなく不ふ愉ゆ快かいになる護堂だった。きっとアレクも同じ気分にちがいない。

　店の外でエリカとリリアナが待っていた。

　護堂の目くばせに応こたえて、騎士たちは無言でうしろについて

きた。

「どうやら貴様は、女連れでなくては散歩もできないらしいな」

「部下や仲間に行き先も告げないで出ていくよりは、いいと思うぞ」

　仲よく肩を並べて、毒のある言葉を吐き合う。

　なぜだろう？　護堂はいらだっていた。はじめて味わう感覚——いや。これは、サルバトーレ・ドニと会ったときに感じるのと同じ苛いら立だちだ。

　目の前の男には負けたくないと、理屈抜きに思う。敵てき愾がい心しんを刺激されてしまう。

「しばらく帰ってくるなと勧すすめたのに、わざわざ帰ってくるとはな……」

　自己紹介もなしに、アレクは本題に入る。

　護堂は気にしなかった。人として然しかるべき礼節は、今の自分たちには必要ない。

「あんな手紙で、言うとおりにできるか」

　根ね津づ三丁目の商店街を離れて、根津神社の境けい内だいにまで来ていた。

　幸い、他に人ひと気けはない。護堂は遠慮なく吐き捨てた。

「あれじゃあ逆に、ケンカ売ってるようにしか思えないだろうが」

「それは無む駄だに闘争心が旺おう盛せいだからだ。このタイミングで俺が『アヴァロン』を復活させ、事を起こす。狙ねらいも意図も明白だろう」

　明白なものか。あきれる護堂へ、アレクは熱弁する。

「なぜそこで静観し、全ての決着がつくまで出番を待とうとしない？　俺なら迷わずにそうするぞ。その方が楽だし、効率がいい。無駄な力も使わないですむ」

「誰がするか。逆だろっ。状況を見きわめようとして帰ってくるだろ？」

「ふん。やはり貴様もカンピオーネだな。脳ではなく、感覚で体を動かす野や蛮ばん人じんめ。安あん楽らく椅い子すにすわったまま密室殺人のひとつも解決できないでどうする？」

「する必要がないだろ。当てずっぽうで殺人事件の犯人を決めるな。足を使えよ！」

　何やら子供のケンカじみた口論になってきた。

　護堂はグィネヴィアのことを思い出した。あの魔女、世間知らずのお嬢さまに見えて、そこそこ人を見る目はあるのかもしれない。

　草くさ薙なぎ護ご堂どうと黒王子アレク。たしかに相性が悪いようだ……。

「そもそも、俺たちが掘り出したものを勝手に盗とっていたのはあんただろう？　盗ぬすっ人と猛たけ々だけしいってのはこのことだぞ」

「借りただけだ。用がすめば返すと手紙にも書いた」

「返さないときもあるって聞いてるぞ。ったく、これだからカンピオーネなんて連中は最悪なんだ。人の迷惑も考えない、奇人変人ばかりだからな」

「言うにことかいて、貴様が言うな。行く先々で破壊の限りを尽くす野蛮人め。貴様が世界各地で繰りかえす所業は、どうひかえめに見積もってもテロリストとしか言いようがない。自分のことを棚たな上あげにして、いいご身分だな」

　言い合いしながら護堂はムッと唇くちびるをゆがめ、アレクは仏ぶつ頂ちよう面づらになっていった。

　何だろう、この感覚は？　おたがいの痛いところ、さわられたくないところがピンポイントでわかってしまうような……。

「大体だな。狙いは明白とか言ってたけど、全然わからん。あんたは何を企たくらんで、あの島を東京湾に造ったんだ？」

　いささか唐とう突とつに、護堂は話題を変えた。

　アレクも同じ危き惧ぐを感じていたのか、すぐに乗ってくる。

「わからないのなら、全てが終わるまで見物していろ。どのみち、あの島は俺の権けん能のうで迷宮化してある。めったなことでは近づけない。まあ、グィネヴィアどもはそうも言えずに歯ぎしりしているだろうがな」

「アレクサンドルさま、おうかがいしてもよろしいでしょうか？」

　リリアナと共に後方を歩いていたエリカが、口をはさんできた。

「俺のことはアレクと呼べ。書くのも読むのも面倒な綴つづりで呼ばれるよりいい」

「ではアレク、ひとつ確認させてください。この世の最後に顕あらわれる王とは、カンピオーネが幾人も出で揃そろったとき、これを殲せん滅めつするために降こう臨りんする魔王殺しの神なのですね？」

「そのとおりだ。全ての魔王を殲滅する神……というところは眉まゆ唾つばだと思っていたが」

　エリカの問いかけに、アレクは淡々と言った。

　護堂への敵愾心を、騎士たちにまで向けるつもりはないようだ。

「数か月前に顕けん現げんした斉せい天てん大たい聖せいを見て、考えを改めた。あのサルの強大さは、『最後の王』が行使するという魔王殲滅の権能と同じ力らしいからな」

「そして『最後の王』は全ての神殺しが死に絶えると地上を去り、眠りにつく。ふたたび地上に幾人ものカンピオーネが出そろう日まで——」

「そのようだ。ただし、魔王が七人そろった今も眠りっぱなしだがな」

　黒王子アレクの回答は丁てい寧ねいだった。

　護堂は意外に思った。この男、傍ぼう若じゃく無ぶ人じんな天才

肌の割りに、他人に教えることを苦にしないようだ。実は面倒見がいいのかもしれない。

「おそらく『最後の王』はイングランドでの戦いの数百年後、アジアのどこかで再さい臨りんしたのでしょう。そして、このときも全ての神殺しを殲滅し、眠りについた。その土地は日本、それも東京湾の近くだったはずですわ」

　質問を重ねていたエリカが、いきなり推論を語った。

　アレクは「ほう」と相づちを打った。

「東京湾に浮かぶ小さな島で、彼は眠りについたのでしょう。ただ不運なことに、日本には古老——英雄神スサノオを中心とする守護者がいました。『最後の王』を危険視する彼らは、何らかの呪じゅ術じゅつで『島』を海に沈めた……。この術の鍵かぎとなるのが天あま之の逆さか鉾ほこ。そして、アレクは鉾の使用法を見み出いだして、ふたたび浮上させた。そうではありませんか？」

　天之逆鉾。日本列島を創造したのと同じ名前の神具。

　かつてスサノオたちは、それで『島』を造ったのではなく、沈めた？

　奇妙に思える筋書きだが、たしかに理屈は通る。大胆ではあるが理にかなった、エリカらしい推測だった。はたして、黒王子の反応は？

「……なかなか鋭いな。正解とは言ってやれんが、真実の輪りん郭かくくらいは捉とらえているぞ」

　出来のいい学生を見るような目で、黒王子アレクは感心していた。

「ヒントに『蛭ひる子こ』という言葉を教えてやろう。あとは自分で考えるといい。……あの島はグィネヴィアにとって無視できない最終目的地だ。ただし、あの魔女を葬ほうむるために俺が用意した落とし穴でもあるがな」

「……あんたはグィネヴィアを倒すつもりなのか？」

　護堂が問うと、アレクは即座にうなずいた。

「あの女には借りがある。聖せい杯はいを傷物にした程度では気が収まらないほどの借りが、いくつもな。そろそろ返す頃合いだろう。慎しん重ちょうすぎるうえに逃げ足の速いやつだが、アヴァロンを用意した以上、必ず罠わなにはまりにくる」

　そう語るアレクの横顔には、揺ゆるぎない闘志が満ちていた。

　この男もやはり神殺し。どれだけ異色でも、神すら殺あやめる戦いの申し子なのだ。それを痛感させる猛たけ々だけしさだった。

「そうか……。だけどな、グィネヴィアを守るランスロットは俺の敵だ」

　アレクが倒すというのなら、まかせればいい。平和主義者らしく、避けられる戦いは避けてしまえばいい。そう思うのに、護堂は言わずにはいられなかった。

「あんたにまわすわけにはいかない。ひっこんでいてもらおうか」

「それはこちらのセリフだ。たかが一度戦った程度の敵だろう？　でかい顔をするな」

　にらみ合う。たがいに譲るつもりはない。

　敵てき愾がい心しんと対抗心が燃えあがっていた。不思議だ。比較的、年齢の近いカンピオーネ同士だからだろうか。天之逆鉾を巡るいさかいのせいだろうか。

　護堂もアレクも、出会って間もないのに相手への闘志で猛っていた。

「お二方にご意見を申し上げてもよろしいでしょうか？」

　不意に、リリアナが発言した。

　ずっと沈黙して成り行きを見守っていたのに、なぜ今？　いぶかしみがなら護堂はうなずき、アレクも「かまわん」と答えた。

「アレクサンドルさま——いえ、アレクの標的はグィネヴィア。そして草薙護堂が望むのはランスロット卿きょうとの戦い。でしたら、それぞれ自分の望む相手とだけ戦うとして、共闘とはいかぬまでも協定を設けることはできると思うのですが」

「……う」「……む」

　考えてみれば、真っ先に検討すべき選択肢を提示された。

　しばらく思案してみる。が、すぐに即答した。

「「そんなこと、できるわけないだろう」」

　期せずして、護堂とアレクの声がハモった。同時にチッと舌打ちし、ふたりして相手から顔を背け、エリカとリリアナにも背を向けた。

（なあ。おふたりはもしかして、気が合う同士なのか？）

（ちがうんじゃないかしら？　気は合わないけど、息が合う感じじゃない？）

（性格は全然ちがうはずなのに、妙に似た部分があるような……）

（護堂も向こうも、体てい裁さいを取りつくろう方だから……。どちらもきっと、『自分だけは他のカンピオーネとはちがう』と思っているにちがいないわ）

（そうか。ゆがんだ鏡を見ている気がして、癇かんに障さわるわけだ）

（正反対の性格だけど、似ているところもあると自覚できるから、やけに反発してしまうというか。たぶん、録音した自分の声を聞く気分なのよ）

　リリアナとエリカのひそひそ話が、背後から聞こえてくる。

　好き放題言いやがってと、護堂はひそかに毒づき、同じ気分なのか、アレクも眉まゆをひそめている。ふたりの魔王はごまかすように、ふたたび向き合った。

「伝えるべきことは全て伝えたぞ、草薙護堂。そのうえで介入するというのなら、覚悟を決めておくといい」

　はじめて護堂の名を呼びながら、アレクは宣告した。

「あんたこそ気をつけろ、ガスコイン。俺の地元の近くで危ない真

ま似ねをするなら、黙って見ているわけにはいかないからな」

　めったに使わない警告の言葉で、護堂も応こたえた。

　フンと鼻で笑い、黒王子は去っていく。それを騎士ふたりと共に見送る。剣の魔王、東とう欧おうの老ろう侯こう爵しやく、中華世界の武ぶ侠きようを統すべる義姉、北米の英雄に次いで出会った同族とは、どうやら良好な関係を作れそうにはなかった。

5

　草くさ薙なぎ護ご堂どうが神速のカンピオーネと口論していた頃。

　白き甲かつ冑ちゆうの軍神は、黙もく然ねんと月を見あげていた。

　ランスロット・デュ・ラック。人呼んで、湖みずうみの騎士。魔女王グィネヴィアの守護者にして神しん槍そうエクスカリバーの担にない手てだ。

　白き甲冑で全身をくまなく防護している。

　兜かぶとに胸きよう甲こう、鎖くさび帷かた子びら、籠こ手て、脛すね当あて——。素肌が見える部分は皆かい無むだった。

　彼の居場所は浜辺である。月明かりに照らされている。

　満月を眺めたあと、眼前の海を見る。この先にアヴァロンが浮上している。かつてブリテンの地で『勇アル者トス』と呼ばれた、彼の主あるじが眠る島——。

　仇きゆう敵てきアレクサンドル・ガスコインが浮上させたものだ。まちがいなくグィネヴィアと、守護者であるランスロットを呼び込むために！

　さらに、再戦を約した草薙護堂も帰き還かんしたらしい。

——やんぬるかな！　ランスロットは口くち惜おしさを噛かみしめた。

戦いの日は近い。なのに、彼はいまだ完全復活を果たしていない。この間、アテナと草薙護堂のふたりを相手に戦ったせいで、神力の恢かい復ふくが遅れたせいだ。

このまま戦闘がはじまれば、またも早々に力尽きてしまう。

もとより持久戦・長期戦を好む彼ではない。全力全速の一騎駆けを早々に繰り出して、敵を薙なぎ払うのがランスロットの流儀。

しかし、このままではただ一度の一いつ騎き駆がけで力を使い果たすだろう。

心置きなく戦うためには、やはり二の矢、三の矢の準備をしなくては。時間が欲しい。神力を取りもどすための時間が。

——いや。ここでランスロットは、決してそうではないことを自覚した。

「余は何の枷かせもない状態で、あの少年と決着をつけたいのだな……」

自みずからの心をのぞき見て、その認識を新たにする。

先の戦いから半月と経たっていない。草薙護堂——あの若き神殺しとの激闘は、細部に至るまで生々しく思い起こせる。

「草薙護堂……余が撃破すべき敵の名。ふふ、愛いとおしくさえある響きよな」

舌の上で美酒を転がすように、名をつぶやきさえする。

アテナを介して逆縁で結ばれた少年。その顔を想おもい、名を唱となえ、逞たくましい丈ます夫らおぶりを思い出すだけで心がたぎる。血が燃える。魂たましいが逸はやる。

「力が欲しい。この刃はこぼれした体を癒いやす時が欲しい。あの少年と激しくぶつかり合い、打ち合い、斬きり合い、睦むつみ合うための刃やいばが欲しい……！」

　実をいえば、その願いはかなえられる。

　だが、ひきかえに己おのれは変わる。変へん貌ぼうしてしまう。おそらく庇ひ護ごすべき少女を打ち捨てて、まつろわぬ闘神の性さがをどこまでも体現しようとするだろう。

　――嗚あ呼あ！　この誘惑のなんと甘美なことか！

　声には出さない慨がい嘆たんを、冴さえ冴ざえと輝く満月へ訴えたときだった。

「小お父じ様、ここにいらしたのですね」

　後ろから声をかけられた。グィネヴィアが来たのだ。

「ああ。首しゅ尾びはどうであった？」

　ランスロットは振り返り、何の懊おう悩のうもふくまぬ声で答えた。

　この少女に要いらぬ心配をさせてはいけない。ひそかに想うだけとはいえ、彼女への裏切りだともいえる心情を悟られてはいけない……。

「残念ながら、無理でしたわ。やはりアレク王子の迷宮を突破し、アヴァロンに上陸することはかなわぬようです。……あの手を使う以外には」

「大地と迷宮の神、ミノスを顕けん現げんさせる法か」

　憂ゆう鬱うつそうにグィネヴィアに言われて、ランスロットはつぶやいた。

　アレクが所有する迷宮の権能は、クレタ島の牛ぎゆう頭とう神しんミノスより簒さん奪だつしたもの。かつてグィネヴィアは、ミノスの神格をごく一部とはいえ模も倣ほうし、顕現させたことがある。神しん祖そのみが行使できる霊力『神しん威い招しよう来らい』を用いたのだ。

　ミノスの迷めい宮きゆう神しんとしての神格を模倣させれば、アレクの迷宮を突破できるだろう。

「ですが、神の贋がん作さくを造るには聖杯の呪じゅ力りょくが必要です。それも莫ばく大だいな量が。幸いにもアテナより汲くみあげた呪力がありますから、貯蔵は十分ではありますが」

「偽いつわりの神を呼んでいる間、本来の目的のために聖杯を用いることはかなわなくなる」

　大地の精気をプールし、供給する。それが聖杯本来の機能である。

「ガスコインめもそれを知っている……。愛いとし子よ。あやつはそうさせるつもりで誘っているのだ。偽りのミノスを顕現させ、そのうえでアヴァロンへ引き込むために」

　グィネヴィアの切り札は三つ。

　ランスロット、聖杯、そして神槍エクスカリバーである。

　神の贋作を招来すると、ある事情から聖杯は使えなくなる。そして、聖杯からの呪力供給を必要とする神槍も。ふたつも切り札を失ってしまうのだ。

「はい、まちがいなく。それでもグィネヴィアが来ると承知のうえで！」

　グィネヴィアは怒りとくやしさのため、涙を浮かべていた。

　涙まじりの瞳で、海の彼方かなたを見つめる。

「仕方あるまい。このうえは偽りのミノスによって迷宮を破り、アヴァロンに乗り込むしかあるまい。そこから先は、余が死力を尽くすとしよう」

　すべきことがはっきりして、ランスロットはすがすがしく言った。

　そうだ。神力の恢復など二の次でよい。この不満足な体でも死力を尽くし、騎士のつとめをまっとうすればよい。余計な想いなど振り捨てて。

　しかし――。

「せめて草薙さまを籠ろう絡らくし、アレク王子との戦いをゆだねることができればよかったのですが……。そうなれば、グィネヴィアたちはアヴァロンへの突入に全てを注ぎ込めます」

　しかし、グィネヴィアが口にしてしまった。

　軍神の血をざわめかせる仇敵の名。それをこの場面で！

「アテナを陥おとしいれるためにあの方をご利用させていただいた直後です。いかに奸かん計けいを用いても、きっとかないますまい。他の手を考えましょう」

「い……や。はたして、そうかな？」

　白き軍神は言ってしまった。禁断の扉を開けるための一言を。

「そなたは忘れたのか？　余が狂きよう奔ほんと激情こそを本地とする神であり、我の血も彼の血もたぎらせ、狂わせる神であることを」

「——小父様？」

「ふふふ、そうであった。まず草薙護堂と和し、合力してガスコインめを討うったあと、われら両名で雌し雄ゆうを決すればよい。余の神威をもってすれば、必ずやかなおう！」

「ですが小父様。それを成すには、草薙さまのおそばへ近づく必要がございましょう」

　ささやくランスロットへ、グィネヴィアは心細げに訴えた。

「なに、そのための術はある。ゆえあって騎士となった余だが、その本性は志こころざすべき道など持たぬ蛮ばん夷いであり、倫も理も知らぬ勇ゆう猛もう剽ひよう悍かんの兵つわもの。常の神々であればかなえられぬ狂きよう奔ほんも、余であればできる……」

　静かにつぶやいてから、白き軍神は愛し子へ言い渡した。

「ひさかたぶりに、あの業わざをなすとしよう。愛し子よ、手伝いを頼む」

房ぼう総そうの海にふたたび魔女王と軍神が来たり、神殺したちも蠢しゅん動どうする。

浮島ともアヴァロンとも呼ばれる島と、救世の神刀を巡る戦いの火ひ蓋ぶたが、いよいよ切って落とされようとしていた。

## 第４章　護堂失墜

### 1

　江え戸ど前まえの海にあやしい『島』が出現して以来――。

　あわただしかった草くさ薙なぎ護ご堂どうの身辺は、逆に小しょう康こう状態となってしまった。

　黒王子アレクは横よこ浜はま中ちゆう華か街がいに潜せん伏ぷく中ちゆうだという。だが、報告してくれたあとで、甘あま粕かす冬とう馬まはむずかしい顔をした。

「あそこはね、ちょっと厄やつ介かいなんですよ。華か僑きよう系けいの幇ほう――秘密結社なんかがこっそり軒のきを連ねていまして……。私らの業界的には治外法権の租そ界かいといいますか、委員会のスタッフが迂う闊かつに飛び込むと、たまにコンクリに詰められて東京湾ダイブの標的にされます」

「俺が直接出向くというのは……？」

「もちろん草薙さんなら無モウ問マン題タイ、諸もろ手てをあげて歓迎もしくは降参してくれるでしょう。ただ、大都会・横浜の中心で大魔王おふたりがケンカ腰で接近遭そう遇ぐうってのは、上う手まくない展開ですかねェ……」

　そういう微妙な場所に居いすわっているらしい。

　まちがいなく、東京湾の『島』を見守るために選んだ土地だろう。

　そして、グィネヴィアとランスロットも行方ゆくえがわからな

い。何しろ神しん祖そと神の組み合わせである。アレクに輪をかけて神しん出しゆつ鬼き没ぼつな連中だ。呪じゆ術じゆつか霊力で捜そう索さくする以外に発見手段はなく、それも上手くいっていなかった。

　こうなると、護堂にできることは『何かあったときのために待機』しかない。

　連休明けからの数日、ただ待つだけだった。そこに万ま里り谷や祐ゆ理りが帰ってきたのである。

　一一月も後半に入った週の金曜日。

　放課後、護堂は地下鉄で虎とらノ門もんに向かった。

　昨夜、祐理から帰国を報しらせる電話をもらったのだ。そこで、彼女が媛ひめ巫み女ことして守護する七なな雄お神社で落ち合うことになった。長旅と霊視の濫らん用ようから来る疲れを癒いやすため、今週中は学校を休むと言われたからである。

「結論から言えば、ランスロット卿きようの神格を全て見とおすことはかないませんでした」

　護堂と顔を合わせるなり、まず祐理は言った。

　七雄神社の敷地内にある社しや務む所しよ。その一室でふたりは向かい合っていた。

「ああ。それは昨日も電話で言ってくれたよな」

　護堂はうなずいた。祐理の霊視をもってしても、謎なぞは解とけなかったのだ。

　がっかりしなかった、といえばウソになる。しかし、逆に護堂はよろこびもしたし、現地調査をしてくれた媛巫女とプリンセスに感謝もした。

　全ては見えなかった。逆をいえば、ある程度までは霊視できたのだから。

「わかったのはどういうことなんだ？」

「はい。私とプリンセスはあのあとブルターニュへ渡り、先代と当代のグィネヴィアさまたちが本拠地とされた森や町、城や修道院の跡地などをまわりました」

「……修道院。アーサー王伝説をアレンジした連中の根ね城じろか」

　森・町・城はともかく、修道院という言葉は唐とう突とつだ。しかし、もう護堂はその理由を知っている。アレクサンドル・ガスコインが解き明かした中世の陰いん謀ぼうを。

「それから、私たちはブルガリアに渡りました」

「ブルガリア？　どうして？」

　フランス北西部から中欧の小国へ。地続きだから、かんたんに移動できただろう。

　だが、なぜそんなところへ？　護堂は首をかしげた。

「すこし前、あちらのトラキア平原にランスロット卿が降こう臨りんされたらしいのです。あの方の権けん能のうが穿うがったというクレーターを、姫様といっしょに見て参りました」

　軍神ランスロットの一騎駆けを思い出して、護堂はうなずいた。

　あれが直撃すれば、たしかにクレーターのひとつやふたつできるだろう。

「どうして、そんなところに大穴を開けたんだろうな？」

「古代トラキアはスキタイ人、サルマタイ人の勢力範囲だったといいます。その関係でランスロット卿と縁があったのかもしれません」

　異国の神を語る祐ゆ理りは白衣に緋ひ袴ばかま。正統なる巫み女こ装しよう束ぞくであった。

「幸い、いくつかの啓示を授さずかることができました。まず、ランスロット卿はサルマタイ人に崇あがめられた軍神であったこと。

そして、グィネヴィアさまの前世は彼と共に崇められる地じ母ぼ神しんであったこと……」

「もともと近い関係の神様だったから、今でもつるんでいるんだな」

「そのはずです。おふたりは地上に『まつろわぬ神』として顕けん現げんしたあとで再会し、行動を共にするようになったのでしょう。そして『最後の王』と出会い、その傘さん下かに入ったのだと霊視できました。ですが……」

　ここで、祐理はちょっとだけ口ごもった。

「それでも視みることがかなわなかったのです。卿の甲かつ冑ちゅうのなかを」

「ランスロットが着ていた鎧よろいや兜かぶとってことか？」

「はい。卿がいかなる属性の神であらせられるかは、ほぼ視みえています。でも、甲冑のなかだけが駄目なんです。そして、それを知らなければ、おそらく卿の真実は理解できないような気がします……」

　と言って、祐理は切なそうにため息をついた。

「せめて、甲冑の一部だけでも外れた御姿を拝見できればと思うのですが」

　頭頂からつま先までを守護する完フル全プレ鎧ート。あれを外すのは骨が折れそうだ。

　しかし、やらなければダメなようだ。護堂はうなずいて礼を言った。

「わかったよ、万里谷。ありがとう。それだけ突きとめてくれれば十分だ。次にヤツと会ったときは、あの白ずくめをどうにかして引っぺがしてみるよ」

　すると媛ひめ巫み女こは、フッと小さな桜の花がほころぶように微笑した。

「いえ。これも護堂さんの……あなたのためですから」

思わず、美しくも可か憐れんな媛巫女を抱きしめたくなった。

まわりに魅力的すぎる少女が多いせいで、護堂は意識して禁欲的であろうとしている。彼女たちによからぬ想おもいを抱かぬよう自じ戒かいもしている。

だが祐理には、その決意を粉砕されてしまうときがある。

基本的に心やさしく、しかし、たまに手厳しい大やまと和なで撫子しこの美少女。彼女は草薙護堂の警戒心をあおることなく傍そばにいて、ひかえめに控えている。

たとえばエリカなどは、花園でも他を圧する華麗さで咲きほこる大輪の椿つばきだ。

一方リリアナは白く清せい楚そな、大ぶりに花ひらいた百ゆ合りだろう。

恵え那なは、色あざやかな野性の蘭らんかもしれない。

他の少女たちに比べて、祐理は決して目立つ花ではなかった。美しさに差はない。だが、自らの魅力を主張する我がの強さがない。最前列へ出ようとする意欲もないだろう。

しかし、そうであるからこそ、惹ひきつけられるのかもしれない。

それを改めて意識して、護堂は顔を紅あかくした。

「どうかしましたか、護堂さん？」

一方の祐理は、そんな想いに気づくことなく清せい楚そに微笑んでいた。

「い、いや。何でもないっ」

「それならばよいのですが。……ところで、ひとつご相談させていただきたいことがあるのですけれども、よろしいでしょうか？」

いきなり祐理が話題を変えた。もちろん否いなやはない。護堂は即うなずいた。

「…………そ、その」

　だが、一向に話しはじめない。祐理は恥ずかしそうに口ごもっていた。

「どうしたんだ？　遠慮なく言ってくれよ。俺と万里谷の仲じゃないか」

「わ、私と護堂さんの仲……？　は、はい。そうなのですね」

　仲間への気安さにまかせて、護堂はうながす。

　しかし祐理は赤面し、うなじまで真っ赤になった。しかも、うつむく。護堂の顔ではなく、あぐらをかいている足ばかり見ている。

　ちなみに余談だが、祐理はもちろん端たん然ぜんと正座していた。

「すいません、自分から言い出したくせに……。で、でも、お察しください。私の口からは言い出しにくいことなんです。特に今は差し迫った戦いがあるわけでもなく、非常時とは言いがたい状況ですし……」

　口早に語る祐理はひどく愛らしい。しかし、これでは埒らちがあかない。

　彼女の肩にポンと手を置いて、護堂は語りかけた。

「変な遠慮はするなよ。今回だって、万里谷にはさんざん苦労をかけてるんだ。俺の方にも何かさせてくれよ」

「は、はい。では遠慮なく」

　遠慮なくと言いながら、祐理はさんざんためらった末に、

「あの……全てを見とおすことはかないませんでしたが、ランスロット卿きようの知識はかなりのところまで準備ができています。そ、それで、どういたしましょう？」

　と、ようやく訊たずねてきた。

「どうって？」

「つまり、い、いつご教きよう示じしましょうか、という意味です……」

　教示＝呪術による知識の伝達。

　だが、護堂たちカンピオーネに通常の術は効かない。そこで経けい口こう摂せつ取しゅが必要になる。口うつしにして、呪術を体内に吹き込むのだ。

　その絶対的なルールに思い至って、護堂は赤面した。

　そうだった。祐理に霊視を頼んだら、最後にそれをしなくてはいけない。

「あ、でも、ランスロットの全てを視みられていないなら『剣』も造れないだろうし、まだ早いんじゃないか……っ！」

「で、ですが！　この先、何が起きるかわかりません！」

　狼ろう狽ばいしつつ護堂が回避しようとしたら、珍しく祐理が大声を出した。

「もしかしたら、私がおそばにいないときにランスロット卿との戦いがはじまるかもしれませんし……！　備えをしておくのは当然の用心ではないかと思うのですっ」

「そ、そうか。だけど、魔法とかで教わった知識はすぐ頭から消えるだろ⁉」

　どちらも興奮気味に主張し合う。護堂と祐理は身を乗り出した。

　いつのまにか、ふたりの距離が近づいている。

「消えてしまったときは、またお教えすればいいだけだと思いますっ。ど、どうしても必要なことですし、そのために労を惜おしむつもりはありませんし……」

　顔どころか、うなじまで紅こう潮ちようさせながら、祐理は訴える。

　その必死さが媛巫女にほのかな色いろ香かをあたえていた。清純そのものである美少女から求められているのを実感して、護堂は息

を呑のんだ。

　それに応こたえたくなって仕方がない。



　また、今は和室でふたりきり。障しよう子じもきっちり閉めてある。

　神職の人々は護堂が来たときの慣例どおり、近くに来ようとはしないだろう。しかも、ふたりの手と手。あとちょっとのばすだけで、ふれあえる。

　護堂も祐理も畳たたみに視線を落として、それに気づいてしまった。

「そ、そうか。戦いのために必要……だもんな」

「は、はい。絶対に必要だと思います……」

　つぶやきながら、たがいの顔を見つめ合う。

　共犯者を見つめるときの光が、それぞれの瞳ひとみにあった。

　護堂が手をのばすと祐理も同じことをした。手と手が結ばれる。緊張で汗ばんでいた媛巫女の手が愛いとおしく、護堂はそっと握りしめた。祐理もきゅっと握り返してくれた。

「私と護堂さんの仲、ですし。こ、こういうことをしても問題ありません……よね？」

「あ、ああ。そう……だな……」

　顔と顔を近づけさせ、睦むつ言ごとのようにささやきながら。

　ふたりとも目をつぶり、おたがいの感触を唇くちびるで確認しようとしたとき——。

　携帯電話が着信音を奏かなでた。しかも、護堂と祐理双方の携帯が。

「エリカからだ」

「リリアナさんからです」

　護堂がポケットに入れていた携帯を、祐理は手近に置いていた携帯をチェックして、発信者の名前をつぶやいた。仕方ない、出るか。

　どちらもまじめな性格なので無視したりせず、ふたりは携帯を耳に当てた。

「何だよ、エリカ？」

『外を見て。わたしたちもちょうど来たところなの』

「……来た？」

『ええ。言ったとおりにしてくれればーいち目もく瞭りよう然ぜんよ♪』

　まさか。護堂はわずかな汚れひとつない障子をにらんだ。似たような会話があったのか、祐理もそちらを驚きながら見ていた。

　ガラッと障子を開けてみる。たしかに一目瞭然だった。

　七雄神社の境内にエリカが微笑みながら、リリアナがちょっとだけ眉まゆをひそめながら立っていた。学校から直行したのだろう。ふたりとも制服姿だった。

2

「念のため言わせてもらうけど、わたしはむしろ反対したのよ？」

　開口一番、エリカは朗ろう々ろうと告げた。

「祐ゆ理りも向こうでがんばっていたでしょうし、ちょっとくらい抜け駆けさせてあげるのも女の器量だって、リリィに言って聞かせたくらいだし。わざわざ神社を訪ねてまで邪じや魔まするものじゃないわって」

「とか言いながら、真っ先に抜け駆けの可能性を指摘したのはあなただぞ、エリカ」

　旧友兼ライバルに、リリアナが言い返した。

「授業が終わると、早々に姿を消した草くさ薙なぎ護ご堂どう。すでに帰国しているらしいが学校を欠席した万ま里り谷や祐理。それ

らの状況が行き着くところは明らかだと言って。わたしは『邪じゃ推すいもいいところだろう』と、きちんと主張したぞ」

「でも、わたしが予想したとおりだったでしょう？　ほら」

　エリカが指さしたのは、和室のなかにいる護堂と祐理だった。

　まだ手をつないだままだったので、あわててふたりはおたがいから離れた。

「最近、すっかり『女』になった祐理と、すっかり許容範囲が広くなった護堂。こういうシチュエーションでふたりきりになったら、大たい義ぎ名めい分ぶんもあることだし、なるようになってしまうかしらと予想しただけよ。かんたんな方程式じゃない」

「……まあ、そこに気づけなかったのは、自分でも迂う闊かつだったとは思うが」

　騎士たちが語るのを聞きながら、護堂と祐理は目くばせし合った。

　ふたりとも赤面している。おまけに動揺している。どう言いつくろえばいいのかと悩み、どうしようもないと打ちのめされている。

「草薙護堂。よい機会ですから、申し上げたいことがあります」

　リリアナに凛り々りしく訴えられて、護堂は背を正した。

「あなたにはそろそろ、複数人の女子との恋を同時進行で愉たのしむドン・ファンとして、確たる自覚を持っていただきたいと思います」

「ち、ちょっと待てっ。俺はいつ、そんな人間になったんだよ⁉」

　心からの叫びだった。しかし、リリアナは沈痛そうに頭を振った。

　エリカには「まあ、こういう人よね」と肩をすくめられ、祐理にはすこしふくむところのある視線で見つめられた。みんな異論があるらしい。

「お黙りください。身近にひかえる複数の女性について、誰が大事

か、誰を守ると訊きかれて迷いもせず『全員』と即答する人物に反論する資格はありません」

「うぐっ」

　ぐっさりと心に刺さる、リリアナの苦言であった。

　心当たりはいろいろあるので、自じ業ごう自じ得とくなのだが……。

「そろそろ、この方面にも開き直りと順応を見せるべき頃合いだと思います。異様な状況下に置かれたとき、その異様さともだんだんと折り合いをつけ、いつのまにか生まれ故郷にいるような振る舞いを見せる。それは明らかに、草薙護堂が持つ希け有うな才能です」

「ひ、開き直りと順応!?」

「はい。まあ、あなたなら意識せずとも自然と順応されていきそうですが……。しかし、現時点でいくつか問題があるのも事実。指摘だけはさせていただきましょう」

　リリアナはキリッと表情を引き締めた。

　その凛々しさと美しさに、護堂は反論の言葉を呑のみ込んだ。

「べつに、万里谷祐理と『儀式』をするなとは言いません。ですが、そういうことをされるのなら……事前や事後にきちんと教えていただかなくては」

「おおお教える!?」

「あるいは、今回のようにあっさり露見することがないよう、もっと巧こう妙みように隠していただきたいと思います。でないと、その、どうしても嫉しつ妬と心しんに似た、騎士にあるまじき負の感情がわき起こるといいますか——」

　リリアナは恥ずかしそうにつぶやいた。

　嫉妬心に似たどころか、嫉妬そのものを感じて困ると、羞しゆう恥ちの表情があからさまに教えてくれる。だから全員に告知するか、隠すなら絶対バレないようにやってくれ——？

　なんというハードルの高さ。

　高校生にはまったくふさわしくない要望を突きつけられて、護堂は愕がく然ぜんとした。

　そんな難題に順応できる才能は、自分にはないと思うのだが……。

「あと、もうひとつ。わたしたちの家の者についてですが」

　さらにリリアナは言い継ついだ。

「エリカの叔お父じ上うえでもあるパオロ・ブランデッリ卿きようとは、面識があるのですよね？」

「ああ。あのかっこいい叔父さんだろ。イタリアで会ったけど、気持ちのいい人だよな」

　エリカの数少ない血縁だという叔父は、とにかく男ぶりがよかった。

　しかし、護堂は首をかしげた。なぜ、ここであの人の名前が？

「その……そろそろエリカだけでなく、たとえばわたしなどの家族にも会っていただけると、非常にうれしく思えます。や、やはり家か人じんの公認があるのとないのとでは、だいぶちがうといいますか……」

　つまり、あれか。家族に紹介したいという意味か？

　護堂はあせった。無理もないと、我われながら思う。これだけいろいろあった少女たちの家族に会って、挨あい拶さつなどしたりする。どうしても身がまえてしまうイベントだろう。

「家族と護堂さんを引き合わせる……のですか!?」

　しかも、隣で祐理まで愕然とつぶやいた。

「う、うちはもう妹のひかりとはお会いしていただきましたけど、両親や祖父母とはまだでした……。でも、どうしましょう？　当代のカンピオーネである方と引き合わせたら、きっと家族はすごく動転してしまいます。もともと万里谷家はたいした家格ではありませ

んし……」

　どうしましょうと困ったような発言だが、祐理の目は輝いていた。

　リリアナの言葉を聞いて、前向きに考え込んでいるらしい。まさか、これから彼女たち全員の家族と顔を合わせていくのか。

　肚はらの底にひやりとした感触が広がるような——。

　護堂が奇妙なプレッシャーに囚とらわれたとき、携帯電話にメールが届いた。

　開いてチェックすると、明あ日す香かからだった。『例の約束、そろそろどう？　あたし、今日は暇ひまだけど』という、短い文面であった。

　その後、護堂は明日香との待ち合わせ場所を決め、七なな雄お神社を出た。

　アレク、グィネヴィアの双方に動きがない。草薙護堂の出番が来るのはまだ先だろう——ということで、エリカたちが送り出してくれたのだ。

『ま、最近バタバタしていたしね。たまには揉もめごとを忘れて、日常っぽいことをするのもいいんじゃないかしら。遠出しなければ、何か起きてもすぐ対応できるでしょうし』

　これがエリカの弁だった。

　たしかに、非常事態にばかり備えていると気疲れしてしまう。

『そうだ。みんなもいっしょに行くか？』

　思いつきを口にすると、少女たちはいっせいに顔を見合わせた。草薙護堂の至らぬ部分をみんなで嘆なげき、あきれる表情に見えたのは気のせいだろうか？

『心ひかれるお誘いではありますが、遠慮しましょう。徳とく永ながが明日香にも悪い』

『あいつのことだから、気にしないと思うけどな』

『いえ。この間会ったとき、わたしとエリカにすこし遠慮していたようですし』

『そうですね……。せっかくの機会ですし、このままエリカさんとリリアナさんに、私が得たランスロット卿の知識をお教えすることにします。今日のところは旧交をあたためていらしてください』

　リリアナが遠慮すれば、祐理も最近忙しい亭主に羽根をのばせと勧すすめる若妻のように言ってくれた。護堂はありがたく気き遣づかいを受け、出かけていった。

　週末を前にした金曜日の午後一八時。待ち合わせ場所は上うえ野の駅前。

　明日香も護堂も文ぶん京きよう区く根ね津づの住民である。買い物ではまず、近場の上野（品物によっては秋あき葉は原ばら）がファーストチョイスとなるのだ。

「よう」

「遅い。二〇秒の遅刻」

　上野駅の不しの忍ばず口ぐちで落ち合った直後の挨拶。

　護堂のそっけなさも、わずかな遅刻に憎まれ口をたたく明日香も相当だ。しかし、気心が知れている同士。これでいいのだ。ちなみに幼なじみはフード付きのパーカーにニットの上着、ジーンズという飾り気のない格好だった。

　だが、明日香がいきなりお洒落しやれして来たら、逆に護堂は戸惑うだろう。

「じゃあ早速、買い物に行こ。プレゼント、何にするか決めた？」

「いいや、まだ」

「頼りにならないヤツ。じゃあ作戦会議ね。静しず花かちゃんが好きな物を言って」

「そういえば、あまり知らないな」

「頼りにならないにも程ほどがあるわよ、ダメ兄貴！」

「……待てよ。この間、うちのおふくろが持ってきた何とかってドイツワインの九〇年物を気に入って、すごく美う味まそうに飲んでいたぞ。俺やじいちゃんといっしょに」

「特殊すぎる草薙家の事情を、平凡な家族団らんみたいに語るな！」

　明日香にくわっとにらまれて、護堂は肩をすくめた。

　知らないものは仕方ないよと言外に訴える。一生心に残る贈り物をしたいわけでも、サプライズを演出したいわけでもないのだ。

「変にリサーチとか考えないで、無難な選択肢を選べば十分だろ」

「あんたってば本当に、その程度の心がけでよく女子にモテまくれるわね。ある意味、あたしの人生で最大の驚きだわ」

　守備的なアイデアに明日香はため息をつく。護堂は一応クレームをつけておいた。

「べつに俺、そんなにモテないだろ」

「うるさいっ。あんたの非モテアピールが信しん憑ぴよう性せいゼロだって、こちとら幼稚園の頃から承知してんのよ。この祖父にしてこの孫ありだって、さんざん言われてきたでしょ!?」

「じいちゃんの孫まごだからって、俺の個性を無視して決めつけるなよ！」

「決めつけてないわよっ。そういうこと言うの、みんな一いち朗ろうおじいちゃんとあんたを昔から知ってる人ばかりなんだから！」

　ポンポンと爆ばく竹ちくが鳴るように、ふたりして言い合う。

　明日香とのこういう会話はひさしぶりだった。中学まではずっと同じ公立校に通っていたが、高校はべつになった。以来、一時的に絶えていたものだ。

　強しいていえば、エリカとの軽口のたたき合いが近いだろうか。

しかし、この打てば響くような感覚は、明日香との間にだけ感じるものだった。

「そういえば知り合いに、モテてモテて仕方ないってくらいモテる、正しよう真しん正しよう銘めいの女たらしがいるぞ。その人にアドバイスをお願いしようか」

沙さ耶やの宮みや馨かおるの武ぶ勇ゆう伝でんを思い出して、護堂は言った。

まあ、相談相手が〝彼〟ではなく〝彼女〟であるという性差ジエンダーの問題はあるが、ここでは障しよう碍がいになるまい。

「あんたの交友関係、最近ますますいかがわしさを増してるわね……。その意見は却きやつ下か。他人のアドバイスとか当てにしないで、あたしたちだけの力でなんとかするわよ」

「あ、ちょっと待った。実はカンパをすでに受けている」

事情を聞いたエリカ・祐理・リリアナが、ささやかに援助してくれたのだ。

そのことを護堂が言うと、明日香は「えっ」と驚いた。

「あの人たち、あたしと護堂が会うの知ってるんだ？」

「ああ。さっき教えた」

「よ、よく許してくれたわね……」

「許すも何も、みんな気持ちよく送り出してくれたぞ」

まあ、ちょっとだけ微妙な表情をしていたが、気にすることでもないだろう。

しかし護堂の言葉に、明日香は「そ、そうね」とひきつった表情で答えた。何か思うところがあるようだ。さらに愕がく然ぜんとした表情で、

「つ、つまり、あたしは今のところ先頭争いから外れたその他大勢ワンオブゼムだから、警戒どころか牽けん制せいすらしなくても大丈夫って見なされてるのね……。ううっ、それで全然いいんだけ

ど、なんだかちょっとモヤモヤした感じが……でも、あのエリカさんとかと張り合うだなんてどだい無理な話だし……」

　ゴニョゴニョよく聞き取れないことをつぶやいていた。

「どうかしたのか、おまえ？」

「ううん、何でもないっ！」

「そういえば、前にエリカと会ったときも、様子が変だったよな？」

　この幼なじみは〝いいやつ〟だし、エリカも人づきあいの名人だ。

　そうそう妙な関係にはなるまいと思いつつも、護堂は念のため訊きいてみた。

「エリカのこと、もしかして気に入らないのか？　やたらと目立ちたがりで、事実目立つヤツだけど、あれで結構ものわかりはいいし、面白い女だぞ。おまえともそれなりに仲よくやっていけると思うけどな」

「あ、ちがうちがう。エリカさんが気に入らないとか、全然ないから」

　明日香があわてた様子で、手をぶんぶん振った。

「むしろ逆だし。あの人、すごく〝いい性格〟してそうじゃない？」

　明日香は『いいやつ』でエリカは『いい性格』。そのとおりにちがいない。

　上う手まいことを言うなと、護堂は感心した。

「つきあってみたら、すごく面白そうだなとはあたしも思う。顔とかファッション見てるだけでも退屈しなさそうだし。あと、真ま世よおばさんに張り合えそうな十代の女子、世界中探してもエリカさんくらいでしょ」

「う……まあな」

　母・草薙真世。その名を出されて、護堂はうなずいた。

「万里谷さんもリリアナさんも、あんたのお母さんには絶対かなわないわよ。そういう意味でも、エリカさんはすごく面白いと思うわ。だけど、まあ、何ていうのかなあ……」

　幼なじみはここで、ちょっとだけ切なげな表情になった。

「あんたみたいなヤツの隣にいるのは、やっぱりああいう全部が規格外の娘なのかなって思うと、なんかいろいろ考えちゃってね。ただそれだけ。だから、気にしないで。次に会うときはきっと、仲よくやれると思うから」

「……そうなのか？」

「あんたにはわからない乙おとめ女心ごころというか、微妙な心の綾あやよ。それより、軍資金が増えたのは朗ろう報ほうだわ。そろそろ任務に取りかかるわよ」

　明日香はさっぱりした口調で、護堂に移動をうながした。

　それから二時間ほど、ふたりで上野の店をまわってみた。

　購入したのは手頃なサイズのバッグである。落ち着いたデザインなので、どこへ持っていくのにも困らないだろう。

　下へ手たに奇をてらわず、手堅く勝ちにいく戦術ゆえの選択だった。

　品物は護堂ではなく、明日香が保管することになった。

　草薙家に置いておくと、プレゼントの存在が静花にバレるかもしれない。ささやかなサプライズを堅守するための用心だった。

「もうこんな時間だし、どっかで飯を食べてくか？　今日の礼におごるぞ」

「いいわね。ただし、おごりはなしよ。あんたごときに借りを作ったら、目覚めが悪くって仕方がないもの」

「じゃあ、それで。ひさしぶりにあのカレー屋へ行くか？」

「もしかして、中学の頃に何度か行ったあそこ⁉」

「ああ。ほら、じいちゃんの知り合いでパキスタンの人がやってる店」

「パス！　あそこ、あんたやおじいちゃんの顔見たら、ウルドゥー語で遠慮なく話しかけるわ、同じパキスタン人向けの隠しメニューしか見せてくれないわ、現地の味つけで激げき辛から郷土料理を出すわで、国際色出しすぎよ！」

「あそこはあれがいいんだよ。なかなか他にない店だろ」

「そういう個性は必要ないのっ。ちゃんと日本人向けのマイルドなカレーだって作ってるのに、特別待遇してくれるんだから！」

　ふたりで遠慮のないやりとり。憎まれ口。

　この程度で護堂は気を悪くしないし、明日香も本気ではない。気の置けない古なじみとのつきあいを楽しみながら、口論する。

　金曜の夜、さすがに上野の町はにぎわっていた。

　外国人も大勢いる。だから、蜂はち蜜みつ色の髪に空色の目をした白人の少女がいるだけなら、奇妙ではなかったはずだ。だが、彼女は明らかに異質だった。

　――美しい。抜きんでて美しい、一〇代後半の少女だった。

　シャギーを入れた蜂蜜色の髪はショート。長身で細ほそ面おもて。顔立ちは天使のそれを思わせるほど精せい緻ちで、なにより清らかだった。

　夜の繁華街にはまったく似合わない、自然な透明感。

　草原を吹き抜ける涼風。あるいは、突き抜けるほど高い空の蒼あおさ。

　そんな雰囲気をまとう美び貌ぼうなのだ。そして、異様な風ふう体ていだった。マントのような薄汚れた外がい套とうで全身をくるみ、フードまでかぶっている。

　だが、浮浪者まがいの格好が、逆に彼女の美貌を際きわ立だたせていて――。

　なのに、なぜだ？　護堂は奇妙に思った。

「なあ明日香。あの女の人、わかるか？」

「え、誰？　……ああ、すごくきれいな人じゃない。へえ」

　上野駅近くの大通りである。

　異様に涼やかな白人美少女は、交差点で信号待ちをしていた。

　それを見つけた護堂が訊たずねると、はじめて明日香は少女の存在に気づいた。また、周囲にいる人々は誰も少女を見ていなかった。奥ゆかしく遠慮して、並外れた美貌に注目するチャンスを無駄にしているのではない。気づいていないのだ。

　路ろ傍ぼうの石に目を止めないように。

　吹きゆく風にわざわざ注目しないように。

　誰も少女の特別さに目を向けていない。この奇怪さ――まさか、あいつらか？　だが、護堂の心に闘志がみなぎることもなければ、肉体に力が満ちることもなかった。

　つまり、神との遭そう遇ぐうではない。

　どういう少女なのだろう。護堂は信号待ちする美少女を凝ぎよう視ししてしまった。

　その直後――。

　いきなり少女が振り向き、護堂と視線が合った。

　彼女は微笑した。草原を渡る風に光がまじるように笑い、こちらへ歩いてくる。

「やっと見つけたぞ。私の運命よ」

　透明感のある美貌に似合いの涼やかな声で、美少女はささやいた。

3

「我が運命の男よ。宿命をひとつにして分かち合うべき少年よ……。今、確信できた。私は貴公と出で逢あうためにここまで旅をしてきたのだ」

　流麗な日本語で、外がい套とうにくるまった美少女は言った。

「貴公も同じはずだな。私をこそ宿命の相手と感じ、私の存在に胸をたかぶらせ、血を熱くしているだろう？　ふふふ。わかるのだよ、私には」

　大おお仰ぎようで持ってまわった言葉遣づかい。神々のことをいやでも想そう起きしてしまう。

　だが、神殺しである草くさ薙なぎ護ご堂どうの心身には、神との遭そう遇ぐうを示す兆ちよう候こうは何も現れない。もしかして、神しん祖その仲間だろうか？

「あんた……名前は？」

「さて？　知らぬな。いや、忘れてしまったのかもしれぬ」

　護堂の問いに、奇妙な少女は平然と答えた。

「忘れた？」

「ああ。実は己おのれの素す性じよう、このあたりにいた理由……全てを忘れて、ここ数日さまよい歩いていた。ただひとつの激情に身をまかせて、な」

「何だよ、それは？」

「逢わねばならぬ何者かがいるという想おもいだ。その者こそ我が運命の相手であるという確信が、ここで静かに燃えていた」

　外套の上から、少女は胸を押さえた。

　ぶあつい布越しでも、ゆたかな乳ち房ぶさのふくらみが見て取れ

る。ほっそりしているくせに、女性として然しかるべき部分は大いに肉付きがいいらしい。

しかし、そんなことより——。

自じ称しよう記き憶おく喪そう失しつの美少女。只ただ者ものであるはずがない。何者なんだ、こいつは？

やはり神祖？　護堂が鋭くにらみつけたとき。

「ち、ちょっと護堂。本当にこの人と初対面なの？」

明あ日す香かが口をはさんできた。何か疑っているようだ。

あわてて護堂はうなずき、言いわけした。

「あ、ああ。見かけたのも話したのも今がはじめてだ」

「それなのに、ずいぶん熱烈な求愛じゃないっ。つまり、一ひと目め惚ぼれさせたってこと？　それも外人さん相手にッ。ほんと、どこまでもムチャクチャなやつね！」

「え？　一目惚れ？」

「この娘が言ってること、そうとしか聞こえないわよ！」

そうだったのか。明日香から憤ふん然ぜんと指摘されて、護堂は意外に思った。

そこには思い至らなかったのだ。むしろ、この奇妙な少女が告げたとおり——。

護堂は少女をにらんだ。

名も記憶もないという少女もにらみ返してくる。

ぶつかり合う視線と視線。眼光と眼光。魂たましいと魂。たしかに心が逸はやる。この女と自分の間には、得体の知れない絆きずなめいたものが存在するように思える。

「ふふ……たまらぬぞ。貴公の瞳ひとみが、私にはたまらぬ。こんなにも私を熱くさせるものがこの世にあるという事実に……ぞくぞくする」

　恋人を求める情欲にも似た熱が、少女の瞳にはあった。

　だが、似ているだけだ。護堂にはわかる。彼女が望むものを察せられる。

　しかし、明日香にはたぶん無理だろう。また誤解されると面倒になりそうなので、護堂は適当な言いわけを考えようとして、驚いた。

　怪け訝げんそうな表情で、幼なじみが質問してきたからだ。

「……ねえ護堂。まさかとは思うけど、この人とケンカとかしないでしょうね？」

「え!?」

　さすが、幼稚園の頃からの古なじみというべきか。

　態度や表情から、徐々にたかぶってきた護堂の心を漠ばく然ぜんと察したようだ。明日香の慧けい眼がんに舌を巻きながら、とっさに言う。

「バカ言うな。この人、こみいった事情がありそうだし、すこし話をしてみる。必要があれば警察や知り合いに相談するつもりだから、先に帰ってもらえるか」

　明日香を巻きこむわけにはいかない。その気き遣づかいからの方ほう便べんだった。

「知り合いって、あんたやおじいちゃんのあやしい友達とか？」

「ああ、そんなところだ。……いや、じいちゃんはともかく、俺の友達はたいしてあやしくないと思うけど」

「はいはい。そういうことにしといてあげる」

　明日香はため息と共に言った。

「ま、あたしがいっしょにいると会いにくい友達もいるだろうし、荷物を持って退散してあげるわ。でもね、護堂」

　さっき購入した静しず花かへのプレゼントが入った紙袋。

　それを護堂の手からひったくりながら、明日香は通告した。

「あんたは自分のこと平和主義者だとか言うくせに、いざとなると過激もいいところだから、一応注意しといてあげる。いい、荒っぽい揉めごとに首を突っ込んだら絶対ダメよ！　それだけは覚えときなさい！」

　幼なじみからの、ありがたい忠告だった。

　だが、かなえられるか——。護堂は自称記憶喪失の少女に『向こうへ行こう』と、あごをしゃくる。少女はフッと微笑して、黙ってついてきた。

「なあ。あんた、もしかして神様なのか？」

「どうだろうか。そのような心当たりはないな」

「それとも神祖か？　あいつら、見た目はみんな小さな女の子だって聞いたけど」

「……さて？」

　護堂は歩きながら、いささか唐突な質問を重ねた。

　しかし、少女はふつうなら答えに窮きゅうするはずの問いを平然と受け容いれながら、まったく意味のない回答しかしなかった。

　そうこうするうちに、上うえ野の公園へ到着した。同じ敷地内に上野動物園、国立科学博物館、西洋美術館、有名な不しの忍ばずの池いけなどもあり、かなりの広さを有する恩おん賜し公園だ。

「ほとんど何も覚えていないのだ、私は」

　人通りのすくない、公園の夜道。

　護堂とならんで歩きながら、少女はつぶやいた。

「だがな。空白ばかりが目立つ記憶の底から、わずかに拾いあげられる光景がある……。白き星に導みちびかれる私と、黒き星に導かれる何者かがいる。その者こそ、いずれ私が雌し雄ゆうを決し、死

をもって引いん導どうとすべき究きゆう極きよくの敵であると。穴だらけの魂に刻まれているのだ」

「……え？」

　意外なつぶやきに、護堂は思わず足を止めた。

　すると少女も立ち止まり、鋭くにらみつけてくる。

「黒き星を戴いただく者こそ、我が運命。そして、それは貴公であろうと我が魂が告げている。貴公の死と生は我が生と死に深く結びつき、決して離れることはあるまい」

「あんた、まさか。もしかして、ランスロット……なのか？」

　白き恒こう星せいの神刀と、黒き破滅の神刀をぶつけ合った死闘。

　あの忘れえぬ情景を語った少女に、護堂は愕がく然ぜんとして問いかけた。

「ランス――ロ……？」

　そして、風変わりな少女の顔がこわばった。

　茫ぼう洋ようとしていた瞳の覇は気きが強まる。草原を吹く涼風めいた美び貌ぼうに、超然たる神こう々ごうしさがこみあげてくる。そして、唇は微笑の形に。

　護堂の心身に力がみなぎってきた。神の気配に応こたえて、戦闘態勢に入ったのだ。

「ふ、ふふふ……。そうであった。いや信じていたぞ、我が運命よ。必ずや余の騎士としての名を思い出し、唱となえてくれると。おかげで自みずからに科した呪じゆ縛ばくがゆるんできた……」

「なんだってェ!?」

　自分で言っておきながら、護堂は心底仰ぎよう天てんした。

　ランスロット・デュ・ラック。涼やかにして酔すい狂きような男ぶりを示す、白き軍神。アテナを死に至らしめたグィネヴィアの小

お父じ様……だったはず。

「ちょっと待て！　声だってちがうし、デタラメ言うなよ！」

　かつて白しろ兜かぶとの内側から発せられたのは、男らしい美声である。

　今、護堂が聞いているのは美しいメゾソプラノ。可か憐れんな少女の声だった。

「ここはいくさ場にあらず。余も甲かつ冑ちゆうをぬいでいる。たまには本来の声を出してもよかろう」

「ほ、本来!?　それが地声だってのか！」

　愕がく然ぜんとする護堂に、ランスロットを名乗る少女は「うむ」とうなずいた。

　たしかに、あの軍神を彷ほう彿ふつさせる重々しい仕草だった。

「え？　それ、女装とかじゃないのかよ!?」

「無礼な。甲冑をまとわぬ余は、麗うるわしき騎馬の民たみの女王。女たると偽いつわる必要などない。草薙護堂、卿けいは女によ性しように対する礼儀をわきまえぬ無ぶ骨こつ者ものよな」

「えええええっ!?」

　フンと美少女に吐き捨てられ、護堂は頭を抱えたくなった。

　完全に意表を突かれた。いや、只ただ者ものでないことはとっくに見抜いていた。

　だが、まさか、こんな告白をされるとは！

　しかし、不思議と疑う気持ちはわいてこなかった。目の前にいる美少女の所しよ作さ、物言い、何より雰ふん囲い気き——いわれてみれば、全てがランスロット・デュ・ラックに重なる。

「さっきまで神様と会ったときのピリピリした感覚もなかったぞ!?」

「卿を警戒させぬよう、『狂きよう奔ほん』の呪縛で余の神格と記

憶を封じたからよ。卿と巡り逢うまで、神としての名も記憶も失えという呪いを自らに科したのだ」

　美しきランスロットはフッと微笑ほほえんだ。

「呪縛で記憶を封じるって……一体、どんな魔法だよ⁉」

「ふふふ、心に眠る欲望を満たせとそそのかし、暴走させる呪縛だ。もっとも、ただ猛たけらせるだけでは芸がない。理性や品格を捨てさせ、ただひたすらに狂奔させるため、多少だが心のなかをいじることもできる。此こ度たびのようにな」

　護堂は理解した。一種の精神操作、催眠術の類たぐいなのだろう。

　騎士らしく突撃するだけが得意技だと思っていたのだが、こんな裏技もあったとは。……いや、欲望のために暴走させるだけなら、これもある意味で突撃の一種か。

「もとが野人である余は、宮廷に騎士として控えるのが苦手でな。たまにこの呪縛を自らにかけ、外に飛び出すこともあった。ふふふ、ひさしぶりにやってみたぞ」

　微笑しながら語るランスロットに語られて、護堂はある名を思い出した。

　そうだ。ウルスラグナも同じだった。

「聞いたことはないか、『円卓の騎士』の物語を？　あれは先代のグィネヴィアが画策し、修道士どもに広めさせた話だ。余を『最高の騎士』と持ち上げるのに苦心しておった。まあ、それでも余の本性が狂える武人であることを粉飾できてはいなかったがな」

　最初に会ったとき、ウルスラグナは記憶と神としての性質を失っていた。

　東方の軍神をそうさせたのは、フェニキアの神王メルカルト。ランスロットは自らの権能で同じことを為なしたわけだ。

　納得した瞬間、ランスロットにスッと近づかれた。

　そのまま組みつかれてしまう。上着の布をつかまれ、首にも手を

かけられた。

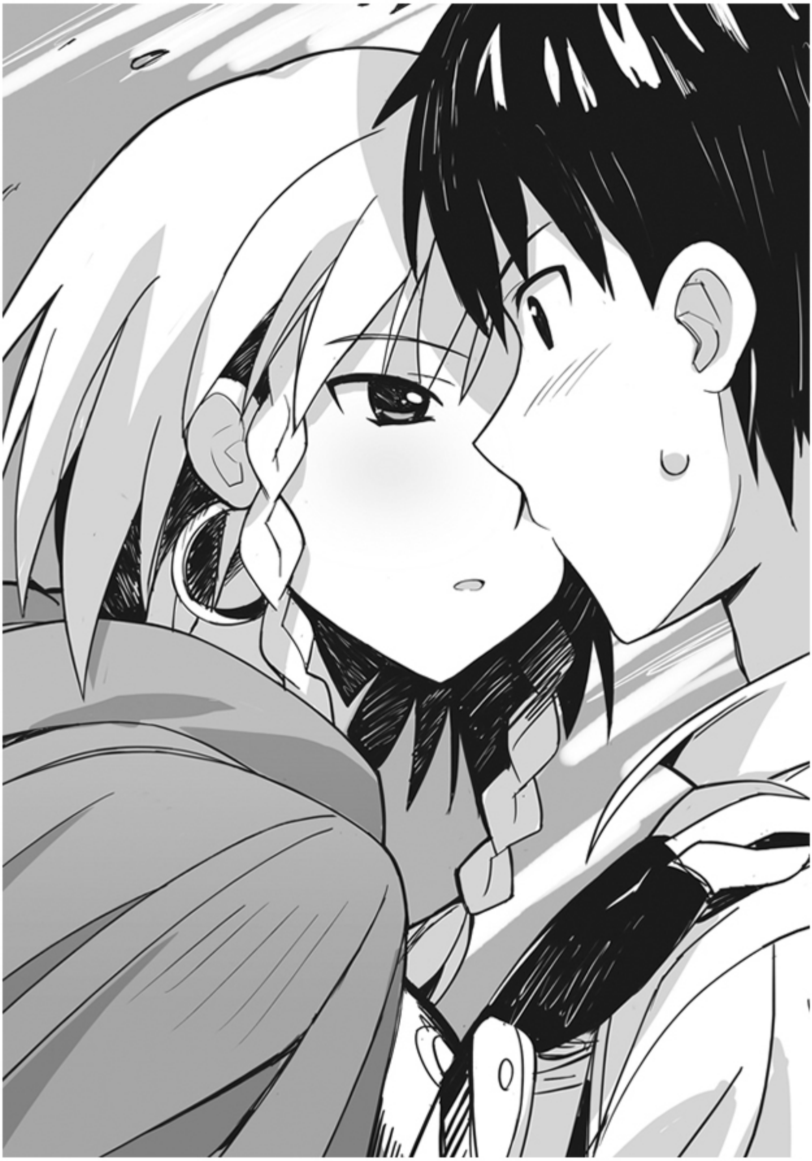
「神であることさえも余は忘れていた。だが、運命の敵である卿を念じて徘はい徊かいし続ければ、必ず再会できると信じていたぞ。そして、ついに願いは成じよう就じゅした……」

　しまった。護堂は舌打ちした。

　驚きのあまり、警戒をゆるめてしまった。とっさにランスロットを振りほどこうと、全身の力を振りしぼる。だが、間に合わなかった。

　迫るランスロットの美貌——。そして意表を突かれた。

　涼やかな美少女の唇くちびるで、護堂は唇を奪われたのだ。



「余は愛いとし子のため、アレクサンドル・ガスコインを討うたねばならぬ。だが、彼奴きやつは端たん倪げいすべからざる大敵。必ず勝てるなどと大言のできる敵手ではない。ゆえに草薙護堂よ、余と卿の力を合わせて、ガスコインめを粉砕しようぞ。それを果たしたあとで、われら両名の運命に生死勝敗のいずれかをもたらすのだ！」

　これが狂奔の呪縛か――？　護堂は息を呑のんだ。

　カンピオーネの心身にランスロットの権能がからみついていく。

　すさまじい強制力だった。理性と人格が狂的に加速していく。あらがえない。振り払えない。血が熱くたぎり、心が焔ほのおのように燃えさかる。

　そうだ。まずガスコインを倒す。そのあとで必ず、この女との決着をつける。

　心が定まった。護堂の唇が獰どう猛もうな形にゆがむ。微笑だった。

「俺をグィネヴィアのところに案内しろ。準備をはじめるぞ」

「承知したぞ、我が運命よ」

　誓約の接せつ吻ぷんを終えて、白き軍神も婉えん然ぜんと笑みで応こたえた。

## 第５章　黒王子対草薙護堂

### 1

アレクサンドル・ガスコインは神殺しの魔王である。

だが、霞かすみを喰くって生きられるほど生命力旺おう盛せいではない。また星空をテントに、野の草花をベッドにして野営するほどアウトドア志向でもない。

……まあ実のところ、いざというときにアレクが発揮できるサバイバル能力は、かなりのレベルである。その気になれば無人島に住まいを築き、手て際ぎわよく食糧を調達し、火を起こし、そこそこ快適な新生活を手に入れることも可能だ。

だが、アレクは現代社会に生きる成年男子である。

そのような生活力をわざわざアピールしたいとは思わない。異国に長期滞在するときは、それなりの拠点を用意するのが慣例だった。

今回、日本での潜せん伏ぷく先さきに選んだのは横よこ浜はま中ちゆう華か街がいだった。

「アレク、草くさ薙なぎ護ご堂どうというのはどういうカンピオーネなの？」

「一言でいえば、すさまじく傍はた迷めい惑わくな男だ。……ところで見ればわかるだろうが、俺はこのとおり忙しい。話しかけるのはすこし待て」

リビングで待つセシリア・チャンに、アレクは即答した。

彼がいるのは台所である。中華鍋なべをガンガン振って、冷や飯の水気を飛ばしている。

「私の質問の方が、ランチの準備よりも重要事項だと思うけど……」

無口無表情が基本のメガネ少女は、いつもどおり淡々とつぶやいた。

「何かの作業をしているときに集中を乱されるのが、俺はきらいなんだ。もう一分もかからないはずだ。おとなしくしていろ」

米のパラパラ具合が炒チヤー飯ハンの命——。

アレクはエプロン姿で鍋だけ見つめ、うしろの配下を一いつ顧こだにしなかった。

結社《王おう立りつ工こう廠しよう》の総そう帥すいと台たい湾わん在住の構成員がいるのは、横浜中華街にある高級マンションの一室だった。一八階建ての九階にある部屋である。

ここがアレクの潜伏先なのだ。

東京湾に面した港町・横浜は、拠点として申し分ない場所だった。

迷めい宮きゆうの権けん能のうで鍵かぎをかけた例の小島には岩しかない。あそこで寝起きしたいと思うほど、アレクは物好きではなかった。

ちなみに、ふつうに借りた部屋ではない。

セシリア・チャン——華か僑きようの一員である彼女の親族に頼み、供与してもらった。

親族とはもちろん一般人ではなく、中国系呪じゆ術じゆつ結けつ社しや《九きゆう天てん幇ほう》の幹部であり、黒王子アレクの雷名を知る者だった。

首都圏に潜伏する以上、そのうち正せい史し編へん纂さん委員会

に居所を知られるだろう。

　そこでアレクは《九天幇》を抱き込み、日本呪術界における〝租そ界かい〟ともいうべき中華街に居場所を求めたのだ。

「こんなところか……。テーブルに皿を持っていけ」

「わかった。ねえアレク、前から思っていたけど、あなたって本当にマメ」

　ため息をつきながらセシリアは言った。ふたり分のカニチャーハン、中華風チキンスープ、海鮮サラダの皿を運びながら、部屋を見まわしている。

　４ＬＤＫの室内はきちんと整理整頓され、ホコリひとつない。

　魔王カンピオーネへ貸すにあたって、徹底的に掃除されたおかげもある。だが、それ以上に大きいのは、アレク自身がマメに掃除と整頓を毎日しているためだ。

『使用人に料理人？　俺は自分の面倒くらい、自分で見られる。よく知らない輩やからがまわりをうろつくのも好みじゃない。要いらぬお節せつ介かいは遠慮してもらおうか』

　そうなるまでに、このような指示を仏ぶつ頂ちよう面づらで出しもしたが。

　ちなみに、アレクは充実した居住環境をあまり効率的には使っていない。

　寝室は一部屋だけ、それもベッドとクローゼット、デスクのみ使用。深夜まで調べ物や考え事にのめり込み、眠くなればソファで横になることもザラなので、それで十分なのだ。４ＬＤＫどころか１Ｋでも十分な暮らしぶりだ。

　それでも全ての部屋を隅々まで掃除する。アレクの几き帳ちよう面めんさゆえである。

　三〇分前、親族の家で寝泊まりしているセシリアが、中華街で買った差し入れを持って訪ねてきたときも、

『これが蟹肉炒飯カニチヤーハンだと⁉　米粒はだいぶ水っぽい

し、カニは冷凍物——それも解凍と冷凍を何度も繰りかえした粗悪品だ。俺が本当の炒飯というものを味わわせてやる！』

　と、自みずから鍋を振るいだした。スープとサラダまで手際よく作りながら。

「俺は快適さを求めるにあたって、妥だ協きようしないだけだ。居場所のどこかが気に入らないのなら、自分で手を入れればいい。好ましい食事が欲しければ、自分で調達すればいい。それだけの話だからな」

「あなたがすごいのは、都会でも無人島でも同じペースでそれをやるところ……」

　上司と部下はテーブルで向き合い、昼食と会話に取りかかった。

「たしか草薙護堂のことだったな。まあ、すさまじく傍はた迷めい惑わくな男だ」

　炒飯のパラパラ具合に満足しながら、アレクは同じ表現を口にした。

「口先だけで平和主義を唱となえるのがヤツの手口だ。そうやって周囲を油断させる。見るからに危険そうな物体なら、近づく人間も注意するだろう。だが、安全そうにカモフラージュされていれば、つい気を抜いてしまうからな。その隙すきに破壊の限りを尽くすわけだ」

　アレクは斉せい天てん大たい聖せいとランスロットの騒動時、日本で成り行きを静観した。

　結果、草薙護堂というカンピオーネをすでに見切っていた。

「しかも、異性をたらしこむ手て管くだにかけては並ぶ者がない。どうやったのかは知らんが、あの魔ま教きよう教きよう主しゆとまで意気投合して、義ぎ弟ていの座に収まったからな……」

「さすがはアレクの同族ということね」

　セシリアの相づちに、すこしだけアレクは眉まゆをひそめた。

「他の連中と同類項のように俺を語るのは、そろそろやめろ。考え

るより先に体が動くやつらとは、あまり気も合わんし似てもいないはずだ」

「アレクこそいいかげん、自分の本性から目をそむけるのはやめたら？」

「バカを言うな。俺ほど己の長所と短所を把は握あくしている人間はすくないはずだぞ」

「そう？　ところで思ったのだけど」

　自信を持って唱えた異論は、セシリアにあっさり流された。

　む。さらに眉まゆをひそめるアレクだった。

「そんなに厄やっ介かいな人なら、味方にできなくとも敵にまわさないよう気を遣つかうべきだと思う。なのに、アレクはケンカを売るようなことばかり。明らかに配慮が足りていない」

「いいや。その考え方には重大な見落としがある。不見識だと言わざるをえないな」

　聡明だが経験の浅いセシリアに、アレクはかぶりを振った。

「見落とし？　何、それは？」

「相手がまともな人間であると思っている点だ。いいか、カンピオーネという非常識な連中と接する場合、『話せばわかる』『相手も同じ人間』『人は理解し合える』といった考えは捨てておけ。連中のことは、人語を理解する猛獣くらいに思うべきだ」

「……そうなの？」

「ああ。たしか七年前だったか。カリフォルニアに遠征したとき、ロスのジョン・プルートー・スミスと知り合った。やつはカンピオーネにしては理性的な方なので、俺も柄がらにもなく友好関係を築いてみようかと思った。せめて、敵対関係にはなるまいと。だから、思ったことの一〇分の一も口にしないよう気も遣った」

「……なんて思っていたの？」

「たしか『成人年齢には達しているだろうに仮装趣味を卒業できな

いのか』。『いちいち芝居がかったセリフとアクションで目立とうとするな、自じ意い識しき過か剰じようなナルシストめ』。あと『さんざん他人を待たせていいところだけ持っていくとは、いいご身分だな』とか……他にもたくさんあったが、あの男を知る者なら誰でも感じることばかりだな」

　かつての邂かい逅こうを思い出しながら、アレクは語った。

「だが、努力は全て無駄に終わった。俺たちはそれなりに良好な関係を築けていたはずなのだが、出会いから一週間後、なぜか俺とスミスは全力で戦っていた。あやうく相打ちになるところだった……」

「どうして、そんなことに？」

「巡り合わせが悪かったというか、そもそもあんなにアクの強い男と足並みをそろえるのなど無理だったというか……。結局、一時休戦したときに俺たちは相互不可侵条約を結び、互いのやることに干かん渉しようしないというルールを作ったわけだ」

「アクが強いのはあなたもいっしょ……」

「とにかくだ。他にも似たようなことが何度かあり、俺は学んだ」

　いろいろ訴えたそうなセシリアをさえぎって、アレクは言い切った。

「相手がカンピオーネなら、どう振る舞おうと揉めるときは揉める。講和できるときはバカバカしいほどあっさり講和できる。だから、無駄な努力をしても仕方ないとな」

「そこでそういう結論に行き着くあたり、あなたもやっぱりカンピオーネなのね」

「「…………」」

　噛かみ合わない会話の結果は、無口少女との見つめ合いになった。

　どう言えば部下の不適切な認識を改めさせられるのか。アレクが悩んでいると、

「それはそうと、『島』の方はいいの？」

　セシリアの方から話題を変えた。不毛な話に飽きたのかもしれない。

「問題ない。迷宮化させた海域に接近する者がいれば、報しらせが届くようにしてある。何か起これば、すぐに舞い戻ればいい」

　伝説がアヴァロン、もしくは浮島と呼ぶ『島』。

　天あま之の逆さか鉾ほこによって横よこ須す賀か近海に浮上させた、いにしえの小島である。神速の権能によって稲いな妻ずまと化したアレクなら、あっという間に飛んでいける。

「あの島はアーサー王……いいえ、そのモデルとなった軍神が眠る島なのでしょう？　救世の神刀とかいう『剣』を抱いて眠るはずの？」

「そのとおりだ」

　セシリアの問いに答えてから、アレクはスープを一口すすった。

「なのに、アレクはどうしてあれを用意させたの？　ふつうに考えたら、あの島にこそオリジナルがあるはずなのに」

　ロスに行っている間、セシリアに取りにいかせた品。

　かつてインドネシアの小島で発見し、現地の信頼できる知人に預けていた秘宝のことを訊きかれて、アレクは淡々と言った。

「だが、ちゃんと必要になっただろう？　グィネヴィアをあの島へ呼び込むために、不可欠な要素だからな。いつか役に立つと考えて、本部に展示もせず隠していた甲か斐いがあった」

　本拠地でもあるセントアイブスの美術館。

　アレクはしばしば、借り物や発見物をあそこに展示する。

　だが、世界中に黒王子の根ね城じろと知られた場所だ。出入りする配下には戦闘力の低い者もすくなくない。万一に備えてアイスマンになるべく留守を守らせていたが、真に危険な敵を呼び込む物品は置かないようにもしていた。

「たしかにそう。でも、あるはずのものがないとアレクは予測していた。それが不思議」

「逆だ。『最後の王』が眠るといわれる場所だからこそ、あれがある可能性は低い。あの島は神しん祖そたちが千年も探し続けて、発見できなかった場所だぞ」

　グィネヴィアのことを思いながら、アレクは言った。

「あの魔女はもっと早く、こう考えるべきだったんだ。——これだけ探しても見つからない理由は何か？　主あるじの居場所を巧たくみに隠している者がいるからではないか。眠れる主は、はたしてどのような手段で隠されたのだろう……とな」

　古老という正史編纂委員会の上位者たち。彼らが『最後の王』を危険視し、その存在を隠いん蔽ぺいしたらしい。自分が彼らならば、どうやって隠す？

　アレクはこう考え、グィネヴィアはそうしなかった。この差が明暗を分けた。

「まあ、俺の読みは当たったが、べつに予知をしたわけじゃない。単に、今までの状況から考えられうる展開を二〇通りほど予測して、全てに対応できるよう布ふ石せきしていただけだ。それが上手くいって、グィネヴィアをしとめる準備は整った」

「……どうかしら、それは？」

　だが、ここでセシリアがぼそりとつぶやいた。

「あなたはたしかに切れ者だけど……たいてい『女』で失敗するから」

「バカを言うな。俺は草薙護堂あたりとはちがう。女に執しゆう着ちやくも思い入れもないから、女にたぶらかされて判断をあやまることもない。失敬なやつだな」

　憤ふん然ぜんと反論する。しかし、セシリアは首をふるふると横に振った。

「そういう意味じゃない。アレクの策や企たくらみをひっくり返すのは、たいてい予測不能な女の情念とか、恋心とか、妄もう執しゆ

うとか、無む償しようの愛だから。それに、あなたが苦手な敵は大体『女』。あのお姫さまがいい例」

「妙な言いがかりはよせ。そんな女、俺にはいない」

　ひそかにグリニッジのプリンセスを思い出しながら、アレクは吐き捨てた。

　テーブルに〝使い魔〟が顕あらわれたのは、このときだった。姿形は『黒い仔こ牛うし』である。ただし、手のひらほどのサイズ。つぶらな瞳にはたしかな知性の輝きが宿っている。

　虚こ空くうより忽こつ然ぜんと顕れた仔牛は、炒飯の皿の隣でアレクを見あげた。

「来たか」

　にやりと笑う。猛もう牛ぎゆう神しんミノスの権能が生んだ使い魔である。

　アレクの造り出した迷宮を管理し、留守を預かりもしてくれる顕けん身しんだ。仔牛とのアイコンタクトで、情報はすぐに伝わった。

（迷宮付近の海に、かなりの呪力を持つ何物かが出現）

「神獣か、偽いつわりの神か？　それともランスロットか？」

（不明。しかし、『まつろわぬ神』ではない）

「つまり、神獣以上の何かというわけだ。慎重なグィネヴィアも、ついに決断してくれたようだな。俺もすぐにあちらへ向かうとしよう」

　つぶやきながら悠ゆう然ぜんと匙さじを動かし、炒飯を口に運んだ。

　腹ごしらえと着替えをすます程度の時間はまだある。さて、今日はどのジャケットにするべきか。アレクは食べながら検討をはじめた。

　今日は忙しくなるだろう。時間は有効利用しなくては――。

2

軍神に奇襲された翌日の昼、草くさ薙なぎ護ご堂どうは湘しょう南なんにいた。

窓の外には青い海うな原ばらが広がっている。ここは海辺のカフェなのだ。

昨夜、ランスロットは欲望を暴走させる秘術で護堂を呪じゆ縛ばくした。その結果、奇妙な呉ご越えつ同どう舟しゆうが実現していた。

「何もこのようなところで御食事をされなくとも……」

グィネヴィアは不満そうな顔で言った。

いつも澄ましている魔女王の、はじめて見る表情。しかし、護堂は聞き流した。

今はそれよりも腹ごしらえだ。チキンと有機野菜、ハーブのサンドイッチをほおばる。美う味まい。ルッコラなどの葉物はみずみずしく、うすく切ったトマトは甘く、何より鶏とり肉にくの塩気がちょうどよかった。

「町や人間を避けるのはおまえたちの勝手だけどな。俺にそういう趣味はないし、好きなやり方でもない。俺といっしょにいる以上、こちらのやり方に合わせてもらおうか」

ゆっくりとサンドイッチを呑のみ込んでから、悠ゆう々ゆうと言う。

護堂がすわる席の向かい側に、ふたりの少女がいる。神しん祖そグィネヴィアと、蜂はち蜜みつ色のショートヘアが涼やかなランスロットである。

グィネヴィアはいつもの黒いドレスで、とにかく目立つ。

ゴスロリ風ファッションの美少女として、自然と注目を集めてし

まうのだ。カフェの店員も客もグィネヴィアをちらちらと見つめ、賛さん嘆たんしていた。

「たとえそうでも、このような俗ぞく人じんどもが集つどう場所、グィネヴィアの身分にふさわしくありませんっ。草薙さまも立派な殿方なのですから、すこしは貴レ婦デ人イへの気き遣づかいをお示しくださいませ！」

　視線を感じて落ち着かないのか、グィネヴィアはやや赤面しながら言った。

　一方、その隣となりにすわるランスロットは落ち着いていた。

「よいではないか、愛いとし子ごよ。たとえ無人の荒野であっても、吹きゆく風や天の星々に見守られているもの。鳥も虫も獣けものも見つめていよう。人じん間かんにあっても同じことだ。われらはわれらにふさわしき威い厳げんを示していればよい」

　と、コーヒーのカップを口に運ぶ。



　もっとも、神祖も軍神もカフェでの作法をひとつも心得ていない。彼女が飲むコーヒーは、護堂が適当に注文した品のひとつだった。

　ランスロットは昨日の薄汚れた外がい套とうをぬぎ、衣装を改めていた。

　白いニットセーターにシャツ、そして黒のパンツ。気品ある落ち着いた装いだ。

「ですが小お父じ様！」

「ふふふ。この姿でそう呼ばれるのも、こそばゆいものだな」

　怒れる被保護者に、短髪の美少女は微笑で応じる。

　人間たちの注目を集めているのは、実はランスロットも同じだ。騎士の方は堂々とそれを受け流し、カフェの風景に溶け込んでいたが。

　しかし、いさめられてもグィネヴィアの興奮が収まる様子はない。

　衆しゆう目もくにさらされるのが、そこまで我が慢まんできないのか？　護堂は不思議に感じた。それなりに度胸の据すわった女だと思っていたのだが——。

「ああ、そうか」

　グィネヴィアが不ふ機き嫌げんな理由に気づき、護堂はククッと含み笑いをした。

「何をお笑いなのですか、草薙さまっ」

「いや、なに。意外とかわいいところがあると思っただけだ」

「かわいい？　何がでございますか？」

「おまえに決まっているだろう、グィネヴィア」

「な!?」

　たちまちグィネヴィアの顔が真っ赤になる。

「草薙さま。魔王であらせられる御おん身みといえども、魔女の王に対して非礼でございます。お気をつけあそばしませっ。なにゆえ、このグィネヴィアがかわいいなどと⁉」

「拗すねているからさ」

　護堂は人の悪い笑顔になり、からかいの言葉を口にした。

「昨日から、俺が全部仕切っているからな。魔女の王様は思いどおりにならないことが多くて、ご機嫌ななめというわけだ」

　昨夜、ランスロットの呪縛を受けたあと。

　美しき軍神に導みちびかれて、護堂はグィネヴィアの待つ海辺へやってきた。

『お待ちしておりましたわ、草薙さま。この度たびはわたくしどもの招待をお受けいただき、まことにうれしく存じます――』

　グィネヴィアはいつもの勿もつ体たいぶった口調で迎えたものだ。幼い笑顔には、ついに勝機を得た魔女王の喜き悦えつがあふれていた。しかし、護堂はそれを一いち瞥べつするなり告げた。

『まあ、招待は受けてやるが』

　そして、グィネヴィアの顔に手をのばした。

　さすがの魔女王もハッと身を固くした。その隙すきに、細いおとがいを人差し指と中指でつまみあげ、無理矢理に護堂の顔を見あげさせた。

『覚えておけ。俺はガスコインを倒したあと、そこのランスロットと決着をつける。邪じゃ魔ますることは許さない。するなら、それなりの覚悟をしておけ。『最後の王』とかいう男を復活させたいんだろう、おまえは？』

『グ、グィネヴィアを殺すとおっしゃるのですか……⁉』

『まさか。そんな真ま似ねはしないさ。だけどな、復活とやらを邪魔する方法はいくらでもある。あまり都合よく俺を動かせるとは、思わない方がいいな』

　あのとき、護堂は静かに言ったものだ。

　だが、自分でも不思議なほど凄すごみと威厳があった。威に打たれたのか、グィネヴィアは素直にこくりとうなずき、それから守護者にすがるような視線を投げかけた。

『すまぬな、愛し子よ。余は草薙護堂を狂きよう奔ほんさせ、余との再戦を果たす前にアレクサンドル・ガスコインと戦えと呪縛した。それは上う手まくいったのだが……やはり神殺し、なかなかの器量を持っている。呪縛はできても、あくまで対等の盟友としかならぬようだ』

『対等？　バカを言うな』

　ランスロットの言葉を、護堂は嘲あざ笑わらった。

『これからは俺に仕切らせてもらおうか。グィネヴィアのように慎しん重ちようすぎる女が指揮していたら、勝てるものも勝てやしない。ガスコインと戦うまで、俺の指示にしたがってもらう。あんたたちを必ず勝たせてやるよ』

　この宣言に、グィネヴィアは美び貌ぼうをこわばらせた。

　彼女の美しき守護神は『ふむ……』とつぶやいて腕組みし、しばらく思案した。だが結局、異論は唱となえなかった。護堂の言い分が正しいと、暗に認めたのだ。

　かくして草薙護堂は、呉越同舟というべき集団のリーダーになったのである。

　あのあと護堂はグィネヴィアに指図して、魔術で食事や寝床を用意させた。

　夜の間に『明日、島に攻め込むぞ』と決め、細かい段取りも定めた。たっぷりと寝て朝を迎えると、戦いに備えて腹ごしらえ——となったのだ。

　そして美少女ふたり連れで海辺のカフェに入り、現在に至る。

「ご機嫌ななめだなんて、そのようなことはございませんわ！」

　護堂のからかいを、グィネヴィアが赤面したまま否定した。

　だが、図星だったのだろう。ぎこちなく顔を背け、こちらを見ようとしない。

「ふふっ、照れるなよ。魔女王とかいってもまだまだ子供だな。さっき、かわいいって言っただろう？　おまえのそういうところ、俺はきらいじゃないぜ」

「え？」

　微笑しながら護堂が言うと、グィネヴィアはきょとんとした。

　転てん生せいを遂とげてから幾十年も経たつらしいのに、幼女にしか見えない神祖。すさまじい魔力と権威を持つ魔女王。だが、今のグィネヴィアは容姿相応のあどけなさで驚いていた。

「子供は子供らしく、歳とし上うえの連中に下げ駄たを預けていろ。べつに俺だって大人じゃないけどな、おまえよりはしっかりしているつもりだ」

「な⁉　非礼でございます！　グィネヴィアが幾とせの齢よわいを経へた魔女だと——！」

「何年生きてたって、子供なことに変わりはないさ。とりあえずガスコインを倒すまでだけどな、今のおまえにはランスロット以外にも当てにできる男がいる。すこし子供らしくしてもいいと思うぞ？」

　こうなってから、まだ半日も経っていない。

　だが護堂は、グィネヴィアという魔女を理解しはじめていた。

　結局、子供なのだ。神祖たちに成人や成長の概がい念ねんがあるのかは知らないが、すくなくともグィネヴィアは精神的に成熟していない。だから、ときどき視野がせまかったり、不必要なほど慎重だったりするのだろう。

「そ、そんな——困りますわ。グィネヴィアにも体面というものが……」

「まあ、意地を張るなら張るで、それもいいさ。強情だったり意地っぱりだったり、利きかん気だったりする思いどおりにならない女も、かわいいものだからな」

　グィネヴィアがもじもじするのを見て、護堂は言った。

　男の望むとおりに振る舞う都合のいい女も、たしかにかわいいだろう。

　しかし、今まで気づかなかったが、自分には少々天あまの邪じや鬼くなところがあるようだ。こちらの思惑どおりにならない一面を持つ女——たとえばエリカや祐ゆ理り、リリアナや恵え那なといった少女たちがやはり好ましい。

　そういえば、妹の静しず花かや幼なじみの明あ日す香かにもそういう面がある。

　改めてそれに気づくと、以前よりもかわいく思えてくるから不思議だ。

「く、草薙さまは意地悪ですッ！」

　一方、グィネヴィアはぷいっと顔を背そむけてしまった。

　護堂の微笑ほほえましげな目に耐えかねたようだ。だが、背けたあとで、こちらの顔色をちらちらと上うわ目め遣づかいでうかがおうとする。

　気分を害したわけではなく、むしろ逆なのだろう。

　そういうところがかわいいのだが——。護堂は気づかないふりをしてやった。

「ところで草薙護堂よ。見られているのはわれらだけではないぞ。卿けいを熱く見つめる娘どももいるようだが」

「そうか？　それは気づかなかったな」

　ランスロットに言われたが、護堂は特に感かん銘めいを受けな

かった。

「でも、勘かんちがいじゃないか？　俺程度の男なんて、その辺にごろごろしている。あんたたちといっしょだから目立つだけで、『熱い視線』ってのは眉まゆ唾つばだな」

「ふふ。そんなこともあるまい。実際、卿の男ぶりはなかなかのもの」

　不意にランスロットが顔を寄せてきた。護堂の顔へ、である。

　すぐ目の前に清涼感あふれる美少女の面おも差ざしがある。あと数センチで彼女の唇くちびるが護堂の唇にふれそうだ。アングルによっては、本当にキスしているように見えるだろう。

　そのとき、背後から「きゃあっ」と嬌きよう声せいが聞こえた。

　振りかえる。すると、向こうの席にいた中学生とおぼしき少女二人組が護堂に直視されて、うろたえた。どうやら彼女たちを驚かせたらしい。

　声には出さずに笑いかけ、軽く手を振る。

　愛あい想そ笑いではない。ただ『悪いな』と念を込め、一瞬だけ微笑んだのである。少女ふたりもたちまち笑顔になり、手を振りかえしてくれた。

　以前とちがい、護堂は女子への遠慮を感じなくなっていた。

　ランスロットの呪縛を受けて以来、心が澄み渡っているせいだ。要いらぬ常識や既成概念にとらわれず、心の赴おもむくままに行動できている気がする。

「いきなり変なことをするなよ。まわりが驚くだろう？」

　少女たちへのフォローのあと、美しき騎士に文句をつけた。

「なに。卿に注目する娘どもをよろこばせてやろうと思い、悪いた戯ずら心ごころを起こしたのよ。許せ。だが、余の言葉は正しかったであろう？」

「どうかな。単に外人女の変な行動にびっくりしただけじゃない

か？」

　ランスロットへ言い返してから、あることに護堂は気づいた。

「あんた、神様のくせに珍しく人間が見えているな」

「人間とて地を這はう蟻ありへ目を向けようとすれば、視界に入れることはできるであろう。真に理解できるか否いなかはべつとして。つまり、そういうことだ」

　空色の瞳をわずかに細めながら、ランスロットは言った。

「卿につきあって人の世に罷まかり出た以上、すこしは人間を見もしよう。それだけのことよ。だが、余が真に注視し、そして心を通じ合える人間はひとりしかおらぬ。すなわち卿——草薙護堂、貴公のみだ。ゆめ、そのことを忘れるな」

「誰が忘れるか。あんたを倒すのはこの俺だからな」

「いいや。余が卿を倒すのだ」

　ふたりで見つめ合い、顔を間近に寄せ、ささやき合う。

　護堂とランスロットの行為に、またも背後で「きゃあっ」という嬌声が聞こえる。しかし、もう振り返らない。眼前の『敵』より大事なことなど、ありはしないからだ。

「小父様と草薙さまは、本当に相そう思し相そう愛あいでいらっしゃるのですわね……」

　ふと、グィネヴィアがつぶやいた。

　皮肉の響きはなく、心から感じ入ったという口調だった。

「そんなに風流なものじゃない。むしろ腐くされ縁えんの類たぐいじゃないか？」

　つぶやいてから、護堂はランスロットから顔を離した。

　傍はた目めには『両手に花』に見えるかもしれないが、そんな生ぬるいものではない。あくまでアレクサンドル・ガスコインを倒すまでの呉越同舟。

その果てに待つ再戦こそ、護堂が真に望んでやまないものだった。

護堂は少女ふたりと共にカフェを出て、海に向かった。

人ひと気けのないところでグィネヴィアに指示して、飛ひ翔しよう術じゆつを使わせる。白き光につつまれて、護堂と魔女王、そして美しき軍神は飛び立った。

目的地は魔の海域に近い海上だ。

グィネヴィアに指示して、そこに『船』を用意させたのだ。

護堂の心は静かに猛たけりはじめていた。まず黒王子アレクを蹴け散ちらす。そのあとで、いよいよランスロット・デュ・ラックと再対決し、アテナへの弔いとしよう。

もちろん、勝つのは俺だ——。

闘志が唇をゆがませ、獰どう猛もうな微笑を浮かべさせる。呪縛のおかげだろうか？　何の躊ちゆう躇ちよも遠慮もなく、戦いに集中できる。

これまでもいざとなれば、ほとんど一瞬で戦う覚悟を決め、開き直っていた。

だが、今は開き直る必要すらない。心の底から戦うことを望み、魂たましいの赴おもむくままに猛たけり、昂たかぶり、戦える。なんという自由。なんという解放感。

今の草薙護堂に迷いはない。純然たる戦士、荒ぶる王者そのものであった。

## 3

稲いな妻ずまとなったアレクは、東京湾の上空を駆け抜けた。

セシリアは中華街に置いてきた。単独行である。このことを悪あき癖へきのように語る者は多いが、仕方ないのだ。彼の速さについてこられる者など、地上に幾人もいないのだから……。

横浜中華街で見あげた空は快晴だった。

だが今、稲妻に化け身しんして駆ける空は曇どん天てんである。

天気が変わった——否いな。これは神か、それに類するものが起こした変化だろう。グィネヴィアかランスロット、もしくは彼女らに仕つかえる何かが雲を呼び込んだのだ。

「あれか」

稲妻化したまま、アレクはつぶやいた。

眼下の海では、なんと『帆はん船せん』が航行中だった。

木造の船体はところどころ鉄板で強化され、数門の大砲も装備されている。まさしく大航海時代——大英帝国が世界中に植民地を広げた時代の産物だ。

高々と上げた白い帆ほは風を受けて、順調に船を推おし進めている。

船体の長さは二〇メートル弱。マストは三本。しかし、船上に乗組員の姿はない。航行させるのに人力が不可欠なはずの帆船は、全自動の機械のように動いていた。

あれは魔術で呼び出し、魔術で動かす『船』なのだ。

今にも雷雨になりそうな曇天の下、帆船は海を進んでいく。幽ゆう霊れい船せんと呼びたくなるほどの不気味さと荘そう厳ごんさをただよわせていた。

アレクは心身が昂たかぶり、戦うための力がみなぎってくるのを感じた。

あの船のどこかに『まつろわぬ神』がひそんでいる！

「青せい天てんの霹へき靂れきよ！」

短く言こと霊だまを唱となえ、気まぐれに権けん能のうを振るった。

途端に稲妻化した体から光がほとばしり、霹靂——雷電となった。眼下の海と帆船へ駆けくだる。ふつうの木造船なら火災となるだろう。だが、魔法の帆船はなんともない。

船に乗る『まつろわぬ神』の呪じゅ力りよくが、稲妻を払いのけたのだ。

フッとアレクは微笑ほほえむ。稲妻化した状態から放つ電撃は、あくまで神速の権能にともなう付属物である。神々にダメージをあたえうるものではない。単に『黒王子推すい参さん』の号砲代わりに放っただけだった。

天あまくだる稲妻となって、帆船の甲かん板ぱんへ降下する。

着地と同時に生身の肉体へ。アレクは仇きゆう敵てきの姿を求めて見まわした。

「こちらでございますわ、アレクサンドルさま」

なつかしいグィネヴィアの声で呼びかけられた。

アンティークドールのごとき金髪の神しん祖そと、そして白き甲かつ冑ちゆうの騎士ランスロットが船室より出てきたところだった。

「ようやく勝負に出る覚悟を固めたか、グィネヴィア。思ったよりも早かったな」

もう八年にもなる魔女王とのつきあいと抗争。

おかげでアレクは、グィネヴィアの気性も思考法もすっかり把は握あくしていた。だから、意外だった。わずか数日で乾けん坤こん一いつ擲てきの大バクチを決心するとは——。

「はい。さまざまに悩みましたが、『己おのれを当てにしろ』とおっしゃる御方がいらっしゃしましたので、勇気を振りしぼり、罷まかり越こしました」

「ランスロットか？　『まつろわぬ神』になったのなら、たしかに

厄やつ介かいな相手だ」

　うなずくグィネヴィアに、アレクは言った。

　白き甲冑の軍神はエクスカリバー——朽くちた救世の神刀を鍛きたえ直した槍やりをたずさえ、黙もく然ぜんと神祖のそばに控えている。

　出会ってからの八年間は、ずっと背後霊のようなものだった。

　だが、今は正しよう真しん正しよう銘めいの『まつろわぬ神』。しかも神しん槍そうエクスカリバーを新たな武器とし、アテナから精気を汲くみあげて聖杯も復活させた。実のところ、今のグィネヴィア陣営はすさまじい力を所持しているのだ。

　それに打撃をあたえ、勝利するために——。

　アレクは〝アヴァロン〟を用意し、迷めい宮きゆうの権能を使った。すこしでもグィネヴィアとランスロットの戦力を削そぎ落とすことが目的だった。

「いいや、ガスコイン。わが愛いとし子ごグィネヴィアに助すけ太だ刀ちを約した男は、余ではない。余が彼女を守護するのに、もはや約束も申し出も要いらぬからな」

「……ほう」

　兜かぶとより洩もれるランスロットの男らしい声に、アレクは眉まゆをひそめた。

　すでにある可能性を疑っている。実は日本を決戦の舞台にすると思い定めたときから、その展開を予期していたのだ。

　見つけなくてもいい火種を見つけ、つけなくてもいい火をつけてしまう——。

　そんな連中ばかりだと、さんざん思い知らされてきたせいだろう。

「はい。あの御方、お節せつ介かいといいますか、貴婦人との接し方も知らぬ粗そ野やでぶしつけな殿方のようですが、多少は頼りにさせていただけるようでしたので、是非にと願いまして」

やや頬ほおを上気させながら、グィネヴィアは告げる。

アレクは「ん？」と首をかしげた。

なんだ、あれは。今まで孤こ高こうを貫つらぬいてきた少女が異性との出会いをきっかけに心が揺らぐのを自覚しはじめ、その甘美なときめきに戸惑いを覚えている……という風ふ情ぜいではないか。

あの魔女に、あんな少女らしい表情と物言いをさせるとは――。

いやな予感が確信に変わりつつあった。

「つまり、貴様たちの陣営にはまだ切り札があるわけだな」

「ああ。俺だ」

三人目が船室より現れる。声を聞いても驚かなかった。

相手は口先だけ平和主義を唱となえる偽ぎ善ぜん者しや。対してアレクは、その手の観念にダストボックスほどの価値も感じない。自分でいうのは気恥ずかしいが、偽悪的なのだ。

あまり相性はよくなかろうと、数か月前から予期していた。

というわけなので、草くさ薙なぎ護ご堂どうの顔を見ても、

「まあ……日本で戦うことを決めたときから、こうなるかもしれんとは考えていたがな」

と、肩をすくめるにとどめた。

カンピオーネが同じ国に居合わせたとする。いつのまにか騒ぎの中心点で一堂に介し、それぞれ好き勝手に暴れ出す。珍しくもない話だった。

同族同士でケンカを売り買いするのも、これまた珍しくもない。

「意外だったのは、偽善者の貴様がグィネヴィアの側に荷か担たんするということか」

「実はランスロットに提案されてな」

　くくっと笑う草薙護堂を見て、アレクはいぶかしんだ。

　前に会ったときよりも迷いがない――。そんな印象を受けた。

「俺とこいつで心置きなく決着をつけるには、あんたが邪じゃ魔まだ。先に邪魔者をかたづけてから、思い切りやり合おうってな。ガスコイン、ここで俺と戦え」

「いやだと言って拒否できるなら、そうしてやってもかまわんが？」

「悪いな。申し訳ないが、キャンセルは不可だ」

　短時間での草薙護堂の変へん貌ぼうぶり。それが鍵かぎか。アレクはひそかにうなずいた。

　実は日本のカンピオーネと黒王子は、非常に対照的な存在だ。

　己おのれの真に欲ほつするところを為なすのに躊ちゅう躇ちょし、すぐには一歩を踏み出せない。それが偽善とならぶ、草薙護堂の特徴である。躊躇する時間が短く、決断してからの行動力がすさまじいので、あまり目立たないが。

　対してアレクは、己の欲したことを為すのに一瞬もためらわない。即行動に移す。

　偽善者と偽悪家。ためらう男とためらわない男。

「ある意味では収まりのいい組み合わせか……。いいだろう。貴様の挑戦に応じよう。ただ、俺はこれでも足が速い方でな。ついてこられないときは遠慮なく置いていくぞ」

「ああ。全力でついていくことにしよう」

「それにしても、まさか神祖に与くみするとはな。いや、魔女にたぶらかされたというより、貴様の方がグィネヴィアをたぶらかしたようにも見えるが」

　グィネヴィアは泰たい然ぜんと振る舞おうとしつつも、どこか心配そうに護堂を見つめている。

　そのざまを眺めて、アレクは嘆たん声せいを吐き出した。

「た、たぶ――!?　失敬なッ。口を慎つつしみあそばしませ、アレクサンドルさま！」

「慎むも何もない。客観的な観察の結果だ」

「べつにたぶらかしても、されてもいないさ。これもランスロットと戦うまでの、短い同盟ってやつだ。そろそろはじめようぜ」

　あせるグィネヴィアと冷れい厳げんなアレクを尻しり目めに、草薙護堂は言った。

「ランスロット、グィネヴィア。ここは俺にまかせて、おまえたちは先に行け」

　この指示に、神祖と軍神はすぐに応こたえた。

　ランスロットが口笛を吹くと、天より白馬が舞い降りてくる。例の天あま翔かける神しん馬めである。ひらりと飛び乗った騎士は、グィネヴィアの幼い体も鞍くらに引きあげた。

　白き神馬は宙へ走り出す。行き先はもちろん浮島だろう。

「悪いが、ここで戦ってやる義理は俺にはないぞ」

　とっさにアレクは稲妻化した。草薙護堂に神速はあっても、空を飛ぶ術はないはず。

　飛翔して振り切るのが、いちばん楽な始末のつけ方だった。だが――

「天あまの叢むら雲くも、頼む」

　草薙護堂が右手をかざす。

　するとプラズマ化していたアレクの肉体がほぐれ、人間体にもどってしまった。稲妻化は魔術破りに弱い。あの手には術や霊力を打ち消す何かが秘められているのだ。

「どうやら、そこに便利な仕掛けがあるらしいな」

「ああ。結構器用なやつでな。魔法っぽい力を吸い取ったり、切り破れるんだ。あんたの力をすこし吸えば元にもどせるっていうか

ら、まかせてみた」

　草薙護堂の答えを聞いて、アレクは気持ちを切り替えた。

　やはり、楽はできないようだ。仕方ない——。神祖の魔術が呼び出した帆船の甲板で、日本生まれのカンピオーネと対たい峙じする。戦いのはじまりだった。

4

　敵は黒王子、アレクサンドル・ガスコイン。

　自みずからの意思でカンピオーネに挑いどんだ護ご堂どうは、敵の権けん能のうについての情報を思い出した。アリスやエリカ、リリアナたち、それに昨夜グィネヴィアからも教わったのだ。

　稲いな妻ずまと化す神しん速そくの魔王。

　他にも厄やつ介かいな権能を持っているそうだが、最大の特長は『速さ』だという。

「貴様もたしか、俺と同じ能力を持っていたな……」

　アレクが言った。向こうも護堂の権能を知っているようだ。

　ランスロット戦を観戦していたはずだし、この間は斉せい天てん大たい聖せいのことにも言及していた。手の内はだいぶバレていると見てよさそうだ。

「承知しているだろうが、『稲妻と同じほど速い』という能力は意外と扱いづらい。こういう荒っぽい場面では特にな」

　たしかに。アレクの講こう釈しやくに、護堂は心からうなずいた。

　とにかく神速は速すぎる。思い描いたとおりに体を動かすのにも苦労するほどだ。

「だが、慣れるとなかなか面白い芸もできるようになるぞ。こんな

ふうにな」

　直後の攻撃は、まったく把は握あくできなかった。

　気づいたときにはもう、護堂の体は宙を舞っていたのである。

　――飛んでいる!?　いつのまにか護堂は空中に浮かんでいた。当然、そのまま甲かん板ぱんに落下した。体感でいえば、十数メートルの高さから落ちた気がする。

「ぐはッ！」

　グィネヴィアの魔術で呼び出された『船』。

　その甲板に護堂は叩たたきつけられた。苦く悶もんのうめきが口から洩もれる。

　今、何をされた？　驚きよう愕がくと共にアレクを見つめる。スタイルのいい長身で黒いジャケットを伊だ達てに着こなす黒王子は、微動だにしていなかった。

　後頭部がずきずきと痛む。体のあちこちに激痛が走っていた。

「俺も人のことは言えないが、非常識な頑丈さだな。ふつうの人間があの高さから落ちれば、只ただではすまないぞ。運よく生きのびたとしても、どんな後こう遺い症しようが残ることか」

　あきれたようにアレクから言われた瞬間、ふたたび護堂は落下していた。

「があッ！」

　また甲板に叩きつけられて、全身を強打した。

　たしかに、ふつうの人間なら即死してもおかしくない。だが、護堂は全身の痛みに耐えながら身を起こした。立ちあがろうとあがく。

　護堂も同じ神速の使い手。当てずっぽうだが、攻撃の正体を察していた。

　対抗できそうな手もある。迎え撃ってみせる……！

「おとなしく寝ていろ。俺も手間がはぶけて助かる」

「ふざけんな。組みついてジャンプするだけのくせに、一仕事してるみたいに言うなよ」

　護堂が言い返すと、アレクはフッと微笑ほほえんだ。

　当たっているはずだ。神速で護堂のふところに飛び込んで、組みつく。そのまま護堂を抱えて直上にジャンプ。適当なところで護堂を落とし、自分は華麗に着地。

　全て神速で行えば、さっきのようになるだろう。

　あの能力の使用時はおそろしく身軽になり、人間ひとり程度の荷物なら重量もほとんどゼロになる。だからこそできる芸当だった。

「あのスピードで動きまわりながら格闘技を楽しみたいと思うほど、俺はバカ正直ではないのでな。これなら効率がいい。上う手まい方法だろう？」

「それは認めるけどな……」

　かつて、斉天大聖は神速の連続攻撃をしかけてきた。

　だが、護堂は真ま似ねしたいとは思わない。カンピオーネや神々の防御力、何より耐久力はとにかくデタラメだ。十分なダメージをあたえるまで、どれだけ手数が必要になるだろう？　その間、負担が大きく、扱いがむずかしい神速で連打を繰りかえす……。

　あまり賢けん明めいな選択肢だとは、今でも思えないのだ。

　もしかしたら、斉天大聖の神速は護堂のそれとは性質が異なるのかもしれない。

「……まあ、でも、これではっきりしたか」

　ひそかに護堂はつぶやいた。

　同じ武器を使えるといっても、練度がちがいすぎる。あちらの方が神速という能力をよく知っている。同じ土俵で戦えば、きっと惨敗するだろう。

　護堂はウルスラグナ第四の化身『駱らく駝だ』を使った。

　重傷を負ったときのみ使える力。野獣じみた格闘術と脚力、耐久力を持つ化け身しんだ。

　――来る！

　アレクが動き出す気配を『駱駝』のカンが察知した。

　出された攻撃を見切るのではない。敵の心に攻撃の意思――殺気がゆらめくのを獣けもののカンで悟ったのである。そして、アレクが消えた。その刹せつ那なに護堂は右足を振りあげた。目の前にいる敵のあごを、頭部ごと蹴けり砕くだく要領で。

　同時に、常じよう軌きを逸いつした速さで近づく何者かがその蹴りを避けた――と感じた。

　ふたたび元の位置に、アレクの姿が現れる。

「俺の速さを捉とらえる技……貴様、あれの真似もできるのか」

「前に同じことをさんざんやられたからな……」

　面白そうに言うアレクへ、護堂は苦痛を堪こらえながら応じた。

　神速すら見切り、カウンターをねじ込んでくる羅ら翠すい蓮れん、それにサルバトーレ・ドニ。

　あの超人たちに近い格闘能力を『駱駝』の化身は秘めている。同じとまではいかなくても、真ま似ね事ごと程度ならできるのだ。

「ふむ……。まあ、だが、所しよ詮せんは真似事だな。このまま攻め続ければ、そのうちボロを出していきそうにも思えるが」

　さすがに鋭い。護堂はアレクの慧けい眼がんに舌を巻いた。

　今回はたまたま上う手まくいったが、さっきの感触だと三回に一回くらいはしくじりそうな気がする。それでも、ああして牽けん制せいしていけば好き勝手に攻められないですむ。十分に役立ってはくれるだろう。

「とはいえ、殴なぐり合いをしたがる敵にわざわざつきあってやる

ような真似は、あまり俺好みでもない。すこし趣向を変えてやろう」

　ニィッと笑ってアレクが宣言する。その瞬間だった。

　ゴゥゥンッ！　魔法の帆はん船せんが大いに揺れた。

　まるで縦たて揺ゆれの地震だ。何か大きな質量を持つものが海中から突っ込んできて、船底に激突したような――。

　ゴゥゥンッ！　また揺れた。海中からの攻撃が続いているのだ。

　海から何が来た？　いぶかしむ護堂をよそに、アレクはひらりと跳ちよう躍やくする。帆船のマストへ軽やかに飛び移ってしまった。

「悪いが、ボクシングよろしく殴ったり殴られたりは性に合わん性格でな！　そういうときのために護衛を連れ歩くことにしている。すこし恥ずかしがり屋だが、貴様のように血の気が多い輩やからも満足させられるはずだぞ！」

　文字どおり高みの見物を決め込む態勢で、上からアレクが叫ぶ。

　護衛!?　これはそいつの仕し業わざか！　尚なおも揺れる船上でどうにかバランスを保ちながら、護堂は船ふな縁べりに走った。

　海を見おろして驚いた。海中に黒い影がある。巨大な人型だった。

　水中にひそむ巨人らしき何かが帆船に突撃し、船体を揺らしていたのだ。髪は長く、体つきのシルエットは女性の体型だ。背には翼らしき隆起があり、下半身は足ではなく魚の尾びれのように見える。

　アリスに見せてもらったアレクの資料を、護堂は思い出した。

　たしか『無貌の女王クイーン・ザ・フエイスレス』といっただろうか。

　あの男が所有する権能はおそらく五つ。『電光石火ブラツクライトニング』『復讐の女神ジヤツジ・オブ・フユーリーズ』『大迷宮ザ・ラビリンス』に『さまよう貪欲ウイアード・グリード』。そし

て『無貌の女王クイーン・ザ・フエイスレス』。

決して〝顔〟を見せてはならないと、ルールを課せられた女王。誰かに目撃されたら、その場を離れていくらしい。しかし空を飛び、水中でも魚のように活動し、鉄塔をも粉砕する破壊力を持つ。神しん出しゆつ鬼き没ぼつでサイズも伸しん縮しゆく自じ在ざい。

顔を見せられないルール以外は、まさに万能なのだとか——。

ゴゥゥンッ！　また船が揺れた。

このままでは沈没させられる。船底に穴でも開けられたらアウトだ。

アレクは稲妻になって空も飛べるし、魔術の使い手だと聞いている。船がなくとも切り抜けるだろう。だが、草薙護堂は海に放り出されたら泳ぐしかない。

——だったら、ヤツを呼ぶしかない！

護堂は一瞬で決断した。

「鋭く近寄り難き者よ！　契けい約やくを破りし罪科に鉄てつ槌ついを下せ！」

言こと霊だまを叫び、ウルスラグナ第五の化身を使う。

漆しつ黒こくにして容よう貌ぼう魁かい偉い、体格では見えざる女王にも負けない『猪いのしし』を海に召喚した。巨大な物体を粉砕したいときのみ行使できる化身だ。今回の標的は、もちろん女王である。

オオオオオオオオォォォォォォォォンンンンンッ！

神獣の咆ほう哮こうが大海原に轟とどろく。

実は、あいつがカナヅチだったらまずいなと、護堂はひそかに心配したのだが。

そんなこともなかった。海に浮かんだ黒き『猪』はいきなり突進をはじめた。海上をすべるジェットスキー、あるいは水中を貫つらぬく魚雷のごとく、女王の影めがけて一直線に水を切り裂き、超高

速でぶつかっていく！

　しかし、影しか見せない女王は機き敏びんだった。

　水中で魚のようにひらりと身を翻ひるがえし、『猪』の直線的な突撃をかわす。

　だが、さすがに『猪』は闘争心旺おう盛せいだった。かわされても即座にＵ字にターンして急旋回＆方向転換、ふたたび女王めがけて突っ込んでいく。

　かくして、巨大な怪物同士の水中戦がはじまった。

　突っ込んでくる『猪』をかわしながら、顔なき女王は巨大な投槍をどこからともなく取り出し、これを水中で投げて迎え撃つ。

　ときどき見えざる影に肉薄した『猪』の牙きばが、敵のどこかを抉えぐった。

　また、女王の投とう擲てきする槍やりも漆黒の毛皮と肉を切り裂いた。この世ならざる蒼あお黒ぐろい血が流れ出し、海水の青さを汚していく。

「そういえば、貴様も猛獣の飼い主だったな。ふふっ、海の上まで来てペットの凶暴さを比べ合うのも芸がないか！」

　アレクの笑声が響き渡った瞬間、海から女王の影が消えた。

　文字どおり猪ちよ突とつ猛もう進しんしていた『猪』は標的を失い、むなしく水だけを切りながら明後日あさつての方向に直進していく。

　その瞬間、護堂はハッとした。ひどく危険な感じがしたのだ。

　直感の警告にまかせて、護堂はプールへ飛び込むように前へ跳んだ。アレクがいるはずのマストを見上げもせずに。そちらに注意を向けていたら間に合わなかったはずだ。

　跳ぶのと同時に、それまで立っていた場所の前にアレクが現れた。

　手にした道具を突き込んでくる。護堂が跳んだおかげで、道具は

空を抉った。

「殴り合いは性に合わないんじゃなかったのかよ!?」

「なに。一方的に殴るだけですませられそうなときは、一、二発分くらいの時間なら、看板を返上してもいいと思ってな」

　倒れ込んだ護堂のツッコミは、軽く受け流された。

　それにしても、あんなものをわざわざ武器に選ぶとは——。アレクが持つ道具を見て、護堂はむしろ感心した。なんてひねくれた男なんだと。

　突き込んできたのは、金属造りのアンティークペンだった。ペン先をインクにつけて使うタイプだ。筆記用具としても時代遅れだが、武器としてなら尚更だろう。

「ああ、これか？　荒事にしか使えない下品な道具を持ち歩く趣味がないだけだ。まあ、こんなものでも急場をしのぐことはできる」

　護堂の視線に気づき、アレクはダーツのようにペンを投げた。

　ヒュッと空気を切り裂いて、ペンが飛んでくる。護堂は横へ跳んでかわした。

　標的を失ったペンは船の甲板に突き刺さる。ペン先どころか、ペン軸じくのなかばまで板に埋まった。魔術で殺さつ傷しよう力りよくを高めているようだ。

　……これは本当に、はじめて戦うタイプの敵だ。

　護堂はひそかに賛さん嘆たんしながら立ちあがった。人を食った、トリッキーな戦法の数々。真正直な攻防につきあおうとはほとんどしない。さまざまな手て管くだで敵の攻撃をしのぎながら、隙すきを突いて決定打を放ち、戦闘に幕を引こうとする。

　蝶ちようのように舞いながら、蜂はち——ではなく、悪魔のようにチェス盤をひっくり返す。

　アレクのペースにつきあって戦ったら、絶対に勝てない。そう痛感した。やはり、決め手になるのは『鳳おおとり』か……。

スピードに頼るためではなく、駆け引きの道具とするために。

今が切り札を使うタイミングであると、護堂は悟った。

5

迷めい宮きゅうと化した魔の海域めざして、ランスロットたちは進む。

白き神しん馬めを駆り、海うな原ばらを見おろしながら天あま翔かけていく。手た綱づなを握る騎士の前には神しん祖そグィネヴィアが陣じん取どり、神馬の鞍くらにうちまたがっていた。

「愛いとし子ごよ、そろそろ偽いつわりのミノスを召しよう喚かんせよ」

「承知しておりますわ、小お父じ様」

ふたたび完全武装した守護者の指示に、グィネヴィアがうなずいた。

「聖杯よ！　白き女神の遺のこせし命の泉よ！　女神の裔すえなる娘に応こたえてちょうだい！」

天翔ける神馬の前方に、黄金の甕かめが出現した。

アテナの精気も吸いとった聖杯である。虚こ空くうより忽こつ然ぜんと顕あらわれ、空に浮く。

「クレタの王、ミノタウロスの父、生いけ贄にえを捧ささげる祭司なる御方。御おん身みの再さい臨りんをグィネヴィアは天に訴え、地に祈り、海に願います。乙女おとめの嘆たん願がんを聞き入れ、その断片だけでも地上に遣つかわしてくださいませ！」

グィネヴィアは『神しん威い招しよう来らい』の霊力を振るった。水や大地の神獣――女神であった頃の眷けん属ぞくを顕現させる、神祖独自の秘術だった。

だが、今グィネヴィアが為なす業わざは、それにアレンジを加えたものだ。

神に連なる獣けものを呼ばわるための言こと霊だまが、聖杯に絡からみついていく。そのまま黄金の甕は変化していった。頭部は猛たけ々だけしい雄牛。しかし、首から下は逞たくましい裸ら形ぎようの人間という姿に。身の丈は一〇メートルほどもある。

八年前、クレタ島で黒王子が殺あやめたミノス神の似に姿すがたであった。

聖杯の呪じゅ力りょくを用いて偽りの神を顕けん現げんさせる法——。これを為なすには聖杯そのものを神に化身させる必要がある。その間、本来の機能は失われるため、聖杯との連動を必要とする神しん槍そうエクスカリバーは使用不能になるのだ。

偽にせミノスは悠々と空を飛び、天翔ける神馬の隣にならんだ。

進行方向の先にあるのは、アレクが浮上させたアヴァロン。そして、この島に鍵かぎをかける魔の海域——アレクがミノス神より簒さん奪だつした権能である。

迷宮化した海と空へ真正直に挑めば、突破するまでに幾日もかかるだろう。

だが、同じ権能を持つ偽ミノスの力を借りれば——。

偽ミノスに先導をまかせて、ついにランスロットとグィネヴィアは魔の海域に突入していった。アヴァロンと、そこに眠るはずの『最後の王』をめざして！

戦闘における黒王子アレクの絶対的なアドバンテージは、神速にある。

これは草くさ薙なぎ護ご堂どうならずとも、すぐに看かん破ぱするだろう。だが、護堂はもうすこし敵についての考察を進めていた。

黒王子アレクはひねくれた切れ者だ。彼はおそらく神速を『戦闘の武器』ではなく、『戦術的優位を確立するための道具』と見なし

ているはずだ。

　己おのれは敵よりも圧倒的に速い。

　だから、スピードにまかせて攻撃し、防御する——のではない。速さという利点を、戦闘の主イニ導シア権チブを握るために使う。

　神速によって、常に敵よりも早く行動を開始する。

　移動時間も極端に短くできるから、ほとんど一瞬で戦場を移動・離脱する。

　攻撃を受けても神速で回避し、絶対に被弾しない。

　そうやって主導権を握ったうえで、戦闘を一いつ気き呵か成せいに終わらせるべく手を打っていく。それがアレクの常じよう套とう手しゆ段だんであり、必勝手なのだろう。神速で動く時間は極力短くし、なるべく濫らん用ようしないようにする。

　おそらく神速という権能の扱いづらさゆえに、そのスタイルに至ったはずだ。

　同じ能力を使う者にはわかる。まず、使うだけで心身にすさまじい負担がかかる。特に護堂の場合、それは制限時間という形で現れる。

　また、繊せん細さいな動きがむずかしい。

　緩かん急きゆうの使い方に目覚めてからは、格闘戦も可能になった。だが、あのスピードをゆるめたり速めたりするたび、すくなからぬ集中力がすり減っていく。長期戦になったとき、あの消しよう耗もうは必ず命取りになるはずだった……。

　使い方ひとつ見ても、アレクが神速の専門家であると察せられる。

　スピード勝負になれば、護堂に勝ち目はないだろう。だが、それでも『鳳おおとり』——神速の化け身しんを使わなければならなかった。

　敵の方が上手なのは明らか。そこを逆手にとって隙すきを作れないか——。

　アレクがふたたび神速でペンを突き込んできたとき、護堂は『鳳』を使った。敵がそうしているように一瞬だけ神速になり、稲妻と同じほど速いペン先をかわす。

　ひきかえに、海で猛たけっていた『猪いのしし』は消えてしまったが。

「そのカードをいつ切ってくるかと思っていたが、ここでか」

　護堂の神速を見て、興味深げに言ってから。

　アレクはついにスピードをトップギアに上げ、帆船の甲板を疾しつ走そうしはじめた。護堂も同じスピードを出して、追いかける。

　黒王子に組みつければ、彼がやった『効率のいい』攻撃を真似できるだろう。

　それを狙ねらって、護堂はアレクを追いかける。だが、追いつけない。たしかに速さは互角である。しかし、緩急をつける技術が段ちがいだった。

　アレクが神速全開で疾しつ走そうする。護堂も同じ速さで追いかける。

　すると、アレクは神速のギアをいきなりトップからローへ落とす。最高速のままだった護堂は、減速した黒王子を追い抜いてしまう。

　結果、両者の位置は入れ替わり、距離はめいっぱい開いてしまう。

　さらに、アレクが宙にジャンプする。

　その着地点へ護堂が走り込む。だが、アレクはここで神速のギアを落とす。すると、自由落下や重力の存在を無視して、落下のスピードが落ちる。

　結果、護堂が走り去ったところに、アレクは悠々と着地する。

　そう。神速とは『Ａ地点からＢ地点までを高速で走り抜ける』能力ではない。『Ａ地点からＢ地点までにかかる移動時間をデタラメに縮める』能力。

　だから、物理的にありえない移動が可能になる。

　ふつうの人間が走りまわるとき、その動きは二次元だ。『鳳』使用中の護堂はすさまじく身軽なので、三次元的な動きも可能である。

　だが、アレクサンドル・ガスコインの神速は四次元のものだった。

　時間すらもコントロールする、まさに四次元的な移動手段。こんな男相手に追いかけっこをして、かなうわけがない！

　そのまま、時間だけがむなしく経過していく。

「さて……決着はついたと言ってもよさそうな状況だが、どうだ？」

　ついに、目の前のアレクから宣告された。

　草薙護堂は胸を押さえてうずくまっている。追いかけっこをする間に、『鳳』の制限時間が来たのだ。心臓に激痛が走り、体の硬直がはじまっていた。

「貴様の神速、やはり使い続けるうちに負担がたまるタイプだったか。いきなりトップスピードを出せるようだから、そうだろうとは思っていたが」

　アレクが余裕で講釈している。勝利を確信したのだろうか。

　だとしたら、これが最大のチャンスになるはずだが……。

「徐々に加速しながら最高速度に至るタイプであれば、使用中の負担は比較的すくないのだがな。まあ、これぱかりは選べるものでもないので、自分ではどうにもならん。運……いや、使い方が悪かったな」

　そんなこともないだろう。護堂は虎こ視し眈たん々たんと機会をうかがっていた。

　うずくまり、体は硬直し、まともに戦える状態ではない。だが、だからこそ、アレクの油断を誘える……と期待したい。

「さっきも言ったが、俺は一方的に殴なぐれる機会を見逃すほど、お人好しでもない。いいかげんにグィネヴィアどもを追いかけねばならんし、幕引きとさせてもらおう」

　黒王子の声が告げ、その手が例のペンを取り出す。

　護堂が真の切り札を使ったのは、まさにこのときだった。

「ああ、そうだな……。そろそろ終わりにさせてもらう。行け、天あまの叢むら雲くも！」

　心臓の苦痛を堪こらえながら、右手に宿る相棒へ呼びかけた。

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎが忽こつ然ぜんと顕れる。護堂はすばやく神刀で斬きりつけ――ない。硬直中の体で、そんな芸当は望めない。だが、意思を持つ神刀は自らアレクめがけて飛んでいった。

　その切っ先で黒王子の心臓を貫つらぬくべく――！

　だが、もちろんアレクには神速がある。不意打ちの斬ざん撃げきでさえ、易やす々やすとかわせるはず。

　案あんの定じよう、彼の体にバチバチと火花が走る。神速を行使するときの兆ちよう候こうだった。

「なに⁉」

　しかし、アレクは愕がく然ぜんとした。

　彼めがけて突っ込む天叢雲劍が、神速だったからだろう。

　全て護堂の目もく論ろ見みどおりだった。この《鋼はがね》には、敵の権能をコピーする力がある。ひそかにその能力を使わせ、アレクの神速をコピーさせていた。

　ゆえに今、天叢雲劍は閃せん電でんの速さで飛び込み――。

　黒王子の胸元に突き刺さり――。

　そして、黒いジャケットを伊だ達てに着こなす貴公子の姿は、蜃しん気き楼ろうのように消え失せた。

「……ダメだったか」

「当たり前だ。神さえ殺してしまうような生き汚い男が、こんなにたやすく頸くびを差し出すはずがない。何かの罠わなだろうとは、当然思っていたぞ」

　天叢雲剣が貫いたのは、神速移動によって生じた残像だった。

　こいつ、神速で『分身の術』まで真ま似ねできるのか。あきれながら肩を落とす護堂へ、黒王子アレクはフンと吐き捨てた。

「こんな罠のために身動きできなくなるとは早まったな。一か八かギャンブルを仕掛ける根性は悪くない。だが、詰めが甘すぎる。これでもうチェックメイト、貴様の勝ちはなくなった」

「いいや。そうでもないぜ……」

　もう指一本動かせない。だが、護堂は微笑んだ。唇くちびるが獰どう猛もうな形にゆがむ。

「俺はあんたを倒して、ランスロットと戦う。そうしろと呪じゅ縛ばくされている。そのためになら、まだまだ力を振りしぼれるぞ……」

　魔法の言葉を口にした瞬間だった。

　護堂は体の奥底から、ランスロットの神力が込みあげてくるのを感じた。

「なんだと⁉」

　アレクもそれを察したのだろう。驚きよう愕がくの叫びを洩もらす。

「あいつには自分や他人を狂わせて、欲望にまかせて暴走させる権能があるんだ。俺もそいつを喰くらって、今あんたと戦っているわけだ……。結構いい気持ちだぞ。なにしろ、己おのれの欲ほつするところをやりたいようにやれって呪縛だからな」

「それで貴様、お得意の偽ぎ善ぜんをかなぐり捨てたのか。面倒な呪縛を受けてくれたな！」

　ククククとほくそ笑んだら、アレクに吐き捨てられた。

　それを聞き流しながら、護堂は立ちあがる。草薙護堂の心身は暴走状態にあった。ランスロットによって肥ひ大だい化かさせられた欲望——あの軍神と『必ず戦う』という念が全身に満ちている。そして『アレクを倒せ』という呪縛が力となっている。

　ランスロットの呪縛は、欲望をかなえるために対象を暴走させる権能。

　疲労や負傷で限界が来たときも、この呪縛が心身を猛たけらせ、新たな力——ふたたび立ち上がるための力をあたえてくれるのだ。

　もちろん無制限にではないが、今の護堂程度の消耗なら——。

　ランスロットの神力で、限界を迎えていた肉体がふたたび動き出す。今までの戦いで負った傷は、たちどころに癒いえた。ウルスラグナの化身は一度使えば丸一日ほど再使用できないはずだが、それらの化身も恢かい復ふくした。

『鳳おおとり』使用後の痛みと硬直も終わった。もう何の障しよう碍がいもなく戦える！

「ガスコイン、あんたの手の内はだいぶわかった。ここからの第二ラウンド……今までほど上手くはいかないぜ。それに、あんたがここで足止めされるほど、グィネヴィアたちは目的地に近づく。もうそんなに猶ゆう予よはないと思うぞ？」

「ちっ。ここまでの戦い、はじめから捨てるつもりだったか」

　護堂の意図を知って、アレクは唾つばを吐はきたそうな顔をした。行為には移さなかったので、紳士の面めん目ぼくは保たれたが。

　さあ、ここからが戦いの本番。護堂は猛りにまかせて叫ぶ。

「申し訳ないが、俺の気がすむまでつきあってもらうぞ、ガスコイン。神様を倒した男同士でケンカをする機会なんて、めったにないんだ。せっかくの愉たのしみをあっさり終わらせるのは、バカバカしい話だろ!?」

　だが、このとき護堂は邪じや魔ま者ものたちの飛来を悟った。

闘技場となっていた帆はん船せんめがけて、遥はるか向こうの空から青い光が飛んできたのだ。

チッと舌打ちする。意外ではない。考えてみれば、そろそろ駆けつけてきてもおかしくない頃合いなのだ。しかし、すこし忌いま々いましくも思う。

好き放題に愉しんでいたのに、わざわざ邪魔しにくるか——。

お節せつ介かいな女たちだな、と肩をすくめる。これも意のままにならない女を好んできた気性が呼んだツケか。どうにかして切り抜けるとしよう……。

青き光が甲かん板ぱんに降り立つ。

それはもちろん、リリアナ・クラニチャールの飛翔術だった。

光が消えると、銀髪の騎士だけでなくエリカ・ブランデッリ、それに万ま里り谷や祐ゆ理りまでそろっていた。三人の少女は『またこの人は厄介事に巻きこまれて……』という顔で、いずれも憂ゆう慮りよの気持ちを露あらわにしていた。

# 第６章　運命の島へ

## 1

　草くさ薙なぎ護ご堂どう、失しつ踪そうす——。

　その報しらせは昨夜のうちにエリカ・ブランデッリのもとへ届けられていた。

「護衛ってほどでもありませんが、ないしょで草薙さんのあとをつけさせていた者たちの報告によりますと」

　ニュースソースである正せい史し編へん纂さん委員・甘あま粕かす冬とう馬まは語ったものだ。

　尚、彼からの電話を受けて、エリカ、リリアナ、祐ゆ理りの三人は深夜にもかかわらず沙さ耶やの宮みや家別邸の応接間に集合していた。

「正体不明の美少女と会うなり意気投合。手に手を取って逃避行しはじめたそうです。信じがたい話ですが、その娘さんは魔王カンピオーネ相手に何らかの催眠術をかけることに成功した模様ですね」

　これを聞いて、エリカはため息をついた。

「いつもどおりと言えば、それまでだけど……。女の子相手だと、本当にどうしようもないほど隙すきだらけになる人よね、護堂って」

「この間グィネヴィアと再会したときは、すこし成長されたようにも思えたが」

　隣となりでリリアナも口くち惜おしそうに言った。

「まだまだ不十分ということか……。わたしたちが四し六ろく時じ中ちゆう同行するわけにもいかないのだから、ご自分で気を配っていただかなくてはならないのだが」

「それで甘粕さん。護堂さんはその後、どちらへ行かれたのですか？」

　エリカたちの嘆なげき節ぶしを聞きつつ、祐理が正史編纂委員に訊たずねた。

「あー、それがですね。実は十数名のスタッフが三班にわかれて草薙さんを見守っていたのですが、そこからの出来事を全員が報告できない状況でして。謎なぞの娘さんに何をされたのかは不明ですが、みんな意識不明の昏こん睡すい状態で発見されました」

「そう……。甘粕さんの手配なら、人選にまちがいはなかったはずよね」

　甘粕の報告を聞いて、エリカは気持ちを切りかえた。

「だったら、このなかの誰か——いえ、全員がいっしょだったとしても、同じ結果になった可能性が高いわ。逆にわたしたちが無事だったことをよろこびましょう。護堂をつかまえて、妙な女のところから連れもどすのよ」

「ああ。そうなると、草薙護堂の居場所を突きとめるのが肝心だな」

「突きとめる必要はないんじゃないかな。今回の場合、たぶんゴールはあそこだろうし」

　リリアナが決意を口にしたとき、沙耶宮馨かおるが言った。

　正史編纂委員会・東京支部長。男装の麗人にして媛ひめ巫み女こ。そして、エリカ・ブランデッリにも負けない切れ者でもある少女だった。

　どうやら、彼女もエリカと同じ結論に達していたようだ。

「そうね。むしろ、そこに時間を費やすよりも、護堂にかけられた

であろう呪じゆ縛ばくの解除法を模も索さくする方が効率的だわ」

　エリカが賛意を表明すると、馨はフッと微笑した。

　話が早くて助かるよ。そう言いたげな顔だ。正史編纂委員会の次期指導者という立場を越えて、沙耶宮馨は護堂に協力してくれる。

　もしかしたら、いずれ草薙護堂の『円卓』が誕生するとき——。

　宰さい相しようないし枢すう機き卿きようの座に収まるのは、馨なのかもしれない。そして、聖騎士にして宮廷の女主人となったエリカと共に、知謀の両翼を担になうのかもしれない。どちらの権勢が上か下かと、駆け引きも繰りかえしながら。

　そんな未来を想像させる、馨の共犯者めいた微笑だった。

「ゴールというのは、やはり浮島か？　謎の女とやらがグィネヴィアの仲間で、草薙護堂の力を利用するのが目的なら、断言してもかまわないだろうが……」

　リリアナが発言した。

　彼女はおそらく、そんな暗闘や政争とは無縁であろう。草薙護堂に仕つかえる忠実な近このえ衛き騎士しで執しつ事じ。公私にわたる副官という立場を気け高だかく貫つらぬいていくはずだ。

「これがアレク王子の差し金で、逆に草薙護堂を浮島から遠ざけるのが目的だったら、どうする？　まあ、どんな背景であっても、誘ゆう拐かいされたまま暗殺……の心配はないだろうが」

　暗殺の可能性を否定するあたり、リリアナもわかっている。

　カンピオーネをたぶらかすことは可能かもしれない。だが、隙を突いて暗殺というのは無理だ。彼らが神々を殺あやめるのは、その理り不ふ尽じんな生命力と凶暴さゆえである。おとなしく騙だまし討うちの標的になるとも思えない。もし、護堂がそんなピンチに陥おちいったら——。

　おそらく今頃、東京を半壊させながら暗殺未み遂すい者しやと戦っているのでは？

　その情景を想像して苦笑しながら、エリカは答えた。

「アレク王子の介入という線はないと思うわ。あの方の人となりにそぐわないもの」

「そうだね。よく言えば『少年の心を持ち続けている人』。身もフタもなく言えば『自分がかっこいいと思うことなら犯罪行為でも躊ちゆう躇ちよしないけど、かっこ悪いと思ったことは意地でもやらない人』みたいだから」

　独特の言いまわしで、馨も口添えしてくれた。

「盗んだバイクで走り出す一五歳の夜っていうのかな。逸いつ話わを聞くかぎり、そういう御方に思えるね。美人局つつもたせみたいな真ま似ねは、あの方的にアウトだと思うよ」

「で、グィネヴィアさまがカンピオーネの呪縛なんて、猛獣の生け捕りじみた危険を冒おかすのなら――。浮島での戦いに利用する以外の理由は考えにくいわ」

「神殺しの相手は、神か同じ神殺しにしかできない……。そういうことなのですね」

　祐理が淑しとやかにうなずくと、さりげない口調で馨は言った。

「ねえ祐理。護堂さんをさらった女のこと、どう思う？　これが只の魔女か、せめて神しん祖そだったら、どうにかできるだろうけど。そうでなかったら、かなり厄やつ介かいだよ」

「どう……？　そうですね、すごく不安な気持ちになります」

　一瞬だけ目をつぶり、自みずからの心をのぞき込むようにして、祐理は静かに答えた。

「途方もないほど恐ろしく、すさまじい存在。そういうものの気配を感じるような……」

　なるほど。エリカはうなずいた。馨はわざと曖あい昧まいな言葉をならべたのだろう。

　祐理ほど傑けつ出しゆつした霊視能力者なら、心で感じたままの答えにこそ真実が宿ると信じて。

「あるいは、新たに到来した女神かもしれないと感じるのね、祐

理？」

「とても断言はできませんが。もしそうでも、私は驚きません」

　今度はエリカが問いかけると、祐理は厳おごそかに託たく宣せんを授けてくれた。

　真実が定かでない混迷した状況でも、万ま里り谷や祐理はいつも一筋の光で行く手を照らしてくれる。ときに煌こう々こうと輝かしく、ときにささやかに。

　暗くら闇やみに灯とも火しびをともす、無む二にの導みちびき手。それこそが祐理の役割なのだ。

「となると、あの娘を呼んだ方がいいのかな？　早急に手配できる対応策のなかではいちばん強力だし、実績もある」

「そうね。ただ、過度の期待を押しつけるべきではないと思うわ」

　馨のつぶやきにエリカは意見した。すると男装の麗人は苦笑して、

「それはもちろん。実績といっても、あくまで限定的な効果だったそうだしね」

　かくして方針は定まり、エリカたちは動き出した。

　救出対象がいずれ現れるであろう浮島の情勢を探るため、甘粕冬馬はあわただしく出かけていった。このジャパニーズニンジャマンは隠おん行ぎよう術じゆつをはじめとする呪術に長たけ、神話伝承にもくわしく、さまざまな局面で当てにできる男だ。

　エリカひとりが草薙護堂の介かい添ぞえ人にんであったのは、もう昔の話だ。

　いつのまにか若きカンピオーネの陣営は、多た士し済さい々さいの充実ぶりを見せていた。だが、それらはあくまでケーキを飾る生クリームやトッピングだ。土台となるスポンジ――護堂本人がいなければ、どれも無意味なものだった。

　そして、エリカと馨が中心になって対策を検討中、電話があった。

『ねえエリカ。その後、例の件はどうなったのかしら？　ああ、もちろんこれはレディにあるまじき野や次じ馬うま根性などではないのよ？　ただね、わたしも現職を退いたとはいえ、世界に対して責任を果たすべき組織の重じゆう鎮ちんだったわけでしょう？　自らがかかわった案件の行く末を、きちんと把握しておきたいと思って――』

　手短に話をした結果、心強い味方を得ることもできた。

　カンピオーネとは神を殺あやめ、その聖なる権けん能のうを簒さん奪だつした妖よう人じん。しかし、なぜか人々を惹ひきつけ、騒乱と混こん沌とんの中心にもなる『王』である。ゆえに、彼らの生に多くの人々が巻きこまれ、あるいは自らの意志でかかわろうとする。

　そのことを実感しつつ、エリカは準備を終わらせ、仲間たちと共に夜を明かした。

　そして今日――。

　甘粕から「魔の海域に異状あり」と報告を受けて、リリアナが『魔女の目』で該当区域を偵察した。彼女の飛ひ翔しよう術じゆつによって、エリカたちはついに草薙護堂と再会した。

　飛来したエリカ、祐理、リリアナを前にして、彼は笑った。

「まったく……。こんなところにまで追いかけてくるなんて、お節せつ介かいなやつらだな。俺はこの男と遊ぶので忙しいんだ。放っておいてくれるとありがたいぞ」

　と、さわやかな笑顔で言い放ったのである。

　それを横で聞く遊び相手は、苦にが虫むしをかみつぶしたような表情だった。

「貴様が遊ぶのは勝手だが、俺にとってはきわめて重要な事業の一環だ。遊び半分で邪魔をするなら、とっとと家に帰って欲しいものだがな」

「意外とまじめなことを言うんだな、ガスコイン。たしかに俺は遊んでいるけど、真剣でもあるんだぜ？　遊びってのは、真剣にやる方が面白いからな。最後まで俺につきあえよ。途中で抜けるのは、

おまえの方こそやめてくれ」

　アレクサンドル・ガスコインの要請に、からかうように答える護堂。

　普段なら絶対に言いそうにないことだ。『剣の王』サルバトーレ・ドニが聞いたら、嬉き々きとして抱きつくかもしれない。

　これを見て、思わずエリカたちはささやき合った。

「……みんな、草薙護堂のあれをどう思う？」

「……明らかにおかしいわね。ただ、精神的に不安定そうなところがまったくないし、躁そう鬱うつ状態というわけでもなさそうなのがひっかかるわ」

「……ええ。すごく自然な感じがしますね」

「……むしろ、いつもは理性や常識に邪魔されて表に出てこない本性が、この機会に顕けん在ざい化かしたとか仮説を立ててみたくなるな」

　リリアナの結論めいたコメントに、祐理とエリカはうなずいてしまった。



　ともあれ、草薙護堂がおかしい状態なのは事実である。

「護堂、あなたの遊び相手にはわたしたちが立候補してあげるわ。遠方からのお客様相手に火遊びをするのは、いいかげんにして欲しいものね」

「おまえたちが、だって？」

「やめておけ。この男、ランスロット・デュ・ラックから厄やつ介かいな呪じゆ縛ばくを受けたようだぞ」

　護堂がなかば笑いながら驚けば、アレクは真剣な声こわ音ねでたしなめる。

　しかし、エリカはふたりの王に華やかな微笑みを返し、軽やかに言い切った。

「あら。これでも成算を立てたうえで参上したのよ？　護堂、あなたといえども、甘く見ないで欲しいわ。——そのような次第です、アレク。われらが主あるじのこと、わたしどもにおまかせくださいませ。御おん身みの手をこれ以上わずらわせては、騎士としても淑しゆく女じよとしても格好がつきませんもの！」

　あざやかな口こう上じように、二王は期せずして似たような表情を見せた。

　護堂もアレクも興味を引かれた体で瞠どう目もくし、それからわずかに微笑したのである。

「そうか！　なら、当てにさせてもらうとしよう！」

　アレクの体からプラズマがほとばしる。稲いな妻ずま化かして飛翔するつもりなのだろう。

　すかさず護堂が右手をあげ、天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎに破らせようとする。その瞬間、エリカとリリアナは召喚の魔術で投げナイフを呼び出した。

　これをふたりは一瞬の迷いもなく、護堂の心臓めがけて投げた。

「何!?」

　仰ぎよう天てんしながら、護堂は避けようとした。

　これがサルバトーレ・ドニなら、余裕でかわせただろう。そして、悠々と魔術破りを指示して、成功させたはず。だが、草薙護堂に武術の心得はない。

　天性の反射神経、魔王カンピオーネの集中力と生存本能のおかげで、敵の攻撃を避けたり、強引にやりすごすのは大得意だが、決して隙のない武術家の動きではないのだ。

　騎士たちのナイフを後ろに跳んで避けたため、それで手一杯になった。

　そのせいで天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎに指示を出すのが遅れ、アレクには十分すぎる猶ゆう予よとなった。電光と化した黒王子は、一瞬にして飛翔していく。

「まさか、いきなり攻撃してくるとはな……」

　今、エリカたちが心臓めがけて投げたナイフは、レプリカなどではない。

　鋼はがねの刀身を持つ本物だ。だからこそ、護堂もとっさに避けたのだ。

「何を言ってるの。殺してもいいくらいのつもりでやらないと脅きよう威いにならないでしょう？　それにあの程度、護堂ならやり過ごせるわよ。いつものことなんだから」

　まったく心配などしていなかったので、エリカはあっけらかんと言った。

　リリアナも黙然とうなずいている。ひとり祐理だけはドキドキしていたようだが。

「そうか……。ランスロットの呪縛があっても、空は飛べないからな。ガスコインと遊ぶのもここまでか」

　護堂は肩をすくめながら、つぶやいた。

「せっかくの愉たのしみを邪魔するなんて、気の利きかない女たちだ。仕方ない。ここからはおまえたちをしつけ直すことで、新しい

遊びにしようか」

「そのような狼ろう藉ぜき、わたしたちが受うけ容いれるとお思いですか、草薙護堂？」

　ムッと眉まゆをひそめて、リリアナが言う。

「どうやら、今のあなたは羽目を外しすぎているらしい。道をあやまった主を諫いさめるのも騎士のつとめ。そのためでしたらリリアナ・クラニチャール、剣を抜くことも厭いといますまい」

　宣言して、青き騎士はゆっくりと手を開いた。

　愛剣イル・マエストロはまだ呼ばない。だが、その決意があると示す手つきだった。

　護堂をあやしい呪縛から救うために推すい参さんしたのだ。エリカもリリアナも戦いくさ装しよう束ぞくをまとっていた。黒地に紅あかの縦たて縞じま模様。黒地に青の縦縞模様。いつものケープである。

「護堂さん。いつものあなたにお戻りください。アレク王子がおっしゃったようにランスロット卿きように眩げん惑わくされたのだとしても、それを乗り越えてこそ王者の器量といえましょう！」

　巫み女こ装しよう束ぞくの祐理も、たしなめるように訴える。

　これに苦笑し、護堂は髪をかきあげる。実に堂々たるたたずまいだった。

「俺を王様だというなら、細かいことに目くじらを立てないでくれよ。俺は只、気の向くまま足の向くままにあちこちうろつきたいだけなんだ。その途中で気に入らないやつや、俺を熱くさせるやつがいれば、ちょっと一勝負するのもいいと思っているだけさ」

　えらぶるのでもなく、荒ぶるのでもなく。

　自然体というべきか。気負いのない、そして自由闊かつ達たつな雰ふん囲い気きだ。もしかしたら、これこそが草薙護堂の本質なのかもしれないと——。エリカはひそかに思った。

　考えてみれば、彼はいつもこの自由さで戦うための力を切りかえ

てきたのだ。

　さまざまな国や組織の者を友人にし、パートナーにしながら。

「ここまで迷いがない護堂、はじめて見たわね。厄やつ介かいな状態になってくれたわ」

　なかば感心しながらエリカはつぶやく。

　ここにはいない人々の助けも借りて、神の呪縛を解くための準備はすませてきた。あとは実働部隊である自分たち次第。なんとしても成功させなければ。

2

　聖杯が変化した偽神ミノス。

　牛ぎゅう頭とうの巨神は、白き神しん馬めの隣を飛びながら咆ほう哮こうした。

「ＵＲＲＲＲＲＡＡＡＡＡＡＡＬＬＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨ!!」

　それは、呪じゆ力りよく・権けん能のうを打ち破るための叫びだった。

　荒ぶる魂たましいが言こと霊だまとなったものだ。びりびりと天は震ふるえ、海にも波が走る。

　偽にせミノス、そして天あま翔かける神馬を駆るランスロットとグィネヴィアの前には、周囲を岩がん礁しようで取り囲まれた小島があった。

　奇怪な形状の岩山が目立つ、まさに奇き岩がん城じよう。

　グィネヴィアは、この島を取りまいていた呪力が半分ほど減じるのを感じた。

「アレクサンドルさまの迷めい宮きゆう、たしかに弱まりはしまし

たが……」

「偽いつわりの神と神殺しでは、同じ権能でも格がちがうか。完全に破るのは無理らしいな」

　同じ神馬にまたがりながら、グィネヴィアとランスロットはささやき合う。

「だが、ここまで来れば、力にまかせて押しとおるまでだ。偽りのミノスを先頭に立て、迷宮に乗り込むとしよう。破ることはかなわずとも、道案内の役には立とう」

　ランスロットとグィネヴィアは、牛頭の迷宮神を先導にして魔の海域へ乗り込んだ。

　彼らが進むのは海ではなく、空である。あと、ほんの十数キロで〝アヴァロン〟に到達できる。だが、そのわずかな距離がひどく厄やつ介かいな道行きとなった。

　まず、数メートル先も見えない濃のう霧むが立ちはだかった。

　さらに、すさまじい強風に吹き飛ばされ、魔の海域の外に放り出されそうになった。

　気づかぬうちに進行方向がズレ、島へ一向に近づけないこともあった。

　海中から間かん欠けつ泉せんのように海水が吹きあがり、ランスロットたちの神馬は撃げき墜ついされそうにもなった。全て黒王子アレクの権能――島に何なん人ぴとも近づけまいとする迷宮の呪力だ。

　そのたびに偽ミノスが咆哮し、呪力を無効化する。

「……このままでは埒らちがあかぬな」

　ぼそりと、ランスロットはつぶやいた。

「いっそ偽りのミノスを狂きよう奔ほんさせ、強引に突破口を開いてみるべきか」

「小お父じ様、不用意な真ま似ねはお控えくださいませ。そのよう

なことをすれば、触しよく媒ばいに使った聖杯にも悪あしき影響が出るかもしれませんわ！」

　鞍くらの前にすわるグィネヴィアが心配そうに意見する。

　だが、ランスロットはあえて聞き流した。草くさ薙なぎ護ご堂どうを使って時間稼かせぎしている間に、すこしでも先に進みたい。ここは勝負をかけるべきだ。

「ミノスよ、余に合ごう力りきせよ！」

　呼びかけに応こたえて、猛たけ々だけしい牛頭神は「ＯＯＯＡＡＡＮＮＮ！」と咆哮した。

「そなたはこの海を越えるための露つゆ払はらいとなれ。余と愛いとし子ごのために駆けよ。只ひたすらに迷宮の出口をめざし、狂おしく駆けよ！」

　それは呪じゆ縛ばくの言葉だった。

　呪のろいを受けた者は狂い、猛たけり、目的を果たすために暴走する……！

　効果はてきめんだった。今まで牛頭人身だった偽ミノスの姿形が、完全なる猛牛の形に変化していく。人の部分を捨て、獣けものの神となったのだ。

「ＱＵＯＡＡＡＡＡＮＮＮＮ!!」

　猛牛ミノスが流星のごとく飛び出す。すさまじい速さで飛ひ翔しようする。

　しかし、一歩駆けるごとに、牛の体に裂れつ傷しようが生じていった。これは我が身を滅ぼしながらの暴走スタンピードなのだ。そして、数十秒後。

　迷宮化した海上を駆け抜けながら、偽りの猛牛神は爆ばく散さんした。

　同時に、魔の海域に満ちる呪力——黒王子アレクの権能も雲うん散さん霧む消しようする。命がけの暴走と散さん華げで、偽ミノスはついに迷宮を打ち破ったのだ。

「聖杯はどうだ、愛し子よ？」

「どうにか無事のようです。幸運でした……！」

　偽ミノスが爆散したあとの空に、黄金製の甕かめが浮かんでいる。

　それを一いち瞥べつして、グィネヴィアは報告した。ランスロットは黙もく然ねんとうなずいた。不滅の神具があの程度で砕けるわけがないのだ。

「これでまた、エクスカリバーを使えるようになりますわ」

「まあ、なかば無理矢理に復活させた武具だ。そう長くも使えまい。ここぞというとき以外に振るうべきではないだろうがな」

　ささやき合うふたりの前方に、東京湾の海が広がる。

　そこにぽつんと、岩ばかりの小島が浮かんでいる。奇怪な形状の岩山が目立つ、特徴的な島だった。あれこそがアヴァロン。ふたりの最終目的地だった。

　しかし、ランスロットが神馬の手た綱づなを取って前進させようとしたとき。

　真下の海中より、いきなり呪力がほとばしる！

「これは権能!?　――ガスコインの仕し業わざか！」

「小父様、海をごらんくださいませ！」

　海のなかに、直径二、三〇メートルはあろう黒い球体がひそんでいた。

　球体は特殊な力を発していた。白き軍神と神祖がまたがる神馬を海中に引きずり寄せようとする引力――あやしき吸引の波動である。

「貪どん欲よくの魔球！　アレクサンドルさまが巨獣ベヘモットより簒さん奪だつされた、吸引と重圧の権能ですわ！　いけません、引きよせられてしまいます！」

「最後にこのような門番を置いておくとは、念の入ったことよ！」

　海中の球体より引力波が放たれ、空を行く騎士たちを拘束する。

　ランスロットは愛馬の横腹を蹴けり、疾しつ走そうを命じた。だが、走れない。騎士の指示にしたがおうと、神馬は全力で足を動かす。いつもなら地を蹴るように空気を蹴って、快走する。だが今、白い前まえ肢あしと後ろ肢はむなしく空を掻かくだけだった。

　神馬だけではない。ランスロットもグィネヴィアも指一本動かせない。

　対象物を吸引し、捕らえて放さないというアレクの権能が彼らを抑おさえ込んでいるのだ。

　ランスロットは呪力を高めて、権能の拘束を振り払おうとした。だが、無理だった。この引力を放つ球体、実は移動速度がきわめて遅い。しかし、それと反比例して、吸い込む力はおそろしく強かった。白き軍神ですら振り払えないほどに。

「ガスコインめ、こやつを迷宮のなかに配していたのか」

　黒王子の手て管くだを悟り、ランスロットが舌打ちした瞬間だった。

　視界の隅に、黒い人影が見えた。成熟した女性のシルエットで、背には白い翼。だが、腰から下は蛇へびの胴。つま先にあたる部分は魚の尾びれのようだった。

　異い形ぎようの女妖が飛んできたのだ。その飛翔の速さと軽やかさは、まさに風。

　ランスロットには彼女の背中側しか見えない。これはたしか、アレクが女神メリュジーヌより簒奪した権能！　新たな敵の出現に、軍神の注意がそれた瞬間だった。

「ぬうっ⁉」

　いきなり拘束が解けて、ランスロットは驚きよう愕がくした。

　自分たちを引きよせようとしていた引力波が、唐突に消失したのだ。全力で走り出そうとあがいていた神馬もつんのめってしまう。

それが隙すきとなった。

　疾風の軽やかさを持つ女王に、一瞬にして接近されてしまった。

　ランスロットと神馬の隙を突いて、純白の翼で飛ぶ女王はグィネヴィアの肢し体たいを抱え込み、そのまま去っていく！

「小父様!?」

　さらわれる格好となった神祖が、空中で必死に手をのばす。だが、その直後、黒き球体から放たれる引力が復活した。

　騎士と愛馬は、ふたたび引力の檻おりに囚とらわれてしまった。

「おのれ、愛し子を狙ねらうとは！」

　身動きを封じられ、ランスロットは歯は噛がみした。

　遥はるか彼方かなたを飛ぶ誘ゆう拐かい者しやの背中しか見えない。あの方向には目的地である『島』——アヴァロンがある。あそこで待つ黒王子のもとへ帰参するのか？

「一騎駆けの備えをせよ！」

　全力全速を振りしぼり、吸引力を振り払う！　ランスロットは即断した。

「全速で駆ける以外に活路はあるまい。この檻をなんとしても抜け出すのだ！」

　上空の雷雲より稲いな妻ずまを呼んだ。次々と蒼あお白じろい電光がほとばしり、騎士と神馬を撃つ。切れ目なく雷鳴が轟とどろき、天と海を激動させる。

「この力が満つるとき、われらは白き流星となる。愛し子よ、それまで無事でいてくれ」

　雷電に撃たれながら、祈る。だが、いいのか？　ひそかに自問もする。

　ここで一騎駆けを行えば、アテナ戦と同じ結果になるだろう。ランスロットは神力を消しよう耗もうし、疲労困こん憊ぱいしてしま

う。それでは、その先に待つアレクとの戦いに支障が出る。何より草薙護堂との決戦で、存分に戦うことができない。それでいいのか!?

　——よい！　わずらわしい自問を切って捨てた。

　即座に決意し、ランスロットは一騎駆けの準備を続ける。ここを切り抜ければ、神しん槍そうエクスカリバーも使える。何より、己おのれにはあの手が残っている！

　白き兜かぶとのなかで、いつしかランスロットの美び貌ぼうは笑っていた。

　それは迫る決戦と訣けつ別べつの時を予期して、歓喜に打ちふるえる笑顔だった。

　一方、アレクサンドル・ガスコインである。

　呪縛を受けた草薙護堂はあの男の愛人たちにまかせ、稲妻と化して飛ぶ。

　このまま魔の海域へ進入すれば、迷宮の主であるアレクは迷宮の深しん奥おう部ぶへ瞬間移動できる。今回のケースでいえば、例の浮島だ。

　迷宮の権能をミノスから簒奪して八年。扱いにもすっかり慣れていた。

　イメージしたとおりに迷宮を造り出す、創造の権能だ。

　地下や地上に建造物を造るだけではない。今回のように魔の海域を仕立てあげたり、入ったら二度と出てこられない迷いの森や眩げん惑わくの霧きりを生み出したりと、さまざまなバリエーションを用意できる。一度使うと、一か月ほど再使用できないという制限はあったが……。

　しかし、アレクは魔の海域には戻らなかった。

　あの『島』と迷宮は、グィネヴィアとランスロットを分断させるための罠わなだった。

只でさえ強力な軍神がエクスカリバーもどきで武装しているのだ。そのうえ、グィネヴィアには例の切り札まである。ひとりずつ各個撃破するのが良策だった。

そのための舞台を浮島の近くから選んでおいた。

——明めい治じ時代、旧日本軍は帝都東京の防衛を目的に、三つの要よう塞さい島とうを千ち葉ば県の富ふっ津つ岬みさき沖おきに建設した。これが第一・第二・第三海かい堡ほである。

アレクが選んだのはそのうちのひとつ、第二海堡だった。

海上保安庁の管理下に置かれ、一般人の立ち入りは禁止された無人島だ。

現在も運用中の灯台は太陽電池で稼働する。消防の訓練に使われることもあるらしい。ガレキばかりの廃はい墟きょしかない小島なので、誰はばかることなく暴れられる——。

雷電の速さでの、短い飛行。眼下に島が見えてきた。

着地と同時に人間体へ戻り、『女王』を召しょう喚かんした。顔を見せてはならないというルール以外は実に便利な従じゅう僕ぼくで、何かと重ちょう宝ほうしていた。

グィネヴィアを捕らえよと指示して、送り出す。魔の海域内には、前もってベヘモットの球体も配置してある。迷宮の権能が破られたときの備えだった。

そして十数分後、ついに『女王』が帰ってきた。

腰から上は絶世の美女、しかし下半身は蛇へびと魚の融合で、背には翼を生やす——。

異い形ぎょうの女使い魔は抱きかかえていた少女を地面におろすと、翼を広げて飛び去った。己の姿形を恥じるような退場である。ここへ拉ら致ちしてくるまでの間に、顔を見られたのだろう。

「ようやくふたりきりになれたな、グィネヴィア」

「そのような口く舌ぜつは、恋人同士の逢おう瀬せにこそふさわしいものでございましょう。あいかわらず王子の呼び名に反して、貴

婦人の扱いには慣れていらっしゃらないのですね」

　アレクが言うと、拗すねた口ぶりで魔女王は答えた。

「あとすこしで『最後の王』のもとへ到達できるというのに、このようなところへ招待されるだなんて……。しかも小父様と引き離して、どうなさるおつもりです？」

「言わなければならないほど、みずくさい関係でもなかろう。いつまでも過去の主人を吹っ切れない貴様の未練が、どれだけ揉めごとを起こしてきたと思う？　いちいちつきあうのに、俺もうんざりしていてな」

　アレクはわざと親しげな口を利きいた。

　だが、口元に浮かべるのは酷こく薄はくな利己主義者めいた微笑だった。

「貴様や神祖どもの企たくらみで死を得た連中は、俺の知ち己きや部下のなかにも多い。そいつらの借りを返しておくのにもいい頃合いだろう。……ああ。そういえば、貴様が招来したアーサーを封じるため、壊れかけていた体をさらに壊した女もいたな」

　八年にもおよぶ抗争の記憶が甦よみがえってくる。

　グィネヴィアがアレクの身辺をうろちょろするだけの魔女だったら、迷惑には思っても排除しようとは考えなかっただろう。あのプリンセスを放置しているように……。

「魔女の王だからといって、ツケを払わずともいいという法もあるまい。俺も一度くらいは借金の取り立て人になってみたかったところだ。悪いが俺の転職願望につきあってもらうぞ」

「そのためにアヴァロンを復活させたのですね……」

　アンティークドールのごとき美貌が険しくゆがみ、アレクをにらんだ。

「主が眠るはずの地をわれらより先に見み出いだし、あまつさえこの地に汚けがらわしき罠わなを仕掛け、さらに小父様とグィネヴィアを引き離し、そのうえで賢さかしげなことをおっしゃって！　アレクサンドルさま、本当にあなたは忌いま々いましい方！」

「似たような悪態をつきたい気持ちは俺にもあるが、実じつ践せんするのはやめておこう」

　アレクは皮肉の色が濃い冷笑で、神祖の弾だん劾がいを受け流した。

「今、貴様がすべきは決断だ。『最後の王』を前にしてもリスクを冒おかさず、逃げ去る術すべを模も索さくするか。あるいは、全てを手に入れるために最後の手札を切るか。ふたつにひとつだ」

　いつものグィネヴィアなら、まちがいなく前者を選ぶ。

　そして、ランスロットの救援を待ちながら破滅するはずだ。事がここまで至ったなら、アレクが詰めをあやまるはずはないのだから。

　だが、今この局面においてなら、どうだろう？

　ついに命を賭として、『最後の王』を求めるか、否いなか。どちらだ？

　グィネヴィアの可か憐れんな立ち姿が膨ぼう張ちようするのを見て、アレクは微笑した。いいだろう、そちらを選ぶのなら、最さい期ごまでつきあってやると。

　人形めいた美少女の全身が、ふくれあがりながら白銀の鱗うろこにおおわれていく。

　喪も服ふくさながらだった黒いドレスは、たちどころにはじけ飛んだ。

　四し肢しの先端には鋭く長大な爪つめが生える。背にも翼が生える。美貌は冷たい爬は虫ちゆう類るいの顔となった。だが、猛たけ々だけしさよりも荘そう厳ごんさを宿す面おも差ざし――。

　それは竜への化身だった。

　魔女王グィネヴィアはついに神祖の切り札を行使した。竜蛇の封印を解き、かつて大だい地ち母ぼ神しんであった頃の神性を一時的に取りもどしたのだ。

　だが、ひきかえにグィネヴィアは残りの寿命を失う。

　アレクの全身に火花が走る。神速をまとい、宿敵との決着をつけるためだった。

3

「俺はランスロットに呪じゅ縛ばくされているんだ。あいつとの決着をつける前にガスコインと戦えってな。あのまま続けて、ガスコインを倒していれば自由の身になれたんだけど……なかなか上う手まくいかないもんだ」

　魔術で動く帆はん船せんの甲かん板ぱん上じようで、護ご堂どうは軽やかに言った。

　もちろんエリカ、祐ゆ理り、リリアナの三人を前にしながら、である。

「早くランスロットのやつと戦って、白黒はっきりさせたいのにな」

「だとしたら草くさ薙なぎ護堂、あなたは重要なことをお忘れです」

　何？　リリアナに指摘されて首をかしげる護堂に、エリカが告げる。

「『剣』の言こと霊だまよ。あなたはまだランスロット卿きようの知識を得ていないわ。あの軍神を斬きり裂くことはかなわないはずよ」

「……ああ。そういえば、そうだった」

　護堂は自みずからの迂う闊かつさに気づいた。呪縛のせいで浮き足立っていたようだ。

「いざとなったら、グィネヴィアにでも教えさせようとか思ってはいたんだけどな……」

「あ、あなたは何てことを。彼女は敵で、しかも神しん祖そです

よ！」

　つぶやきを聞きとがめたリリアナに、糾きゅう弾だんされてしまった。

「それはつまり、あの魔女とま、またキスしてもいいという意味ではありませんか！　そもそも、何と言って彼女に命令を聞かせるおつもりだったのです!?」

「まあ、その辺は何とでもできそうだから、必要になったら考えればいいさ」

「なんて破は廉れん恥ちな！　色ドン男ファンぶるにも程ほどがあります！」

「そう言うなよ。大体、おまえもこういう俺をきらいじゃないだろう？」

「――!?」

　リリアナの剣幕に苦笑を誘われながら、護堂はウインクした。

　彼女が書いた恋愛小説の内容はよく覚えている。何だかんだと言いながら、銀髪の騎士は草薙護堂のような男に翻ほん弄ろうされることも心の底で期待しているのだ。

　リリアナはハッとした表情で目をそらした。真実を言い当てられ、あせったようだ。

「お、お待ちください、護堂さん。グィネヴィアさま云うん々ぬんという発言の是ぜ非ひはともかく、まだランスロット卿最後の謎なぞが解けていませんっ。卿やアレク王子と戦われる前に、そちらに取り組む必要があるはずです！」

　黙り込んだリリアナに代わって、祐理が訴える。

「今は戦うべき時ではありません。どうか足を止め、心をお鎮しずめください！」

「ああ、実はな。鎧よろいを脱いだランスロット……あいつの正体を見たぞ」

ひとまず護堂の戦意を抑おさえるつもりらしい媛ひめ巫み女こに、笑いながら告げる。

すると、祐理はびっくりした顔でまばたきをした。

「それがどういうものか教えれば、万ま里り谷やなら何か視みえるんじゃないか？　あいつの正体、最後の謎だってわかるかもしれない。――ああ、そうか」

妙案を思いついた護堂は、祐理へ歩み寄った。

「た、たしかにそうなるかもしれませんが……え？　護堂さん、何を!?」

「いや、なに。せっかくのアイデアだから、早速試ためしてみたいと思ったんだ。ついでに万里谷、ランスロットのことを俺に教えてくれ」

「い、今ここで、ですか!?」

護堂は手をのばして、驚く祐理を引きよせた。

華きや奢しやで非力な媛巫女は、あっさりと胸に飛び込んでくる。細いくせにしっかりと女らしい体つきと肌のぬくもりを感じる。

極上の抱き心地だった。護堂が微笑ほほえみかけると、祐理はすぐに赤面した。

「エ、エリカさんもリリアナさんもいらっしゃいますし、そもそも護堂さんご自身が正気ではありませんっ。お、おたわむれも大たい概がいになさって――んんっ」

生き真ま面じ目めなことを言う割りに、祐理はいやがってはいなかった。

いさめようとはするが逃れようとせず、目は熱っぽく潤うるんでいる。だから、遠慮なく唇くちびるを合わせて沈黙させた。

「だ、駄目です……っ。み、みなさんが見ていらっしゃいますし、私、今の護堂さんのために、そのようなことはできかね――んんっ、おやめくださいっ」

　涙ぐみながら、祐理が唇をずらそうとする。だが、本気で拒こばまれてはいない。

　その証拠にまた唇をかぶせたら、すぐにおとなしくなった。

　唾だ液えきで濡ぬれて桜色に光る祐理の唇を、やさしくついばむ。最近ではすっかり大胆に応こたえるようになっていた媛巫女だが、さすがに今回はぎこちない。護堂のキスにも、しばらく唇を硬くしていた。だが、徐々にほぐれてきた。

　くちゅくちゅと何度も唇をついばんでいたら、ついに祐理も口を開いてくれた。

　可か憐れんな舌先で、ひかえめに護堂の舌を迎え入れる。

「も、もう……護堂さん……い、いいかげんになさってください。こんなことを続けられるのでしたら、私、本当に怒りますから……んっ」

　うっとりと目を細め、羞しゅう恥ちで全身を紅あかくしながら祐理がキスに応こたえる。ひさしぶりのぎこちなさを愉たのしんでいたら、エリカが歩み寄ってきた。

「さっきも迷いがないと思ったけど、まさか、こういう方面でもそうだなんて……。本当に意外だわ、護堂。今回はあなたに驚かされてばかりね」

「そうか？　本当に思いつくまま行動しているだけなんだけどな」

　媛巫女とのキスを中断して、エリカに答える。

　このとき、祐理が残念そうに唇をふるわせたのを見逃さなかった。おそらく無意識にそうしたのだろうが、彼女も草薙護堂を求めているのだ。

「悪い。万里谷が恥ずかしがるから、おまえたちはすこし席を外してくれるか？　俺はランスロットのことをここで知っておきたいんだ」

　エリカとリリアナの視線に、祐理が身をすくませている。

　媛巫女に気を遣つかい、護堂はいささか主義に反する指示を出し

た。身近にいる誰かをひとりだけ優遇するような真ま似ねは、趣味ではないのだが。

「バカを言わないで。こんなあなたを放置して退場できるわけないでしょう？」

「なら万里谷といっしょに、おまえもランスロットのことを教えてくれ」

「なんですって!?」

いつもは振りまわす側のエリカが、今日は護堂が何か言うたびに驚いたり、意表を突かれている。なかなか面白い光景だった。

「昨日、万里谷からランスロットのことを教わったんだろ？　なら、大丈夫だよな。誰かひとりだけを選んで可愛かわいがる……みたいな真似は、俺も抵抗があったんだ。エリカがつきあってくれるなら、こんなにありがたいことはない」

近くまで来ていたエリカの腕を、護堂はつかんだ。

力比べなら、魔術で筋力を強化した彼女の方が上だ。いやなら払いのけられるはずだが、かんたんに引きよせることができた。

護堂の要請に、彼女も迷っているのだ。だったら前置きは要いらない。

エリカの唇にキスをかぶせ、そのまま数十秒。

祐理がすこし悲しげな目になり、リリアナが「おやめください草薙護堂ッ。エリカもいいかげんにしろ！」と叫んでいたが、かまわずキスを続ける。

「ん……っ。護堂、こんなことでごまかそうとしてもダメよ。あなたの命令、無茶苦茶すぎるもの。聞くつもりはないわ……んっ」

護堂と熱烈にキスを交わしながら、エリカはささやいた。

大胆に唇を開いて、護堂の唇を包みこむ。情熱的にうごめく舌で護堂の舌を愛あい撫ぶし、ふたり分の唾だ液えきを共有する。

「もちろん、こういう受け身じゃない護堂も胸がときめくし、こん

なに求められたら応えたくもなるけど……。祐理といっしょにだなんて言われて、うなずけるわけないわ。エリカ・ブランデッリはそんな都合のいい女じゃないもの……んっ」

「前にもみんなでしたことがあったじゃないか。たまにはいいだろう？」

　エリカと幾度も、いや、幾十度も接せつ吻ぷんを交わしながら、睦むつ言ごとをささやき合う。

「前例があるからいいなんて理屈、通じるわけないでしょうッ」

「不満があるなら、さっきナイフを投げたみたいに、俺を刺してもいいんだぞ？　今度はかわさないから……。それくらいされても文句は言えないようなことを、おまえたち相手に結構してるもんなァ」

「そうね。機会があったら、必ずやってあげる。覚悟していなさい！」

　言葉を交わす合間にも、ふたりは気ぜわしく口づけを繰りかえす。

　憎まれ口をたたくエリカだが唇は甘く、情熱的に護堂を迎え入れていた。

「俺のそばには、やっぱりおまえたちが必要なんだよ。特にエリカ、いちばん古くからの相棒がいないと格好がつかない。いつもみたいに俺を助けてくれ」

「もう……こんなときだけ、殊しゆ勝しようなことを言って……仕方のない人ね」

　エリカがようやく、護堂の口から唇を離した。

　激しい口づけの名残なごりが唾液の糸になって、ふたりの間を結んでいる。

「感情的には認めがたいし、いつかあなたを刺してやりたいって気持ちはますます強くなったけど、望みどおりにしてあげるわ。エリカ・ブランデッリがここまで尽くす男性は草薙護堂しかいないという事実を、運命に感謝して欲しいわね」

「ああ。肝きもに銘めいじておくよ」

「エ、エリカさん、本気なのですか!?」

　紅あかき美少女と草薙護堂が結んだ合意を聞いて、祐理が驚きよう愕がくした。

「ええ。今回にかぎり、特別にそうしましょう。どうせ『剣』は必要になるものだし。もとの計画で考えていたのとはだいぶ方法がちがうけど、どうにかして護堂とこういうことをしようと目もく論ろんでいたわけだし」

「計画……た、たしかにそうですがっ」

　頬ほおを紅こう潮ちょうさせて語るエリカに、祐理が返事する。

　どうやら、何か企たくらんでいたらしい。だが、護堂は気にしなかった。さっき言ったように、刺されても文句を言えない間柄なのだ。甘んじて受ける覚悟も必要だろう。

「し、しかし、いくら何でも無茶がすぎる！」

　叫んだリリアナに護堂は笑いかけた。

「そんなこと言わずに、おまえもいっしょにつきあってくれよ。前に言ってただろう？　今度は騎士らしく俺を受うけ容いれるって」

「それはたしかにそうですが、唐突すぎます！」

　困惑する青き騎士を尻しり目めに、護堂は媛巫女へ近づいた。

　びくっと身を固くする祐理を抱き寄せる。すぐそばにエリカもやってきた。

「万里谷が本当にイヤなら、ここまでにするよ。でもな、俺はどんなふうになっても、万里谷をそばに置いておきたいと思うし、頼りにもしているんだ。だから、ダメか？」

「そ、そんなことをおっしゃらないで……。放して——あ……っ」

「イヤだったら、このまま俺の口を噛かみ切ってもいいんだ。遠慮しないでいいぞ？」

　ふたたび祐理にキスしながら、ささやいた。

　護堂に抱かれて、媛巫女は身をよじっている。だが、まったく力が入っていない。いくら非力でも、本気ならもっと暴れて拒むはず。

　祐理は護堂に抱かれたまま、陶とう然ぜんと目を潤うるませていた。

「リ、リリアナさんもいいと許可してくださるのなら……」

「その逃げ方はちょっと卑ひ怯きようだな。俺は万里谷に頼んでいるんだ」

「そ、そんなふうにおっしゃる護堂さんこそ卑怯ですっ。や、約束してくださいね？　ランスロット卿のことをお教えしたら、正気に戻ってくださると……」

「俺の力でどうにかなることじゃないから、ちょっと約束は無理だけど。そういう機会があったら、がんばってみるよ」

「や、やっぱり今の護堂さんは卑怯――んんっ、んっ」

　祐理がついにぐったりと体を預けてきたので、護堂は愛いとおしさにまかせてキスをした。

　おたがいの唇をついばみ、交わらせ、舌をからめ、唾液を交換する。

「もう……いろいろ考えて、準備していたことのほとんどが台なしだわ。あなたって本当に、どうしようもない人ね！」

　後ろからエリカも抱きついてきた。もちろん、彼女とも濃厚な口づけを交わす。

　すると、最後のひとりが耐えかねたように叫んだ。

「じ、状況が状況です。万里谷祐理とエリカがそうするというのなら、侍じ従じゆう長ちようであるわたしが怠なまけるわけにもいきませんっ」

　ふらふらとリリアナが歩み寄ってくる。護堂は無言で引きよせ

た。

4

「ランスロット・デュ・ラックといえば、騎士のなかの騎士。アーサー王と円卓の騎士伝説では、欠点のない最強の存在として語られます……」

リリアナが妖よう精せいめいた美び貌ぼうを近づけ、キスの雨を降らせてきた。

唇くちびるに唇をおおいかぶせ、ついばむ。包みこむ。唇を唇ではさむ。舌で唇を舐なめる。丁てい寧ねいになぞる。遅れた分を取り返そうとするような、愛情深い接せつ吻ぷんだった。

「ここで問題になるのは、騎士という存在の源流がはたしてどこにあるのか、です。この問いへの答えを、あなたはもうご存じですね？」

魔王カンピオーネには、生なま半はん可かな魔術・霊力は通じない。

しかし、術を体内に吹き込むのであればべつだ。そこで経けい口こう摂せつ取しゆが選択される。

まっすぐな気性そのままの強引さで、リリアナが舌を差し込んできた。これに応こたえて護堂も舌を差し出し、彼女の口内をねぶり、愛あい撫ぶする。

ふたりの口元は、すぐに唾だ液えきでびちょびちょになった。

いや、唇のまわりだけでなく頬ほおまで濡ぬれている。しかし、リリアナはかまわず護堂の頬に自分の頬をこすりつけ、親愛の情をあらわにする。

「原げん初しよの騎馬民族にして鉄器文明の伝承者スキタイの流れを汲くむ、サルマタイ……重装騎兵という武装と戦術の発明者です……」

　うっとりと護堂の舌を受うけ容いれながら、息継ぎの合間にリリアナは語る。

　すると、ここでエリカが割り込んだ。

「サルマタイに端を発する騎士——いえ、騎兵という文化が中世騎士道文学にまで流れ着くための土ど壌じようは、ローマ帝国によって醸じよう成せいされるわ」

　旧友兼ライバルから主あるじの唇を奪うばい、代わりにむさぼる。

　しかし、エリカの口づけは貪どん欲よくでありながら、十分な品位を持つものだった。愛欲にまかせて唇にしゃぶりつくのではない。家か臣しんの手へ接吻を授さずける女王のように、気品と尊そん大だいさを持って。それでいて乙女おとめらしい熱情を伴ともなうからだろう。

　そんな紅あかき騎士に対抗するように。

　ふたたび青き騎士が、妖よう精せいの可か憐れんさとひたむきな真心を込めて、護堂にキスを捧ささげる。

「当時のローマ帝国には、異民族出身者でも二五年の兵へい役えきを終えれば正式なローマ市民権を得られる制度がありました……。軍役を志願したサルマタイ人は、騎兵として帝国各地に派遣されたといいます」

「ええ。そして、退役した軍人は赴ふ任にん地ちの近くに土地をあたえられ、現地民の妻をめとることが多かったのよ」

　紅と青の騎士ふたりは交互にキスを迫り、功を競う。

　そんな両名と護堂の交わりを悲しそうに見つめながら、祐ゆ理りがささやいた。

「それで護堂さん。ランスロット卿きようの正体とは何だったのでしょう……？」

「ああ。あいつ、鎧よろいの中身は女なんだ。ランスロット・デュ・ラックは女騎士なんだよ」

　即答した直後、祐理にため息をつかれた。

　リリアナは文句を言いたそうな顔で、護堂の背中をつねった。

　エリカに至っては、キスのふりをして唇を寄せ、護堂の下唇を軽く噛かんだ。

「痛ッ！　何をするんだよ？」

「結局、また女にたぶらかされて唇を奪われたのね」

「隙すきが多いにも程があります。もっと警戒なさるべきです」

「その大らかさが護堂さんの美点だとは思います。でも、そろそろ過去の失敗から学ばれてもいい時期でしょうに……」

　少女たちから口々に言われて、護堂は首をすくめた。

　本題はそれではない。今の告白は媛ひめ巫み女この霊視を導みちびくためのものだ。どうなるだろうと、護堂は結果を待った。はたして——

「ですが、そのお言葉でたしかに視みえました。ランスロット卿の素顔は、彼女がまさしく原スキタイの系けい譜ふに連なる女王であるという、たしかな証あかしです」

　祐理がひしと抱きつき、背伸びするように唇を押しつけてくる。

　けなげで、かいがいしい接吻。ひかえめな大やまと和なで撫子しこにはやや不似合いな振る舞いが、それゆえに背はい徳とく的な興奮をあたえてくれた。

　祐理からのキスで、ランスロットの謎なぞを解く知識が伝えられる。

　最高の霊視力を持つ媛巫女は、今回も天てん啓けいを得てくれた。さすが——と護堂が感謝した瞬間、もうひとり霊視力を持つ少女がキスしてきた。

「スキタイに関する最古の記録を遺のこした歴史家ヘロドトスが、この民族の末まつ裔えいについて記した一節もお忘れなきよう。女王にして女戦士たるランスロット卿とスキタイを結ぶ鍵かぎは、そ

こにあるのですから……」

　今回はリリアナも霊視に成功したらしい。

　魔女にして騎士という希け有うな少女も、新たな知識を伝達してくれる。膨ぼう大だいな量の知識を脳に直接送り込んでくれる『教授』の魔術。これを三人がかりでかけられた結果、護堂の心に確信がわき上がってくる。

　造れる。ランスロットを斬り裂く『剣』、今なら造ることができる！

　その確信が、護堂を猛たけ々だけしく微笑ほほえませたときだった。

「護堂、ちょっといいかしら……？」

　今度はエリカにキスをせがまれた。当然のように応じる。

　これで何度目になるのか、数えるのもバカバカしいほど繰りかえしてきた行為。しかし、今度のキスが送り込んできたのは、知識でも言葉でもなかった。

「……石？」

　舌先で転がるほどの、小さく固い球体だった。

　それをエリカはたっぷりの甘い唾だ液えきで流し入れ、護堂は特に警戒することなく嚥えん下かしてしまったのである。その直後、心が大いに乱れた。

「な、に——？」

　あせり、動揺、気おくれ等。今まで忘れていた感情が甦よみがえってくる。

　飲まされた物体は何か？　いぶかしむ護堂に、エリカが婉えん然ぜんと微笑んだ。

「ちょっと名なごり残惜おしいけど、そろそろおしまいにしましょう？　ひかりの禍まが祓はらい、覚えているでしょう？　あれをプリンセス・アリスの術で呪石に封じてもらったの」

祐理の妹で万ま里り谷や家の次女、ひかり。媛巫女見習いでもある。

ごく一部であれば、神の権能さえ消去するのが『禍祓い』だ。斉せい天てん大たい聖せい戦では、エリカが折った如によ意い金きん箍こ棒ぼうをふたたび砕くことにも成功した。それにアリス？

「只の禍祓いではないわよ。プリンセスが精神感応の霊力で、ひかりにご自分の霊気を分けあたえたうえで使わせたものなの。ランスロット卿の呪縛を破ることは無理でしょうけど、すこし亀き裂れつを入れるくらいならできるかも……と、姫はおっしゃっていたわ」

そうか。それでこんな感情が。護堂は納得した。

たしかに亀裂程度のようだ。ここで気合いを入れ直せば、今のままでいられる気がする。

だが、しかし。

護堂は少女たちに見つめられて、その意欲に火をつけることができなくなった。

行為の余よ韻いんに身も心もほてらせながら、それでも逆転の一手を放ち、護堂を取りもどそうとしたエリカ。激しい接吻を繰りかえしたせいで虚うつろな目をした、しかし心配そうな祐理。あれこれ文句を言いながら、真しん摯しな情熱で護堂を求めたリリアナ。

彼女たちのところに帰らなくては——。

自然にそう思った瞬間、もとどおりの草薙護堂に戻っていた。

かくして復活した護堂は、エリカ、祐理、リリアナと向き合ったのである。

今まで繰り広げていた行為の余熱は、いまだ少女たちを昂たかぶらせているらしい。いつもより艶つやっぽい顔つきだった。そして、彼女たちのそれぞれ魅惑的な肢し体たいからは得も言われぬ色いろ香かがただよい、護堂を惹ひきつける。

だが、三人とも皆、何か物言いたげな目つきであった。

気まずく思った護堂はコホンとせき払いをして、

「あー……みんな、今度のことは本当にすまない。ランスロットに変な呪縛をかけられて、俺はかなりおかしくなっていたみたいだ」

心から謝罪した。しかし、反応はかんばしくなかった。

「そんなこともないと思うわ。護堂ったら、ものすごく活いき活いきとしていたもの……」

「たしかな根拠はありませんが、ないでしょうね。魔術で洗脳された者特有のぎこちなさや、反応の鈍にぶさも見られませんでしたし……」

「なんとなくですが、あれは内なる想おもいや願望を引き出して、狂気に近い強さにまで増幅する呪じゅ詛そなのだと感じました。だとしたら、さきほどまでの護堂さんはやっぱり……」

エリカに決めつけられ、リリアナにあきれられ、祐理には託たく宣せんのように告げられた。

身から出た錆さびなので、反論できない。護堂は恐縮して頭を低くした。

「ひかりのやつにも迷惑をかけたみたいだなァ……」

「そうよ。プリンセスの霊気を受け容いれて、限界を超えるほどの力を使ってくれたわ。そのせいで心身共に消しよう耗もうして、すごい高熱を出して寝込んでいるんだから。あとで見舞いに行ってあげなさい」

エリカに言われて、護堂はうなずいた。

そういえば、ひかりには前々から『遊びに連れていってください』と頼まれていた。今回の詫わびと礼もかねて、そろそろ約束を果たさなくては……。

「もちろん、アリスさんにもお礼をしなきゃな。また日本に来てくれたのか……今は馨かおるさんや甘あま粕かすさんといっしょとか？」

「あ……その件で非常に申し上げにくいことがあるのですが」

　この問いにリリアナがあせり顔で答えた。祐理は赤面してうつむき、エリカまで気まずそうに視線をあらぬ方へ向ける。

　どうしたんだろう？　不思議に思った瞬間、護堂はその声を聞いた。

「も、申し訳ございません。実はさきほどから隠れて、一部始終を見ておりました……」

　なんと、プリンセス・アリスの声だった。

　仰ぎよう天てんして振りかえると、もじもじと恥ずかしげに美女が立っていた。

「昨日エリカに電話をかけましたら、草薙さまがたいへんなことになっていると報しらされまして、駆けつけたのです。アレクサンドルの動向も気になっていましたし……」

　また幽ゆう体たい離り脱だつをして、飛んできてくれたようだ。

　もちろん、善意以外の野次馬根性も大いに関係しているだろう。しかし、それは些さ細さいな問題だ。わざわざ救援に来てくれたプリンセスには、いくら礼を言っても言い足りない。

　だが、愕がく然ぜんとした護堂は、無言でアリスを見つめるだけだった。

　アリスの方も気まずそうだ。誰とも視線を合わさないよう苦労していた。そして、興奮気味の口調でつぶやく。

「隙すきを突いて、わたしが用意した呪石を草薙さまに口うつしで飲ませる……というエリカの計略を聞いて、ドキドキしながら見守っていたのですが。まさか、あんなすごいことになるだなんて！　本当にびっくりしてしまいました！」

　羞しゅう恥ちで気まずそうだが、アリスの目はやけにキラキラと輝いていた。

　護堂たちの行為は、よほどカルチャーショックだったのだろう。

「と、とりとめのないことを言って御ご免めんなさい。さすが草薙さまの陣営は先進的だわと感動してしまったもので、上う手まく言

葉が出てこないのですっ。そ、それよりも今は、グィネヴィアさまとランスロット卿が火か急きゆうの問題ですものね！」

　アリスはかなり無理矢理に話題を変えた。

　おほんと可愛かわいくせき払いして、帆はん船せんの甲かん板ぱんから海を見やる。

「わたしには、あちらに『竜』の影が視みえます。おそらくグィネヴィアさまが竜蛇の封印を解いたのでしょう」

　霊視力にもすぐれる巫み女こ姫ひめが言った。護堂には只の海原にしか見えない。

　だが、同じ力を持つ祐理がうなずいた。

「はい。私にもそのように視えます。それと、あちらから強い『雷』の気配も……」

「ええ。ランスロット卿が力をたくわえていらっしゃるのね」

　護堂は気づいた。今、巫女たちが指摘した方角はまったくちがう。

　魔の海域より感じるという雷の気配。それとは逆方向に見えるという竜の影。

「グィネヴィアとランスロットは引き離されたのか？」

「ええ。それがアレクサンドルの狙ねらいだったのでしょう。ランスロット卿を迷めい宮きゆうで足止めし、孤立させたグィネヴィアさまを各個撃破する。ナイトよりもクイーンの方が与くみしやすく、優先順位の高い標的と見なして」

　その計画は、護堂によってひっくり返される寸前だったのだ。

　とはいえ、アレクみたいにアクの強い男と共同戦線など張れるわけもない。まあ、仕方ないことだよなと護堂は肩をすくめた。

　一方、アリスは竜がいるはずの方角を見ながら、決然と言った。

「わたしはグィネヴィアさまとアレクサンドルの決着を見届けよう

と思います。草薙さまはいかがなさいますか？」

「俺は浮島に……ランスロットの方に向かいます」

　黒王子と白き姫にとっては、神祖グィネヴィアこそがより重要な敵なのだろう。しかし、草薙護堂にとってはそうではない。

　戦うべきは、決着をつけるべきは、ランスロット・デュ・ラック。

　ゆえに、ここで袂たもとを分かつのは必然だった。

「今回のことでは本当にお世話になりました。ありがとうございます。いずれきちんとお礼をさせてください」

「いいえ。わたしもずいぶんと楽しませていただきましたから」

　護堂の謝しや辞じに、プリンセスは茶目っ気の多すぎる微笑で応えた。

「それではごきげんよう、草薙さま。御ご武ぶ運うんをお祈りいたしますわ。アレクサンドルと仲よくしてくださいませとは申し上げません。ですが世界平和のため、もうすこしだけ歩みよっていただければ、わたしどもも安心です！」

　今度こそ貴婦人らしい口調で告げてから、アリスは飛び立っていった。

　残ったのは護堂、エリカ、祐理、リリアナの四人。いつものメンバーだった。

「護堂。わたしたちはランスロット卿と決着をつけるのね？」

「ああ。悪いな、みんな。俺のせいでゴチャゴチャしたけど、予定どおりにあいつとケリをつけにいく。もうすこしつきあってくれるか？」

「それはエリカ・ブランデッリに訊きくことではないわね。自分の右手に『つきあえ』とか言うのは、度しがたい愚おろか者だけよ。……まあ護堂の場合、たしかにいつだってバカな人ではあるのだけれど」

　エリカらしい凝こった返答に、護堂は苦笑した。リリアナも祐理も、隣でうなずく。

　いろいろゴタゴタしたが、どうにか最終局面へたどりつけた。仇きゆう敵てきアテナを死に追いやった騎士との決戦へ、ついに護堂は一歩を踏み出す——。

## 第７章　旅の終わり

### 1

　白き竜に化け身しんしたグィネヴィアと、アレクサンドル・ガスコイン。

　ずっと暗闘を続けてきた両名である。だが、直じかに矛ほこを交えたことはない。グィネヴィアは常に、そういう局面を避けてきた。『死』と同義である竜化を果たさなくては、カンピオーネとの直接対決など不可能だからだ。

　ゆえに、これは最初の決闘であり、最後の戦いだった。

　グィネヴィアが白き竜翼を広げ、羽ばたかせる。だが、竜の巨体は浮き上がらない。空を飛ぶためではなく、べつの目的のための羽ばたきなのだ。

　翼が生み出したのは、風だった。

　囂ごう々ごうと音を立てて、グィネヴィアの白き竜体より旋風が巻きおこる。

　風はすぐに颶ぐ風ふうとなり、面積約四万平方メートルの人工島に吹き荒れる。アレクの体も吹き飛ばされそうになった。

「俺の動き自体を封じる肚はらか！」

『ええ！　アレクサンドルさま、いかに御おん身みが電光の速さを持とうと、身動きできない状態であれば脅きよう威いではありませんもの！』

　神しん祖そが起こした魔の風は、単なる強風ではなかった。

　荒れ狂う空気のかたまりとしてアレクにぶつかり、吹き飛ばそうとする。しかも、彼の長身痩そう躯くに蛇へびのようにからみつき、一切の身動きをさせまいと呪じゅ縛ばくしにかかる。

　この凶風の圏内にいるものは、どんな巨大生物であっても微動だにできまい。

　不動金かな縛しばりというには激しすぎる演出だが、これは緊きん縛ばくの呪法なのだ。唯ゆい一いつの例外はグィネヴィアが変へん化げした白竜のみ。我は動けるが、敵には棒立ちする以外の選択肢はなし。

　絶対的な優位を生む魔風のなか、白き竜は吠ほえた。

　ガアアアアアアッ！

『アレクサンドルさま、御覚悟！』

　咆ほう哮こうと共に、グィネヴィアの可か憐れんな声が竜の顎あごより放たれる。

　そのまま襲いかかってきた。竜の長大な前まえ肢あしを振りおろし、剣にも負けないほど鋭い爪で引き裂こうとする。ふつうなら為なす術すべなく切り刻まれただろう。

　だが、アレクはカンピオーネである。魔力に対しては絶大な耐性を持っている。

　いかに神と同列の聖竜が繰り出した呪縛でも——

「汝なんじ、死に至るまで忠実なれ！　さらば我、汝に命の冠かんむりをあたえん！」

　聖句を唱となえて、体に宿る呪力を高めた。

　こうすることで魔力への耐性も向上する。途端に、体を抑えつけていた風の呪縛が失われ、アレクは自由の身になった。即座に神速を使う。

　傍はた目めには瞬間移動に見えただろう。

　一瞬にして白き竜の背後にまわり込むと、軽やかに跳躍。竜の背にタッチする。もちろん、只の接触ではない。右手首から先はプラズマとなって放電していた。

　バチッ！　火花が散った。

『く……ッ。やはり敏びん捷しようでいらっしゃいますこと！』

　舌打ちするようなグィネヴィアの声が、竜から聞こえてくる。さすが神獣すら凌りよう駕がする竜神の巨体。電撃の手くらいではダメージにならないようだ。

　しかも、魔風の勢いがすこし強まった。

　グィネヴィアが神力をふたたび風に注ぎ込んだのだ。

　風がうなる。吹き飛ばすためではなく、からみつくために吹き荒れる。アレクの痩躯はまたも魔の凶風にまとわりつかれ、神速はおろか指一本動かせない状態になった。

「ちっ！」

　いきなり金縛りになったせいで、アレクの足はもつれる。

　舌打ちしながら転倒する羽目になった。そこを狙ねらって、グィネヴィアが竜の長大な尾をブゥンと振りまわす。これに打たれたらビル建設現場の鉄骨で殴なぐられるのと大差ない。

　アレクはまたしても呪力を高め、どうにか魔風の呪縛を解いた。

　あと数センチで尾に全身を打たれるというところで、神速の発動。回避。しかし、グィネヴィアがまた風に神力を注ぎ込み――。

　そこからは、まさにイタチごっこだった。

　風で呪縛した瞬間、グィネヴィアが竜の肉体で攻撃を仕掛けてくる。

　長大な前後の肢と爪を振るって。凶悪かつ鋭い牙きばがならぶ顎あごで喰くらいついて。巨大な肉体そのものを凶器にする体当たりで。意外と厄やつ介かいな武装である尾を振りまわして。

何より恐ろしいのは、口より吐き出す息ブレスだった。

竜の吐息はたちまち氷片まじりの嵐となった。生者を吹き飛ばし、切り刻み、氷結させる武器となって猛もう威いを振るう。

それらに襲われるたび、アレクは呪縛を振り払った。

神速を使って飛びすさり、竜の攻撃をぎりぎり回避し続ける。しかし、有効な反撃ができない。ひねくれた性格が影響してか、アレクの権けん能のうはあまり攻撃的ではないからだ。

「まあ、迷めい宮きゅうを造る力ではそもそも攻撃に転じようがないしな」

つぶやきながら、アレクは竜の猛攻をしのぎ続ける。

「恥ずかしがり屋の召めし使つかいは、真っ向勝負向きの人材じゃない。貪どん欲よくの魔球は出張中。例の雷らい霆ていを使えば、貴様から逃げまわる足がなくなる。なかなか厄介な局面だ！」

神速の権能には、地上を焼き払うための『黒き雷霆』という攻撃形態がある。

しかし、あれを使うと半日ほど神速移動ができなくなる。さすがのアレクも、この状況で使う気分にはなれなかった。

「だがグィネヴィアよ。チェックメイトの時間まで、あまり猶ゆう予よはないぞ。その一手を封じる準備はできているか？」

アレクの問いに答える余裕は、グィネヴィアにはない。

がむしゃらに魔風を吹かせ、凶きよう猛もうな竜の巨体でしとめにかかる。

——これはいわば、ライオンと猫の戦いである。どれだけアレクがすばしっこくても、竜の一撃を受ければ即死する。グィネヴィアはじっくりと獲え物ものを追いつめ、十分痛めつけたあとでとどめを刺せばよい。

だというのに、余裕があるのはむしろアレクの方だった。

「時間稼ぎに徹してランスロットの救援を待つこともできるだろう

に、そうしない。――ということは、あの騎士殿には何か不都合があるのだな。たとえば、スタミナ不足で連戦ができないというような……」

『くっ！』

　アレクのつぶやきに、グィネヴィアがさらなる猛攻で応こたえる。

　明らかにあせっている。正解なのだろう。そして、防御一辺倒のアレクが逆転の条件を整えるまで、もうさほど時間がかからないことも承知しているのだろう。

　躍やつ起きになった竜が繰りかえす攻撃をひらひら避け続け――ついに、時は来た。

　アレクは十分な威力がたくわえられたと知り、言こと霊だまを唱えた。

「聞け、永遠の夜の娘たちよ。地と影の娘たちよ」

　魔風で動きを封じられていたが、もはやアレクは気にしない。

　賛歌に応えて、美しき三妖女が顕あらわれたからだ。左右と頭上を守護するメガイラ、ティシポネー、アレクトー。復ふく讐しゅうの三女神エリュニエスである。

「悪には悪を、罪には罪を返し、復讐の嚆こう矢しとせよ。殺あやめられた母の血は、最も惨むごたらしき死を於おいて他、報むくうることかなわぬと知れ」

　黒き翼を背中にはやす、三人の妖女たち。その髪の一本一本が『蛇』である。

　彼女たちの翼で、竜化したグィネヴィアの爪も牙も息ブレスも全て跳ね返された。

「鬼女メガイラよ、復讐者ティシポネーよ、時を止めぬ名めい状じようしがたきアレクトーよ！　疾とく呪じゆ詛そを返し、報復を成せ！　今が復讐の時だ！」

　黒王子アレクが二番目に得た、復讐の権能である。

　三妖女の召しよう喚かんには一定時間の瞑めい想そうと儀式が必要になる。だから、戦闘中にいきなり使うことはできない。しかし、前もって召喚しておいた場所に敵を呼び寄せることができれば、すさまじいアドバンテージになる。

　彼女たちの前で行われた破壊と攻撃の全てを、加害者に叩き返せるのだから。

　アレクの詠えい唱しようを聞いて、蛇髪のエリュニエスは凶きよう相そうを浮かべた。黒き翼を広げて、白き聖竜に襲いかかる！

　無惨に打ちのめされ、切り刻まれていく竜形の女神——。

　アレクに叩き込もうとした攻撃の威力を、グィネヴィアは全てその身で引き受ける。天に高々とかかげられた生いき餌えのように、猛もう禽きんどもに群がられ、鋭い嘴くちばしで引き裂かれていく。

　それは、百も舌ずの早はや贄にえにも似た光景だった。

　仇きゆう敵てきを葬ほうむることに成功しても、アレクは表情を動かさなかった。まだランスロットと草くさ薙なぎ護ご堂どうの問題があるからだ。彼らに思いを馳はせたとき、なじみ深い声を聞いた。

「どうやら、こちらはもう終幕のようですね」

「来ていたか。あいかわらず鼻が利きくようだな」

　振り向けば、プリンセス・アリスの幽体がそこにいた。

　彼女の野や次じ馬うまぶりをフンと鼻で笑いながら、アレクは言った。

「見てのとおり、グィネヴィアはもうおしまいだ。残った敵はランスロットだが……もしかしたら、戦う必要はないかもしれないな」

「庇ひ護ごすべき御方がいなくなれば、卿きようが戦う理由そのものがなくなりますものね」

　さすがにアリスは察しがいい。すぐさま相あい槌づちを打ってきた。

「ああ。ふつうなら復讐という動機が生まれるかもしれないが、今のやつは『まつろわぬ神』だ。千年ものつきあいがあるから、グィネヴィアの騎士を続けていたのだろうがな。唯一のしがらみがなくなれば、すぐに気ままな放浪をはじめてもおかしくはない」

　アレクが魔女王を先に狙ったのは、その見込みもあったからだ。

　しかし、いきなり反論された。瀕ひん死しのグィネヴィアが声をふりしぼったのだ。

『いいえ！　たしかに小お父じ様はまつろわぬ身となりましたが、われらが主あるじに誓った忠誠は健在のはず！　アヴァロンの地を前にした今なら、まつろわぬ者の性さがにも屈しますまい！』

　死にゆく身であるからだろう。竜の肉体は石化をはじめている。全身をおおう白銀の竜りゆう鱗りんからはすでに輝きが失われ、乳白色の石に変わりつつあった。

『グィネヴィアは小父様の侠きよう気きと忠誠を信じております。われら神祖に代わって、必ず「最後の王」の麾き下かに馳はせ参じ、第一の騎士として振る舞ってくださると！』

　まだ神祖の魂たましいは健在のようだ。彼女の声にアレクは答えた。

「あの島が真のアヴァロンなら、たしかにそういう展開もあるかもしれんな」

　冷酷さも憎悪もなく、ただ無感動に。

　目の前にあるテスト解答のあやまりを、機械的に指摘するように。

「天あま之の逆さか鉾ほことは国生みの神具、日本列島の父母イザナミとイザナギにまつわるものだ。彼らが生んだのは、きちんとした陸地だけではない。『蛭ひる子こ』という不定形の流動体をも生み落とし、海に流したと神話は伝えている」

　グィネヴィアの悲願を断ち切ったことで、すでに報復は終わっている。

　だから、何の感かん慨がいもなくアレクは淡々と語った。

「天之逆鉾はこの伝承にならい、陸地と蛭子のどちらも生み出せる神具だった。そして千年ほど前、当時のカンピオーネを殲せん滅めつするため復活した『最後の王』は、いつものように使命を果たしたあと、日本のある島で眠りについた」

　ロスでの実験で、アレクは天之逆鉾の性質を理解した。

　さらに最強の《鋼はがね》のことを思い出し、ある仮説へと到達したのだ。

「『最後の王』が眠る島は、天之逆鉾によって蛭子に変えさせられた。もうわかっているだろうが、俺が甦よみがえらせた浮島……貴様がアヴァロンと呼ぶ島だな。ここで問題になるのは、誰が何のためにそうしたのかだ」

　アリスが何かに気づいた表情をする。罠わなのカラクリを理解したのだろう。

「古老という『最後の王』を危険視する連中が首しゅ謀ぼう者しゃだったらしい。厄介な虎とらが眠る島を蛭子とし、海底に沈めて隠す。悪くない隠し方だ。しかし、貴様ら神祖のような輩やからもいる。どうせ隠すのなら、もっと念入りにやった方が安全なはずだ」

　それは、アレクが推測していた展開のひとつであった。

「一週間前、俺は天之逆鉾で浮島を再構成してみた。それで明らかになったのは、あるはずのものがないという事実だ。あの島に朽くちた救世の神刀——『最後の王』の骸むくろはなかった。古老たちは念には念を入れて、王の寝所を変えておいたのだろうよ」

　最強の《鋼》は朽ちた愛刀と共に眠り、復活の時に備える。

　だが、浮島のどこにも刀はなかった。岩しかない小島だった。天之逆鉾はミスディレクション——探たん索さく者しゃの目をそらせる囮おとりだったのだ。

　真のアヴァロンが何ど処こにあるかも見当をつけていたが、それは言うまい。

「結局、浮島はアヴァロンではなかったわけだ。とはいえ、貴様らをおびき出すという俺の目的には十分役に立つ。だから迷宮の権能で鍵かぎをかけ、罠の要かなめとした」

『あの島より感じていた神刀の霊気——あれはまさか!?』

　慟どう哭こくめいたグィネヴィアの声には答えず、アレクは肩をすくめた。

　かつてサルデーニャ島でルクレチア・ゾラは言った。『最後の王』はアーサー王よりも古い、大陸の東西にまたがる英雄だろうと。

　その言葉を信じて、各地でフィールドワークを繰りかえした。インドネシアで朽ちた救世の神刀を発見できたのは、その成果である。これをセシリア・チャンに命じて、日本に持ってこさせたのだ。

「草薙護堂が登場したときはどうなることかと危ぶんだが、なんとか計画どおりに進んでくれた。グィネヴィアよ、これが事の真相だ。逆転の目はどこにもない。魔女の王らしく、威い厳げんを持って死んでいくのも悪くはないと思うぞ？」

『いいえ！　そうであるならば、グィネヴィアにはまだやるべきことがございます！』

　白き竜の肉体は、完全に石化を終えていた。乳白色の石像となって、地面に横たわる。しかし、この像がやにわに崩れた。

　長い歳さい月げつが経たって風化したように、ボロボロと砂になって形を失った。

　ついさっきまで竜神であった砂が、ザーッと地面に広がる。だが、砂の一部が動き出す。折から吹いてきた風に乗って、ひとかたまりの砂が海の方角へ飛んでいった。

「あの砂からグィネヴィアさまの念を感じます！」

「しぶといものだ。さすが不死の神性を持つ者というべきか！」

　アリスに教えられて、アレクは感心した。あの状態で何をするつもりなのか？

　いぶかしみながら、稲いな妻ずまに化身する。めざすは浮島。今頃、ランスロットが上陸しているはずだ。彼の動向をうかがい、グィネヴィアの最さい期ごを見届けるつもりだった。

## 2

　黒王子アレクが東京湾に浮上させた『島』まで、あと数キロ。

　だというのに、ランスロット・デュ・ラックは空中で足踏みしていた。海中にひそむ黒き球体の吸引波に捉とらえられ、微動だにできないからだ。

　だが、空をおおう黒雲からは電光が絶えず放たれている。

　天あま翔かける騎士と神しん馬めに、『雷かみなり』の精気をあたえるための電撃だった。

「運命の島へたどりつくため、われらは全力全速を振りしぼる。我が盟友よ、余と共に稲いな妻ずまとなり武ぶ勇ゆうを示せ。往ゆくぞ！」

　稲妻の速度と隕いん石せきの威力を帯おびるための充チヤ塡ージは終わった。

　白き愛馬へささやいてから、ランスロットは馬上で身を伏せる。刹せつ那な、乗り手と相棒は白き隕石メテオとなった。自みずからを竜殺しの神剣と変え、天地を切り裂く突撃である。もはや吸引波など、ものともしない。

　ひたすらにまっすぐ、飛ひ翔しようする。

　引力の拘こう束そくを振り切って、魔の海を越えた。ついに到達した運命の島を、ランスロットは上空から見おろす。それは岩しかない小島だった。

　奇怪な形状の岩山が目につくが、他にめぼしい地形も建物もない。

　ランスロットは神馬に島の上空を旋回させて、地上にきらりと光るものがあることに気づいた。金属が陽光を反射したようだ。

　すかさず降下し、奇岩の頂いただきに降り立つ。

そこには、ボロボロに錆さびた鉄剣が突き刺さっていた。

昔は長大な剛剣だったはずだ。同じ形状の剣をランスロットも知っている。神しん槍そうエクスカリバーの素材となった、救世の神刀である。

朽くちた剣は英雄の骸むくろ。これが突き刺さる地に、彼は眠っているはず。

しかし、ランスロットは島のどこからも同族——《鋼はがね》の存在を感じなかった。朽ちた佩はい刀とうと共に眠るはずの戦士。物もの憂うげな、錆びた刃やいばにも似た気配を感じ取れなかった。

「ここもアヴァロンではなかった……そういうことか」

さらに、白き軍神は気づいた。

近くで『竜』が断だん末まつ魔まの咆ほう哮こうをあげた。数え切れないほど屠ほふってきた獲え物ものである。聞きまちがえはしない。そして、守るべき少女の気を感じない。

アレクサンドル・ガスコインに連れ去られたはずのグィネヴィア。

黒王子と交戦中であれば、庇ひ護ごを求める彼女の思念が届けられるだろう。上う手まく逃げられたのであれば、健在を報しらせる思念が届くはず……。

「志こころざしなかばで愛いとし子ごも倒れたか。われらの旅もここまでのようだな」

諦てい念ねんが胸にこみあげてくる。これより先、どうしたものだろう？

グィネヴィアの仇かたきを討つため、黒王子に決闘を挑むか。かねてよりの願望どおり、放浪と戦いの旅に出るか。——否。

奇岩の頂より海を望めば、島に近づく帆はん船せんが視界に入ってくる。

あれには『敵』が乗っているはず。今後の生き方など、戦い終え

てから考えればいい。

　さっき全力全速を振りしぼったため、ランスロットも愛馬も疲労困こん憊ぱいしていた。だが、愛し子がいない今、心置きなく狂うことができる。

　ランスロットは決戦の予感に兜かぶとのなかで微笑し、手た綱づなを握りなおした。

　甘あま粕かす言うところの奇岩城。

　奇怪な形の岩山が目立つ小島へ、船は順調に近づいていった。迷めい宮きゅうの権けん能のうが消えたのと、グィネヴィアが帆船にかけた魔術――草くさ薙なぎ護ご堂どうの指示どおりに動けという術のおかげだった。

　護堂だけでなく、エリカも祐ゆ理りもリリアナも甲かん板ぱんに出ている。

「ランスロット卿きょうが近づいてきます。おひとりです」

　リリアナが報告してくれた。恵え那なが不在の今、いちばん視力がいいのは彼女なのだ。

　護堂も目を凝こらす。白騎士の姿を視認するまで、しばらくかかった。例の稲妻めいた飛ひ翔しょうではない。一直線に飛んではくるが、本物の馬がゆっくり走るのと大差ないスピードだ。

　ランスロットは以前の甲かっ冑ちゅう姿である。肌の露出はまったくない。

　だが、騎士の全身からは倦けん怠たい感かんがただよい、神馬の足取りも重そうだった。

「だいぶ疲れているようだな？」

　護堂は甲板の縁へりまで行って、問いかけた。

　三人の少女たちは後ろに引っこみ、神との会話を邪じゃ魔ましないようにする。彼女たちの出番はもうすこしあと、事がはじまって

からだ。

「うむ。黒王子めの眷けん属ぞくを振り払うため、一騎駆けをしたからな。しかも、ひとり彼奴きやつに立ち向かった愛し子は、竜と化しながらも敗れた。あげく、それだけの犠ぎ牲せいを出しながら到達した島は偽いつわりのアヴァロンであった……」

　愛馬を空中で静止させ、ランスロットは物もの憂うげに言う。浮島まで罠わなだったようだ。

　アレクの仕掛けに、護堂はゾッとした。

　今後、あの男とどんな関係になるかは知らないが、ヤツの用意したフィールドで戦うことだけは避けなければ。どうあがいても二重三重の罠にからめとられて、『詰チエツクみメイト』に追い込まれそうな気がする。

　もし戦うのなら、そのフィールドごと粉砕する手を打つべきだ——。

「余が心利きく智ち慧え者しやであれば、ガスコインの奸かん計けいに屈くつせずともすんだかもしれぬ。が、あいにくと余は、まっすぐ進むことしか知らぬ武辺者。愛し子には悪いことをした……」

「ガスコインのところへ復ふく讐しゆうにでもいくか？」

「それもたしかに考えた。だが、不思議なほど心が燃えぬ」

　カシャンと音を立てて、ランスロットが兜かぶとの面めん頬ぽおをあげた。白き軍神の美び貌ぼう——女としての素顔があらわになる。

「余を守護騎士たらしめていた絆きずなが失われた今、思うのだ。これより先はただ心の赴おもむくままに旅し、余にふさわしき雄ゆう敵てきと矛ほこを交えたいと」

　兜を開いたランスロットは、女の声になっていた。

「アレクサンドル・ガスコイン……たしかに大敵であろう。愛し子の仇であろう。だが、余の好みとはいささか異なる。ふふふ、放たれた矢のごとく駆け、ただ無心に槍やりを振るうことこそが余の本ほん懐かい。そのように愚ぐ直ちよくないくさに、あの者はつき

あってくれまい」

　守るべき少女を失ったばかりなのに、美しき軍神は微笑ほほえんでいた。

　英雄らしさも減じ、ささやかな絆もかえりみない。このゆがんだ闘争心、まさしく『まつろわぬ神』。ランスロットは狂神の性さがに呑のみ込まれたのだ。

　護堂とひとときの友ゆう誼ぎを結んだ、東方の軍神ウルスラグナのように。

「じゃあ、さしあたってはどうするつもりだよ？」

「言わねばならぬほど、余と卿けいはみずくさい関係でもあるまい。卿もそのつもりで来たのだろう？　われらが奏かなでる激闘の調べをもって、女神アテナへの弔とむらいとしようぞ！」

　ランスロットは快活に笑いながら告げる。

　こうなると確信していた。護堂は黙ってうなずいた。

「無論、疲れ切った体で卿に挑むような非礼はせぬ！　余は自らを呪縛する。草薙護堂を討ち取るために、この身の全てを懸かけようと！」

　そう叫んだ瞬間、ランスロットの体に強大な神力がもどってきた。

　これは魔法の言葉。草薙護堂にもかけた、狂きよう奔ほんの呪縛なのだ。アレクと戦ったあと護堂の力を恢かい復ふくさせたように、白き軍神も全快させたのである！

　さらに、見覚えのある長ちよう槍そうが空より降ってきた。

　アテナと護堂を苦しめた、白き恒こう星せいを生む最強の武具。これを掴つかみ取りながら、ランスロットは謡うたうように朗々と言う。

「来たかエクスカリバー……救世の神刀より生まれし聖せい槍そうよ。さて草薙護堂、卿にはもう余の素顔を見せているな。ならば、この先の姿も見せねばなるまい！」

　ランスロットの白き甲冑がはじけ飛んだ。

　蜂はち蜜みつ色の短髪が似合う、涼しげな美貌である。すらりとした長身もあらわになる。

　胸は驚くほど豊満で、腰つきも悩ましい。それでいて、締まるべき部位は完かん璧ぺきに引きしまっている。女性として、余すところなく完熟した肢し体たいであった。

　そして、まとう衣装が改まった。

　上半身を守るのは鎖くさり帷かた子びらに。兜は面頬のない、美貌を隠さないものに。右手には神槍エクスカリバーを持ち、鉄製の強ごう弓きゆうを背負う。白き神馬の鞍くらには矢筒と矢も加わった。

　そして、今までランスロットを防護していた甲冑——。

　さっきはじけ飛んだ白い鋼はそのままバラバラに砕け散り、無数の破片となる。

　破片は粉々になり、飛散しながら膨ぼう張ちようし、変形していった。なんと、騎士と馬の組み合わせに変化してしまった。

　甲冑の意い匠しようは、かつてのランスロットと瓜うり二つ。

　しかし、鋼はがねの色は曇どん天てんのごとき鈍にび色いろで、華やかな白騎士姿とは一線を画かくす。

　その数は三〇〇騎ほど。全員の馬が空を飛び、ランスロットの周囲にすばやく集まった。まるで、統制の取れた鳥の群れだ。

　集団で狩りをする猛もう禽きん類るいがいるなら、きっと彼らのように動くことだろう。

　美しき軍神を守護する重装騎兵隊の出現であった。

「ふふふ、ひさかたぶりに我が配下へ号令をかけたぞ。余と卿はこれより兵を率いる王者として、また一箇の戦士として雌し雄ゆうを決するのだ。いざ尋じん常じように勝負と参ろう！」

　これが完全なるランスロット・デュ・ラック！

彼はまだ本調子ではない――。アテナの忠告を思い出して、護堂は武む者しや震ぶるいした。ならば、こちらも出し惜しみはできない。

「騎士のなかの騎士であるはずのあんたが、なぜ女なのか!?　謎なぞを解く最大のヒントは、ギリシア神話にある！」

祐理、エリカ、リリアナ――仲間たちから教授された知識を叫ぶ。

護堂はウルスラグナ最後の化け身しん『戦士』となり、言こと霊だまの刃やいばを操り出した。

「あんたは只の《鋼》じゃない。鋼の英雄とは生ける剣の神であり、地じ母ぼ神しんと深い共生関係を持つ男の戦士たちだ。だけど、あんたは女だ。鋼の英雄たちは世界中にいる。でも、《鋼》でありながら女神という存在はきわめて稀だ」

「おお、余にもあの武器を向けるつもりだな。神を斬きり裂く言霊を！」

ランスロットが余裕めかして微笑する。アテナとの戦いを観ていたのなら、『剣』を知っていて当然だ。護堂はかまわず続けた。

「稀まれではあっても、皆かい無むじゃない。そのひとりがアマゾネスの女王ヒュッポリュテ……ギリシア神話が軍神アーレスの娘と伝える、女戦士族の女王だ！　軍神ランスロットの原型、もしくは姉妹にあたる女神。そうだろう!?」

護堂の頭上、晴れ渡った空に『剣』の言霊が顕あらわれる。

黄金色に輝く小さな球体たち。天の星々を思わせる、数千のきらめきだ。そのひとつひとつがランスロットの神格を斬り裂く武器であった。

「ふふふ。なつかしい名を聞かせてくれる！」

「アマゾネスは軍神アーレスと水のニンフを祖とする、女だけの勇猛な騎馬民族だ。黒海沿岸に住み、内政を司つかさどる女王と戦闘を指揮する女王のふたりに支配されていた。なかでもヒュッポリュテをはじめとする一部の女王は、始祖アーレスの娘でもあった！」

護堂を乗せた帆はん船せんの上空に、光の剣陣がまたたく間にできあがった。

その進行方向では、ランスロットを中心に置く『鈍にび色いろの騎士団』が待ちかまえている。彼らの持つ槍の穂先が、いっせいに『剣』の言霊たちへ向けられた。

そして、正面衝突――。

「ヒュッポリュテやその姉妹が《鋼》である理由は、父アーレスに由来する。彼こそは最源流の一角――最もシンプルな、戦うことだけを本分とする剣の化身。凶暴で思慮に欠け、大地に突き立てた剣をシンボルとする軍神の一柱はしらだからだ！」

護堂は言霊をつむぎながら、愕がく然ぜんとした。

約三〇〇騎いる騎士団の半分が先陣となって、『剣』に突っ込んでいったのだ。

まさか、ランスロットは自ら敗北を選ぶのか⁉

「卿にばかり武器を振るわせては、武人としての面めん目ぼくが立たぬ。余の配下にも暴れさせてもらおうか！」

だが、美しき軍神は実に愉たのしげだ。何か策があるのか？

あれでは猛もう禽きんたちに網あみへ飛び込ませるようなもの。黄金に輝く光球はランスロットを斬り裂く刃。鈍色の騎士たちも標的になるはずだが――。

護堂は戸惑いながら、言霊を唱える。今は戦力を増強させるのが先だ！

「古代の歴史家ヘロドトスは著書『歴史』に記しるしている。ギリシアのアーレスに等しい神格を、騎馬の民たみスキタイは信しん仰こうしていた。それも特別な神として。他の神には造らなかった祭さい壇だんをアーレスのためだけに築き、大地に突き立てた剣を彼の象しよう徴ちようとして崇あがめていたと！」

黄金の『剣』は鈍色の騎士たちを易やす々やすと斬り捨てていった。

言霊の刃に兜を両断され、胸きよう甲こうを引き裂かれ、鎖くさり帷かた子びらを貫かれて、騎士と馬たちはガラス細工のようにパリンと音を立てて砕け散る。

破片はそのまま消滅。あっという間に騎士団の数は半減してしまった。

だが、勝利にも護堂の胸は躍おどらない。むしろ、いやな予感がする。

「そして、ヘロドトスはこうも書いている。騎馬民族スキタイと女戦士族が混血して、騎馬の民サウロマタイが生まれたと。この民族こそが黒海の戦う女王であった女神を騎士の神ランスロットへと変へん貌ぼうさせる鍵かぎなんだ！」

「左様！　余をいくさの女王と崇めた民たみ草くさどもよな！」

あっさり認めるランスロットが不気味だ。だが、何もせずにいることはできない。

護堂は『剣』を大きくリング状に展開し、半減した騎士団を包囲させた。

美しき軍神を守る騎士団は、まさに鈍色の猛禽たち。これを黄金の網が取り囲み、一いち網もう打だ尽じんにするかまえ。ここでランスロットも言霊を謡うたう。

「勇猛なる騎士たちに告ぐ。退くな、怖おじけるな。汝なんじらは不屈の勇士。汝らに許されるのは前進のみである。突き進め！　ひたすら前に進み、敵を砕け！」

と、背負っていた鉄弓を天に投げる。

すると、今度は弓が粉々に砕け散り、その破片が鈍色の騎士となった。新たに誕生した者たちは一〇〇騎ほど。さっき半減したばかりの騎士団は、ふたたび陣容を立て直した！

「これでよい。ふたたび余にふさわしき騎士どもを生むことができた」

「って、まさかおまえ!?」

「ふふふふ。さすがは我が運命、察しがよいな。余の意図に気づいたか！」

　ランスロットが復活させた鈍色の騎士団。

　彼らは『剣』が織りなす黄金の網へ、再突撃してきた。さっきと同じ光景が反復する。騎士たちが次々と『剣』に敗れていく。

　だが、ランスロットの狙いを察して、護堂はゾッとした。

『王よ、あれもまた不死身の《鋼》ゆえの戦法ぞ！』

　右腕に宿る天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎから警告され、護堂はうなずいた。

　霧きりになるだけがランスロットの不死性ではなかったらしい。彼女には、自らに仕つかえる眷けん属ぞくを復活させる力もあったのだ。

『おぬしの言霊から退かず、あくまで真っ向から挑み、破るつもりなのだ。あやつは折られても砕けても刃をふたたび研ぎすまし、おぬしに突き立てる覚悟と見た！』

　感じ入るものがあったらしく、相棒の声には賛さん嘆たんの念がこもっていた。

『さすがは己オレと同じく最源流の《鋼》よ。左様、剣たる存在が小こ賢ざかしき策で逃げを打つなどあってはならぬ！』

「理屈はわかるけど、つきあわされる方はたまったもんじゃないぞ！」

　あきれ、同時に感心しながら言う。自殺行為に見えて、繰りかえされると護堂もきつい戦法だ。『剣』は使うたびに切れ味が鈍にぶるのだ。

　消しよう耗もう戦せんになれば、いずれ使いものにならなくなる……！

「ランスロットのやつ、手持ちの武器や鎧を材料に騎士を造っているのか？」

『うむ。そのとおりであろうな』

「だったら、あっちの装備がなくなるのが先か、俺の『剣』がなくなるのが先か……そこが勝負の分かれ目になるわけか」

天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎと話していた間に、鈍色の騎士団がまた半減していた。

だが、ランスロットが今度は矢筒を放り投げる。なかの矢は二〇本ほど。どれも鉄の鏃やじりが付いていた。それらが砕け散り、新たな騎士たちが一〇〇騎ほど誕生する。

また鈍色の騎士団は陣容を立て直した。『剣』を封じた神は今までもいたが――。

ランスロットほど愚ぐ直ちよくで単純なやり方は、はじめてだった。

「さあ、草薙護堂よ。共に華々しきいくさを愉たのしもうではないか！」

「ふざけるなッ。こんな頭の悪い消耗戦、愉しめるものかよ！」

言葉とは裏腹に、護堂は唇を獰どう猛もうな形にゆがめて微笑む。

いいだろう。そちらが騎士を補充していくのなら、こちらも言霊を唱えて『剣』の威力をできるだけ維持してやる！

「サウロマタイの民は、のちにサルマティア人サルマタイと呼ばれるようになる。彼らは縁えん戚せき関係にあるスキタイとも抗争し、勝利した。スキタイもサルマタイも同じ騎馬の民。でも、鉄の鎧で身を固めたサルマタイの重装備が、軽装のスキタイを圧倒したんだ！」

「うむ。より堅けん牢ろうな鋼たるを求めたサルマタイの流儀が、先人に勝利したのだ！」

空を舞う『剣』による黄金の包囲網。

押しつつまれた鈍色の騎士団が、決死の防御戦に臨のぞむ。

　そこからは予想どおり消耗戦になった。ランスロットは両手両足の籠こ手てと脛すね当あてを素材にして、騎士たちを造り出す。対抗して護堂も言霊をつむぐ。

「神話が伝えるサルマタイは、女戦士族の風習を引き継ぐ民でもあった。サルマタイの女は武芸にすぐれ、人を殺した経験がなければ結婚を許されなかったという！」

『剣』に切れ味があるうちに、ランスロット本体を攻撃したい。

　その思いにまかせて、言霊を操る。だが、美しき軍神はだいぶ数の減った鈍色の騎士団に死守され、護堂の『剣』は届かない。

　さらにランスロットは兜を投じて、補ほ充じゆうの騎士に変えた。

「神話に語られる王や女王は『神』に等しい。かつてのあんたはアマゾネスの女王ヒュッポリュテ、あるいはペンテシレイア、アンティオペー……アーレスの娘にあたる女神だった。サルマタイの民は、女戦士族の風習といっしょにあんたという女神も引き継いでいたはずだ！」

『剣』が騎士たちに圧勝していた状況は、徐々に変わりつつあった。

　はじめ、黄金の光球に打たれただけで消滅していた騎士たちが、どんどん持もち堪こたえるようになっていたのだ。やがて相打ち止まりになってしまった。

　正面衝突した『剣』と騎士が、そろって対消滅するのである。

『剣』の切れ味がだいぶ鈍っているせいだ。ランスロットはくすりと微笑した。

　神槍をのぞけば、装備はもう鎖帷子のみ。直後、この防具を構成するリング状の鎖がいきなりバラバラになった。そのまま周囲に飛散する。

　大量の鎖は鈍色の騎士に変化し、最後の補充兵となった。

「往いけ、荒野の騎士たちよ！　我が第二の槍となり、草薙護堂を討ち取るのだ！」

　そして、女王は号令をかけた。

　鈍色の騎士団が空中で紡ぼう錘すい形けいの陣をしく。『剣』の言霊で黄金の包囲網を築かれても、今なら突破できると判断したのだろう。

　護堂は息を呑んだ。ここが勝負どころだ。

　消極的になれば押し切られる。攻めに転じなくては！

「サルマタイの民と文化は、ローマ帝国の軍人となったことでヨーロッパ各地に広まっていく。その時代のあんたはまだ《鋼》の女神、アマゾネスの女王だったはずだ！」

　言霊を詠えい唱しようし、残った『剣』たちに念を送る。

　集まれ。夜空の星々のように、バラバラのまま戦うのではない。

　集まって、ひとつの生き物になれ。そう、ランスロットに仕える騎士たちが一羽の猛禽さながらに戦うように！

「当時は重装騎兵というサルマタイ発祥の文化が、中世ヨーロッパの騎士道に変わりつつあった時代だ。だがサルマタイは滅び、文化も変わっていく。『騎士』が戦場の華となるのに反比例して、アマゾネスの女王の名も神話も徐々に忘れられていった！」

　数千の光が集つどい、黄金色の輪りん郭かくを形作っていく。

　それは喩たとえるなら銀河の光。暗黒の宇宙に輝きをともす星雲のきらめき。集いし光は猛たけ々だけしき力となり、勝利への路みちとなる——。

「いつしかサルマタイの戦う女王だった女神はぶあつい甲かつ冑ちゆうをまとい、ランスロットという騎士の神になっていた。騎士らしくない狂気と野蛮さを隠し持つ……でも、誰よりも最源流に近い究極の騎士として！」

　護堂の頭上に顕れたのは、黄金に輝く『蛇』形の星雲だった。

　幾千、幾万の光球が集まって、細長く巨大な『蛇』の形状を作ったのだ。頭部にあたる部分は楕だ円えん形けいにふくれ、顎あごを開くように裂けている。

戦いやすいよう、一箇の生物たれと『剣』に指示した姿。

ランスロットの介入ゆえに死んだ女神が象徴とした、聖獣の似姿であった。

「ふふふ――。竜蛇を殺あやめる軍神にそのような陣で挑むか、神殺しよ！」

黄金の『蛇』をーいち瞥べつして、ランスロットは哄こう笑しようした。

そこに嘲あざけりの響きはない。実に痛快そうな、心の底から戦いを愉しむ者の声だった。

「かような風流を戦場に持ち込む気概、なかなか余の好みに添うぞ。やはり、卿こそが余の求める大敵！　余が欲してやまなかった運命の男！」

女王ランスロットは、手にした長槍を天にかかげた。

「卿がアテナの影に命運を託すのであれば、余も旧主の威を偲しのび、かの男が見せた圧倒的強者の剛力を示そうぞ！」

長槍の穂先が白プラ金チナ色にきらめく。刃の名はエクスカリバー。アーサー王伝説の種子となった英雄が、かつて世を救うため振るった神刀である。

「救世の神刀よ、星をも斬り裂く鋼よ！　我われに力をあたえ給たまえ！」

ランスロットと騎兵隊の背後に、白き恒こう星せいが忽こつ然ぜんと顕れた。

その大きさと輝きは、まるで地上に墜おちた第二の太陽。ここより放たれる刃の破壊力は、脅きよう威いを通り越して冗談じみている。

燦さん然ぜんと燃える白き恒星を目まの当たりにして、護堂は息を呑のんだ。

あの神刀を『剣』で防ぐことはできない。どうやって切り抜ければいい――!?

3

　上空では、天あま翔かける騎士団と黄金の蛇へびが対たい峙じしている。

　紡ぼう錘すい陣じん形けいを整えた鈍にび色いろの騎士たちは、残り一〇〇騎ほど。対する蛇の全長は四、五〇メートル程度。『剣』の言こと霊だまが集合し、蛇の形状になったものだ。

　配下の布陣を見守るのは、神しん槍そうエクスカリバーをかかげる女王ランスロット。

　美しき軍神の背後には、白き剣の恒こう星せいがひかえていた。

「最強の武器を、ついにここで抜いてきたわね……」

　魔術が動かす帆はん船せんの甲かん板ぱんで、エリカは息を呑のんだ。

　舳へ先さきでは護ご堂どうが仁に王おう立だちになり、『蛇』を操りながら、ランスロットと白き恒星をにらんでいる。エリカと祐ゆ理り、それにリリアナは船の後方で緊急事態に備えていた。

　それにしても、ランスロットは意外に駆け引きが上う手まい……。

　エリカは眉まゆをひそめた。愚ぐ直ちよくな玉ぎよく砕さい戦法を繰りかえしながら、最強の武器はきっちりと温存していた。最高のタイミング——配下の騎士団とエクスカリバーで護堂を一息に粉砕できる好機に備えて。単なる猪いのしし武む者しやではない証あかしだった。

　全力全速で一心不乱に突撃することこそが、彼女の本領だろう。

　だが、いつ力を全開にするか、冷静に見きわめるいくさ巧こう者しやでもあるのだ。

　護堂もそう思っているはずだ。猛たけ々だけしく笑いながら、上

空に浮かぶランスロットを鋭くにらんでいる。絶体絶命の窮きゅう地ちに負けてなるかと、闘志を燃やしているのだ。

　ここで彼を補佐できなくては、エリカたちの存在意義はない。

「護堂がエクスカリバーを防ぐには、『戦士』以外の化け身しんを使うしかないわ。でも、ランスロット卿きようの騎士団が健在の間は、まだ『剣』が必要なはず。わたしたちで彼を守りましょう」

「言われるまでもない。わたしはそのためにここにいるんだぞ？」

　エリカの呼びかけにリリアナが即答した。さすがは旧友兼ライバル。

　鈍色の騎士団がランスロット・デュ・ラックの部民ならば、紅と青の騎士ふたりは草くさ薙なぎ護堂の剣であり楯たてである。ふたりは魔剣を呼び出した。

　獅し子しの鋼はがねクオレ・ディ・レオーネと匠たくみの鋼イル・マエストロ。

　前者はがっしりした造りの大剣で、後者は長い柄に片刃の刀身をつけた薙なぎ刀なたである。

「救世の神刀……その骸むくろをグィネヴィアさまが蘇そ生せいさせた鋼――」

　そのとき、ランスロットと神槍を見あげながら祐理がささやいた。

「エリカさん、リリアナさん。私にはランスロット卿と槍の間に呪じゆ術じゆつでつないだ『路みち』が視みえます。あれを断ち切ることができれば、卿はエクスカリバーを使えなくなるようにも思えるのですが」

「さすがだな。そんなものを霊視できたのか？」

「でも、くやしいことにわたしたちには視えないのよね。どうすれば、祐理が霊視しているものを把は握あくできるかしら……」

　リリアナが賛さん嘆たんし、エリカは思案を巡めぐらせる。

　祐理は世界でも類を見ない霊視力者だが、白はく兵へい戦せん・魔術戦の専門家ではない。それは自分たち騎士の領分なのだ。

　すると、日本の媛ひめ巫み女こは美しい面おも差ざしを引きしめ、決然と言った。

「大丈夫です。私におまかせください」

　そういえば、似たような状況が以前もあった。あのときはたしか――。

　気づいたエリカは祐理にうなずきかけた。

「プリンセスはたしか、あなたに手ほどきしたいことがあるとおっしゃっていたわね。じゃあ祐理、あなたはもう……」

「はい。ランスロット卿の謎なぞを解く旅の間に。私にはこの力の素質があるからと、ご指導をいただきました。まだまだ未熟ですが、みなさんのお手伝いもできるはずです！」

　祐理が宣言した直後、変化は起きた。

　大やまと和なで撫子しこにしては茶色味が強い、つややかな黒髪。これに淡い光が宿り、亜あ麻ま色に輝きはじめる。そして、瞳ひとみまでもが玻は璃り色に変わる。

　そして、祐理の体から神こう々ごうしいほどの霊気が放たれる。



　これと同じ気を宿す巫み女こはプリンセス・アリスただひとり。白き巫女姫が最も得意とするのは精神感応の霊力。実は清せい秋しゆう院いん恵え那なの神がかりと同じほど、精神感応者の数はすくない。しかし以前、祐理はたしかにこの力を使ってみせた。

「そうか。ウルスラグナの『加護』がなくとも使えるようにと、万ま里り谷や祐理の資質に気づいた姫君が手ほどきを――！」

　リリアナも事情を察して、うなずく。

「はい。おふたりとも手を。姫様とちがって、直じかにふれなくては駄目なのです」

　と、祐理が両手を差し出す。エリカは右手を、リリアナは左手を取った。

　エリカは自分の心に別人の心が接触してくるのを感じた。斉せい天てん大たい聖せい戦で経験したのと同じ感覚だ。祐理の精神とのリンクがはじまったのだ。

　目の奥が熱い。リリアナも同じ感覚を味わっているはずだった。

「私が視ているものと、私の力をおふたりに託します。存分にお使いください……」

　つぶやいた祐理は、貧血でも起こしたように倒れ込んだ。

　慣れない霊力を使ったのと、自分が持つ呪力をエリカとリリアナの体に半分ずつ送り込んだせいで消しよう耗もうしたのだ。

　エリカは臍せい下か丹たん田でんに呪力がみなぎるのを感じて、そっと下腹部を押さえた。

「ああ。ありがたくそうさせてもらう。そこで休んでいてくれ」

「あ、あとはお願いいたします。おふたりに御ご武ぶ運うんがありますように――」

　リリアナの呼びかけに、祐理はぐったりしながら答えた。

「これで燃えなければ、女がすたるというものだぞ。エリカ」

「言われるまでもないわ。祐理の分まで戦わなくてはいけないものね、リリィ」

　紅と青の騎士はうなずき合う。上空ではすでに決戦が開始していた。

　紡錘陣形の騎士団が、蛇型の『剣』に突撃を敢かん行こうしたのだ。それは神ラタグのナ黄ロ昏クと呼びたくなるほど、神話的な情景だった。

　なにしろ怪獣じみた光の蛇と、天空の騎士団が正面衝突しているのだ。

　巨大な蛇体に、空飛ぶ数百騎の騎士たちが波状攻撃。

　光の蛇は巨体に似合わぬスピードで急上昇し、引き離そうとする。それを騎士たちが追いかけ、槍を突き立てようとする。そこで光の蛇は長大な体を鞭むちのようにしならせ、接近する騎士たちを殴おう打だ。

　彼らの甲かつ冑ちゅうはたちまち砕け、馬も吹き飛び、そのまま消滅していく。

　だが、倒されなかった騎士たちは光の蛇に槍を突き立て、すぐに離脱——。ヒットアンドアウェイで蛇を抑え込もうと、懸けん命めいに戦っていた。

　そして、戦うのは配下だけではない。ランスロットもついに動いた。

　帆はん船せんの舳へ先さきに立つ草薙護堂に、神槍の穂先を向けたのだ。神しん馬めにまたがって飛ひ翔しようする女王の、華麗なる攻撃指令であった。

　刹せつ那な、天空に浮かぶ白き恒星がきらりと光った。

　——来る！　エリカが確信した瞬間、リリアナがすばやく叫ぶ。

「もう防御する余裕はない！　飛ばすから手伝ってくれ！」

　性急すぎる指示。だが、長いつきあいのエリカにはわかる。

　リリアナが使おうとする魔女術を補佐するため、ふさわしい言こと霊だまを選ぶ。

「アルテミスよ、女なる者の翼に力を分かちあたえ給たまえ！」

「重ねて願い奉たてまつる。天の道を往ゆく飛翔の特権を、われらに授け給え！」

　リリアナは言霊を唱となえ、しゃがみ込んだ。

　帆船の甲かん板ぱんに手を当てて、得意の飛翔術を使う。いつもは数名のグループを飛ばすだけだが、今回はちがう。祐理から預かった呪力、エリカの補佐を受けて、ふだんよりも格段に強い飛翔力を生み出して——。

　グィネヴィアによって召しよう喚かんされ、ここまで護堂たちを運んでくれた帆船。

　この船をリリアナは飛翔させた。帆船全体が青い光につつまれた瞬間、白き恒星から電光が放たれた。

　それは海上に存在する全てを焼き払い、消滅させる神の鉄てつ槌ついだった。

　帆船が呑み込まれる寸前でリリアナの飛翔術が働き、青い光につつまれて帆船は一直線に飛んでいく。海の上をすべるようにして、前方の浮島へ。そして、白き殲せん滅めつの電光をどうにか受けずにすんだ。

　だが、強引な輸送は帆船を半壊させてしまった。

　浮島の岸辺に乗り上げた——というより、ぶつかった船体の舳先はぐしゃりとつぶれ、木材が吹っ飛んだ。甲板にいたエリカ、リリアナ、それに護堂は大いに体を揺さぶられ、転倒してしまう。意識のない祐理だけは最初から横たわっていたが。

「いきなり動かして申し訳ありません。こうする以外にエクスカリバーから逃れる方法を思いつかなかったもので！」

「何を言ってんだよ。おかげで助かった、ありがとうな！」

　リリアナの謝罪に、護堂が笑って礼を言う。

　だが、これはあくまで緊急避難。同じ避け方を二度もすれば、ランスロット操るエクスカリバーは飛翔する船を余裕で消滅させるだろう。

「護堂、エクスカリバーはわたしとリリィにまかせて。あなたは『剣』を使うことに集中して、まずランスロット卿の騎士団を消し去るのよ」

　エリカは迷うことなく言った。

　それぞれの担当分を明確に分ける。斉せい天てん大たい聖せいのときにも使った手だ。

「ランスロットのヤツは厄やつ介かいだぞ!?　抑え切れるのか!?」

「もちろん、卿そのものを止めるなんて無理よ。でも、エクスカリバーだけなら、どうにかできると思うわ。さっき祐理が霊視したのだけど、すごく不安定な武器みたいだから」

　これだけで十分だった。

　エリカの意図を察して、護堂は海の方へ向き直り、天翔ける騎兵隊と光の大蛇が繰り広げる神ラ話グ的ナ闘ロ争クを注視する。『剣』の操作に集中するつもりなのだ。

　そして、ただ一騎だけ浮島へ飛んでくる騎士がいる。

　神槍エクスカリバーをたずさえ、美貌もあらわな女王ランスロットであった。

　切り札を解き放つのは今しかない。まずエリカが唱えた。

「七人の祭司、各おの々おの角つの笛ぶえを吹き鳴らし、甲かつ冑ちゆうのいくさ人はこれに先立ちて進軍す！」

　聖絶。自らに殲せん滅めつの特権をあたえる言霊である。

「邑まちを七度巡り、七度目に祭司らは角笛を吹き、ヨシュアは告げたり。主しゆはこの邑を汝なんじらに賜たまれりと。生ける者、男も女をんなも若きも老いたるも分かちなく悉ことごとく刃にかけ滅ぼし、牛うし羊ひつじ驢ろ馬ばに至るまで及ぼせり！」

　紅あかい光がエリカを取りまいていく。

　この輝きを聖なる虐ぎやく殺さつの呪じゆ詛そに変えるべく、詠えい唱しようする。

「このジェリコに邑を建つる者、主の御み前まえにて呪のろわるべし！　礎いしずえを据すえなば初うい子ごを失い、門を建てなば末すえ子ごを失わん！」

　祐理から分けてもらった呪力のおかげで、前回よりも術を御ぎょしやすい。

　エリカは殲滅の特権を愛剣クオレ・ディ・レオーネにあたえ、そして、自らの防具へと変えた。丸型の大おお楯たてと鎖くさり帷かた子びら、兜かぶとといういでたちに改まる。

　紅き殲滅者の出現であった。もちろん、リリアナもこれに続く。

「彼かの者ら、主のモーセに命じ給えるがごとくミデアン人びとを攻め撃ち、ついに其その内の男子を悉く殺あやめけり。其の殺めし者の他にミデアンの王おう五ご人たり、剣つるぎにかけて殺めけり！」

　銀髪のポニーテールを揺らしながら、彼女も言霊を唱える。

「ミデアンの婦女および童わらべを生け捕り、家畜と羊の群れと其の貨財を悉く奪い取り、住まいの邑々と村々を火にて灼やけり！」

　リリアナを取りまくのは、やはり青い光だ。

　ひそかに術の研けん鑽さんを積んでいたらしい。以前よりもなめらかに術をつむぎ、青の輝きに力を吹き込んでいく。もちろん、祐理の助けも大きいだろう。

「かくて彼の者ら、生け捕りしもの掠かすめしもの奪うばいしものを携たずさえ、モーセのもとに詣もうでけり！」

　リリアナは殲滅の特権で、イル・マエストロの形を変えた。

　長なが柄えの薙刀から、銀の長ちよう弓きゆうに変貌していく。また、彼女が選んだ防具はエリカよりも軽装だった。うすい鋼で造られた青の胸当てに籠こ手て、脛すね当あて。身軽さを身上とする

リリアナらしい戦いくさ装しよう束ぞくである。

「まず、わたしの矢でエクスカリバーを射い抜ぬく。それからエリカ、あなたが神刀とランスロット卿の絆きずなを断ち切れ！」

　指示するリリアナの瞳は玻璃色に変わっていた。

　祐理の精神感応で、霊視のイメージを受け取ったせいだろう。

「ええ。神々の例にもれず、ランスロット卿も人間であるわたしたちには無関心なはずよ。そこに聖なる殲滅の特権をぶつければ――！」

　うなずくエリカも、同じ色の瞳をしているはずだ。

　この力を託してくれた祐理のためにも、必ず勝利しなくては。

4

「ふふふふ。神を斬り裂く言こと霊だまの刃やいば……なかなかによき武具であるが、余の兵を前にしてはいささか数が足りぬようだな」

　ついに『蛇』が守る防衛線を踏み越え、微笑をたたえつつ――。

　空飛ぶ神しん馬めを駆って、ランスロットが護ご堂どうの方へ近づいてくる。電光に等しい最高速度ではなく、ゆるい駆け足程度のスピードである。

　だが、決して余裕や驕おごりゆえにのんびりしているのではない。

　馬という動物が全速力で駆けられる時間は短い。いつどこで全力を出させるかの判断も、騎手の技ぎ倆りよう。古代の騎兵戦でも現代の競馬でも、ここは変わらない。全力疾走すべきときと、そうでないときを区別しているのだ。

　護堂は半壊した帆はん船せんの舳へ先さきに立って、空の大敵を

見あげた。

　全ての鋼はがねを脱ぎ捨てた軍神は、素肌をあらわにしていた。身にまとうのは、下着や水着と大差ない薄布のみ。防御力は皆かい無むのはずだった。

　右手に持つのは神しん槍そうエクスカリバー。穂先は白金色に輝き、白き恒こう星せいをしたがえる。

　天と地と星々を斬り裂くという、破壊力の具ぐ現げんたる星を――。



「これ以上の武器を卿が持たぬのであれば、いくさはここで終しまいとなる。口くち惜おしいことだがな。だが、そうはならぬと信じているぞ。卿は必ず余の期待に応こたえる男だと！」

「ああ。すこし面倒だとは思うけど、できるかぎり努力してやるよ」

　つぶやきながら、護堂は念じた。早く来い！

「だけど、あんたもひとつ忘れてるぞ。さっきまで騎士たちをまわりに置いていたから、あんたの守りは完かん璧ぺきだったけど……今はがらあきじゃないか！」

「ほう——むっ!?」

　護堂が叫んだ直後、ランスロットは攻撃を察知した。

　頭上をちらりと見やり、眉まゆをひそめる。彼女を乗せる神馬は、すかさず後方に跳んだ。

　二秒後、さっきまで軍神と愛馬がいた空間へ、黄金に輝く大蛇——護堂の『剣』が飛び込んできた。騎士団ではなく、総大将を狙ねらえと指示したためだ。

　もちろん、この程度の奇襲でランスロットを倒せるとは思っていない。

　あくまで牽けん制せい。そして、移動のため。護堂は船の舳先から、思い切りジャンプして海へと飛び込んだ。このまま落ちれば、泳ぐしかないところだが。

　水面へ落下する前に、すばやく黄金の『蛇』が真下に飛んできてくれた。

　巨大な『蛇』の頭部へ、護堂はどうにか着地する。

　固い感触が足の裏から伝わってくる。『蛇』はそのまま、護堂を乗せて上昇した。『剣』の言霊は、質量を持つ本物の剣に変えたりもできる。こういう使い方も可能なのだ。

『蛇』の頭部に乗った護堂は、鈍にび色いろの騎士団に視線を転じ

た。

　猛もう禽きんの群れを連想させる動きの、紡ぼう錘すい陣じん形けいを取る騎士たち。彼らは目の前から消えた『蛇』を追って、やはりこちらへ飛来してくる。

「あいつらの背後を突け！　後ろから突き崩すぞ！」

　護堂は『蛇』に命じた。

　光の蛇体をうねらせて、長さ数十メートルの『剣』は加速と上昇をはじめる。護堂は腹ばいになるようにして、『蛇』の頭にしがみついた。

　幾度か手に取ったことがある『剣』の感触を、全身でたしかめる。

　ひんやりとした、金属よりも石に近い手ざわりだった。人を乗せるための乗騎ではないので、全力でしがみつかなければ振り落とされる。

　また『蛇』は高速で飛ぶため、風圧がすさまじい。

　護堂の頭、肩、腕、それに背中へ空気のかたまりがぶつかり、重圧を受ける。それでも落ちないのは、おそらく『剣』が守ってくれているおかげだろう。

　ともあれ、『蛇』は護堂の指示どおりに動く。

　紡錘陣形を取る鈍色の騎士団——その最後尾に喰くらいつくべく、全速力で飛ぶ。対して騎士たちも、『蛇』の尾に槍やりを突き立てるべく、全力で方向転換した。

　つまり、たがいがたがいの尾をつかまえようとする形だった。

　片方が光の蛇、片方が紡錘陣形の騎士軍団。だが遠くから観みれば、空飛ぶ大蛇二匹がそれぞれの尾を呑のもうとして、ひとつの円環を空中に描いているように見えるだろう。

　護堂はちらりと下を眺めた。

　海面近くで、ランスロットが神槍の穂先をこちらに向けていた。

『蛇』の頭に乗る草くさ薙なぎ護堂に照準を定めているのだ。

「まあ、これであきらめるわけはないからな……」

　今、護堂たちはランスロットの配下とぐるぐる追いかけっこをしている。迂う闊かつにエクスカリバーで攻撃すれば、もう補充できない味方まで巻きこむかもしれない――。

　などと、ランスロットは考えないだろう。

　心眼まで駆使して、神速を見切ってしまう騎士なのだ。

　だから、護堂はそんな期待などしない。だが、代わりの期待はあった。ランスロットに狙い澄ました一撃の準備をさせる。エリカとリリアナなら、勝手に隙すきを見つけて上う手まいことやってくれるだろう――。

「天地星海の悉ことごとくを滅ぼす刃よ。正統なる主あるじに代わり、今このときは余が使い手となる。聖なる殲せん滅めつと殺さつ戮りくを示せ！」

　案の定、ランスロットは臆せず言霊を唱えた。エクスカリバーを撃つために。

　白き恒星から放たれる電光は、鈍色の騎士たちにはかすりもせず、護堂と『蛇』だけを吹き飛ばすだろう。だが、あのふたりなら、きっと……！

「我われは言霊をもって世に義を顕あらわす！　我が雄ゆう弁べんなる呪言こそが神威である！」

　護堂も信じて、言霊を唱えた。エクスカリバーを防ぐためではない。蛇状の『剣』に最大限まで呪力を吹き込み、ランスロットの騎士団を撃破させるために。

「剣よ、我が勝利と正義のために輝け！」

「剣よ、救世の光を顕し、世界に均きん衡こうをもたらせ！」

　神殺しと軍神が唱え終えた直後、さまざまなことが同時に起こった。

　まずエクスカリバーの穂先が前に突き出され、白き剣の恒星から電撃が放たれた。

　次いで、半壊した帆船から青い閃せん光こうの矢が発射され、神槍の刃にみごと的中した。これによって、槍の穂先が数十センチ跳ね上がってしまった。

　そして、護堂は『蛇』に十分すぎる呪力を送り込めた。

　光の蛇体は一気に加速して鈍色の騎士団に追いつき、後方から喰らいついて、紡錘陣形をズタズタに切り裂いた。

　そこへ襲来するエクスカリバーの電光。しかし、軌き道どうは大きくズレていた。

　針の穴を通すように、護堂と『剣』だけを粉砕するはずだった光。しかし、聖なる破滅の雷光は、護堂たちの遥はるか頭上を通過していった。

　最後に、紅あかい光につつまれた金髪の騎士が彗すい星せいのごとく飛昇する。

　獅し子しの魔剣を振るって、虚こ空くうを斬きり裂く。それはランスロット・デュ・ラックと、彼女が持つ神槍エクスカリバーの間にある空間だった。

　斬り裂かれたのは空気だけのはず。しかし、エクスカリバーに異常事態が発生した。

　白金色の火花が槍の柄より飛び散って、ランスロットの手を拒こばむようにはじけ飛び、真下の海に落ちていったのである。

　エリカ、祐ゆ理り、リリアナがそれぞれ全力で援護してくれたおかげだった。

　今度こそ鈍色の騎士団に壊滅的なダメージをあたえた護堂は、ずいぶんと弱った『蛇』に指示して、浮島に向かわせた。刃の数も切れ味もだいぶ落ちている。もう空中戦はさせない方がいいだろう。

　さっきも上陸した浮島の岸辺に、護堂はふたたび降り立つ。

　ここまで奮戦してくれた『蛇』は、体長一〇メートルほどに減じていた。蛇の形状を解かせて、いつもの球体にもどす。三、四〇ほどの光球が護堂の頭上でまたたいた。

「エクスカリバーだったか？　あの槍、ダメになったみたいだな」

「うむ。卿の配下もやってくれるものだ」

　護堂が話しかけた相手は、白き神馬を駆って飛来したランスロットである。

　白金色の穂先を持つ神槍が手から消えている。だが、騎馬民族の戦う女王であった軍神は、愉快そうに笑っていた。

「これでもう、余に遺のこされたのは愛馬だけとなった。しかし、馬といえども余と共に幾多の戦野を駆け抜けた第一の臣。卿に仕つかえる者どもに劣おとりはせぬぞ」

「配下とかいうなよ。あいつらは俺の大切な仲間だ」

「ふふふ、よき呼び方だ。ならば、余も言い直そう。この神馬は余にとって無二の親と友も。卿といえども、われらの絆きずなにかなうはずもなし。そろそろ雌し雄ゆうを決しようぞ！」

　ランスロットの手に、忽こつ然ぜんと馬ラ上ン槍スが顕れた。

　アテナとの戦いでも使っていた武器だ。これだけは配下の騎士に変えず、残しておいたのだろう。そう、最後の一撃を放つときに備えて。

「おお、わかった――って、言ったやりたい気持ちはあるけどな。あれのすごさはこの目で見たぞ。アテナでも止めきれない攻撃、俺にどうにかできるはずないだろ！」

　言いざま、護堂は『剣』に攻撃を指示した。

　頭上をただよっていた言霊の刃が、ランスロットに殺到する。もう身を守る鋼はない。鈍色の騎士団で防ぐことはできないはず――しかし。

「つれないことを申すな。余の全力全速、卿にこそ受け止めて欲しいのだ。何と言われても引きさがることはできぬ。この霧風あるか

ぎり余は不死身……卿の『剣』でも斬り裂くことはかなわぬよ。覚悟してもらおうか」

　ランスロットの姿が消えて、浮島に濃のう霧むが満ちていった。

　数メートル先もよく見えない。だが、護堂は前回の戦いを思い出して精神集中、ランスロットの気配を探る。……いた。すかさず『剣』を送り込んだ。

　しかし、手て応ごたえはない。何も斬れなかったようだ。

「ふふっ。この霧は、余の大祖母にあたる水の女神より借り受けた恩おん寵ちよう。ランスロット・デュ・ラックを斬り裂く言霊では破れぬ。余の到来に備えて、暫しばし待つがよい！」

　ふくみ笑いと共に告げられる。

　護堂は理解した。メドゥサの神力を斬れなかったときと同じだ。『剣』の対象となる神以外の力による防御なので、破ることは不可能なのだ。

　もうランスロットの声はしない。一騎駆けのために充チヤ塡ージしているはずだ。

「まあ、どこかでこうなるんじゃないかって思ってたよ」

　ひとりつぶやいて、深呼吸する。

　前回、ランスロットはエクスカリバーを、護堂はアテナの造った天てん地ち開かい闢ひやくの刃を手にぶつかり合った。どちらも借り物の力だ。

　次に真っ向からぶつかるときは、そうはならないのでは——。

　なんとなく護堂は予期していたのだ。ランスロットも草薙護堂も、本来そういう戦い方をよしとする性格ではないのだからと。

「我は最強なる勝利者……全ての敵と、全ての敵意を挫くじく者なり」

　濃霧のなか護堂はウルスラグナの聖句を唱え、呪力を高める。

もう『剣』は要らない。べつの力を使うことにする。とはいえ、どの化け身しんを使えばいいのだろう。実はランスロット、悪行というほどの非道はしていない。したがって、『白馬』や『山や羊ぎ』の対象にはならなかった。

閃電の隕石落としメテオストライクを撃ち落とすため、どちらかを使いたかったが……。

仕方ない。こういうとき頼りになるのは、やはりあいつか。

護堂はあるイメージを心に思い描いた。これで、いつでもあの化身を解き放てる。だが、ヤツだけの力でランスロットの一騎駆けを撃破できるのか……？

思案していると、『己オレにも一枚噛かませろ』とささやく声があった。

護堂はすぐにうなずいた。敵が全力全速なら、こちらも総力を結集させて迎え撃つ！

そして待つ。数十秒、数分、あるいは数十分。

正確な経過時間はわからないが、長いこと待ち続け、ついに霧きりは晴れた。

だが、空は晴れていない。見あげれば黒い雷雲が天をおおっている。ランスロットが稲いな妻ずまの精気を集めるために呼んだものだ。

「我こそはランスロット・デュ・ラック。湖みずうみの騎士と人は呼ぶ。この槍に余の権けん能のうと魂たましいの全てを込め、駆けようぞ！　草薙護堂、卿も全てを懸かけて余を受け止めよ！」

勇ましい口こう上じようと共に、雷雲のなかが白く光った。

直後、隕石メテオの破壊力を帯び、稲妻の速さに乗って、騎士が飛び出してくる。

肌もあらわな薄布だけをまとい、馬上用の長槍を突き出した美貌の軍神ランスロット・デュ・ラックが――。

そして、護堂もウルスラグナ第五の化身『猪いのしし』を解き

放った。

「鋭く近寄り難き者よ、契けい約やくを破りし罪ざい科かに鉄てつ槌ついを下せ！」

　最も突進力がすさまじく、暴ぼう虐ぎやくそのものの破壊力を所有する化身。

　黒き『猪』は海中より魚雷のように飛び出し、浮島の護堂めがけて駆けくだるランスロットと神馬に真っ向からぶつかる。

　白き隕石失墜メテオストライクと、黒き巨獣の正面衝突。

　オオオオオオオオオォォォォォォォォォンンンンンンンン!!

『猪』の猛たけ々だけしい咆ほう哮こうが海原にこだまする。しかし、いくら容よう貌ぼう魁かい偉いの生物ばなれした神獣とはいえ、一応はヤツも獣けもの。槍を持つ軍神相手に丸腰で送り出したくはない。

　だから、護堂は続けて言霊を唱えていた。

「爰ここに須す佐さ之の男おの命みこと、国を取らんとて軍いくさを起こし、小さ蝿ばへなす一千の悪神を率そつす」

　スサノオの聖句である。右腕の相棒に呼びかける謡うたである。

「一千の剣を掘り立て、城じよう郭かくとして楯たて篭こもり給たもふ」

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎは護堂の権能を吸収し、新たな力に合成する術を使う。

　ウルスラグナの『山羊』をもとに超ちよう電でん磁じ砲ほう、『戦士』をもとに神具破りを行った。そして、今回はもちろん『猪』とのコラボレーションである。

『応！　是これ所いわ謂ゆる、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ也。ちはやぶる千せん釼けん破はの鋼なり！』

　神刀・天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの名乗りが大音声で響き渡る。

　筋肉ではちきれんばかりの『猪』の黒い毛皮に、神刀の力が加わった。

　つややかな獣皮は、一瞬にして素材が変わる。漆しつ黒こくに焼きを入れた《鋼》の肉体に変へん貌ぼうしたのである。もはや毛皮ではなく装甲だった。

　しかも、口元に生えた長い二本の牙きばは、鋭く研とぎすまされた刃に変化した。

　全てを貫つらぬく槍さながらだ。天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎと『猪』の合体は、ヤツらをなんと猪の形をした生ける神刀に化身させたのである！

『ふはははは！　軍神ランスロットよ、おぬしと同じく最源流の系けい譜ふに連なる《鋼》として推すい参さんした！　われらの一ひと太た刀ち、受けてみよォ！』

　オオオオオオオオオォォォォォォォォォンンンンンンンン!!

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎも『猪』も異様にテンションが高かった。

　まさに水を得た魚のごとく、海中の潜水艦が撃った弾道ミサイルさながらに急上昇し、白き隕石メテオと激突を果たす。

「ふ……さすがは我わが運命！　この威力、この烈はげしさ、実にたまらぬ！」

　ランスロットはささやいて、唇くちびるを舐なめる。

　彼女と愛馬は純白の電光に取りまかれながら、東京湾の小島に失しつ墜ついせんとしている。墜落を押しとどめるのは、もちろん黒くろ金がねと化した『猪』であった。

　ランスロットの美しい手は馬上槍を突き出している。

　その穂先を受け止めるのも『猪』の鼻はな面づら。鋼化しているので、斬り裂かれない。

　五分と五分。互角のぶつかり合い。

　天より失墜せんとした白き軍神。これを阻止したのは海から飛び出した黒金の獣。

　両者の激突は一進一退だった。だが――

　徐々に均衡が崩れはじめた。

　すこしずつ優勢になっていった。白い主従の方が、である。

　じりじりと『猪』の高度が落ち、ランスロットと神馬が地上に近づいていく。

　美しき軍神は多彩な権能を持たず、騎士らしく突撃することにのみ特化した存在。あるいは、その割り切りが『猪』さえも寄せつけないのか。

「ふふふふ。草薙護堂よ、いますこし待て。もうすぐ卿のもとに到来する。そのときこそ余の熱き想おもいを受け止め、鏖おう殺さつされよ。運命の時は来た！」

　勝利を確定しつつあるランスロットに、上空より呼びかけられた。

　愛の告白めいた、熱っぽい口調。しかし、護堂と彼女の間にそのような甘やかさが入り込む余地はない。『猪』が吹き飛ばされれば、草薙護堂は地上から消滅する……！

　護堂はありったけの呪力を黒い巨獣に送り込んだ。

　ダメだ。パワーは増したはずなのに、ランスロットの失墜を押し返せない。この程度ではまったく足りないのだ。

　ならば奇襲だ。『猪』の口元には槍のような牙が二本生えている。

　そのひとつをいきなり発射させる。飛び道具として撃ち出し、ランスロットを吹き飛ばすつもりだった。当たった――ように見えた。

　しかし、ランスロットと神馬は牙の奇襲をみごとすり抜けてしまった。

　神速すら見切る心眼の使い手に対して、お粗末すぎる奇襲だったようだ。このままではまずい……！　あせりと共に、護堂が白と黒の空中対決を見あげたとき。

「ランスロット有利……しかし、挽ばん回かいの目はまだあるというところだな。草薙護堂よ、貴様がどうしてもと望むのであれば、手を貸さないわけでもないぞ？　俺としても、同じカンピオーネに貸しを作っておくのは悪くないからな」

　激戦のまっただなかだというのに、冷静な声をかけられた。

　ちらりと見れば、いつのまにかアレクサンドル・ガスコインがすこし離れたところに立っていた。グィネヴィアを討ったあと、稲妻となって飛んできたのだろう。

「お断りだ。あんたに借りなんか作ったら、あとでどんなツケを払う羽目になるか、わかったもんじゃない。俺はそんなギャンブルをするほどバカじゃないぞ」

　にべもなく言ってから、護堂は改めて上空の隕石メテオを見つめた。

　あせりを表に出さず、鋭く女神と白馬の失墜をにらむ。そうだ。この男――サルバトーレ・ドニ以外でただひとり、草薙護堂の敵てき愾がい心しんを妙に刺激する男の前で、ぶざまな戦いをするわけにはいかない。

　理屈抜きに強く思い、護堂は闘志を燃やした。

　必ずランスロットに勝ち、アテナの借りを返す。そのためにできることはないか!?

　――あった。この状況でも、まだ通用する武器はある。皮肉にも、それを思い出させたのはアレクの出現だった。

　くそ、と腹立たしい気持ちを押し殺しながら、空中の相棒に叫んだ。

「天あまの叢むら雲くも、馬だ！　それと、ガスコインのあれを使え！」

　あの神刀には、敵の力を真似する能力もある。

　アレクと戦ったとき、護堂は天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎに『神速』を模も倣ほうさせた。

　只の攻撃ならランスロットはまた防ぐだろう。しかし、黒王子アレクの神速を利用した一撃なら、あるいは——！

　護堂の指示に応こたえて、『猪』と同化した天叢雲劍は牙を発射した。

　口元に生えた二本の牙。さっきひとつ撃って防がれた武器。その残り一本がふたたび至近距離からランスロットの神馬を襲う。

「ぬ——!?」

　美しき軍神が顔色を変える。ランスロット本人を狙った奇襲なら、それさえも彼女は心眼を使って避けたかもしれない。だが、愛馬にその術の心得はなかった。回避せよという騎手の指示も間に合わなかった。

　神速で撃ち出された巨大な牙は白き神馬に命中した。否いな、白き神馬を吹き飛ばした。

　遥はるか天空の彼方かなたへ、鋼の牙は飛んでいく。

　その発射に巻きこまれた神馬は跡形もなく消し飛んでいた。そして、乗騎を失ったランスロットの白き失墜は当然破れ、そこに黒金の『猪』が殺到し——

「おおおおおおお！」

　巨大な神獣の体当たりが、ランスロットに直撃する。

　さすがの軍神も天高く吹き飛ばされ、その雄叫おたけびが響き渡った。

　黒き『猪』はそのまま放物線を描いて飛び、海に墜おちる。雲を突かんばかりの高さにまで水柱が舞いあがった。

　そして、浮島の岸辺にランスロットの肢し体たいがたたきつけられる。

　護堂とアレクのすぐ近くである。ゴツゴツした岩の上に失墜した

というのに、軍神の美貌も肢体も形をそこなわず、美しいままだった。

　だが、それは無傷を意味しない。

　ランスロットは地に横たわったまま、己を斃たおした神殺し——草薙護堂に向けて微笑みかけ、雄々しく言った。

「ふ、ふふふふ。よきいくさであった。礼を言うぞ、神殺し。アテナといい卿といい、余が千年かけて貯ため込んだ飢うえに、よく応えてくれた。ああガスコイン、草薙護堂の次は卿と戦うのも悪くはないと思っていたが、かなわぬようだ。これも縁というものか……」

　ランスロット・デュ・ラック最さい期ごの言葉であった。

　次の瞬間、彼女の体は石化し、すぐにボロボロと崩れ去った。

　一五〇〇年以上も前に顕けん現げんした『まつろわぬ神』は、こうして滅びた。今度、ランスロットという軍神が地上に顕れるときは、彼女とはまったく異なる男の騎士であるはずだ。彼女に関する神話は、それほど変わってしまったのだ。

　この雄敵とは、もう二度と会えない。

　そう思う護堂の胸に、さびしさに似た感情が去来した。

# 終章

## 1

　死闘の果てにランスロット・デュ・ラックが逝いったあと。

　岩ばかりが目立つ浮島の岸辺で、草くさ薙なぎ護ご堂どうとアレクサンドル・ガスコインは向き合った。

「どうやら呪じゅ縛ばくは解けたようだな」

「まあな」

　アレクの言葉にそっけなく答えてから、護堂は考えた。

　今回はこいつにも迷惑をかけてしまった。いろいろと問題人物だし、妙にそりが合わない印象もあるが、それでも草薙護堂の行動には問題があったわけで……。

　すっとぼけて謝罪しないという選せん択たく肢しも、たしかにある。

　が、そう決め込めるほど、護堂は厚こう顔がんではない。きちんとあやまることにした。

「あんたには悪いことをしたな。軽はずみな行動はつつしめとか言った俺の方が、逆に迷惑をかけて……なんて言うか、本当にすまない」

　しっかり頭も下げる。すると、黒王子はフンとそっぽを向いた。

　護堂の方からすなおにあやまったことが意外だったのか。そっぽ

を向く前、ちょっとだけ困ったような表情をしたのが印象的だった。

　もしかしたら悪ぶってはいるが、かなりの照れ屋なのかもしれない。しかし。

「気にするな。さっきも言ったが、この程度のことは想定内だ。べつに怒りも悪感情も抱いてない。貴様もやはりカンピオーネなのだなと再確認しただけだ」

　ちょっと引っかかることを言われてしまった。

「他の魔王連中と縁があったときも、似たようなことはさんざんあった。俺はこの手のトラブルに慣れている。貴様にあやまられるほどの問題では特にない」

「そうか。ただなガスコイン、俺は他の連中ほど非常識じゃないと思う」

　おだやかな声を出すよう意識しながらも、つい護堂は言ってしまった。

「何でもかんでも十じつ把ぱ一ひとからげにするのは乱暴じゃないか？」

「いや。冷静な観察の結果、同じカテゴリーに分類すべき理由を見み出いだしているのだから、問題ないはずだ。草薙護堂、貴様はもうすこし論理的に物事を考えるべきだな」

「論理的に考えると……あんたも同じカテゴリーだよな」

　なんとなく目の前の気取り屋がいやがりそうだと感じて、護堂は言った。

　すると、効果てきめんだった。アレクはむっと眉まゆをひそめて、

「待て。その発言を見すごすことはできん。訂正してもらおうか」

「いいや、ガスコイン。たしかに他のカンピオーネは考えなしに暴れまわるだけかもしれない。それに比べて、あんたは用意周到に計画を練ったり、舞台を整えたりする。だから、たしかに毛色がちが

うのはたしかなんだけど——何かをやったあとの結果は、他の連中が暴れたあとと大差ないよな。何をしても世界平和の敵になってるというか」

「貴様が言うな。貴様こそ偽ぎ善ぜん的てきな言動でデコレーションしているだけで、何か事をしでかすたび世界を大いにかき乱しているだろう！」

　本当に何なのだろう、この感覚は？

　アレクと不毛な会話をしながら、護堂は痛感した。

　おたがいの痛いところ、突かれたくないところがピンポイントでわかる感覚。性格はまったくちがうはずなのに、勘かんが勝手に働くというか——。

　ふたりの会話を中断させたのは、大きな呪力が動く気配だった。

　護堂とアレクはそろって同じ方向を見た。この浮島は見渡すかぎりの黒い岩。島の中央には丘のように盛りあがった岩山がある。そちらの方角だった。

「アレクサンドル、草薙さま、大変です！」

　そこにプリンセス・アリスが文字どおり飛んできた。幽ゆう体たいの利点を活いかして、ふわふわ空中を浮遊している。彼女は岩山の頂いただきを指さしながら言った。

「あちらでグィネヴィアさまが御自身に蘇そ生せいの術をかけ、肉体を復元されました！」

　報告を聞いた瞬間に、アレクは稲いな妻ずまと化して飛んでいった。

　護堂はアリスの飛ひ翔しよう術じゆつで連れていってもらった。そうして到着した岩山の頂には、ボロボロに朽くち、錆さびついた鉄剣が突き刺さっていた。

　アレクが囮おとりとして刺したという、救世の神刀の骸むくろである。

　そして、朽ちた鋼はがねに取りすがる美少女がいる。アンティークドールのごとき美び貌ぼうには、死を前にした者の影が濃い。

　それでも、いや、だからこそか。彼女はうわごとのようにささやいていた。

「主あるじよ——ご覧くださいまし。このとおりグィネヴィアは力尽きる寸前にございます。小お父じ様も『まつろわぬ神』の本分に立ちもどり、いくさの果てに逝いかれました。われらの矢は尽き、刀も折れているのです。このうえは御おん身みのご慈じ悲ひをたまわる以外に術すべはございません！」

　もちろんグィネヴィアだった。

　一度は死して砂になりながらも、自みずからに蘇生の魔術をかけたという。彼女の幼い体からはボロボロと細かい砂が落ちていく。まるで崩れかけた砂の像だった。

「どうか、どうかグィネヴィアの前に御ご来らい臨りんくださいませ。我が命の尽きる前に、どうか。せめて御姿、御言葉だけでも——！」

　朽ちた神刀にすがりつき、神祖は訴える。その間も砂は落ち続けた。



　だんだんグィネヴィアがうすくなっていく。色いろ褪あせ、透明になっていく。やはり、消滅は近いのだ。瀕ひん死しの重病人でさえ生き長らえさせるという蘇生術も、使い手をわずかな時間だけ延命させるのが限界だったようだ。

　そして、アレクとアリス、護堂は死にゆく神祖を後ろから見守る。

　グィネヴィアは復ふく讐しゆうでも戦いでもなく、今まで求め続けた『最後の王』と対話することを最さい期ごに選んだのだ。だから、自らの仇かたきにも目をくれない。

　それは絶望から顔を背そむけ、無駄と知りつつも希望にすがろうとする行為にも見えた。

「…………」

　アレクの唇がかすかに動き、何かつぶやくのを護堂は見た。

　その直後、強い海風が吹く。グィネヴィアの体は途端にザーッと崩れて完全に砂となり、風に乗って海と空の彼方かなたへ飛んでいった。

　朽ちた神刀をアレクが回収したあと、歩いて岩山から下りながら。

　何をつぶやいていたのか、護堂は訊たずねてみた。

「たいしたことじゃない。取りすがって泣いても、おそらく無駄だろうからやめておけ——と思って、口に出さなかっただけだ」

「アレクサンドル、あなたも言葉をひかえるときがあるのですね」

　黒王子の告白に賛さん嘆たんしたのは、長いつきあいのアリスである。

「感動しました。あなたったらときどき、空気を読まない発言で女の子の心をズタズタに切り裂くことも多いから……。それでこそ紳士というものです！」

「感受性に問題がある人間のように俺を語るのは、そろそろやめろ」

　プリンセスの賞賛に苦い顔をして、アレクは言う。

「でも、無駄ってのは言いすぎじゃないか？　神様たちにだって感情はあるんだ。昔の仲間に泣いて懇こん願がんされれば、情けを起こすかもしれないぞ」

　護堂はひかえめな擁よう護ごを口にした。

　わずかだが、グィネヴィアに同情する気持ちがあった。たしかに危険な魔女だったが、彼女にも悲願があり、前世から慕したい続ける主がおり、そのために全てを犠ぎ牲せいにしてきたのだ。それくらい感じてもいいだろう。

「たしかにな。グィネヴィアが仲間だと『最後の王』も認識していればの話だが」

「なんだって？」

「アーサー王と聖杯関連の調査に没頭していた頃、俺は何度か『最後の王』の足跡を発見したことがある。そのときに思った。なぜ、神しん祖そたちには発見できないのか、とな。たしかに俺はグィネヴィアよりも謎なぞ解ときが得意だろうとは思うが……」

　ここでアレクは肩をすくめた。

「それでも神祖たちには長い時間と魔力、人間にはない知識もある。やつらの方が条件は有利なはずだ。なのに『最後の王』探たん索さくに関しては、むしろ俺たち人類の方が先んじている。サルデーニャの魔女ルクレチア・ゾラも『最後の王』を大陸の東西にまたがる……いや、むしろ東方寄りの神だと見抜き、手がかりもある程度つかんでいたしな」

　思わぬところで旧知の名前を聞いて、護堂は驚いた。

「こういう仮説を立てたこともある。『最後の王』は復活を望んでいない。どこかで眠りながら神祖たちの探索を無視し、やつらに手がかりをあたえないようにしている——とな」

「たしかに辻つじ褄つまは合いますが……」

　アリスが疑わしげにつぶやく。護堂も同じ感想だった。復活を望まない『まつろわぬ神』などいるのだろうか？

「実のところ日本に神刀の骸むくろを持ち込んだのは、その可能性も考慮しての措そ置ちだ。場所は合っていても、捜索対象者の方が出てくることを望まないのなら、またグィネヴィアは失敗するのではないかと思ってな」

「場所は合っている？　どういう意味だ？」

　何気ない一言を護堂は聞きとがめた。

　すると、先を歩いていたアレクは振りかえり、当然のように言った。

「どうもこうもない。『最後の王』が眠る場所には、必ず神刀と戦士の伝承が顕あらわれる。この浮島が囮おとりでも、伝承まで偽にせ物ものとは考えづらい。あれは『最後の王』の権けん能のうが生み出すものだからな。だったら、東京湾のどこかに真の浮島があると考える方が自然だ」

　そうこう話すうちに、魔王ふたりと姫君の一行は岩山を下りきる。

　出迎えてくれたのは草薙護堂の仲間たちだった。

「その分だと、たいした怪け我がはなさそうね、護堂」

「ご無事で何よりです。お帰りをお待ちしておりました」

　まずエリカが颯さつ爽そうと言い、彼女の肩を借りながら祐ゆ理りはおだやかに微笑ほほえんでいた。

「どうした、万ま里り谷や？　もしかして、どこか傷いためたか？」

「いいえ。すこし疲れただけですので、どうかご心配なく」

　と、媛ひめ巫み女こは微笑んだまま言った。だが、ひとりで立てないのは心配だ。

護堂はちらりとエリカを見た。金髪の少女は『本当にたいしたことはないわ』という感じでくすりと笑う。強がりではなく、本当に大丈夫なようだ。

安あん堵どした護堂に、リリアナがにっこり笑いかけた。

「おめでとうございます、草薙護堂。かねてよりのお望みを今回は達成できましたね」

祝福される理由がわからない。すると銀髪の騎士は言った。

「お気づきではないのですか？　今回はいろいろとゴタゴタしましたが、日本のどこも破壊されてはいません」

「……ああ、そういえば！」

護堂は納得した。いいかげん、世界各地に迷惑をかけないようにしなくてはと、かねてより願っていたのだ。神様やカンピオーネ相手の戦いでは、現場近くのどこかが破壊されたり吹き飛んだり、まるごと石化されたりと大変なのだ。

今回は、戦場が東京湾のどまんなかだったことが幸いしたのだろう。

めでたい——とよろこんだとき、護堂は何かを忘れているような気がした。

「どうかしたのですか、草薙さま？」

「あ、いえ。何か忘れちゃいけないことがあったように思えて……」

不思議そうなアリスに答えたときだった。

空の向こうから黄色い光が飛んできた。あれは飛翔術だろう。アリス、リリアナ以外にも魔女がいたようだ。まさか神祖？

護堂の目くばせに、エリカとリリアナがうなずく。

警戒態勢に移った騎士たちの前で、黄色い光は着陸する。現れたのはメガネをかけた東洋人の少女だった。可愛かわいらしい顔立ちだが、印象は地味だ。

「アレク、どういうつもりであんなバケモノを……？」

　開口一番、少女はボソボソした口調で黒王子に問いかけた。アレクの仲間らしい。

「何のことだ、セシリア？」

「とぼけないで。つい一〇分ほど前の話。この島近くの海底で、巨大な呪力のかたまりが動き出すのを、私は中ちゆう華か街がいの道士たちといっしょに感知した。見けん鬼きの術で偵察したら、巨大な猪いのししのバケモノだった。それも全身が黒い鋼はがねの……」

　セシリアという少女の報告を聞いて、護堂はどきりとした。

「猪は全身ボロボロで傷だらけだけど、どうにか海を泳いでいる。しかも、まっすぐ横浜に進行中。すごく興奮している感じ。あのままだと二〇分くらいで横浜に上陸して、町を破壊するかも。どういうつもり……？」

「なぜ、俺の仕込みだと考える？」

「あなた以外にあんなバケモノを使し役えきできる人はいない。単純な理屈」

「バカを言うな。俺以外にもひとり、飼い主候補はいるだろう。そして今回に限っていえば、候補ではなく正真正銘の飼い主だ」

　アレクは決めつけると、皮肉っぽい目を護堂に向けた。いや。セシリア以外、全ての人間がこちらを見つめていた。

　エリカは「まあ、こういうオチよね」と肩をすくめて。

　祐理は「な、何てことをされたんですか⁉」と愕がく然ぜんとしながら。

　リリアナは「やはりあなたは、一ひと筋すじ縄なわではいかない御方ですね」と瞑めい目もくして。

「まあ、さすが草薙さま。ご将来が楽しみなスケール感ですわ！」

　なぜかアリスだけは、我が意を得たりという感じで賞賛してくれ

たが。

「推察すると、こういうことかしら？」

　えらそうに推理をはじめたのは、エリカだった。

「ランスロット卿きようとの決闘で『猪』が必要になったけど、近くには標的にできる大きなものがない。とっさに海辺の何かを思いついて、それを壊すという名目で『猪』を呼ぶ。で、ランスロット卿にぶつかる軌道で突撃を開始させた……」

「ま、まあな。ランスロットと正面衝突したら、そのあとでどこかに行く余力はないだろうと思ったんだけど」

　護堂は顔をひきつらせた。『猪』と神刀のコラボ、予想以上に頑丈だったらしい。

「そ、それで護堂さんっ。標的はどこなのでしょう⁉」

「横よこ浜はまの……ベイブリッジ。ガスコインが横浜の中華街にいたって聞いていたから、なんとなくあそこのことを思い浮かべた……」

「待て。さりげなく俺の名を出して、言いわけに使うな！」

「そ、それより、早く委員会の沙さ耶やの宮みや馨かおるに連絡して、警告しなくてはいけませんっ。け、携帯電話のアンテナは一応立っているな……くそ、ダメか。つながらない！」

　祐理に問われて護堂は答え、アレクが苦情を言い、リリアナは絶海の孤島から電話しようと狼ろう狽ばいする。第三の魔女セシリアは「ベイブリッジを封ふう鎖さしてもらわないと」とつぶやいて、ふたたび飛翔術で飛び立っていく。

「まあ結局、人はそうかんたんに変わらないということね。護堂がかかわった以上、やっぱりどこかしらで困ったことが起こるんだわ」

　エリカは周囲の騒ぎに同調せず、感慨深げに言った。

　そして、もうひとりマイペースな人物がいた。プリンセス・アリスである。

「それはそうと、今回は珍しくアレクサンドルのジンクスが発動しなかったわ」

「ジンクスとおっしゃいますと？」

「彼が凝こった計画を立てたときは、よく女性がらみのトラブルで頓とん挫ざしてしまうの。女の情念とか、妄もう執しゆうとか、無私の愛みたいなものを読み切れなくて。仕方なくアドリブで計画変更するのだけど、今回はそうならなかったわね。……すこしおもしろくないわ」

　エリカとアリスの会話に黒王子アレクは舌打ちし、護堂はそれどころではなかった。

　ともあれ、神祖グィネヴィアと軍神ランスロットにまつわる冒険は、ようやく終わりを迎えようとしていた。

2

『后きさき弟おと橘たちばな比ひ売め、太た刀ちを抱きて海に入り給たもふ。其その太刀の流れし先は陸おかにあらず、海にもあらざる処ところにて、浮島といふなり』

　たとえ天あま之の逆さか鉾ほこが囮おとりにすぎなくとも、この伝承は本物なのでは——。

　死にゆく心で、神祖グィネヴィアはぼんやりと思った。彼女の体は砂となって崩れ、風に乗り、東京湾の上を飛んでいる。

　もう命は尽きている。このまま消滅して、次の転てん生せいに備えることとなる。

　だが、ほんのすこしだけ時間の猶ゆう予よはあった。地上の空を舞いながら、グィネヴィアはぼんやりと『最後の王』のことを想おもっていた。前世と今世、二代にわたって追い求めた主あるじは、いまだ見み出いだせず。なんと悲しき結末か。

　悲ひ嘆たんが心に満ちたとき、霊視がやってきた。

　死に瀕ひんしたことで、霊感が最大限に研ぎすまされたためだろう。

　視みえた。主が眠る、陸でもなく海でもない場所。その位置がたしかに視えた。

「嗚あ呼あ……そこにいらっしゃったのですね！　主よ、この世の最後に顕あらわれる王よ！　かつてアルトスと呼ばれしアーサーの父よ！」

　グィネヴィアの叫びは届いたはずだった。

　真の浮島にいる、彼女が求め続けた英雄に。彼もしくは彼の分身である神刀に命を搾さく取しゆされた地じ母ぼ神しんは、神祖に生まれ変わる。いわば、グィネヴィアたちは彼の遠い『妹』であり『娘』ともいえる存在だった。

　その絆きずなが必ず叫びを届けるはず。なのに、いらえはない。

　無視された——。新たな絶望にグィネヴィアの心はむしばまれる。だが、この絶望は黒い衝動となり、死せる魔女王に最さい期ごの力をあたえた。

　たとえ無視されても、望まれなくとも。なんとしても主を甦よみがえらせる！

「我が母の分身、聖なる命の泉たる聖杯よ……。あなたに後事を託たくすわ。眠れる主を揺さぶり起こし、必ず再さい臨りんを成じよう就じゆさせてちょうだい！」

　神祖は死を得ても、いずれ転生する。だが、新生までは数百年かかる。

　グィネヴィアの来世は遥はるか先。だから、代わりに——。あふれる想いを魔ま導どうの聖杯に託し、本拠地であるブルターニュで雌し伏ふくせよと念じた。

　あの器うつわには、幸運にも汲くみあげて間もない女神の霊気が満ちている。

　数百年も経たてば、霊気の抜ぬけ殻がらが新たな神祖に転生するだろう。だが、地上にはすでに七人も神殺しがいる。彼ら相手に戦

い、そして復活する意欲のうすい主を再臨させるには、神祖ではあまりに力不足——。

「だから聖杯よ、あなたに託します。……ああ。おまえも新たな女王のもとへ」

　グィネヴィアはわずかに残った呪じゆ力りよくで、召喚の術を使った。

　顕れたのは、黄金と鉄の合金より成るメダリオン。『剣』を連想させる形の刻印が表面に刻まれている。数はふたつ——否、三つ。召喚した直後、数が増えたのだ。

「小お父じ様……ランスロット・デュ・ラックの鋼はがねもたくわえたのね。ええ、草薙さまの権能となるのではなく、再臨した『最後の王』の矢となるために……お行きなさい」

　グィネヴィアの命を受けて、メダリオンは空の彼方かなたへ飛び去る。

　これでやり終えた。魔女王の意識はだんだんとうすれ、消滅していく。

「主よ……『最後の王』よ……グィネヴィアは御おん身みを——」

　最期の言葉を言い切ることはかなわなかった。

　グィネヴィアの消滅より、しばらくのち。

　彼女が本拠地としたブルターニュの森に、ふたつの品が顕れた。

　ひとつは黄金と鉄のメダリオン。もうひとつは黄金の甕かめ——聖杯と呼ばれる器。

　かつて森の主が守護騎士と対話した、湖のほとりである。そこに神具ふたつが出現してから、しばし時間が経過する。

　おもむろに、聖杯の形が変わっていった。

　今までは黄金造りの甕であった。それが次第に変化し、人肌のや

わらかさを手に入れ、人の姿形を持つようになったのだ。

「ふむ。かの地に眠る怠たい惰だな英雄を揺り起こす……それが妾わらわの使命――」

　人間でいえば、齢としの頃は一二、三歳ほど。幼い少女の姿である。

　短めの髪は月を溶かしたような銀色。瞳ひとみは闇やみを凝ぎょう縮しゅくさせた漆しつ黒こくの色。精せい緻ちな美貌は幼くとも神こう々ごうしく、そして、女王の威厳に満ちている。

　一糸まとわぬ裸身には、人間の童女ではありえない力もみなぎっていた。

「そう伝えられても、さて、どうしたものか。その者以外にも、妾には意中の――倒すべき男おのこがいたようでもある……」

　彼女はククッと唇くちびるをゆがめて微笑する。

　目を閉じれば、まぶたの裏に宿敵の顔があざやかに描かれる。黒髪黒目の少年。しかし、只者であるはずがない。

　必ず彼女の血を熱くさせる器のはずだ。理由もなく確信できた。

「まあいい。妾にはまだ休息が必要だ。いずれ旅立ち、女王の威と勇を天地に示すため、今は生まれたての体を憩いこわせるとしよう……」

　つぶやきながら、聖杯より生まれし少女は湖へ入っていった。

　身を清め、水とたわむれるために――。

　そして、ふたたび房ぼう総そうへ。

　二度も激闘の舞台となった海の、遥か上方。雲よりも高い場所。大たい気き圏けんよりもさらに上。天上界……ではなく、衛星軌道と人類が呼ぶ場所。

　そこに小さな島が浮かんでいた。

　地上から常に静止して見える――いわゆる静止軌道に乗りながら。人類はその存在を知らない。知ったとしても、衛星軌道上の浮デ遊ブ物リとしか思うまい。

　この狭き地の中心に、鉄剣が突き刺さっていた。

　刃渡り一〇〇センチ近い剛ごう剣けんである。両もろ刃はで、ぶあつい刀身は鉈なたに似た造り。しかし、ボロボロに朽くち果て、錆さびついていた。

　救世の神刀――。

　魔王殲せん滅めつの英雄が佩はい刀とうとする、最強の《鋼》であった。

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

Ｘ　槍の戦神

著者　丈月　城



２０１２年７月19日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！
Ｘ　槍の戦神」

２０１２年６月６日発行の第６刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

〒１０１－８０５０

［電話］

０３－３２３０－６０９５（編集部）

０３－３２３０－６３９３（販売部）

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　有限会社ワイズネット